

M4-108

月 日		種 類		着		摘 要
月	日	種	類	着	種	
六月十五日	水	新 東	后	〇〇〇		夜行二、三等寝臺 食堂
十六日	木	亂石山	后	六二九	六四八	
		四平街	后	四二五		夜行二、三等寝臺 食堂
十七日	金	チ、ハル	后	七五〇		
		昂々溪	后	一三八	二、三等	
		ハルビン	后	一〇一〇	宿 泊	宿 泊二、三等
十八日	土	ハルビン	滞 在			宿 泊
十九日	日	ハルビン	前	一〇三〇		飛行機四三〇

(納 日 朝)

朝鮮總督府



十九日	廿一日				
日	火				
佳木斯	牡丹江	東京城			
后	前	后			
五〇〇	一〇五五	一一、一六			
彌榮	東京城				
后	后				
四、五七	八、四〇	〇、四五			
瀋陽觀察 一、二、三等	瀋陽觀察 一、二、三等	瀋陽觀察 一、二、三等			

(以下未定)

朝鮮總督府



日 程 表						月 日	曜 日
六月十五日	水	新 京	后	〇〇〇		十六日	木
		亂石山	后	一、一七			
		四平街	后	五、五〇			
		チ、ハル	后	一、二五〇		十七日	金
		昂々溪	后	二、二〇			
		ハルビン	后	一〇、一〇		十八日	土
		佳木斯	前	一〇、三〇		十九日	日
飛行機四三〇							
宿 泊							
宿 泊 二、三等							
二、三等							
夜行二、三等 寢臺 食堂							
六、四八							
夜行二、三等 寢臺 食堂							



朝鮮總督府

	十九日	二十日	廿一日	
	日	月	火	
	佐木所	彌榮	牡丹江	東京城
后	前	前	前	后
三〇〇	一〇五五	一〇五五	一〇五五	一一一六
彌榮	牡丹江	東京城		
后	后	后	后	
四五七	八四〇	〇四四		
部落觀察 一二三等	宿泊一二三等 廢盡食堂三等	沙蘭鎮青少年訓練所 視察 一〇三四	夜行 廢盡食堂 一二三等 食堂	

(以下未定)



月 日 曜 日		日 程 表		着 看		摘 要	
六月十五日	水	新 京	后 六、三〇	ハルビン	后 一〇、三〇	宿 泊	
六月十六日	木	ハルビン	前 九、二〇	佳 水 斯	前 一〇、三〇	飛 行 機	
六月十七日	金	佳 水 斯	后 〇、一五	ハルビン	後 一、四五	"	
六月十八日	土	ハルビン	前 九、一〇	千、ハル	前 一〇、二五	"	
六月十九日	日	千、ハル	后 四、一五	ハルビン	后 五、一五	宿 泊	
六月二十日	月	綏 化	前 八、四〇	ハルビン	后 〇、二四	汽 車	
六月二十一日	火	ハルビン	后 九、一〇	牡丹江	前 七、五〇	汽 車	
六月二十二日	水	延 吉	后 一、〇〇	龍 井	后 一、四〇	視 察 三 井 物 資 會 社 三 井 物 資 會 社 三 井 物 資 會 社	
六月二十三日	木	圖 們	后 三、四〇	雄 基	后 五、四〇	自 動 車	
六月二十四日	金	清 津	后 一、〇〇	東 乙	后 四、〇〇	宿 泊	
六月二十五日	土	京 城	前 一、四五	大 京	前 八、〇七	飯 廳	



滿洲國の新興工場街

# 奉天鐵西工業區の全貌

▷☆②☆◁

郎七又原江

# 發展の條件完備

土地燃料交通等申分なし

# 基礎工事

を施す必要もなく

晴天における新興工業區露西が、  
かくも短日月の間に洵に驚異的な  
發展を遂げた原因は一體那邊にあ  
るか。一口に滿洲風氣の波に乗つ  
たといへばそれまでであるが、そ

れなれば同時に工業地帯として指定せられたヘルビ、吉林、安東の三都市はどうかといふに、これは奉天に比べて全く問題にならない。そこで以下少しづつ露西領土の諸條件を陳述する必要がある。

まず第一には土地である。露西における工業用地は前記にも述べたように、殆ど無数の廣大性を持つてゐる上に、平坦に、かつ何等の特殊な

# 基礎工事

を施す必要もなく

このように市場建設に役立ち得る。  
價は本年度市公署選價價格一坪  
一円七十五錢と公定されてゐ

# 輸送上

特別

地域に向つて三條、ほど同一間  
をおいて放出されてゐるのであ  
から、ある地點だけが

ふことは、よぶあり得ない。着  
してよいであらう。

第二に燃料および動力については、石炭の好条件が挙げられる。現在奉天において消費せられる石炭は、瀋陽系の撫順、本炭田、鹿台および牛心台炭と瀋陽系の西安、八道溝北票および阜新炭等がその主なるものであるが奉天のように指揮の間に撫順を

貌  
郎七

によつて、さらに低廉な電力が  
給せられることは、必定である。

供者はあまり好まれない。商人男上の質銀は日給最低五十銭、最高三

吉線によつて吉林に通じ、吉林以南の遼道沿線、それより東へ、各地方

奉天鐵西

# 工業區の全

貌  
郎七

によつて、さらに低廉な電力が  
給せられることは、必定である。

供者はあまり好まれない。商人男上の質銀は日給最低五十銭、最高三

吉線によつて吉林に通じ、吉林以南の遼道沿線、それより東へ、各地方

奉天鐵西

# 工業區の全

貌  
郎七

によつて、さらに低廉な電力が  
給せられることは必定である。

供者はあまり好まれない。商人男上の質銀は日給最低五十銭、最高三

吉線によつて吉林に通じ、吉林以南の遼道沿線、それより東へ、各地方



若き國都に鐵筋林立

謳歌する建設景氣

三千萬圓の入札

但し住宅は置いてけぼり

五月末  
現在

本年一月より五月末までの間に東京において爲された官廳、會社の入札總金額は總額二千八百七十七萬七千七百四十圓、其の内訳は官廳が千七百四十六萬二千二百九十二圓、特殊會社が千三百三十一萬六千三百九十八圓となつて居り、此の中市内において工事の實施されつゝあり又將來されるもの金額は官廳側が二百四十八萬二千二百六十六圓、特殊會社が十八萬九千三百二十四圓で合計千七百四十六萬四千五百九十二圓となつて居り、これを昨年同様に比すれば市内に實施せられたる工事額において二百五十萬圓、五月中における施工工事において百二十萬圓の増加となつて居り、東京における官廳、會社の数は益々増加十一路を通じてあるが、これに對應して當然問題になつて來るのは住宅問題である

此の最も明かな一例としては本年七月中に竣工する物に中央銀行と海ビルがあり、九月に竣工する

ものに東橋があるが此の中觀客の増加してゐるのは中央銀行のみで海上ビルと東橋は未だ竣工してを

らずこれが竣工の時は四方を占めれば少くとも二千名の人員は増加すると見られるので、特殊會社が

今年中に建築する八百戸位ではまだ十分住宅問題は緩和されようもないのでいつか早く完成かと





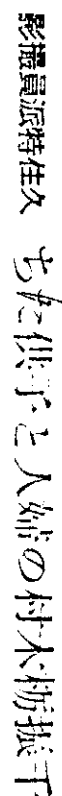


移住地へ  
行つて見る  
と組織旅行  
客の多いの  
に驚かされ  
る。その趣  
をも使ふ園  
は銀の湖と  
王城の湖と  
王城の湖と  
移住地へ

土きし新む笑微

その趣をも使ふ園は銀の湖と王城の湖と王城の湖と

# 統合、聯絡の機關必要

[illegible]

多い。しかし、豊民地は頗る健康  
多識になか／＼市況は盛況が

処女座の御星様を叩くところから出て  
 村へ行くと、婦人血が口から出て  
 坊を抱いて、中には腕に二人入  
 りて置いて、三〇人突つてゐる人達  
 もまだ、しかも皆男だや即ちその人達  
 に腕抱した言ひが通りますよ」  
 といふと、叩くところを叩き  
 上げ、まるでかき坊の御星様で



影撮眞近特生久  
 ちた供子と人婦の村木明城干

[illegible]



# 満鮮北支連絡會議

17.4.19 日 大連 あす愈々州廳で開催

大連市警務局長と、朝鮮國を中  
心として滿洲國と朝鮮、滿洲國と  
華北、蒙疆と發展してこれら大陸  
各地が一體となり對日援助を一  
貫せる目標として生産力増進に邁  
進、戰時重要物資の提供に對日供  
出を圖るべく滿鮮北支連絡會議は  
九日午前十時より州廳會議室にお  
いて滿洲國代表、朝鮮代表、相  
關滿北支の自衛隊代表、蒙疆、相  
互の物資交流により有無相通する  
現地聯絡體制の強化、或は對日供  
出物の積極的増進方針等について  
協議ない意見交換するが會議は  
十日の午前中まで待たれる予定  
である、尚ほ同連絡會議に出席す  
る關東軍司令部三浦總長、成田總務課  
長は八日午後一時、朝鮮側上議  
院議長、副議長ら九名は午後二時  
三十分、北支側總務課長、副課長  
ら七名は午後七時四十分、また滿

## 華北側の期待

【北京特電八日發】大連に  
開催される滿鮮北支連絡會議は本  
年度大陸貿易計畫の最初の重要な協  
議會として華北側は多大の関心を  
寄せ、蒙疆、華北、華中、東北  
いで開催された連絡會議の根本  
協定に基づき、更に朝鮮を含めた  
三地區一體經濟の發展の實現を企  
圖するものであるとの觀點から大  
要次の如き發言により華北側の意  
思をこの會議に反映せしめるもの  
と見られる  
即ち華北經濟の特殊使命とし  
て地下資源の日滿への運搬は時  
局と共に更に擴大に展開される  
所で、要約すれば軍需物資供給  
基地としての使命遂行が北支に

## 三浦總長談

來運した三浦總務局長は新聞の  
問題について左の如く語つた  
大東亞戰の勝たざる結果は滿洲  
に堪へない、すでに一面におい  
ては建設戰の過程にあるが、こ  
のほと内地の事情を觀察して來  
たが統制經濟への協力、或は交  
通網、防務對策等に對する國民  
的訓練が行き届いてゐるのに實  
に心強く思つた、關東州におい  
ても統制經濟への協力やその他  
について國家府省並に立つて州  
民の訓練をこの際大いにやらね  
ばならぬ、これには奉公勵志を  
はじめ國民一體となつて邁進す  
べきであると思ふ  
○  
多年の懸案であつた民衆規則が

實施されたが、この發言をよく  
徹底して州民としての誇を保持  
するやうに努め、敬慕その他を  
與へるやうに言として努め、民  
衆の訓練を可及的に急ぎ州民と  
しての優越等をも考慮せねばな  
らぬと思ふ  
○  
年度豫算は大東亞新秩序建設の  
機に於つて編成された、即ち生  
産力増進、統制經濟の發展、防  
務、謀略對策、防空對策、教育  
方面に重點を置いて編成されて  
ゐる  
○  
滿洲國との價格差問題について  
は考慮してゐない、と云ふのは  
現在それ程の支障があることは  
思はれないからである  
○  
滿鮮北支連絡會議については會  
議終了後まで發表出来ないこと  
になつてゐるが、經濟問題を中心  
とすることは勿論で滿鮮華三  
者間の關係なき意見を交換、相  
互の經濟の促進を圖ることとな  
らう、次期會議開催等も今後議  
で約束されるであらう



① 滿洲國の新興工場街 奉天鐵西工業區の全貌

## 奉天鐵西工業區の全貌

江原又七郎

# 驚異の進展

草原變じて 人口六万の産業街

[illegible]

**現勢**

銅西十業區發展  
地產用務則已  
明乎れば、下業  
地域三八八万五千平方、住宅  
地域二八八万二千平方、商業  
地域三九万七千平方、官公署  
學校用地二九八万八千平方、  
公園綠地道路用地三八八万五千

解水

事に取りかゝることになつてゐるが、今日すでに我第三戰地に對して申入が發到してゐるといふ有様である。

墨西哥における現據上場はこれを各種別に見ると、新據上薬五金屬上薬十八、舊據上薬十五

相當大物の

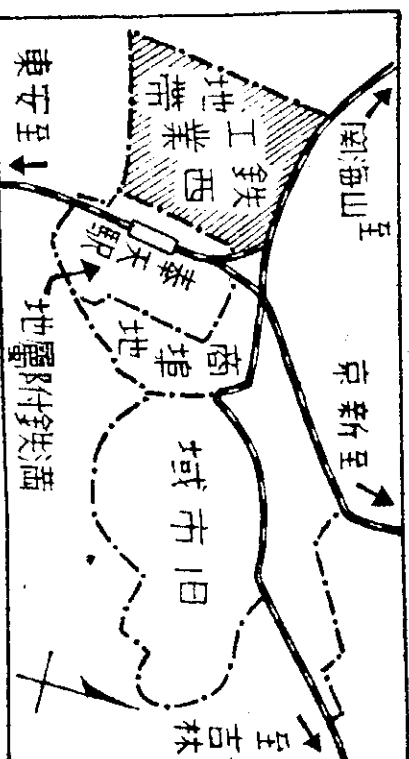
福州富田製作所(百五十万円) 滿洲通信機(三百万円) 東京電氣氣(百万円) 富士電機(百万円) 奉天製作所(芝浦製作、石河豐造船共同出資、百五十万円) 滿洲日立(百五十万円)と

第二年度

円であつたものが、第三年度の  
年末は次のような數字となる。  
貸し生産品不明の工場分を除  
く額であるから、實数は昨年度  
のものは勿論一昨年度のものこ  
れよりさらに大なるものと推定  
れる。(金額單位千円)

滿鐵沿線の

で、ほんの二年足らずの間に五  
千戸、二万五千人の集團部落が  
草原の一角に忽然として出現し  
國內に滿ち小學校もすでに開設  
生徒數三百五十を算する外、日  
本人小學校も去る十月一日を期  
して開設された。(筆者は眞氏は學  
天南士公會副會長)

[illegible]



17.1.29

大東亞戰爭中に對俄滿鮮北支三者の經濟提擧を策圖にし以て大陸の自給自足を確立すると共に大連間の陸路交通を開通して當時の大連間の對日貿易を盛んにする大連鐵道の敷設を斷行し、同時に大連鐵道沿線の地區の開墾は專に武部長官の京族地帯に委ねられ、大連鐵道沿線に於ける土地所有權は武部長官の京族地帯に屬することになり、滿洲國領内に於ける土地所有權は滿洲國政府に屬することになり、滿洲國領内に於ける土地所有權は滿洲國政府に屬することになり、滿洲國領内に於ける土地所有權は滿洲國政府に屬することになり、

生機も豊穡江水电の送電擴充が行はれれば一段の躍進が豫想される



新瑞河

17.1.3 成果を収めけふ終了

第二回臨時議會選舉會第二日の二十一日は午前十一時より開会に引き續け、院中では、選挙、院政、院務、院費の各分科會を舉行、それぞれの事項毎に兩者の熟慮なき意思の一致が行はれた。特に選挙、院政、院務院費についてはその重要にして、慎重な議論がなされた。午前中の議決により各部門とも大體の議案を得るに至つたので午後一時分科會を終了、引續き本會場へ移り各分科會の報告に

第一分科會（院政院務） 主席北野  
眞田山陽、第二分科會（院林）  
主席眞田山陽、第三分科會（院費） 主席佐松商務局長、伊  
藤、眞田山陽、第四分科會（電  
報） 主席田上藤司長より

それら分科會の經過につき報告あり、ついで院政院務院林上議  
院議員院政よりそれぞの報告あつて午後一時多量の成果を収めて閉會した



# 連絡會議の重大意義

即ち斷言する如く滿洲、鮮、北支の間には單に物質交流と云つたものに外に極めてデリケートな諸問題を介し、これを一朝一夕に解決を望むはもとより困難で、同會議が「具體的解決」を短決意に求めるの意味も亦かくるべくここに存するものと解せられる。

たゞ同會議を通し極めて複雑とした問題ながらまた極めて重大問題である國土計畫問題が三者間に取

# 理解・浦

## 三浦總

# 三浦總長、成果を語る

内事情に就て打合せ、事情の紹介を交換、全部地盤を一丸とした綜合的見地から大局的に考へて行かう、いふことになり、結果から見ると相互に理解を深め補強の事業が臺面には現れてゐられた、これが最大の收穫であらう、且つ原動力となつて將來の成里を期待出来るものと確信する。州は州に應じて、景限の協力を興へ行くべきである。例へば大連は華南中心の都市であるが將來は南方關係を著眼に各れて貿易計畫、工業地計畫を擧げて行くべきである、この計畫

六月二三兩日大連で開催

るが、昨年は鐵道省において、第二回懇談會が開催されたので本年は鐵道が賣場に親當てられ、大體來る六月二、三の兩日鐵道大連本社で開催される

山崎副總裁の駐在内

山崎元氏の瀧越調養所任は近  
く政府から正式命令の授けら  
れるが、瀧越丹波郡には渡り  
山崎氏の新居に決定する  
ものを知く、これが實地に注  
意の新居直轄主義今後の動向は注  
意の中心が新居にのみ限りに  
お

誠

上級朝鮮總督府殖産局長談　成  
大いにありだ、相互間に計畫  
れた重要施設の綜合的見解に  
る成果はいはなくとも期待さ  
る、今月末京城で開催される  
三回朝鮮連絡會議の前提とし  
その成果を説明される

# 輸送方策考慮

稲垣興農  
部次長談

大陸連終會議に出席した栢垣開農  
部次長は古海總務廳次長と同道十  
日午前十時より埴垣方面に見學視

## 立地條件改善

今吉拓北局長  
歸京談



17.1.  
28  
新南  
市

に全面的に協力することになったが、今次協賛會においては對敵  
拒否分としての優待を中心とする必要物資、輕工業物資、繊維  
品分、カーペット、無煙炭、機械油類と對親睦分としてのメ  
有産炭、木材類を中心とする物資と對促進及び輕便水産、農  
州、其建設促進所等守る所要資材の既充分の當面の直輸案につ  
き、盛ら對日貨等の協力を中心として、これが具體的遂に轉  
じらぬ間にその協賛の必要とする物資の出の無阻通過の確保を企  
てしたことが、

朝鮮側代表一行入京す

[illegible][illegible]



- (2) 統治の根本方針
- (3) 民心の動向、治安状況、思想問題、民族協同問題
- (4) 各地域の特殊性、今後の方針、相互協力の方策











# 上瀧殖産局長の談話

物資、原料關係では、樺、物、建  
材、用木材を中心とした朝鮮産の  
要求が大部分である。また電力  
では水電発電所の設備問題、泰  
州、雲南の兩省電網の開通及び  
それに要する資材の配分問題が  
繰上けられてゐるが、全圖畫第一



100

なほ下龍局には所蔵あり

本格的協議に入る

滿鮮鮮連網  
協議會議

筆、同前書の附録に引く。總論に「予、時  
より、東、自、漢、唐、宋、元、明、清、  
の各代、鐵を、同、一、土、而、以、之、爲、器、  
蓋、の、友、の、日、本、復、明、の、基、業、陶、冶、  
之、友、の、土、と、い、ふ、不、動、の、基、本、乃、  
斯、く、漢、朝、の、兩、百、年、の、盛、衰、  
開、閉、つ、き、毫、毫、な、き、奇、見、の、理、  
あり、漢、自、漢、族、陳、氏、諸、臣、に、  
に、歸、附、を、發、露、の、促、使、一、理、  
つ、き、又、六、代、諸、臣、に、於、て、自、國、  
本、土、地、理、本、土、物、産、の、盛、衰、  
豫、州、に、唐、朝、發、露、の、理、あり、

いて、本年の國庫の増入は、前年より約一億圓に達するものと見られてゐる。然し、この増入も、國庫の必要に十分の補給を與へてゐるに過ぎない。國庫の増入は、國庫の必要に十分の補給を與へてゐるに過ぎない。國庫の増入は、國庫の必要に十分の補給を與へてゐるに過ぎない。

行渡元藏相推唐



日會で會に應ずる所男衆

すことに決定、また新大

1050

魚連ニ義

[illegible]

... 1990 ...

其、各分科會の協議事項の

1



17.4  
日大  
之連

重要懸案の  
可決に喜ぶ  
連絡會議出席者

大陸の首脳部を網羅した大連連絡  
會議は和氣親王に進歩、重慶  
案は一瀟千里で可決して二日の豫  
定を九日一日をもつて終了、會議  
の成果に憂ひ溢れる首脳部一行は  
十日早朝から大連市内各施設の視



蔡に同ひ上潮朝鮮總督府殖産局長  
を始め華北、蒙疆首領部一行十八  
名は龍田州農商工水産課長の案内  
(寫眞は滿洲資源館を見學中の  
一行)

◇白軍 △監督中島(實業) △マ  
ネジャー佐野(満俱) △主將井

兩軍のメンバー決る

で中央談判を約一時間に亘り見  
學の後、中央公園山の麓に到り  
全市を俯瞰して瀧川省館を見  
學。一方古瀧川國籍博物館次長の  
一行は埠頭方面を見學、正午は一  
同揃つて市場やマートホテルにお  
ける州廳、市役所共同主催の午餐  
會に臨み、午後五時、車駕行  
動をうつて龍崎遊説は大津附近  
の名所龍崎を見學した  
なほ武部龍崎遊説部長は十一  
日、あしあと、三浦廣島居  
長は十三日、上船解纜産官長  
一行は十一日それより歸任の  
豫定



(写真はメンバー交換協議会)

日本中) △三疊(矢野)  
中) 津田(綱新・徳廣)  
壓案株(實新・伊北)  
野角谷(實・明大)  
平安中) 山根)  
矢野(實・法  
なほ審判は  
萬の四代







了の人の監禁、附屬の御下(へ)へ  
 「大日本帝國」結婚勸進會は、  
 二十七日、女子會館、開會し、  
 宇野浩吉及びこれに嫁(よめ)む氏民名を  
 附屬決定、二月三日、大會館で總  
 式事を舉ぐることとなつ、總親  
 王は皇族御下下、華族の御下であ  
 るが會長、副會長は左の通りで  
 ある  
 △會長 山内順子(山内尊で侯の  
 大入で、武官宮澤博士の御下)の御  
 妹)  
 △副會長 禮節子(力(きらく)學博士の  
 御下)留學明天(めいてん)女學校を了す(故  
 武藏屋義元卿子)△三郎(三郎子)  
 △御下(おご)の御下(おご)の御下(おご)の御下(おご)  
 (御下)水野彌壽子(水野練太  
 郎氏子)



# 和氣靄々の交驩 大陸日

## 4.17. 三浦さんトツプを切つて農場へ

### 大陸會議に明るい大連

大陸の首脳部を網羅した大陸會議は、切れるやうな緊張を醸成してゐる。州廳ではこれら一行を三浦農場に迎へる準備に萬端なく手筈を整つた。會議定刻三十分前、三浦農場總務長が懐かしい音の住宅を踏む如くして首領の先着を切つた。是に對して武部、瀋陽、局長官、始め、瀋陽、瀋陽より飛來した、蒙古代表の一行を加へて、文字通り、大陸首領部が一堂に會し、和氣靄々の交驩を、三浦農場會館に、臨み一同カメラに納まり大東亞建

設への大陸會議に移つた。これより先八日來連した三浦農場、上關、朝鮮總督府、殖産局長一行及び九日來連した武部、瀋陽、總務長官一行は、大連、ヤマトホテルに、また北支那代

表は、星、三浦、力家にとそれ、授、時ならぬ、顔目の、訪れに、ホテル、關係者を、驚かすなど、三浦農場の、會議、開れに、臨み、大陸の、交驩、大連は、緊張と、期待に、臨み、で、た。



# 鮮滿華連絡會議

## 將來、春秋に開催

上瀧殖産局長語る

大連特電「十日發」大陸日報記者  
鮮滿華連絡會議は、遼東に於ける第一  
日をもちて總ての打ち合せを終つ  
たが、十日は午前十時より瀋陽  
源記及び塩漬の酒席状態を視察し  
午後には自由行動になつてゐるが宿  
舎はマートホテルに於いて上瀧殖産  
局長は語る

○…會議は豫以上は効果があ  
げた、凡そ物事は人を知ること  
と、土地の事情に通すること  
が第一要務、斯うした各關係  
者が膝を交へて話合ふことは百  
の理論にまじり良いことだ、今  
度の會議の結果、將來春秋二回  
開催するに成り、次は十一月  
頃北京に於て開かれる筈である  
○…大連は廿五日に來たが、  
大連町が奇麗になつてゐる、當  
時露者、ハルビンまで見たが大  
連の變り方が驚異的だ、半島人  
の活動も増進してゐる  
なほ同族一行は十二日夕まで  
に大連山に向ひ、一泊、翌朝を曉  
空のちも一路歸郷の途





北榮圈參畫方策討議  
大陸連絡會議開へ

に解職され代り三十名出席の上、先づ市評議會を廢置に維持し、偶尙に關し懸あつての協議に移つたが、會派は、大陸議會會黨、十分劃定を期すに努力し、その結果、大陸議會會黨と成り、終然知風黨となり、ついでに、眞實社が、吸つて植桑を以て起つに各團體の事實を解決して、義氣義勇進められ、正午に大阪府會その朝報記者招待を以て、交し、萬ヤマトボツに入つた。

是に於て、大村鐵藏、多  
 少の學問者、他國學者と接し、  
 了た後、又トキヲ入つた、  
 午後七時五十三分の、その、  
 附録、經中、附圖の、附定

[illegible]

對日物資供出增強

[illegible]

しかし今回は別段議案を指示することなどなく、又會期が短いため交通物資の數其の恒に細な點に亘つて協議するやうなことは望めないであらう、滿鮮間の融寒でもつた關係に依り、滿の鉛分、鹽土品の製造輸出、滿洲鐵產および滿山炭の製造輸出

いんき蓄・いんぴ精  
**イトコ至天**  
 筆 五 蘭



陸奥事蹟を採擷して編であつたが、石炭部門、農産物部門の如く部門別に前略を添へただけであつて、鋼鐵、非鐵二者の綜合的な論評評述その他の打合せは出来なかつたため今回の三省通覧協賛會刊進に至つたものである。

へ。う。と。て。所。に。至。り。神。城。に。今。里。の。と。り。て。取。り。か。へ。た。め。に。あ。つ。た。り。て。神。城。に。さ。し。上。げ。て。衆。人。に。さ。し。ひ。り。し。て。又。か。へ。り。と。す。又。神。城。に。さ。し。上。げ。り。て。衆。人。の。中。に。あ。つ。た。り。て。ひ。き。か。へ。り。

有力者を中央に引くはいつて、  
 一、新法はなし、舊法を、舊法  
 に、未だ生かすとする、此は  
 愚考である。何から、新法を  
 行へば、新く自分の實益、改良  
 して得るものにならざるべし、  
 して得るに、かゝる利益を、  
 人に與へ、世に施すもので、  
 給て安んじ、國を安んずるべ  
 し、  
 有力者を中央に引くはいつて、  
 一、新法はなし、舊法を、舊法  
 に、未だ生かすとする、此は  
 愚考である。何から、新法を  
 行へば、新く自分の實益、改良  
 して得るものにならざるべし、  
 して得るに、かゝる利益を、  
 人に與へ、世に施すもので、  
 給て安んじ、國を安んずるべ  
 し、

[illegible]

建川前大徳聖天酒  
 開へ  
 分  
 堂生寶  
 の強力 A.D.  
 ツクス  
 堂生寶  
 言時  
 一昨二家の  
 たり多病て困  
 るべき候ではな  
 いとの嘆い  
 へ歎き置てあり、  
 病状漸々、何  
 程まで困窮し、  
 らの三ひきする。然るこ  
 とを察して、  
 らだ。  
 聖天は、  
 二一に家だを建てて  
 ある。これは半に  
 もたない。醫家  
 は神なり、と通  
 達には感ぜざる

發行所 大正通  
印刷所 大正通  
人 大正通  
大正通



# PEN

大正通  
大正通  
大正通  
大正通

大正通  
大正通  
大正通  
大正通



# PEN

大正通  
大正通  
大正通  
大正通

大正通  
大正通  
大正通  
大正通



# PEN

大正通  
大正通  
大正通  
大正通

大正通  
大正通  
大正通  
大正通



# PEN

大正通  
大正通  
大正通  
大正通

人連田日新



刊 夕  
日三十月六

酒銘 高千穂

全滿  
省長會議開

先づ張國務總理舉國一致を強調

(龍江) 金省世 (遼河) 章  
漱章 (濱江) 王斌陳錦州  
黃富隆 (安東) 尹琛陳 (三  
江) 李範 間 呂宜文  
(通化) 大鼎 太郎 (牡丹  
江) 許桂栢 (興安東) 壽明  
阿 (同南) 諾拉 喇爾扎布  
(同西) 額爾欽巴圖 (同北)  
各省長官 許靜遠 特別市長、  
江鏡清首 薩德麟 等出席

竹內內務局管理處長開會の辭  
を述べ張總理同縣訓代留書を  
奉讀し續いて別項の如き訓示

を行ひ直ちに日程に入り星野  
長官より總務廳所管事項の指  
示があつて後、察外務局長官  
よりの指示事項があつて午前  
中の日程を終了、晝食後一同  
打聽つて軍司令部に樺田軍司  
令官を訪問し挨拶を述べ午後  
二時再會、内務局、興安局、  
地籍整理局、治安部、民生部  
の指示事項が行はれた

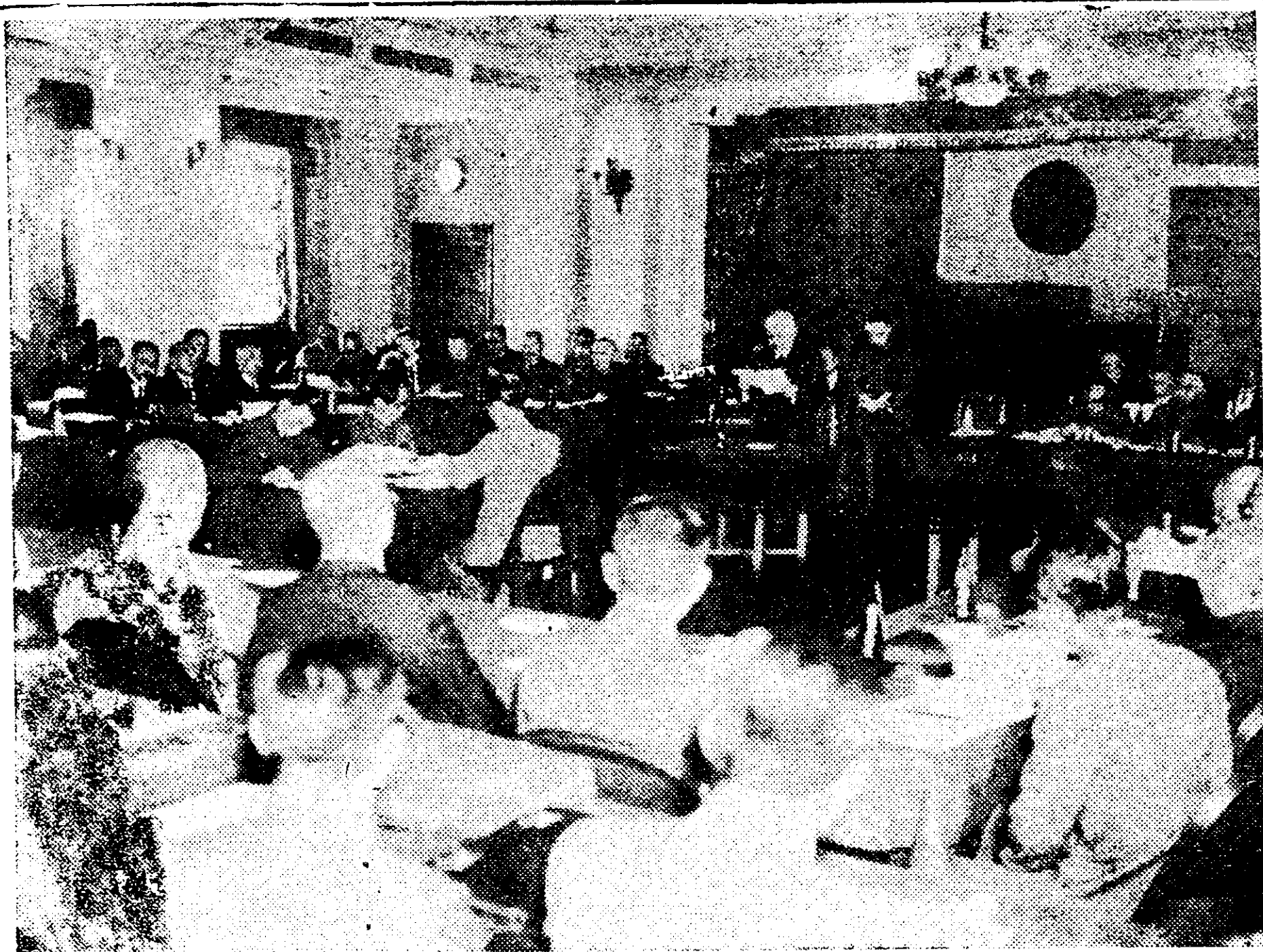
# 張國務總理訓示

繼つて現下内外の情勢を省察するに國際情勢はさらに緊迫するに對し内政の刷新實に必要なるものありと認むるは、民族協和の實踐を以て徹底しこれを基調として物心兩面における舉國一致體制國防國家を完成するにある。

現下の時局に處しさらにその不測の變轉に備へ、確固不動の姿勢を整ふるは刻下の急務である、而してその要諦は建國の理念に徹し、日滿不可分離の協力を要請し以て訓示に代へる。

等徒に過去の業績に安んじ、本國の安易に就くを許さず、本官は茲に政府の所信の存するところを披瀝し各位の眞摯勢熱なる協力を要請し以て訓示に代へる。

の前進を餘蘊なくせしめ、さきに制定された總動員法はその基本法令にして國家總動員の目的態様を示すものといふべからざる事業開發計畫はその實體をなすものである、またたけ防衛法は準備方面における總動員法にして義勇奉公隊の組織はその重要な基礎をなすものである。



# 民間警護の中樞

協和義勇奉公隊

星野總務長官重要性を説く

長官より指示された協和義勇奉公隊は民間護衛組織機構の整備充實を目的とし、既設の防護團を吸収し防空協會の改組、飛行協會との調整を行ひ國民運動機構の確立を期するものとして國家總動員法、防衛法の施行とともに注視されるが、政府原案は左の通りである。

機を速に充てずして協和義勇軍公隊を組織し、以て我が國の發展に資せんとする。

第二 要領

一、協和義勇軍公隊は概ね満二十歳乃至三十五歳の壯年男子を以て組織し、各民族朝野一休の義勇奉公の精神に基き、平戰兩用を通ずる國民的防衛能力を増進し、特に緊急防護の實施に遺憾なきを期するを以て目的とする。

二、協和義勇軍公隊は、軍需品原則として特別市、市、指

區に即應し、原則として當該地區協和會の組織單位を基礎として編成せらるものとす。但し官廳、學校、特殊會社工場、事業場等の施設區域に於てはその機關内に分隊を設けずることを得なものとす。

四、協和義勇軍公隊の設置は、各民族軍一の組織を以てするを原則とし、但し訓練の便宜等に依り、當分の各民族別に

五、協和義勇軍公隊の監督に關し、協和會は指導に關し、協和會は指導に作用するものとす。

七、協和義勇軍公隊の監督に關し、協和會は指導に作用するものとす。

八、治安部大臣は國務大臣と協和會の主席和義勇軍に隊員の教練指導を

和義勇奉公隊

の義勇兵公心に基く降参勲員並訓練組織を速に完成する爲協和會組織と有機的關係に於て別紙要領に基き國務總理大臣の特別各省長の監督の下に特別重鎮地方へ専ら都市重要工業地へは協和義勇兵公隊を組織し兩府地方にある保甲自衛團及市街地方にある保甲自衛團と相連んで民間團體の

星野長官挨拶

とす。本件組織の決定は協和の總動員の前提に外ならざるを以て特に政府協和會一體關係の徹底を期し彼此相倚り相扶け以て國民動員の組織及調練の完成に努めらるべし、尙青年團の組織設定に關しては別に協和會に於て近く決定指示せらるる旨に付右に對しては充分に協力指度

第一 方針

現下内外の情勢に對應し一總一心民協和の我建國の理想に鑑み協和會組織と有聲の職に於て民族一體の義勇奉公心に基く警備前員並に訓練組

一、最大勢力を發揮するに必要とし、一般經濟活動も一段と集約せられ競争の有效なる空白を留め繼として相互に摩擦なき様調を整へることを要す、斯くて一方直接接觸に當る抵抗力の十分なる活動を庶幾し、と共に正當なる背後に在る一般國民の生活を保保し併せて爾後の國力復興増進の爲有効を期すべきなり、此運用こそ實に現代國防の要諦をなすものに現れては猶ほ統制運用とは即ちこの總體であり、又所謂國家總動員とはこの別名に他ならず將の如く現代の國防に國家總動員を度外視しことと論ずる

以上を略して之を要するに、我が國に於けるその統制運用を以て自前たるその統制運用を以て對し得べきものと國家總動員準備を併せざるべきなり、國家總動員準備の第一に重要なるものは青年教育の施設にして、第二に家庭總動員計畫の施設なり、第三に重要なものがあるが、それは總動員に於て之こそ相當なる總動員計畫の設定に依りて實現するものである、其の果地となり得べきものたるものなり、即ち各級の資源に付するの地位は固よりその需要供給の關係を明らかにし、その總動員乃至總動員の可成性毎年測定し平時に於て常に階級にて清査せる資料を整備する

家總動員準備上の基礎となるに止まらず又平時政にもなるものなり、故に之に及ぶ者は諸行政當局に及び當り然れども調査資料に於ける必要とならば一方又國防上の防衛施設に付ても其の資料の整備の要緊なる人れざる明なり

我國における家總動員にあるが如く軍民及地方官の如く軍民及地方官の統制運用計畫（國家計畫）の設定及遂行に

漢口の前衛安慶占領

安慶城門に殺到したわが陸軍の高橋部隊原田隊は見事一番乗り成功し、二日午後十一時城頭高く日章旗を掲げ、續いて高橋部隊の各隊も續々入城完全に安慶城を占領した

# 外務局長官演說

外務省の官は十三日の省長會議において滿洲國の外交方針に就き左の如く所見を發表した。

わが對外關係は從來諸國調和なる發展を遂げ日本との親善提携の日々を遂げて堅密を加へるに在り、帝國を承認せるサルモ、更にラテンアメリカ及ローマ法皇廳のほかに最近イタリヤ、ドイツとスเปนの諸國と正式の國交を開始しポーランドも亦國交開始の希望を我が政府に通告し來り目下承諾の手續中にあり中華民國との關係においても緩慢自治協定、臨時及進歩

各級各段に於てさうに積極的努力を傾倒せんとするものである。これに伴ひ國格はいよいよ多岐多端となりその地位を復た擧げて見るべし。官吏の職員を向上し施政の機能を合理的ならしめるは今後の發展に當り最も重要な條件である。官吏制度の改革はこの要諦に即應じんとするものにしてその根本精神は民族協和且民権一體一心を基礎としその内容は官吏の素養を確立すると共に人材の登用、任用、退避の全副、總稱の合理化等

三政體相輔而行樹立せらるる中國國民が樹立せる三國の提携に向つてせんとするに至れり、わが國の外交が今日の展をみるに至れるは一助によるわが國諸條約漸次列國の承認するところたる結果として直接國內の整備に際接してある省長各位の勞績に充溢なる敬意を表す。特に最近の國情を顧みれば、國内防共協定の成立及び人馬の失散等により已に極

を常事とする、政治はその用につき周到な經營を萬念を期せんとする位がその願望の存する者分らず得ざられもつ吏道の確立に努められん望む。

政治はまづ地方行政財政の刷新を一貫せる方針と爲す機能の強化擴充に置き本年度においては舊の機軸の擴充を随行すの趣旨は省を越へた運営により地方行政の刷新を期しその浸透徹底



利なる立場に陥りたりと雖も  
なほ世界赤化の野望を捨てず  
即ち支那事變發生以來益々赤

基礎を確立し其存共榮の實を擧げると共に巨費公正を旨として國際間の親睦及び通商關係を促進し以て國民經濟力を發達せしめんとするにあり、この見地より東下の非常時局に對應するには、

一、盟邦日本の東亞安定策に對する物心兩方面の即應  
二、防共施設の強化  
三、わが國と志を同じくする諸國との親善ならびに通商關係促進による國民經濟力の擴充にありと確信する（中略）

以上の事項を擧げて協力あらんことを誓ふ

性にも鑑み、共に非常時に於ける人員資源の状態等を多岐に中央に於ては夫々各部局長員に付豫計事務長當務員を任命し、國務總理の下にその職務に從事せしむるものとす。地方に於ては夫々防衛法上の計畫設定者省、市縣廳長の下に中央に準じ事務振興會の重鎮を置き更に豫計總畫上の重鎮を新設することとし、右中地方に於ては市務整頓の爲めに第二次的に適當の要員を臨時増置せむとす、各位以上の上級官に依り速にその組織を整備し圖り豫計畫の決定及實施の訓練查詢等その密

位は克くその地位職員の重大性を自覺せられ一層研究努力を盡したることを希望する次

黃河堤防破壞

【上海十三日發國通】支那側の  
報道によれば、支那軍は九日  
隴海線放棄退却に際し、鄭州車  
北地區に於て黃河堤防を破壊  
したが、打撤く空襲によつて  
高潮せる濁流は決潰せる堤防

るものとす

(2) 協和義勇奉公隊を組織すべき也或に於ては自

事變に限り施行せらるゝものたり、然る處この置に關し巷間稍もすれば直ちに民間施設物件の管理、使用又は收用はるゝが如き誤解を存するものもあるに付本誌の眞義特に實施に當りては補償その他國民生活確保の爲の適當措置を併せ講ぜらるべき旨一般に徹底理解せしめられ度

首相、陸相  
五時間懇談

〔東京國通〕十二日夜行はれた近衛首相と板垣陸相の會談は實に五時間半に及び十三日午前零時漸く終了したが、右

(附註)  
防空協會の改組、飛行協會との調整に付ては別に決定

御商談の心  
藤本七郎  
株式會社  
大同大街道二〇二番  
電話 ②

計その他の必要益々大

を以て直接に揚揚に遂行すべきものなるを以て常に平時行政の執行に付随動員を爲すの訓練乃至準備の必要を加狹すると共に随動員の見地よりするの諸方策を建設の考察或將に遺憾なきを期せられ度

### 防衛法の施行

去る三月十日公布せられ四月

これを傍觀する者も、單なる年中行事以上のものであることを感ずるのである

□

は所屬を啓勵し民間に對し資源調査の趣旨的に付充分な理解協力と得せしむる爲め

に違ひなく、所あるべきこと、その  
れ違ひの間に夫々軍國係出先官  
憲と緊密なる連絡の下に夫々  
準備事項の密備に遺憾なきふ  
をか

六月爽風の大野に麥寄いの  
を以て、持てる國の福祉を祝

外へ出て置いた。それから、  
て、先づその事について出  
来るだけ詳しくお話ししたか  
ら直々筆の意見には總押だ  
満足して居られたやうな  
五時間以上居る會談の内容だ  
お話するやうなことはあま  
存分にやつて来た、これ  
非常に重要なことと思ふ、  
胸臆を開き膝を交へて話さ  
ばいゝ」とよい考へ、編  
んで来る。軍事、外交、經  
濟等の緊密なる連絡を取る  
ために四角張つた會合によ  
らずじつくり話合ふ氣持に  
なれば最良の方途も發見し  
得られるであらう、暇あり  
次第池田藏相、宇垣外相と  
も個別のにつづくりお話し  
て見たらと思つてゐる

吉田舎の

寺超

新聞 二

天下無敵  
の珍優

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100  
101  
102  
103  
104  
105  
106  
107  
108  
109  
110  
111  
112  
113  
114  
115  
116  
117  
118  
119  
120  
121  
122  
123  
124  
125  
126  
127  
128  
129  
130  
131  
132  
133  
134  
135  
136  
137  
138  
139  
140  
141  
142  
143  
144  
145  
146  
147  
148  
149  
150  
151  
152  
153  
154  
155  
156  
157  
158  
159  
160  
161  
162  
163  
164  
165  
166  
167  
168  
169  
170  
171  
172  
173  
174  
175  
176  
177  
178  
179  
180  
181  
182  
183  
184  
185  
186  
187  
188  
189  
190  
191  
192  
193  
194  
195  
196  
197  
198  
199  
200  
201  
202  
203  
204  
205  
206  
207  
208  
209  
210  
211  
212  
213  
214  
215  
216  
217  
218  
219  
220  
221  
222  
223  
224  
225  
226  
227  
228  
229  
230  
231  
232  
233  
234  
235  
236  
237  
238  
239  
240  
241  
242  
243  
244  
245  
246  
247  
248  
249  
250  
251  
252  
253  
254  
255  
256  
257  
258  
259  
260  
261  
262  
263  
264  
265  
266  
267  
268  
269  
270  
271  
272  
273  
274  
275  
276  
277  
278  
279  
280  
281  
282  
283  
284  
285  
286  
287  
288  
289  
290  
291  
292  
293  
294  
295  
296  
297  
298  
299  
300  
301  
302  
303  
304  
305  
306  
307  
308  
309  
310  
311  
312  
313  
314  
315  
316  
317  
318  
319  
320  
321  
322  
323  
324  
325  
326  
327  
328  
329  
330  
331  
332  
333  
334  
335  
336  
337  
338  
339  
340  
341  
342  
343  
344  
345  
346  
347  
348  
349  
350  
351  
352  
353  
354  
355  
356  
357  
358  
359  
360  
361  
362  
363  
364  
365  
366  
367  
368  
369  
370  
371  
372  
373  
374  
375  
376  
377  
378  
379  
380  
381  
382  
383  
384  
385  
386  
387  
388  
389  
390  
391  
392  
393  
394  
395  
396  
397  
398  
399  
400  
401  
402  
403  
404  
405  
406  
407  
408  
409  
410  
411  
412  
413  
414  
415  
416  
417  
418  
419  
420  
421  
422  
423  
424  
425  
426  
427  
428  
429  
430  
431  
432  
433  
434  
435  
436  
437  
438  
439  
440  
441  
442  
443  
444  
445  
446  
447  
448  
449  
450  
451  
452  
453  
454  
455  
456  
457  
458  
459  
460  
461  
462  
463  
464  
465  
466  
467  
468  
469  
470  
471  
472  
473  
474  
475  
476  
477  
478  
479  
480  
481  
482  
483  
484  
485  
486  
487  
488  
489  
490  
491  
492  
493  
494  
495  
496  
497  
498  
499  
500  
501  
502  
503  
504  
505  
506  
507  
508  
509  
510  
511  
512  
513  
514  
515  
516  
517  
518  
519  
520  
521  
522  
523  
524  
525  
526  
527  
528  
529  
530  
531  
532  
533  
534  
535  
536  
537  
538  
539  
540  
541  
542  
543  
544  
545  
546  
547  
548  
549  
550  
551  
552  
553  
554  
555  
556  
557  
558  
559  
560  
561  
562  
563  
564  
565  
566  
567  
568  
569  
570  
571  
572  
573  
574  
575  
576  
577  
578  
579  
580  
581  
582  
583  
584  
585  
586  
587  
588  
589  
590  
591  
592  
593  
594  
595  
596  
597  
598  
599  
600  
601  
602  
603  
604  
605  
606  
607  
608  
609  
610  
611  
612  
613  
614  
615  
616  
617  
618  
619  
620  
621  
622  
623  
624  
625  
626  
627  
628  
629  
630  
631  
632  
633  
634  
635  
636  
637  
638  
639  
640  
641  
642  
643  
644  
645  
646  
647  
648  
649  
650  
651  
652  
653  
654  
655  
656  
657  
658  
659  
660  
661  
662  
663  
664  
665  
666  
667  
668  
669  
670  
671  
672  
673  
674  
675  
676  
677  
678  
679  
680  
681  
682  
683  
684  
685  
686  
687  
688  
689  
690  
691  
692  
693  
694  
695  
696  
697  
698  
699  
700  
701  
702  
703  
704  
705  
706  
707  
708  
709  
710  
711  
712  
713  
714  
715  
716  
717  
718  
719  
720  
721  
722  
723  
724  
725  
726  
727  
728  
729  
730  
731  
732  
733  
734  
735  
736  
737  
738  
739  
740  
741  
742  
743  
744  
745  
746  
747  
748  
749  
750  
751  
752  
753  
754  
755  
756  
757  
758  
759  
760  
761  
762  
763  
764  
765  
766  
767  
768  
769  
770  
771  
772  
773  
774  
775  
776  
777  
778  
779  
780  
781  
782  
783  
784  
785  
786  
787  
788  
789  
790  
791  
792  
793  
794  
795  
796  
797  
798  
799  
800  
801  
802  
803  
804  
805  
806  
807  
808  
809  
810  
811  
812  
813  
814  
815  
816  
817  
818  
819  
820  
821  
822  
823  
824  
825  
826  
827  
828  
829  
830  
831  
832  
833  
834  
835  
836  
837  
838  
839  
840  
84

優  
陳州  
珍殿樣



美

第一彈！

遼 監督 鈴木京子  
子・上田吉二郎

1  
よ  
3

[illegible]

**牛**  
 足釜原藤  
 明井岸  
 演共  
 子接宮姫・篤邊渡

片田舎の  
 忘れられた  
 やうな輕便  
 鐵道の從業  
 員たちと素  
 朴な村娘た  
 ちの戀愛を描く  
 ユーモア篇……

**超特急**

世界  
 新聞  
 ニュー  
 ス

高勢實乘  
 小笠原章二郎  
 の珍優

天下無敵

**日本一の**

日本一の兩珍優  
 が演ずる六百餘州  
 古今會て見ぬ珍殿様  
 これが笑はずに居られま  
 すかの大珍演  
 珍優新コムビ  
 第一弾!

**新珍様**

日  
 4  
 セン  
 1  
 3  
 0

萩原遼  
 池井蘭子・上田吉二郎  
 山田好良 外東寶京都總動員

**豊劇**



物價手冊



あすの野球  
新倶電業  
西公園球場  
午後四時半

水難救濟法實施

濟南徐州間電報  
十五日頃開通  
（濟南十三日發國通）濟南、  
徐州間電報開通については、濟  
南、徐州兩電報局間に於て試  
験連絡中のところ好成績を示  
したので、來る十五日頃日華  
兩電報の取換を開始する事  
となつた

山道代議士等  
上海へ  
（東京十三日發國通）民政黨  
顧問山道義一氏に成島、山本  
（條）兩代議士と共に來る五  
（北京電）北支、支那各總領  
事官に駐軍將士の慰問を以  
て、北京中國の觀察中であつた  
が、十二日午後七時半北京發  
上海に向つた

齋、和久田兩氏  
十四日出發  
洲体育保健協會館に、和

煙草小賣值不定

之北滿各地の體育指導のため  
 十四日出發  
 吉林、牡丹江、佳木斯、哈  
 爾濱、チチハル、白城子等  
 を巡回する

### 都市對抗豫選

### 南滿野球大會

日本都市對抗野球試合出場  
 一ムの南滿地區豫選兼春季  
 東賽は来る廿三日より五日間  
 東驛前グラウンドにおいて開  
 催されるが、その組合せは來  
 廿一日午前十時より安東市

兩神官今夜出發



高士三郎

は今回の物價騰貴に

一丁  
東京  
六五四三番

着  
京

西公園球場  
國民募券開彩

今晚  
主なる放送

七三〇國民唱歌一協和行  
曲（澤大）伊東和子外▲  
ハ。〇ラヂオバナラベハ  
演に酬れ飛ぶ（哈爾濱）  
ハ。〇舞台劇（原付幡隨  
長兵衛）（大阪）歌舞伎座  
り中繼

女中二名

右募集す希望者は本人來談あり度し

常盤旅館

三笠町二ノ八  
電話③三三三番

目下盛業中の洗張店

讓店

露國の爲に急格安讓る

姓名在社

しきに亘つて縣人會として  
このでこんなにも「敵郷の

謝いてゐる。一事も知らずに居られる縣人の方々が相當  
 驚くものと思ひます。  
 縣人水入らずの草を踏んで一夕、お國はなし  
 に興じたいと思ひますが夕氣みがてり軽い氣持でお出ま  
 じ下される様特に新らしく來京された方々のためにお護ひ  
 申し上げます。

會場 記念公會堂  
 時日 六月廿日(月曜)午後六時半  
 會費 一圓八十錢(當日持參)  
 高準備の都合もありますから葉書でなりと御一報下さる  
 御願ひ申し上げます。(六月十七日送申込のこと)

常盤町一ノ一 六電話(三三〇八〇)

宮城縣人會事務所

たみ  
山村置店  
電話2)二二七九番

日 時 六月十四日(火)午  
場 所 新 京 日 滿 軍 人 會  
演 題 並 に 講 師  
火 災 保 險 經 營 の 概 論  
財 團 法 人 損 害 保 險 研 究 所 主 事  
北 後 援 滿 洲 火 災  
來 聽 歡 迎 (無 料)

---

十一日  
より十八日  
まで

五階ギヤラリーにて

新作

フラン



陳列即賣會

新しい構想變つたデザインに依る情調豊  
かな新作フランス人形の一大展観……

東西ゆかたの粹を薙めた

ゆかた會

オス東京銀座ゆかた、大阪染屋銀座ゆかた  
優秀撥染中形、有松絞り、紅梅地ゆかた

「夏はゆかたの世界」ゆかたのあ  
らゆる種類を賣場に市積！

二階

ゆかた賣場

三 中 井

食事と喫茶  
日本橋茶房

日本橋通 電話(3)三一八番

一般刑法法律事務

新嘉坡七路 第一朝日ビ  
(朝日座正隣) 電話二五三

# 集募徒生

學入初月  
院學裁洋華文



奉天鐵西工業區の全貌

郎七又原江

る動機となる。こゝに、陳西亭と王雲五の間に盛  
んじて熱戦上演の問題が起きてゐる譯であるが、引換けては引換  
かたし勘定で、この選挙は殆んど期限がないであらう。これに  
ついては最近新聞を讀んで見れば、華僑士協會あたりが何とか適當  
の方法を講ずるとしてゐたらう。原  
因の第一としてには高級技術員は勿論下級工卒從職員の屬族體操  
をすらすら缺いてゐるといふやうであ

られたのではない。最近漸くこの方面に着目し、王立大學・日本の特許學校程度、および工業本館の調査研究所の設置の機運が動いてゐるが、むづかしいが、  
**感**が 腐敗役員員の  
**が** 日本内地からの  
**ない** 供給の困難、今  
 日、將來の満洲工業の發展性となる  
 照会と並に、この現地における  
 産業と並に、

以上が露西における事實であるが、露西の東部と、その日本資本主義との關係における發見が今後における研究である。

# 當面の緊急問題

資金、原料、熟練工入手難

感か 腐敗技術員の  
ない 日本内地からの  
供給の困難な本  
日、將來の讀んでの發見性  
照して、その内地における  
養成は、但し、自國といはな  
以上が鐵道における第一の  
大問題であるが、臺灣の地  
と、その日本資本主義との關係  
における發見が今後における點である。



## 社説

# 大陸連絡會議

は市の方針に即しての演説をなさ  
や問はれない。それだけ吾人は  
陛下の閣議の要諦を諒解の態度  
事起し、討論の因が抽象的な  
と直間的なところ間はず、そ  
こに解明なる歴史的進歩道を追  
究されんことを期望するもの  
である。

# 印度洋作戦の輝く大戦果

甲巡一隻忽ち血祭り

船舶四十四隻擊沈破



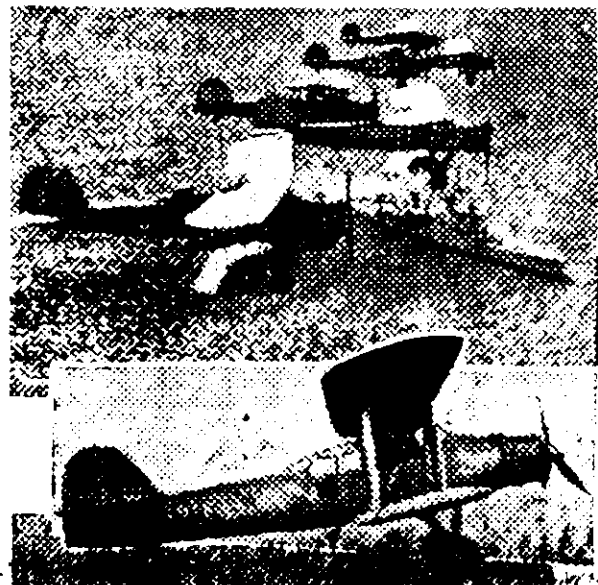
**大本營發表**  
 (九日午後五時、ラジオに發表せしむ) 海軍省軍部除の印度、作戦における四月七日までの計里次の如し(一) 龍艇  
 擊沈 英甲巡ロンドン型一隻、同コンウナル型一隻(二) 船舶擊沈 二十一隻  
 約 三隻(三) 飛行機擊墜 六十機(四) 陸上施設 飛行機格納庫三棟、  
 重要施設 破壊、右においてわが方飛行機を奪ふるはか 艦艇に損傷なし(食糧は我軍が奪  
 取した) 英ロンドン型とコンウナル型



なれば、所以で、この方針の消化は、はやがてその線に科多聯發を自然に活動ならしめ得る。策は、聞なくいへば従来の物産折衝制と異種との意味に於て、餘りにも局部的實效系統が單軌で、然るに、このうち、一は、その地、の、發、展、の、大、局、が、一、體、而、て、

總和

「ベルリン九日  
公使のマルタ  
めて来たが特  
為歐洲閣議  
で獨逸當局者  
ラバレッタ提  
タタ馬内各地  
行り獨逸軍の  
され獨逸軍は  
斷、海軍ドク  
の一方ラベル  
ク、モノエル  
院院中に命  
の英海軍二  
一會計、  
提督で發動  
一、最近  
のガアルハ  
出来る、英



# 築く



# 大連日日新聞

大連日日新聞社  
本社：大連市大連街  
電話：二六二五  
支店：大連市大連街  
電話：二六二五  
支店：大連市大連街  
電話：二六二五

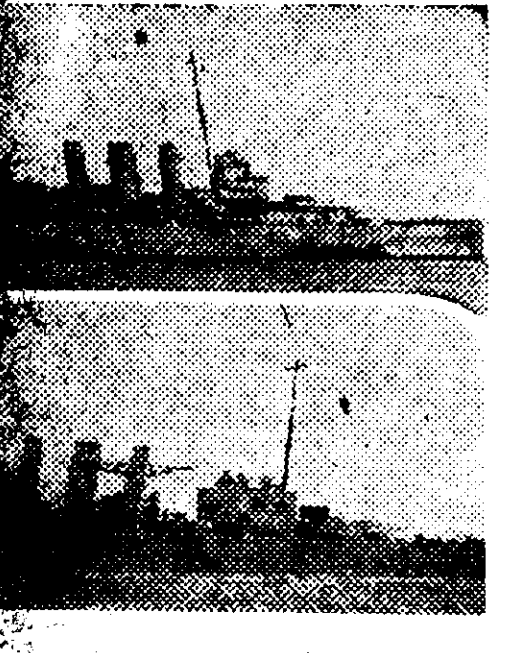
## 大陸連絡會議

大陸連絡會議は、大連市で開かれた。この会議は、大陸の各地方から代表者が集まり、大陸の統一と発展のために努力することを目的とした。会議の結果、大陸の各地方は、大陸の統一と発展のために努力することを誓った。

## 印度洋作戦の輝く大戦果

## 甲巡一隻忽ち血祭り

## 船舶四十四隻撃沈破



甲巡一隻忽ち血祭り

印度洋作戦の輝く大戦果。甲巡一隻忽ち血祭り。船舶四十四隻撃沈破。この戦果は、日本の海軍力の強大さを示すものであり、世界の注目を集めている。

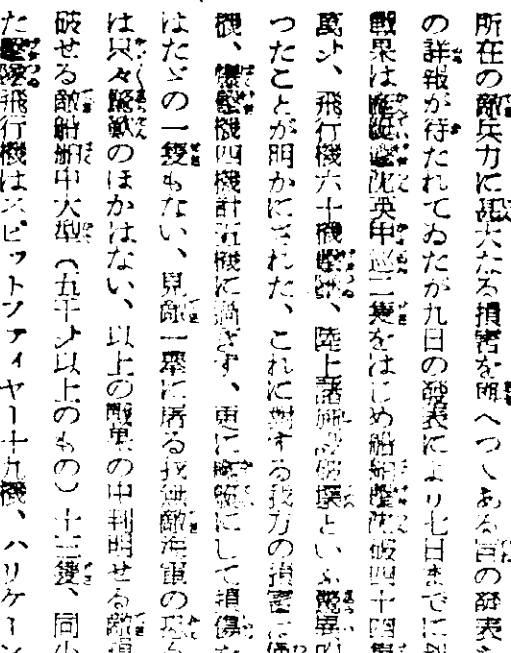
## 秘藏の新型機も我餌食



秘藏の新型機も我餌食

秘藏の新型機も我餌食。この新型機は、日本の海軍力の強大さを示すものであり、世界の注目を集めている。

## 回教徒會議、英案拒否

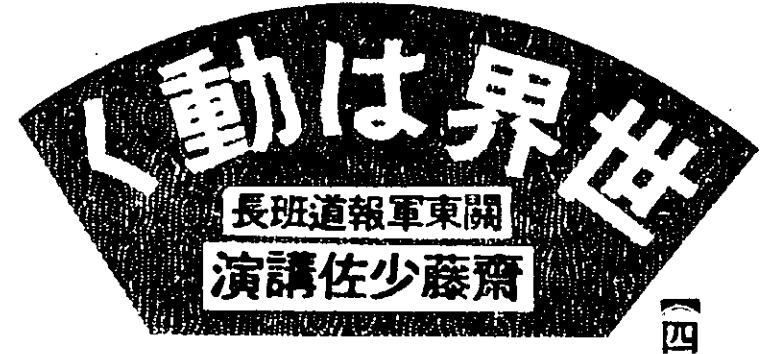


回教徒會議、英案拒否

回教徒會議、英案拒否。この英案は、回教徒の権利を侵害するものであり、回教徒はこれを拒否した。

## 米英の物資難深刻

## 固めよ、鮮満支自給圏



米英の物資難深刻

米英の物資難深刻。固めよ、鮮満支自給圏。この物資難は、米英の国力を弱めるものであり、日本はこれを固める必要がある。

## 世界は動く

世界は動く

世界は動く。この動きは、世界の注目を集めている。

## 米英の實力

米英の實力

米英の實力。この實力は、米英の国力を弱めるものであり、日本はこれを固める必要がある。

## 總官邸

總官邸



## 築く

築く

築く。この築くは、日本の海軍力の強大さを示すものであり、世界の注目を集めている。

築く。この築くは、日本の海軍力の強大さを示すものであり、世界の注目を集めている。

築く。この築くは、日本の海軍力の強大さを示すものであり、世界の注目を集めている。

築く。この築くは、日本の海軍力の強大さを示すものであり、世界の注目を集めている。

築く。この築くは、日本の海軍力の強大さを示すものであり、世界の注目を集めている。



マ  
ル  
夕  
島  
を  
強  
襲

一 會計製、毎 價額算用水上陸、  
複葉で發動機 五七七・七五馬力  
一 器、最近 是獨逸軍門に使用  
してゐる、これを更に改良した  
のがアルハコで、急速下降機  
出来る、英機 車の虎の新鋭機  
である（重量 上からスオー  
ド・フィッシュ、アルハコ、  
デファイアン）

【日野國通】重慶から電  
力してゐる事實を述べたり、英  
米、重慶合作の旨を定断する  
なる進言を  
取らぬ御意

國の理想郷  
清郷工作躍進す

たる際前途に幾多困難のあるこ  
以上に進展してをり時に東、政  
和樂の間に眞剣に之

るが更にこの教訓を擴く全中國に及ぼして一日も早く全中國に普及する如く發せられてゐる。

各地に騷擾を起す

イラクのヌリサイド内閣照にイ  
ラクの他の方法でこの赤白星  
旗が鑑に行はれてゐるが回教徒  
の王政主に対するの例の旗  
橋爪 彦七著  
町人

下村 悅夫著  
國技 史郎著

血鎗  
武道一貫  
秘文記

—B—  
圓八6

—B—  
圓八6

虫、打、行、一、八

和氣露々、屈托を知らぬ財郎家庭を主題にした短編集。明るい無邪氣な少年が、供が登場するところ、おのづから快い愉しい空氣が醸し出される。

眞杉 静枝 著 戦中川一政 監修  
「書下し長篇」B列6冊入  
戦時下の見聞を無差別に綴り、  
正統と非正統を論じ、  
この時代を生き抜く者の  
情状を暴露する。

憎むべき殘虐なる殖民政策を暴擧し、印度の國情と英印關係の根底を

忠勇義烈、ともに戦場を流したる軍人精神の持主である日本と通連した、  
今や確固たる盟約に結ばれて世界新秩序建設を遂行しつつある。その烈た  
る精神は國民の傳統と正不義を憎む強烈なる正義感から生れてゐる。本書  
は赫々たる獨逸軍人精神を簡明に顯示する。敢て日本の讀書手に贈る。

リスナック  
田岡誠 (小説) (長篇)

# 小麦

上 下

米國で通連する小麦に依り歐洲東洋を征服せん  
とせる計畫を背景に描寫  
と正義と時運を描く。

上 下  
一八一八  
一六〇〇  
一五〇〇

原書 廣田 隆  
譯者 廣田 隆

東京市京橋區銀座8丁目

電撃的賣行々 大増刷出来！ 知れ世紀の戦を!! 今や一億

大増刷出来！黎明期にある大陸の種々相を濃密な文筆で描いた名著！「星環」

第九册

全  
園藝利用工業 第三册 皆川豊作著  
農藝の化學と應用 第四册 村川重郎著

土 壤 學 第二册 大杉 繁著 刊

•

水

○

40

藤

40 40

## 11



の多<sup>く</sup>なるので、戦時下の<sup>（一）</sup>の什<sup>（二）</sup>が加はつてゐる事  
つて、但<sup>（三）</sup>してゐるとを考へて、  
おまでもない（終）

分である、それだけ國家の政治方面に目づいて、他方政治方面に目づいてゐるとな味すること、おまでもない（終）



### ライオンペン

ライオンペン株式会社

### 満鐵、本社各部課を移行

大中心主義濃化

### 青龍縣水銀鑛を積極的開發

満鐵、本社各部課を移行

### 立候補者氏名

満鐵、本社各部課を移行

### 帝人人造肥料、帝國加工に改稱

満鐵、本社各部課を移行

### 井野農相補選、立候補者氏名

満鐵、本社各部課を移行

### 満洲鐵道増産、援助交渉進捗

満鐵、本社各部課を移行

### 株式

満鐵、本社各部課を移行

### 買氣潜在

満鐵、本社各部課を移行

### 市況

満鐵、本社各部課を移行

### 圖解科學 第二號

中央公論社發行

### 肩こりに

ルーチメロサ

### 感冒

ルーポラテ

### オリデナル香水

オリデナル香水

### オリデナル香水

オリデナル香水







西地中海で獨潜艦の殊勲

[illegible]

獨軍發表

[illegible][illegible]

行さる

に及ぶまで  
力援力進其  
はと恩恵の  
なり、茲に

大東亞建設博覽會長 榮厚氏式辭

新内閣

## 張國務總理の祝辭

[illegible]

(24)

泉

解通

三郎・作  
門・李・書

「ふ、ふのうたが  
わかつく  
ゆきよき  
ために  
のけしきの  
ほうを  
るわけな  
ら。」

「ふり」  
**の不機嫌**  
は、**隠微**  
微細だけ  
どういふ  
いふか  
と、

[illegible][illegible]

敵がもう

# スードア

**掃力**  
 細菌を吸着消滅菌の働きをしむ。  
**感觸**  
 香味と爽快な気分を一新  
 丹煉齒磨  
 丹粉齒磨  
 丹齒ブラシ  
**磨**

一創製  
 活躍せらるゝ多數有  
 とは誠に苦心に堪へ  
 止しこの費事なる人の  
 信する。明に麻痺  
 肺結核、肺門閉塞  
 後、肺結核、肺門  
 閉塞増進の爲使用  
 研究 所  
 美 商 店  
 武田食品工業株式  
 品名 肺結核薬  
 用法 毎日一回、食  
 後、温かい水で飲む

[illegible]







千人  
千名  
千名  
千人

新新聞社

保證

ク完成御報告

ワック（原自動閉鎖）の出入口には必要なるも日本に於てはる結果對日依存のワック品も漸く拂底

曾葬御禮

武庫谷組

配給されたホフリンでワイシヤツが貳枚作れます

(一) (二)

東京堂

大陸の健康確保に

健意

3-3161  
大田区晴町七番



# 將來滿化も吸集する

## 國策硫安會社設立

### 日滿合辦、資本金五千萬圓

【東京十八日電】硫安會社の設立が、日滿合辦の形で、資本金五千萬圓の巨額を要する。この事業は、硫安の生産と、硫安の消費の増進を目的として、日滿両國の共同事業として行われる。硫安は、工業の重要な原料であり、その生産と消費の増進は、工業の発展に大きく貢献する。硫安會社の設立は、日滿両國の経済合作の重要な一環として、期待されている。

### 大阪見本市開

【大阪十八日電】大阪見本市の開会式が、十八日午後二時に、大阪市立体育館で行われた。開会式には、大阪市長、大阪府知事、関係者など、数千人が参加した。開会式では、大阪市長の祝詞が読み上げられ、大阪見本市の発展と、大阪市の繁栄を祈る言葉が述べられた。開会式は、盛大に行われ、大阪見本市の成功を期すことになった。

### 州内果樹栽培技術員打合會

#### 包張巡回指導その他

【東京十八日電】果樹栽培技術員打合會の活動が、各地で行われている。この打合會は、果樹栽培の技術の向上と、果樹栽培の普及を目的として、各地の果樹栽培者を集めて、技術指導を行う。打合會では、果樹栽培の技術の向上と、果樹栽培の普及を目的として、各地の果樹栽培者を集めて、技術指導を行う。打合會では、果樹栽培の技術の向上と、果樹栽培の普及を目的として、各地の果樹栽培者を集めて、技術指導を行う。

### 三菱社債發行

【東京十八日電】三菱社債の發行が、各地で行われている。この三菱社債は、三菱株式会社の資金調達を目的として、各地の投資者を集めて、發行される。三菱社債の發行は、三菱株式会社の資金調達の重要な一環として、期待されている。

### 四バンプ會社の増産計畫を許可

#### 明年度より實施

【東京十八日電】四バンプ會社の増産計畫が、各地で行われている。この増産計畫は、四バンプ會社の生産能力の向上と、生産量の増進を目的として、各地の投資者を集めて、實行される。増産計畫の實行は、四バンプ會社の生産能力の向上と、生産量の増進を目的として、各地の投資者を集めて、實行される。

### 全面的禁止

#### に非ず

【東京十八日電】全面的禁止の決定が、各地で行われている。この全面的禁止は、各地の投資者を集めて、實行される。全面的禁止の實行は、各地の投資者を集めて、實行される。

### 現地當局の説明

【東京十八日電】現地當局の説明が、各地で行われている。この現地當局の説明は、各地の投資者を集めて、實行される。現地當局の説明の實行は、各地の投資者を集めて、實行される。

### 中文振興會社

#### 事業別、日支割當額決定

【東京十八日電】中文振興會社の事業別、日支割當額の決定が、各地で行われている。この決定は、中文振興會社の事業の発展と、日支割當額の決定を目的として、各地の投資者を集めて、決定される。決定の決定は、中文振興會社の事業の発展と、日支割當額の決定を目的として、各地の投資者を集めて、決定される。

### 哈市輪組貸付狀況

【哈爾濱十八日電】哈市輪組貸付の狀況が、各地で行われている。この狀況は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。調査の調査は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。

### 北支支面會社の政府出資財産評價

【東京十八日電】北支支面會社の政府出資財産の評價が、各地で行われている。この評價は、北支支面會社の政府出資財産の価値を評価し、各地の投資者を集めて、評価される。評価の評価は、北支支面會社の政府出資財産の価値を評価し、各地の投資者を集めて、評価される。

### 哈市輪組貸付狀況

【哈爾濱十八日電】哈市輪組貸付の狀況が、各地で行われている。この狀況は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。調査の調査は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。

### 哈市輪組貸付狀況

【哈爾濱十八日電】哈市輪組貸付の狀況が、各地で行われている。この狀況は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。調査の調査は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。

### 哈市輪組貸付狀況

【哈爾濱十八日電】哈市輪組貸付の狀況が、各地で行われている。この狀況は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。調査の調査は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。

### 哈市輪組貸付狀況

【哈爾濱十八日電】哈市輪組貸付の狀況が、各地で行われている。この狀況は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。調査の調査は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。

### 哈市輪組貸付狀況

【哈爾濱十八日電】哈市輪組貸付の狀況が、各地で行われている。この狀況は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。調査の調査は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。

### 哈市輪組貸付狀況

【哈爾濱十八日電】哈市輪組貸付の狀況が、各地で行われている。この狀況は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。調査の調査は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。

### 哈市輪組貸付狀況

【哈爾濱十八日電】哈市輪組貸付の狀況が、各地で行われている。この狀況は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。調査の調査は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。

### 哈市輪組貸付狀況

【哈爾濱十八日電】哈市輪組貸付の狀況が、各地で行われている。この狀況は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。調査の調査は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。

### 哈市輪組貸付狀況

【哈爾濱十八日電】哈市輪組貸付の狀況が、各地で行われている。この狀況は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。調査の調査は、哈市輪組貸付の状況を調査し、各地の投資者を集めて、調査される。



滿洲國二次五年計畫

本年度物動計畫並びに經濟平衡と黄金制度創設に關し、わが關係當局と折衝のため土中であつた河木滿洲國經濟部長は大体の結合もついたので、来る十九日東京發歸滴することになったが、十五日最近における滿洲鐵道の動向について左のごとく語つた。

大東亞戰爭の影響より大東亞戰爭によつて經濟獨占が南に擴つた結果第二次五年計畫にも當然南方の經濟事情を考慮しなくてはならぬことになつたが、滿洲についてはゴム、錫、ホウキヤイトなどの原料品を輸出し總詰とこの鹽產加工品、鹽鐵具、大豆、雜貨類などを輸出するやうにしたが、この意圖をもつてゐるが、これは更に大東亞共榮圈全体の土壁立地條件を比較検討して決定されることにならう、日滿一體經濟強化の上からいつて滿洲國が繁榮して実を充ねばならぬ第一の問題は鐵礦の増産であるが、これには設備の新設擴張よりも、もつ既に設備の完全利用を計ることが重要でこの見地に於ては、選拔および鐵石品位の向上に必要な設備の擴張を行ふことになつた。

金融政策と資金動員については本年度より種々な新しい方法を採

用することになった、すなはち從來滿洲における貯蓄増加策として、是を協和會を中心とする精神運動によつて有價証券の獎勵を計つたが、昨年度の貯蓄目標十五億一億に對し本年度目標が十五億圓に引下げられたのに對應して今回更に次の二制度を新設して地場資金の徹底的吸收を計ることに決定した。

一、日本と同様に法的貯蓄組合制度を実施する、創設される貯蓄組合は獎勵組合、職場別組合、地域別組合の三種とす。

二、公債の強固保有制度を実施し、一、公債の購入以上の純益を上

用するのになつた。すなはち從來滿洲における貯蓄増殖政策として専ら協和會を中心とする精神運動によつて有價証券の獎勵を計つてゐたが、昨年度の貯蓄目標十二億圓に對し本年度目標が十五億圓に引上げられたのに対応して今回更に次の三制度を新設して地盤資金の徹底的吸收を計ることに決定した。

一、日本と同様に法的貯蓄組合制度を実施する。創設せられた貯蓄組合は職業別組合、職場別組合、地域別組合の三種とす。

二、公債の強制保有制度を実施し、押込資本金の一割以上の純益を上

惨めな重慶の窮乏ぶり

「ハルン特異十四日発」ノイニ  
チユリツヘル・ツアイツン  
グ特派員フルー・ボツサル  
ト氏は非重慶新聞記を同紙宛  
打電し、重慶最近の窮乏振りを  
つぎの如く述べた

「重慶駐在の外國新聞記者團の  
間では洋服を買ふことができないので古着類は三かんでもし  
誰か一人が重慶から他國へ行く  
といふことになるその特物は  
引つ張り思になる、タイムス特派員が自分に贈つたところでは  
彼の洋服數は十人の人々々々

から湧下けて眞つな洋服があるが、まだ店に台帳がないといつて待つてゐる。店長、記者團本部にあるたゞ二種の黒の洋服は結婚式その他會合の時には毎ひ合ひになる。自分が重慶に到着早々も自分の持物は結婚式、タイライター、部屋簾等には自分が重慶に来る時には誰にでも下して貰ふ。何しろ監獄用の洋服が一個、スイスフランし、藥品類や外國國標は珍重される。支那酒も不足で洋酒にいたつては、酒と前から影も見られない。一度スカー一本が賣りに出たが、斯くなれば一本七目スイスフランといふ高價になつた。重慶はここ三年間完全貧窮のどん底に落ち込んじまつた

けた會社に対しその消化部分の一定割合を公債で保有することを命じた。

これらの方策以外に更に彩票にも新工夫を加へて浮動購買力の吸收を計る方針であるが、一般民衆の貯蓄傾向は大東亞戰爭後政府延いては金融機關に対する信頼が増した結果非常に好轉してゐる。

野田資金關係は大變遷になつたが、日滿一體の關係上内地財界人に満洲に対する資本の關心を持つて貰ふための対応策は引續いてやつて貰ふつもりである。

物價対策 物價対策の一として、今回新設された平衡資金制度は物價安定を目標とした重點的物價政策であつて従来の爲替平衡資金制

【新京電話】滿洲國政府は昨（きさ）康徳（かうとく）

八年（昭和十六年）一月、貨幣平準法、資金制度を創設して輸出入商品の價格調整を行つて來たが、今回同制度の弊害を全面的に擴大して國內商品全般にわたつて價格調整を行はしめることになり、近く勅令の公布を待つて実施することになつた。同法の実施は滿洲國の物價政

幣に一段落を畫するものと見るのとができるが、これによつて經濟部大臣は物價の調節をはかるため物品の取扱いを業とするものに対して一定の金額の納付を命じ、または一定の金額の交付をなすことが出来る。この經濟平準資金は滿洲中央銀行内に特別規定を設けて管理となし、その運用には國庫總理の監督を受ける運用委員會がたつたことになつてゐる。

大響タコ先力生  
習へる  
現代洋  
上、



# 大陸經濟の連繫強化 滿洲大連で滿鮮華首腦會議

日滿大陸經濟地帯の經濟連繫を緊密にし物資の交流を廣げて經濟重要物資の生産増進を期する  
ため政府はさきに滿鮮、滿蒙北の兩經濟協定を締結するに着手したが、今日更に滿鮮華北三  
地の經濟地帯たる滿洲、滿蒙、滿鮮北の三經濟協定を締結するに着手した。今日の協定は、  
八、十の滿日大連市、滿蒙北の滿洲、滿鮮北の滿鮮、滿蒙北の滿蒙の三經濟協定を締結することとなつた。今日の  
協定は、滿鮮、滿蒙北の兩經濟協定におけるが如き協定の打合せは第二次のものとして、  
滿鮮華北兩地帯に關する協定の根本方針を協定するもので従つて協定の打合せは左の如き内容  
に與つてゐる。

- ▲滿洲側：武部六藏局長、吉田繁雄次長、柏田繁雄次長、樋口企畫室長
- ▲滿蒙側：三浦重雄局長、柳井勲次長、成田重雄局長
- ▲滿鮮側：上田重雄局長、伊藤司政局長、井坂隆一郎局長、山本企畫室長
- ▲滿鮮華北側：滿鮮華北局長、滿鮮華北局長、滿鮮華北局長



聞けばなるほど  
恐るべき間違ひ

# 文字から見た日語満語

あり△敗走現らず△敗走が通る  
△哲さん正非國産品を非哲さん  
これは非國産品ではありません  
等々  
この他、家心中、寶珠帳、五箇引  
大丈夫、連中、目出度等々日本で  
生れた妻は、義経蘭人にとつて不  
可解なものであるが、最近日本字  
紙に對する蘭人譯寫の習慣に伴  
ひこれ等事實は當国者にとつてそ  
の指掌上極めて不便であるとの見  
地からその對策は緊急事とされて  
ゐる。

が、本年度において初めて行はれ  
目下軍人會館で開かれてゐる全  
滿洲人記者講習會の席上、新班頭李  
龍官よりこの陳辭旨意が指摘され  
注目を喚起し、軍事者として今後  
における滿洲なる方針の確立につい  
てその目的が如何なるべきを説き





大東亞建設博覽會及場

主 催  
滿洲日日新聞社  
滿洲日日新聞社  
康德新聞社

園公同大市別特京新

日三十月六年 一九八四 明 會

趣

首

我滿洲帝國建國以來十載茲茲於聯邦日本其大援助之下四千三百萬國民協同一體努力進向建設之途爲期未久躬清往年之積弊雖保國內治安確立憲制財賦其於建國開發方面雖有驚奇之進展

歲時七年六月我皇帝陛下再大親訪聯邦日本同宴之後創建建國神廟奉祀天照大神其定國本於神祇之道

今次聯邦日本對美英兩國宣戰日本昔日滿一德一心大義被發決意奮發全國之力協助聯邦日本完成建國

大東亞解放運動發端於滿洲事變今大之對美英戰爭實可謂爲開始於滿洲建國之時茲於大東亞建國下欣越建國十周年其意義實屬深遠

於是政府藉此建國十周年偉大將使我國之大新聞社舉辦大東亞建設博覽會其目的在於開明我國建國之由來及建國之偉大特使歷史之陳跡與建國之現勢介紹於中外以實高建國防國家建設之完成同時更明示我國在大東亞共榮圈確立上占有樞紐的地位使命至爲重大並陳報東亞共榮圈之實況用以協助大東亞之建設

我大滿洲帝國建國以來十年、聯邦日本ノ絶大ナル援助ノ下ニ四千三百萬ノ國民協力一致、各方面ノ建設ヲ進進シ、往年ノ積弊ヲ廓清シ、國內治安ヲ確保シ、幣制財政ノ確立ニ成功ス、開發ニ奮勵シ、實業ヲ發展シ、見タカシ

長クモ康徳七年六月、皇帝陛下ニ奉祀シ、親日本神祇ヲ日本ノ御訪問遊幸ナレ、御回鑾ノ後、建國神廟ヲ建テ、天照大神ヲ奉祀シ給ヒ、國本ヲ惟神ノ道ニ奠キタルヘリ

今ノ次、聯邦日本ノ米、英、對シ、戰ヒテ實ニペルヤ我國ハ日滿一德、心ノ大義ニ基キ全力ヲ擧ゲ、運動ハ滿洲事變完結ニ協力シ、決意ヲ發シテ決戦ス

抑モ大東亞解放ノ運動ハ滿洲事變ニ始メ、米英ニ對シ、戰ヒ、滿洲建國ノ時ニ始マリタルト云フベク、從テ大東亞建國戰下ニ迎フ建國十周年ノ意義ハ誠ニ深キモノアリト斷ラズ

茲ニ於テ政府ハ建國十周年ヲ機トシ、我國ノ三大新聞社ヲシテ大東亞建設博覽會ヲ主催セシメ、我滿洲帝國ノ由來及ビ建國ノ實業ヲ明微シシ、歷史ヲ叙述シ、現勢ヲ對外介紹シ、以テ高建國防國家建設ヲ完結ス、實業ヲ共ニ大東亞共榮圈確立ノ機軸ノ役ニ對シ、併シテ東亞共榮圈各國ノ實情ヲ開陳シ、以テ大東亞建設ニ協力セントス

躍飛的異鷲  
會著體民圖  
著體之遠東  
著儲獎有興大

國萬五英特  
新機之電燈△  
圖二號月圖千二號甲  
圖六號月圖千一號乙  
圖三號月圖百五號丙  
問題以機△  
圖萬年五十一月圖一十年三十

二〇二號大同大市街新嘉坡	店名	金興△
部番儲司公興大 號	本一月號萬十得銀五元	
總發售	本一月號二得銀千二號	
店東	本一月月得銀三百三	
陳發合、東順、林吉、外順、元華	本一月月得銀四百三	
順發、順華、37號社、山發	本一月月得銀四百一	
店名	本一月月得銀二百十	
店百四號大馬路	本一月月得銀二百十	
所發售		

總建會	經費	五〇〇萬圓
總場	面積	二八、七〇〇坪
總面	面積	一六、五〇〇坪
總積	面積	一三、六〇〇坪

𠂇 𠂈 𠂉

滿洲國軍御貸下兵器  
大東亞海軍御貸下兵器  
日本陸軍御貸下兵器

中國、日本、滿洲、支那、各國、礦地、出品	二、三、七、十、萬、點、點
----------------------	---------------

[illegible]

第一學節

第二學期

第三卷







593

# 組合進展概況

東成道新居里

林洞農事改良實地組合

611.15<sup>6</sup>  
(22.4)  
④



411.156  
(221.4)

# 組合進展概要

新倉庫建設委員会

昭和四十四年  
六月マデ



秋田農事改良實行組合進展狀況

位置

京成道揚州郡北屯新谷里秋洞

中心人物

議政府公立農桑實修學校第三畢業生金鐘烈(三才)

組織

昭和四年四月一日

中心人物履歷概要

彼、家自作兼小作、大エ業トシテ、兄弟、  
二男アリ。昭和三年三月揚州公立普通學校第六學年ヲ卒  
業シ、當年四月議政府公立農桑實修學校ニ入学シ、昭和三年四月  
學期改訂現制議政府公立農桑實修學校トシ、四年二月議政府公  
立農桑實修學校第三畢業生トシテ實社會ヘ首途ニツイタ、  
組合組織前新谷里秋洞

秋洞(農桑)ニテハ、部落ナルガ近在、愚イ意味ニテ  
相当名高イモノデアリタ、即チ民心極度ニ荒ビ、徒食野情

俗ヲナシ、利ヘ賭博常習、飲酒悪風根強ク蔓延シ、從テ  
負債ニ苦タラルモノ、負債整理、為傳末田畠ヲ賣拂ヒ他、  
流轉旅出ルモノモ少ナカルタ、組織當時ニ於テハ、秋洞土地、  
殆ド他地方者所有トナリ實ニ微々タル一寒村ニ過ギナカルタ  
郡面常ニコレヲ憂ヘ、困窮ナキ善導モ洞民ハコレヲ受入ス民  
力日ニ衰ヘ、実ニ悲惨狀況ニアリタ、

組合組織胚胎組織

寒村ヨリ模範部落ニ、彼金鐘烈ガ昭和三年五月或日  
ノコト、學校歸路ヲイテ市場歸リ、洞民カ何レモ酒氣ヲ帶ヒ  
醉フタキ、島足ノ覺束ナサニ甚タレキ、暫感足ヲ感シタ、フト  
見ル目前ノ田圃ニハコレハ又肥切レシ作物ガ色根ヒテ生  
氣カ全クナシ、思ハス上手ニ腰ヲ下シテ、打続ク田圃荒  
燒ヲ目前ニ見テ、牛ルトキハ彼ノ腦裏ニ浮ブモノハ洞民、



現状テアル。谷向某。苗。京城ノ人。モノニシタ。誰ハ  
ハ。權ヲ取上テラレタ。誰ハ喧嘩ヲシテ傷ヲ負フタ。等々  
日々衰頹シテユク。郷土。將來ヲ思フ時。思ハス。洩レル  
モノ。深イ。溜息デアッタ。

洞風振作。模範部落。新谷里。土地。新  
谷里農民ノ手ニ。土地。コノ郷土。ア  
ヲ見。コレヲ思フ時。彼ハ既往ノ安逸ハ許サレタ。  
思ハス。膝ヲ叩イテヨシ。理想農村ニ。夢郷ノ  
念。鬱教トシテ起。以来。寸時モ彼ノ胸裏ヲ占メナイハ  
コノ事デアッタ。彼ハカクシテ奮起シタ。

理想ヲ見出シタ。彼ハ昨日マデ。彼ハナカッタ。学校於  
テハ。学科ニ実習作業。人一倍努力カ。ト研究ヲ惜マナカ。タ  
家進於ル。実習苗。五畝。土歩。実習田。八畝。手。安  
績。彼奮起。如実ニ示シテクレタ。衆ニ擢。夕。出来栄ハ  
予想以上ノ収量ハ。遊惰安逸ノミヲ貪ル。洞民ニモ驚  
異ノトナ。タ。傍ラ。養雞。養豚。ニ。寸暇ハナイ。夜ハ。製  
襪。機ノ音。隣人ノ夢ヲ驚カシ。若キ妻ヲ勵マシ。養蚕  
五分ヲ飼育シテ。摘桑。忙シク。彼ノ努力ヲ活動ハ。実自覚  
マシイモノデアッタ。

父モ母モ兄モ。遂ニ彼ヲ引スレタ。父。酒量ガ減ッタ。  
兄。健康ガ増進シタ。一家ニ斬。春ガ訪シ。一家。拳ツテ  
ノ活動モ。今。尚。洞民ノ長夜ノ夢ヲ醒マスニ至ナイ。  
彼ハ。学校。帰途。ホッラ。下。デ。白衣。長。初ノ青年ニ  
勤勞ヲ勸メ。家庭作業。暇ヲ見テ。農事改良ヲ説ク。  
三伏ノ夜。蚊。直ニ涼ヲ求メテ。路。迎。煙。管ヲ弄。フ。  
老壯ニ。洞。改善ヲ絶叫シ。荒。シ。ク。洞風ヲ慨嘆シ。



奮起ヲ高調ニ止マナクツタ。

黎明ニ訪レタ、時恰モヨシ郡商産同業組合ヨ、  
種卵配布ニコトヲ期キ、学校ヲ通ジテ面仰、譲与得タ  
コレヲ早速同表ニ十四宛シカチシ後、難ヨク改善ニ希  
チセトシタ、得難優秀ヲモテアルタ、茲ニ農  
事改善機運ニ部ニ到達シタ、昭和三年四月  
実習苗ノ苗代、楊末式ニ合簿播ヲ実行シテ優秀  
ナ成績ヲ示シ、郡農会主催ノ多収獲品評会ニ、穀良  
都ニ栽培出品シテ一等賞ヲ克得タ、交作ニ甘藷  
作ニ学校ヨリ受ケタ指導サハコレヲ実行シテ何レモ予  
期以上成績ヲ挙げ、副業ニル蒔、特等ヲ占メタ、  
ウクレ得タ五拾貳円余貯蓄、負債ニ苦シメシ其  
日、ヲ追ハレテ年ル洞民覺醒ヲ促ス、充分デアツタ、

茲ニ於イテ洞民ハ彼ト競争スヘク努カセトスルモノ、  
彼指導ヲ乞フモノ、彼ニ効ヒ行ハントスルモノ等、以第一ニ  
増加シ学校指導ト相俟ツテ曰信賴ノ度深キヲ加ヘタ  
ノデアル、同時ニ学校ハ東拓ヨリ用五及歩ヲ、議政村  
在住者ヨリ苗五及歩ヲ借リ受ケテ自立自営ノ基礎ヲ  
ラシメ、彼ハ自作ヨリ自作ヘノ道程ヲ出リリ、アルデアル、  
茲ハイテ彼洞民有表ト共ニ昭和四年四月、秋洞農事改  
良實行組合ヲ組織シ、二十ニ以上五十七オ以下ノ組  
合員十四名ヲ有シ、打オス鐘音、ウニ鉄持ツタマ、敏速ニ  
集合スル規律的訓練ノ下ニ模範部落ヘ  
力強ク第一歩ヲ踏出シタノデアル、

李鍾烈農事經營概要

今彼ノ農事經營概要ヲ記セバ、



(一) 作物栽培段別卜其實績

(一) 作物栽培段別卜其實績

別

凌

变

豆

諸

ト

天蒼

九

棉舌

品種	反作別付	収量	反収	数量	取引量	備考
穀良都	五、〇	二一石	四、二	九一八三	取引量	
在来白	一、〇	二二、六	二、六			
カネルマ	一、〇	〇、八五	〇、八五			
長端白	一、五	一、八	一、二			
元氣	一、〇	三一、〇	一、〇			
パチローザ	〇、五	一三、〇	六、六			
會領重	〇、三	一一、〇	七、〇			
北方東	〇、六	五七、〇	九、五			
金甜瓜	〇、四	二〇、〇	三、〇			
梨甜瓜	〇、一	三斤	三斤			
イフルーファット	〇、一					

馬鈴薯計

長崎	9.1	10.3	10.2	10.2	156.7
----	-----	------	------	------	-------

(三)

其他

脊蚕

止掃立<sub>二</sub>。我<sub>一</sub>↓收滿量<sub>二</sub>。負八三。及↓價額<sub>二</sub>。四八九<sub>一</sub>。

秋 蚕

三  
一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

〃  
一〇  
野  
〃  
一  
四  
七  
〇  
多  
〃  
一〇  
門  
七  
金

卷之六

三羽 ↓ 重明卷七三〇 何 ↓ 傾客 七 戸 五 金

一 卷  
一 尾

一頭  
二頭  
三頭  
四頭  
五頭  
六頭  
七頭  
八頭  
九頭  
十頭  
十一頭  
十二頭  
十三頭  
十四頭  
十五頭  
十六頭  
十七頭  
十八頭  
十九頭  
二十頭  
二十一頭  
二十二頭  
二十三頭  
二十四頭  
二十五頭  
二十六頭  
二十七頭  
二十八頭  
二十九頭  
三十頭  
三十一頭  
三十二頭  
三十三頭  
三十四頭  
三十五頭  
三十六頭  
三十七頭  
三十八頭  
三十九頭  
四十頭  
四十一頭  
四十二頭  
四十三頭  
四十四頭  
四十五頭  
四十六頭  
四十七頭  
四十八頭  
四十九頭  
五十頭  
五十一頭  
五十二頭  
五十三頭  
五十四頭  
五十五頭  
五十六頭  
五十七頭  
五十八頭  
五十九頭  
六十頭  
六十一頭  
六十二頭  
六十三頭  
六十四頭  
六十五頭  
六十六頭  
六十七頭  
六十八頭  
六十九頭  
七十頭  
七十一頭  
七十二頭  
七十三頭  
七十四頭  
七十五頭  
七十六頭  
七十七頭  
七十八頭  
七十九頭  
八十頭  
八十一頭  
八十二頭  
八十三頭  
八十四頭  
八十五頭  
八十六頭  
八十七頭  
八十八頭  
八十九頭  
九十頭  
九十一頭  
九十二頭  
九十三頭  
九十四頭  
九十五頭  
九十六頭  
九十七頭  
九十八頭  
九十九頭  
一百頭

一 衆  
一 角青

清江一  
黃裳二  
五〇八  
餘廿  
四角

恒客六六一三金

財

五七円大。銭

昭和五年

(一) 作物栽培與別其成績



種別	品種	酢	収量	収量	價額	備考
稻	秋良都	一七五。	五四四。	三三。	三四八。	
大	在来白	一。	四一五。	二一五。	二。	
小	在来種	一。	四一五。	二一五。	二。	
粟	在来種	一。	四一五。	二一五。	二。	
大豆	長端白	一。	四一五。	二一五。	二。	
甘藷	元氣	三。	一。	三。	一。	
甘藷	苗	三。	一。	三。	一。	
馬鈴薯	長崎赤	一。	一。	一。	一。	
蘿蔔	宮城	一。	一。	一。	一。	
白菜	芝	一。	一。	一。	一。	
計		三六九。	三六。	七六九。	七六九。	

(二) 其他

一、綿肥 → アリ、ツチ、五畝 (採種用) 収量二斗并 価格一三円  
 一、春蚕 ↓ 掃出 半枚 ↓ 収量三六四。及 價額九五九  
 一、秋蚕 ↓ " 二蛾 ↓ " 二三八。及 " 三、三三  
 一、養豚 ↓ 一頭  
 一、養雞 ↓ 一二羽 ↓ 産卵数八二。四 價額一四八八  
 一、蠶 ↓ 製産高 二五六。貫 " 二。四八。  
 一、精米ニヨル收入 一五三円  
 一、負債償還 一六。円  
 現在貯金額 六七円三。錢



第五條

丙、教育的方面，改善生活，改善  
一、農談會修養會講習會開催  
三、時間，勵行  
三、適切ナル副業，經營  
二、農事視察員，派遣  
四、揭示板，設置

五民興作ニ関スル事行  
一忠孝ヲ興フ愛親ノ念ヲ強クシ隣保扶助協同輯睦、美風  
二勤勞ヲ尊ヒ遊惰奢僂ヲ戒シメルコト  
三古來ノ良風美俗、助長繁盛ノ矯正ヲナスコト  
四納稅及公務ニ奉仕努力カスルコト  
五公同經營事項ニ  
六共同耕作地ノ設定  
七農繁期共同食事を  
八灌漑用水利  
九共同使用諸機械購入  
十各項施行細目ハ組合長之ヲ定メ總會ニ於テ可決實行ス



農事改良實行組合員



第一條

婦人會則

本会ハ  
里在住ノ婦人ヲ以テ組織シ會員相互ノ交際ヲ厚クシ勤儉質

第二條

本會  
八号  
二  
里  
婦人  
急  
稱  
其  
事務  
所  
番地  
二  
置  
ノ

第四條

一、會長一名  
二、副會長一名  
三、幹事若干名  
四、評議員若干名

第五條  
第六條

五、顧問  
顧問ハ會長  
諮問ニ應ジ  
本會ノ後援ヲナス

第七條  
第八條

六毎年定時又ハ臨時ニ金穀物品ヲ蒐集シ廣ク慈善救済ヲ行フコト

第九條

總合 每年春秋二期之ヲ開キ諸般ノ報告事業ノ方法講話又ハ懇話会並

第一〇

三役員今  
查年等數恒之  
月行五ノ  
外又  
和合  
經  
候  
又  
八  
年  
八  
月  
日

一

本會員由素行不良者、  
面月ヲ行スノ行為、  
下ノ者ハ相當ノ懲罰ヲ受ケル

第

附則  
本會則  
八金  
八金  
過半數ノ同意ヲ得テ  
昭和五年十月一日  
之ヲ施行スルコトヲ得

以上



秋洞農事改良實行組合進展狀況

自昭和四年至昭和六年

在 未	昭 和 四 年	昭 和 五 年	昭 和 六 年
一部落現勢 部落戶數 二〇 農家戶數 二八 其 他 二 農家內譯 一 地主 一 自作兼作 二 純小作 五 人口 二五 男女 二 一男 八 一女 四	二組合現勢 組合員名 鍾公烈 李鍾九 李若兩 李思兩 李昌兩 李元新 林錦文 林通 朴星 朴慶 李慶 朱慶 卓吉 計 十 四 名	一部落現勢 部落戶數 二五 農家戶數 二九 其 他 一 農家內譯 一 地主 一 自作兼作 二 純小作 五 人口 二五 男女 二 一男 八 一女 六	二組合現勢 組合員名 鍾公烈 李鍾九 李若兩 李思兩 李昌兩 李元新 林錦文 林通 朴星 朴慶 李慶 朱慶 卓吉 計 二十 二 名
組合員家族 男 三 女 二 組合員內訳 自作兼作 一 純小作 四 貯金及負債 貯金 五二六円 負債 二八〇円	組合員家族 男 四 女 二 組合員內訳 自作兼作 一 純小作 四 貯金及負債 貯金 七二二円 負債 三二六円	組合員家族 男 五 女 三 組合員內訳 自作兼作 一 純小作 五 貯金及負債 貯金 八二四円 負債 三一八円	







3. 改定廢兵ノ共同使用  
共同計畫金一部ヲ各々  
大臣和制廢兵和制核  
査陸軍省ヲ購入共同使  
用ヲ云

大規模の貯金  
製造金銀の百分五以上  
ヲ個人名義ノ貯金トス  
最前七円十才位値八十  
才總額三上円ニテオ  
菁横セリ

3. 改良農業共同使用  
全上

久規的財金

前年ト同様個人多義  
ノ貯蓄ヲ支給兩七片  
十才歳迄三月十才續  
九十七片七十六才ノ蓄積  
アリ

アリ

小共同耕作部ノ設置  
學校ノ轉換ニヨリ過剰存  
在仕向ヨリ常置及亡者多  
ク僧地ニシテ共同耕作ヲ  
ナスコレモヨリテ得タル收  
益ハ共同資金トナシ共同  
事業ヲ営ムトテ充當セドモ  
収支均ハズ  
收入之部

二石五斗  
六五斗

支出之部

小作料 一石

肥種代金 五〇三  
三月廿

6. 共同堆肥製作

前年秋期二組人員各在

日使公使にテコレヲ謝す

許說其後作陸侯

人君欲各執其權子共司

購入

聚雲用自家用共三之

竹園書畫天

共同作業場建設

港清御屋敷主トシテ  
延明ノ大司佐ニ爲ル

子安亦同年之小輩也

使中經傳下

生産減少を充分使

用スルニ至ラザリキ

見了

金銀合共四百五十萬千

各班长于道平班长

納稅期一週內

集金三組合長三授有之組

合長ハエレテ取廻スニ由

金市

3. 改良農具、共同使用

大規的野金

5. 共同制作等々並  
六月十四日付で終る

6. 共同地產製作

7. 存竹在藏菜種子共四  
端入

八、共同作業場建設  
 社界教化事業、田舎金  
 ト子神助を以て金百  
 円ヲ以テ温泉田五坪共同  
 十坪ノ一棟ヲ建設シ以テ  
 集金場、事務所、作業場  
 倉庫ニ充テ、予定ヲ以テ  
 早下準備中  
 竣工八月下旬ノ予定  
 九、納税ノ勵行



	<p>2. 苗代          早床ニテ且ツ厚播ニ          レテ多クハ坪方合テ播          種シテ金弱トモ苗ヲ          育成セリ昭和五年季          鐘列ハ播床式トモ且ツ          三合播トモニ一般ハ          コレヲ嘲笑シラハサ          状態ナリヤ</p> <p>播種ハ乱植ニシテ正          作ハ勿論行ハレズ僅          正作ヲ行フ程度ナリ</p>
	<p>(二) 生産的改良事項          1. 塩水選 一部実行          2. 苗代改良          前年季鐘列金弱          目下見ル組合員          ハ全部之効と組合員          ノミハ全部徹底セリ          然レモ河内中ニハ          今尚従来ノ早床          播種ナリヤ</p> <p>久正修植          組合員ハ全部ニ各植          行ハレズ僅カ片正修          正修ハタリ河内中ニ</p>
<p>10. 共同桑田敷定          四月一五部ヲ設定          ニテ植栽セリ</p>	<p>(二) 生産的改良事項          1. 塩水選 全部実行          2. 苗代改良          組合員ハ勿論河内          全部播床薄播ト          ナリ面々種ノ苗代          品評會ニハ加入必要          播種ハ速ニ河内          ハ除外セリ坪方          播種量ニ合フ播          種トナシ</p> <p>3. 苗代肥料改善          従来ノ如ク室内備用          肥料ノ必要ナリ          久正修植          正修植ハ河内等指          道ニシテ全部徹底          正修植ハ河内等指</p>
<p>10. 共同桑田          同上</p> <p>11. 組合建設月謝金ノ共          同購入          昨午共同耕作會ヨリ          得タル收益金ヲ以テ          金五十五圓(金三十二圓)          購入組合員ニ配付          12. 雑卵共同貯蔵          十月末ヨリ実施ノ予定          13. 舊播共同貯蔵          組合員各一畝半以上          栽培シ生産シタル舊          播ハコレヲ共同貯蔵          ナル予定ナリ          14. 麦収手防ハ本年ヨリ          冷水湯湯浸法ヲ共          同実施ノ予定ナリ          15. 花卉種子共同購入          及共同育苗          家庭用種子共同購入          花卉種子共同購入          組合員ヨリ育苗者ヲ          選定シテ育苗コレヲ          各家ニ配付植栽          セリ          16. 葡萄等種共同購入          豚飼用トシテ葡萄種          子ヲ共同購入(金五圓)          總量三十圓コレヲ植栽          ニ宜地ヲ利用セシメナリ</p>	<p>(二) 生産的改良事項          1. 塩水選 全部実行          2. 苗代改良          河内ハ勿論河内及          地方ニ從テ不慮風          地ヲ種トモ播床薄播          ハ徹底セリ</p> <p>3. 苗代肥料改善          同上</p> <p>久正修植          正修植ヲ指導スル及知          播種ハ全部正修植トナ          ス正修植ハ河内等指</p>



悔と正修植乃至序正修  
 子行ノモノ多シ

徒来ノ片正條及乱植  
ハ余ク跡ヲ絶フニ至リ  
梅植法ハ茲ニ新紀元  
ヲ開セリ

往年、乱植正條  
ハ金ノ儀往、就草ト  
ナレク

5. 稻作肥料

多収獲ノ健圃ハ勢ヒ  
多肥料ヲ要ス然カモ  
金肥ヨリモ多ク未ダ  
自然肥料ヲ主体トス  
ルモノヲ認メテ甚ハキハ  
夏冬ハ一ノ十ノ肥料  
ヲ用フモノアリ

3. 稀作肥料

多收穫、健効ト共ニ  
一面多收入本位指導  
ニ對シ組合員ハ金肥ヲ  
節約シテ自給肥料ヲ  
主体トスベキヤリ指導  
セリ其結果堆肥厩  
肥等ヲ主肥料トスル  
モノ廢次多シ

5. 稻作肥料

昨松之於今穀價下  
落勢を生養堂、低  
減ノ痛切ニ感得セシメ  
従来及五五一六兩  
ノ金肥ヲ使用セルモ  
ノモ二兩一五兩種度  
ニ止ム他、自然ノ堆肥  
厩肥雜糞ヲ使用ス  
ルに至リ

## 6、稻作管理

脫 乾 稗 灌 陰  
穀 燥 拔 排 準  
打 采 行 不 回  
落 乾 八 然 面

## 6. 稻作管理

陽草四歌 二一五回  
排 水 秋吉洪水  
稗 拔 行々々々  
乾 燥 乾乾冬来  
脱 穀 打落法

6. 稻作及管理及調製

陰章圖數  
三週  
拂水  
全上

## 6. 指作符理及相象

陸軍由敷  
三由田  
淮排水  
合理所

脱 乾 稗  
藪 燥 拔  
打 采 行  
落 乾 八

稗 乾 脱  
 拔 燥 穀  
 行 轍 乾  
 至 乾 法

脱	乾	穽
藪	燥	按
調	合	勵
釋	上	行
脫		
義		

調製

精米極ニ  
ヨリ却落ニ  
花ヲ精米ス  
ルニ至ル

久稻作收量

一石上二石以下

只  
稻作  
牧量

及當  
最高五石四斗

7. 稀作牧量

及者 最高大石二千

只留作收量

8. 麦作

麦作八间作式ノ在来法  
ニシテ及古收量五斗  
乃至八斗上下

8. 要你改良

李鍾弘唐攝法ヲ究  
施シ及者三石八斗ノ實  
收量ヲ得タリ

8. 麦作改良

富司ノ田作指導ヲヨリ  
廣播法ヲ實施セシメ  
タルニ全体ノ八割ヲテ  
エテ行フ  
反響甚高数量

8. 麦作改良

昨午八割作付金  
面積三反扣不決定

夏需糧肉牧量  
三石四斗



(9) 甘藷栽培  
本鍾乳郡農会、  
委託苗及自備  
備自家用一及分  
ト組合員三無  
償分与ニテ作  
セムコ、本数ニ  
ナリ、

(9) 甘藷栽培  
本鍾乳郡農会、  
委託苗十萬ト自  
家用一萬五千ト得  
ルメ苗床三、坪  
備種代ヲナメ自備  
負ミ分与ニシタル  
栽培面積五及ニ畝  
トナル、

(9) 甘藷栽培  
本鍾乳郡農会、  
委託苗及自備  
苗成ニテ準備ス  
組合員又コシ効  
苗床ヲ設置スル  
モハ、及ニ  
都農会ニ五、  
他自家用及組合  
員ニ分与ニシタル  
栽培面積六及ニ畝  
トナル、

(10) 自給肥料  
堆肥製作ヲ奨励シ  
漸次製作ス  
縮肥栽培面積  
三及六畝

(10) 自給肥料  
コシ増製ト必要  
組合員ニ徹底シ奉  
ソテシヨ製作シタル  
附近ニ原料ニ青草  
ナキヲ嘆スル上ヨリ  
一片平均ニ量  
ニ及八百貫  
谷灰改善ニタメ  
便所改善ヲモメ  
五、  
縮肥栽培五及六畝

(10) 自給肥料  
便所改善者八  
トナル、

(11) 水田深耕秋耕  
深耕制ニ便田  
モ大部分ナリ

(11) 水田深耕秋耕  
大部分ニ徹底シタ

(11) 水田深耕秋耕

(12) 繩製工作  
製繩部又  
学校給放  
十、  
シテ製繩ニ  
\*ットメシム

(12) 繩製工作  
(組合員現製不

(12) 繩製工作

自家用ニ及全  
産スルミナリ、



<p>桑樹栽培数の特記 スベキ事項あり</p>	<p>組合組織原則 飼養戸数三 飼養頭数三 在来種ニナリ</p>	<p>組合組織原則 飼養戸数三 飼養頭数三 在来種ニナリ</p>	
<p>(13) 養蚕 桑樹栽培戸数増加 飼養戸数増加</p>	<p>(14) 養蚕 飼養戸数 飼養頭数</p>	<p>(15) 養豚 (組合現勢参照)</p>	<p>(16) 養雞 (組合現勢参照)</p>
<p>(13) 養蚕 共同桑園改定 桑樹栽培戸数増加 飼養戸数増加</p>	<p>(14) 養蚕 飼養戸数 飼養頭数</p>	<p>(15) 養豚 上</p>	<p>(16) 養雞 上</p>
<p>(13) 養蚕 共同桑園ハ在来 収束し得ルニ至 本式獎勵組合員 全部ニ適用シテ百 便所敷舍及宅地 空地ニ施栽セシム 灌漑下流多ク有 番掃五六枚ニ止マル</p>	<p>(14) 養蚕 飼養戸数 飼養頭数</p>	<p>(15) 養豚 昭和六年四月ニ郡 指導部設立ナリ 学校共同指導ナ ニナリ</p>	<p>(16) 養雞 昭和六年四月ヨリ 産白レグ指導部 指導トナリ郡指導 指導トナル 予定 戸数五二〇ニ ニ簡易ナリ組合 建築ニ至リ 冊飼トス</p>

(12) 蔬菜指導部  
昭和六年四月ヨリ郡  
農会蔬菜指導  
部落トナリ左ノ四  
片ヲ選定シテ郡  
学校ニ共同指導  
トナル  
選定組合員  
本鍾元、李昌倫  
李起東、李昌而



<p>氏曰荒道連年口 論事ト飲酒類博 ノ常習ハ一般のナリ 諸般指導事項モ コレヲ受入レザリハ 前記ルトコロナリ</p>	(三) 福利改善事項	(一) 例會	<p>氏一日十五日 定休職員ハ毎朝 シテ月行事協議 或又省々トシ修 養処世上講話ヲ 技術上問題ニキ テ時々部職員モ 依頼セリ</p>	(二) 總會	<p>三月コレヲ行ヒ下年 ヲ回顧シ新年度ノ 事業ヲ協議ス</p>	(四)
<p>十二月 三月 組合員及家族ノ 慰安日トシテ春耕 作資金金一部ヲ 割充敬老会ヲ催 セリ</p>	(三) 〃	(一) 〃	(二) 總會	<p>(三) 講習會 一月三日間コレヲ開 催シ主トシテ技術上 ノ講習ヲナス</p>	(四) 講話會	<p>毎月例會外ニ隨時 召集シ本校職員 及郡警署警察金融 組合職員等ヲ依 町シテ講話ヲナス 尚視察者中客 士ニ依頼シ講話ヲ 聴講セリ</p>
<p>(二) 總會 土月三月予定</p>	(三) 〃	(一) 〃	上	<p>(三) 講習會 九月 一月</p>	(四) 講話會	



怠惰の逸脱ノト  
セハ前記如シ

肉食の禁断期  
附随の事項ニテ  
酒食ハ通常六回  
其タキハ八回モ及  
ヒリトイフ

飲用時、金銭的ニシテ  
田舎作業中モ極度  
往復モ市内外出  
ニモ常ニ附帶物ニシテ  
カモ秋田ハ用起スル  
トコロナリ

時間觀念 缺乏  
コトハ敢テ言フ要ス  
時計所有者ノ皆母  
ナリニ徴シテモコト知ル  
ヲ得ルナリ

冠婚葬祭ニ部落民  
全部カ衣類シテ飲  
食ヲ事ナレソ期間

四 民風文化助長

(1) 勤勞習慣  
平常早起會  
常盤期 四時半  
農閑期 六時半

(2) 肉食廃止  
肉食主裁ヲ申合  
セテ勵行セリ

(1) 勤勞習慣

今 勤勞時間ハ人リ時  
上  
同ラ掃部トス  
雇傭金減廢止

(2) 肉食廃止  
肉食主裁ヲ申合  
セテ勵行セリ  
其タキハ八回モ及  
ヒリトイフ

(3) 禁酒

平素禁酒由  
セテ実行セリ  
家ニテハ大抵情  
ノ如キ禁酒モ  
決定行サレ市  
ニテハハ跡ヲ絶  
ス

(4) 時間觀念

朝夕打鐘ニシ時  
刻ノ報知  
其合辭散鐘  
合同シ最モ

(5) 冠婚葬祭費節減  
組合ハ冠婚葬  
祭器具ヲ共有  
テコレ使用シ目ツ

(1) 勤勞習慣

(2) 肉食廃止

(3) 禁酒

(4) 時間觀念

(5) 冠婚葬祭費節減



飲日三斗ルコレカ為  
不相心経費ヲ費  
消シ遊ニ負債ヲ  
シメラルモ少カラズ

制利己の打算的ニシテ  
自己目前の利益ニハ  
事シテコレヲ圍繞スレ  
トモ他ノ協調相  
扶助如キ僅カニ親  
戚ニ於テ行ハル也  
ヲ願ルカ如キコトナシ

現在至公全部由服ヲ  
着用シ婦女は室内作  
業中洗濯ニ要スル  
ル部分ヲ占メ時間  
的經濟的損失ニ  
トコロ極メテ多シ

而等級ニ依リテコレ  
カ費用額ヲ限定ス  
ル組合員ハ該家ニ  
於テ飲食セサル  
コトヲ由合ニ実行  
セリ

(6) 隣里團結相を扶助  
組合員中ニ不慮ノ  
災厄ヲ被リシモノ  
トキコレヲ相互救助  
シ扶助スルコトハリ  
組合員自吉同ハ  
昭和五年正月病死  
セリ妻ニ十子ヲ頭ニ  
ユ人子供ヲ食肉中  
ニ抱ヘ身ニ余ル金  
ヲシツアリ組合員  
交互ニコレヲ慰安シ  
尚田圃等作業  
ハ全部組合員手  
ヲ以テ終了セリ

(7) 色服着用  
持別事情ハ  
合ヲ除キ平素ハ  
色物着用ヲ由合  
セタルモ未ダ女  
コレヲ着用スルニ至  
ラス  
標語  
白衣ハ貧乏ノ本

(6) 隣里團結相を扶助  
其根元ニ精神  
ハ漸次根強ク振興  
シ前記卓吉同  
友友組合員  
ヲ以テ終了セリ

(7) 色物着用

(8) 温定改善

(9) 精神修養講話



近ハ塵芥散乱  
草、仲、仁、任、セ、一、臭、  
精神の慰、安、物、ナリ  
実ニ救風景ナリ

所謂養、灰、ト、モ、テ、肥  
料の損失ヲ、レ、且、ツ  
不衛生のナリ

前述ノ通り、自己の打  
算の、ミ、チ、公、家、ノ、者、  
奉仕スルガ如キ觀念ハ  
毫モ認メ得ヤリキ

婦人ハ屋内ニ籠リ洗濯  
炊事以外ノ作業ニ從事  
スルニ極メ稀ナリキ

五、衛生の改善事項  
宅地附近ノ整理  
宅地ノ掃除ヲ申合ヒテ  
コレヲ実行スレドモ未ダ  
充分ナラス

便所改善  
便所ヲ改善シ衛生的ナ  
ラシメ一面自給肥料ノ利用  
ヲナシメニストシタレドモ  
未タ実行セズ

大奉仕の事項  
道路修理  
新谷里地内ノ公道ヲ隨  
時修理ス

五、衛生の改善事項  
宅地附近ノ整理  
堆肥ノ作製、場所ヲ一定シ  
朝、夕、掃除ニシテ塵芥ハ  
コレヲ堆積スルニストシテ  
シテ婦人ノ作業トス

便所改善  
改善者五戸トナル

大奉仕の事項  
道路修理  
七月下旬水害後ノ被害  
ヲ新谷里地内ノ公道ノ  
奉仕修理ヲナス  
十月上旬新谷里地内ノ  
間ノ公道修理ヲナス  
モ、農、業、期、ニ、是、道、リ、ツ、  
アルヲ以テ、日中ノ作業ヲ  
ナスヲ得ズ月明リヲ利用  
シテ夜間作業ヲナス

路面清掃  
少年主トシテコレニ當リ  
汚物ノ危険物ノ除去ニ  
当ル

冬期除雪  
組合員都度コレヲ行フ  
七、婦人ノ作業  
屋外作業  
田植、除草、及田苗ノ管理  
モ田力子ヲ助ケテ活動ス  
ルモノ漸次多シ、尚一部ハ  
男子ニ任セテ遠ク労働ニ  
ニ出ツルモアリ

屋内作業  
鉅、鉤、金、上  
宅地整理 前述ス

五、衛生の改善事項  
宅地附近ノ整理  
尚進シテ本年ハ美化運動  
ヲ樹テ花チ種子ヲ共同購  
入シテ育苗シ各家庭ノ内  
外ニ植栽セリ、整、装、ニ、當、リ、  
ハ組合員當番者ハ毎月  
一日十五日ノ二回各家庭ヲ  
巡視、採、集、シ、コレヲ発表ス

便所改善  
八戸トナル

衛生講話

大奉仕の事項  
道路修理  
新谷里地内ノ公道ノ  
奉仕修理ヲナス  
十月上旬新谷里地内ノ  
間ノ公道修理ヲナス  
モ、農、業、期、ニ、是、道、リ、ツ、  
アルヲ以テ、日中ノ作業ヲ  
ナスヲ得ズ月明リヲ利用  
シテ夜間作業ヲナス  
路面清掃  
少年主トシテコレニ當リ  
汚物ノ危険物ノ除去ニ  
当ル

全 上

冬期除雪  
組合員都度コレヲ行フ  
七、婦人ノ作業  
屋外作業  
田植、除草、及田苗ノ管理  
モ田力子ヲ助ケテ活動ス  
ルモノ漸次多シ、尚一部ハ  
男子ニ任セテ遠ク労働ニ  
ニ出ツルモアリ

屋内作業  
全 上



育舎ノ管理  
本年より全部婦人ノ  
作業シコレヲ履行ス  
婦人會ノ設立  
昭和六年一月婦人會ヲ  
設立ス

本年度より左ノ実行事  
項ヲ決定ス  
イ 例會  
四月 氏十六日  
ロ 總會  
十二月 二月  
ハ 事業  
今度外ノ作業ハ男子ヲ  
加テ一層活発ニ行フ

且、屋内作業ハ從來ノ  
ヲ勿ル其ノ他  
宅地ノ整理  
美化  
、 富合飼養  
、 都市美化  
、 生活改善  
第一歩トシテ色服ノ  
着用ヲ実行  
日精進會ハ分路  
例會總會ハ分路  
其他機關會ニ毎ニ  
聴講ス

親戚者  
生田本府内務局長閣下  
米田道知事閣下  
姉ノ四十一名

親戚者  
坂田政務部長閣下  
坂田道知事閣下  
坂田本府山林部長  
八尋道廣務課長  
姉ノ十八名

親戚者  
京都帝國大学教授土名  
森道官方主事西澤氏  
姉ノ三四名



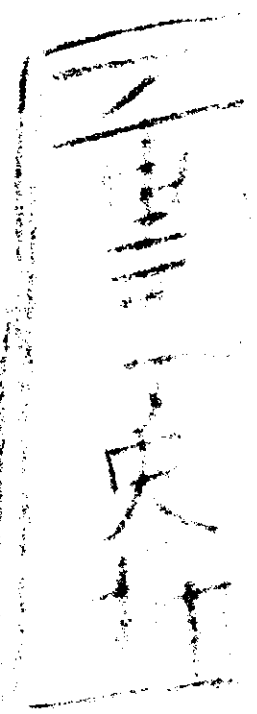
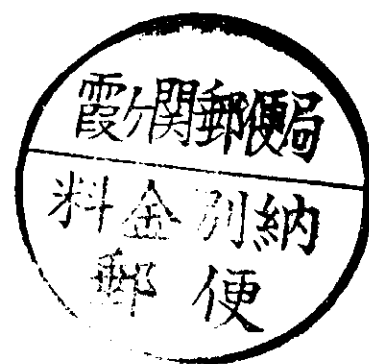
淡山農事改良組合周南洞支部組合是

二十年計畫

年度	耕種	其他	預託	計入	支出	預備	考
四年	四〇		四〇	四〇	四〇		預託牛全部売却
三年	一四〇	六〇	一四〇	二四〇	一九〇		畜一町歩ハ共同耕作ニ及四畝歩ハ管理人ニ無料小作サセル
二年	一四〇	六〇	四〇	二四〇	一二五	一二〇	
一年	一四〇	五五	二〇	二五〇	一二五	二〇〇	
〇年	一四〇	五〇	一〇	二〇〇	一二五	二八〇	
九年	一四〇	四五		一八五	一二五	三六〇	昭和四年度ハ前年度ヨリノ繰越金五年度ハ松苗ノ賣却代ヲ計上ス
八年	一四〇	四〇		一八〇	一二五	四四〇	昭和四年度ハ前年度ヨリノ繰越金五年度ハ松苗ノ賣却代ヲ計上ス
七年	一三〇	三五		一六五	一二五	五二〇	計上ス
六年	一二〇	三〇		一五〇	一二五	六〇〇	其他收入ハ共同作業ニヨリ得タルモノヲ用ヒス
五年	一一〇	四〇		一五〇	一二五	六八〇	葉ハ共同倉庫共同風呂場屋根葺キ上ル
四年	一〇〇	六〇	三〇	一九〇		七六〇	共同耕作收入ハ肥料代地稅ヲ除キ計
三年	一〇〇	六〇	三〇	一九〇		八四〇	組合員ニ小作サセル
二年	一〇〇	六〇	三〇	一九〇		九二〇	及歩ハ共同耕作其他ハ小作地ハ小作
一年	一〇〇	六〇	三〇	一九〇		一〇〇〇	殖銀ヨリ十々年賦デ借入レル畜三

得所	後年十二	二三年	二二年	二一年	二〇年	一九年	一八年	一七年	一六年	一五年
組合員	組合	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
畝三及歩	畝一町歩	四八〇	四〇五	三四五	二八五	二二五	一七五	一二〇	七五	三〇
成牛	現金	八八〇	八〇五	七四五	六八五	六三五	五七五	五二〇	四七五	四三〇
一匹	二八五円	八八五	八〇五	七五五	六八五	六三五	六二五	五五〇	四七五	四三〇
		畝四六〇	畝五五五	畝六六〇	畝七六五	畝八七〇	畝九七五	畝一〇八〇	畝一二八五	畝一三九〇
		、	五	、	五	、	、	、	三五	、
		二八〇	五	、	一〇	、	、	五〇	、	、
		、	、	五	、	五	、	、	、	二〇
		畝三町歩ハ組合員ニ分配	牛ノ配付完成							土地ハ購入次第組合員ニ年度配付スル以後一々年ニ五月ノ差ヲ付ケル





上  
滝

基  
退  
後  
の  
手  
記

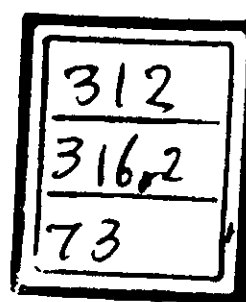
閑  
散  
記

宇佐美内務部長退任

日本ビル五三三号  
中央日報協会内

千代田区大手町二ノ八

42.3.6 受入 (5/7)



M4-119





東京都港区芝罘三丁目三十一番地

第一法規出版株式会社

電話東京区一〇二局代表三四三一番

振替口座〔東京〕二八五七番



閑散記

大正八年三月一日京城ニ於テ朝鮮人ノ独立運動アリ、  
五日又騒動ス。之レト聯絡シテ平壤、宣川、等ニモ騒擾  
アリ、爾後全道ニ波及ス。後内地ヨリ陸軍々隊ヲ増派  
スルニ及ビ、漸ク鎮定ニ歸セリ。然レモ之レ表面ニ鎮定  
ニシテ、民心次第ニ險惡ニ卦キ、容易ニ樂觀ヲ許サズ。  
善後策頗ル重大ナルモアリ。是レヨリ先々總督政務  
總監ノ間意思融合セズ、騒擾發生スルニ及ヒ一層  
甚クシキモノアリ。予自ラ揣テ、之レ國家ノ大事ナリト  
苦心慘怛、苦慮百端、寢成ス能ハズ、食下レ能ハザル  
モ、數月、鬚髮變為メシ、形容亦衰ヘタル感  
アリ而モ總督政務總監關係ヨリ總督府中ノ方針  
殆ント其中心ヲ失ヒ、萬事一意ノ如ク進捗セズ、痛恨矣ゾ  
泣リテ云フ。

六月下旬、陸軍大臣ヨリ政務總監ニ宛テ憲兵整頓ノ  
制度廢止ニ付總督府員ヲ上京セシメラレ度旨電報アリ。  
予命ニ從テ六月二十四日國友警視ヲ伴ヒ上京ス。政務總監  
意、意以爲ラ、久憲兵整頓廢止ト并ニ總督資格同  
額起リ、女官併用トナラン。果シ然ラバ總督目下官トナリ  
自己ノ陞任ヲ見シ至ラント予亦私カニ以爲ラ、果シ然ラ  
バ政務總監、爲メ大ニ慶スヘレ。只政務總監ノ陞任説ハ  
騒擾前ニ於テ中央當局先輩ノ意見ナリシモ、騒擾後  
ノ今日ニ於テハ果シ如何ト。果然上京後見玉白平由  
子等ニ面會スルニ及ビ、政務總監ノ陞任説ハ殆ント同



頭より居ラサルノミナズ山縣老公亦固ク陞任説ニ  
對スルモノナルヲ知ル。直ニ政務總監ニ打電「特表提出方  
ヲ訊スルモ各種ノ報告ト從來ノ行縣ニリトヲ信スル總監ハ  
容易ニ之ヲ悟ラス」予ハ遂ニ田中陸相ニ懇談、田中亦  
於テ特表提出ノ總意ヲ知リ打電スルノ已ムナキニ至レリ。  
六月十八日長谷川總督府邸ヲ登リ上京ス。特表提出  
ノ爲メナリ。是ニ至リ政務總監特表提出ヲ決意シ予亦  
總監着京ノ翌七月一日ヲ以テ其キ辭ヲ特表提出セリ。  
尙未滯京路ニトテ八月十八日出発歸郷、余就  
ハテ今日京城ニ歸着ス。此滯京中、予ハ警察制度  
ニ就キ法制局、陸軍省ニ交渉シ又閣議ニ於テ我意見  
ヲ陳述シ且驗操車中ノ真相ヲ當局及民間有志

説明スルニ努メタリ。而カモ當局及民間有志ハ從來皮相  
朝鮮通ニ誤ラレ、今面、驗操ハ主トシ併合以來總監選  
政ノ其當ヲ得サルニ起因スト信ジ、我説明ヲ信セサルモノ多  
ク又善後ノ處置ニ関シテモ、虚心坦懷我意ヲ容ル、ナ  
クセザルモノ、如レ。是レ亦予カ辭意ヲ決行セザルベカラザ  
ルヲ決意シタル所以ナリ。

此間、總督府官制等ノ改定案ハ、樞密院ニ附議セラレ  
アルモ、容易ニ決セズ。蓋シ政府案ナルモノハ文官總督  
併用ヲ主義トセルモ依然武官ヲ採用セシムル所謂半  
頭狗肉案ナレバナリ。然モ世上ハ新任總督ヲ物色シテ  
論議置キ我在京ヲ目シ政務總監ノ爲メ運動ス  
ルモノナリ、其後任ニ自ラヲ擬スルモノナリト論評ハ新聞



雜誌中傷ヲ事トスルに至リ。焉ハ知ラン。所謂政害及  
一派ノ士ハ文官總督實施ヲ夢タルモノ多クモ。予ハ上京、  
始メニ總督ハ齊藤大將タルヘキヲ確信シ、其後任政  
務然ルハ水野氏タルヘキヲ推斷シ、毫モ之ヲ疑ハズ。而  
カモ今及ビ、政務總監爲ノ運動スル如キハ事ニ於テ  
成功、見エユタルノミナズ。却テ果テ政務總監ニ及ホ  
スヘキヲ思惟、尙事一行動モ出デザルナリ。

八月上旬至リ樞密院ニ於テ議決スル、齊藤氏ヲ野  
氏ニ命アリ、而テ未雨、相談ニ應ジ、警察制度ニ付  
(モシキ)其施行上ニ参考セルモ、官制ヲ公布セズ、長谷  
川總督ヨリ官制公布前、準備ヲ爲ス、到底困難  
ナク覺知スルニ及ヒ、俄ニ旧官制ヨリ總督及政務總監

ノ交代ヲ見ルに至リ。

予ハ八月下旬上京スルト同時、痛甚ク感ザルハ、幹部改選  
議官氏、間ニ置シキトナリ。是ヲ以テ水野、内務ヲ  
受ケル、予ハ直ニ辭表提出シ、トナリ以テ且、閑居、小京  
等、廢官トナルモ、是非内地知事ニ採用セラレシトホメ  
其快諾ヲ得、而シテ改選官制ハ八月二十日即チ裁  
京歸着、日ニ以テ公布、即日施行ナリ、予ハ辭表ハ十  
九日付テ以テ、聽許セラレ、官制發布ト同時、閑居ハ靜岡  
縣知事ニ轉ジ、鈴木度支部長官、小京農商工部長官  
森田總務局長ハ廢官トナリ、久芳人事課長ハ水外事  
課長トナリ、官トナリ、森田秘書官ハ東京府事務官ニ  
轉ジタリ。



實ニ今固ノ事ヲハ甚ダ苦境ニテリ。我ハ長谷川總督  
諮問ニ對シ改正意見ヲ呈スルモトシテ又官總督論ニ憲  
兵廢止論ヲ主張セリ。之レ政務總監ノ意ト同ジモ總督  
ノ意見ト同レカズ。予ハ政務總監ニ辭表提出ヲ迫レリ  
之レ政務總監ノ責任上及官民有志者ノ意見ヨリ見テ  
洵ニ止テ得サル處ナリト信スルモ之レ總監ノ意ニアザリシ  
ナリ。陸軍官憲及一部ノ徒ハ我ヲ目シ政友會ニ近キモ  
ノトハ政府當局及一部ノ徒ハ及テ我ヲ官僚派武新派ニテ  
スルモノトナセリ。彼ノ新聞紙上雜誌上ニ見ハル我ノ對スル中傷  
ノ如キ陸軍官憲ノ爲セル處又使嘆セルモノト見ルハキキトス  
然レモ我ハ我ノ信スル所ヲ我爲シ得ル範圍ニ於テ之レ爲  
セリ。我ハ素ノ信念ナル「盡心而已矣」ニ對シテ一息ノ灰

シキアルナレ。只私カ遺憾ニキ終生ノ恨事トスル所ハ我ハ不  
才微力ナリト虽モ明治聖代ニ人トナル。明治大帝ノ御偉業  
ナル朝鮮併合ノ目的ヲ大成シ之ヲ以テ終生ノ事業トシ一  
身ヲ捨テ一家ヲ顧ミズ之ヲ以テ國恩ニ報ゼント予朝鮮  
ニ就任セヨリ。妻ハ東京ニ死シテ看護ヲ親ラスル能ハズ  
幼兒ノ關係上ホド成長スズテ後妻ヲ娶リタルモ病弱  
ノ身多クハ東京ニヤリ。一昨年大妻以來再ヒ京城ニ歸ス  
多忙ノ身ヲ以テテ四見ヲ膝下ニ置キ教養スルニスト信  
スルモノヲ疑フズ以テ今日ニ至レリ。予素ノ信念ヲ承ケル  
爲メハ朝鮮ニ死スベトナレ。常ニ家人ヲ誡メ告グルニ我  
死セバ遺骨ノ一半ハ之ヲ青島墓地ニ一半ハ朝鮮ニ  
埋葬スベキヲ以テシタリキ。然ルニ今又平生ノ志ニ背キ



朝鮮統治上、或多ク改善策ヲ抱キ、実行ニ由リ  
シ、空ニ歸ス。況ニ又朝鮮人、或モ知ルヲ悔テ、之  
ヲシテ頼ル所ヲ失ハレルヲ。況ニ又目下朝鮮ハ、非常  
國難ニ際ス。人心、險惡、旱害至大、虎疫流行、所謂  
今和ヲ失ヒ、天ノ時ヲ違ヘル、今日ヨリ甚ダシキ事、今之ヲ  
悔テ、去ル。天事、人意、常ニ我ニ幸ナキヲ知ルモ、予豈万  
斛、決テ各ニ無限ノ感慨ヲキヲ得ン。噫。



そのおきないことゝす

探し出し合ふ事したる

別内 宛  
花  
ま  
一  
万  
三  
千  
七  
百  
七  
十  
七  
号

佐美先生の進捗録

の怪をいふたう先生の手記です

當時とて近侍人録に入れ

く  
は  
し  
●  
は  
●  
し  
●  
り  
り  
に  
り  
た

したもので、今頃から冬

二  
一  
丁  
乙  
子  
巳  
辰  
未  
申  
酉  
戌  
亥

後免保五丁

三  
四

7

• • • • •





東京都 丸の内仲通十二番地  
日韓協会

田中 武雄 様



子代市長 沼原  
三郎 様



そのほかおきりないことと存じます。  
探してもいへないところがありました。  
別件に現はれまゐる。これは今  
佐美先生等の進捗記録編纂  
の際かえりたる先づ手配です  
まけとて進捗記録に入れこ  
くまいと思ひまゐる。にいた  
したしので、今頃かまゐる多  
くあらぬと存じます。加へ  
て、先と存じます。 二十五年

田中久

ふかやま



67.1  
9/7

443

昭和六年一月

取引所令施行に対する考察  
陳情書類

大平嘉重郎







即チ特約法ハ八國法ノ範圍内ニ於テ法律的行爲ヲ爲ス可旨ト雖モ同法同長條  
アクトテ之ノ阻止スヘキ權能ナケルハナリ現ニヤ否シテ之ヲ認容セザル可旨ア  
ランカ爾會社ノ經濟的價值ノ低下ヨリ生スル一時的影響ヲシテ其利用用途  
ニ及フヘキヤ否シ想取シ難キモノナルニ於テオヤ

二、仁川市民ハ五年以前ニ兩取引所當事官カ爾所合併ノ旨ヲ表示フ爲スヤリナニ之ヲ地  
方團體トシテ反對的行動ヲトツ。アリ即チ仁川市民ハ取引所ノ有無ヲ決テ仁川  
商界ノ利益ニ重大ナル關係アルモノト認識シタル結果ナラン（仁川市民ノ此ノ認識  
ニハ大ナル誤謬アリ其理由ハ前ニ評説スヘシ）

然レトモ苟モ合併同ニ於テ株式會社ノ法律的行爲ヲ一地方團體ニ依リ用モ同法同  
行爲ニ關ラスシテ之ヲ阻止セントスル如キハ法律ニ關テ無効スル同法ニ依マラス  
現行上ノ重大問題ニシテ之ヲ解決スヘキ理由ヲキヤリ求メルニ尤ンヤ仁川市民ノ  
行動其目的ナル所願ル不達ニシテ而モ取引所ノ實狀ヲ詳セス將來ノ歸趨ヲ知ラス一

ハ二、現行會社ノ法ニ於テ其ノ規定ニ依ラニ株式ヲ募集スル現行ルニ於テオ  
ヤ

昨年十二月廿九日及一月十一日ノ休王會ノ決議ヨリ之ヲ觀察スルニ此仁川市民ノ  
反對行動ヲ裏證スルニ只一片ノ證明ヲ以テ之ヲ爲スニハ甚ニ奇蹟ヲ大シ同紙同紙  
ランゴシヨ旨府ニ於テ爾所合併移轉ヲ認可センカ政府ハ此ニ反對行動ヲ嚴禁シ、  
カナル動作ヲ爲シ難スヘキヤ之ヲ認容ニ難カラス

三、於茲月半總督府ハ一面ニ於テハ同所合併移轉ヲ認容シ一面ニ於テハ仁川市民ノ反對  
運動ヲ阻止スヘキ方策ヲ講ニサルヘカラス之ヲ爲スヘキ方策一アリ同法同法同  
モツ可取引所合併以同ニ同法同法同法同法同法同法同法同法同法同法同法同法  
ニシテハ新取引所合併ニシテ其利益後ノ取引所ヲ認容スヘシ

其決議ノ方ハトシテ事前ニ之ヲ同所ニ通知シ解決スヘキヤ否ヤハ一ニ當局ノ考  
察ニ委ツヘキノミ否シテ其結果、仁川地ニ二所ノ取引所ヲ存置シ同法同法同法同法



ノ懸ヲ抱クモノアランカ夫ハ一片ノ杞憂ニ過キサルナリ  
日清トナルニ一ハ略實警保制度ノ確立セル一大市場トシテ内地並大収引所ト付スル群  
内陸少市場ノ保収作用ヲ爲シ朝鮮陸水首領ノ力長義同トシテノ使命ノ下ニ寄與シ一  
ハ所収引所云ノ下ニ投義以引ヲ御制セラレ内地陸水首領ノ義同トシテノ使命ノ下ニ寄與シ一  
使命ヲ承スニ過キナレハナリ。

以 七



陳

情

書



陳 情 書

從來朝鮮ニ於ケル取引所制度ハ不備ナリシト雖會社令ニ基テ行政命令ニ據リ御統  
綱ノ實ヲ舉ケラレタル爲我仁川取引所ニ對スル監督取締ニ付テハ周匝險峻ヲ極メ  
ラレタルニ反シテ各地ニ散在スル穀物現物市場ハ市場規則ノ支配下ニ置キ極メテ  
實大ナル御監督ヲ取ラレシム兩者ノ賣買取引方法ハ相異ニシテ三ヶ月ト二ヶ月  
ノ差異アルモ標準賣買ニシテ差金決済及代替品ノ受渡可能ナル點等ニ於テ其ノ實  
質ヲ同フシ内地ニ於テハ取引所類似行爲トシテ禁遏セラレ居ルニ拘ラス朝鮮ニ於  
テハ之ヲ默認セラレ來リシ爲我取引所ノ蒙レル影響蓋シ莫大ナルモノアリ加之取  
引所營業及取引所ノ賣買取引ニ在リテハ大正十年以來内地同様ノ課稅ヲ受ケ其ノ  
納稅額ハ昭和五年十二月迄ニ對シ白六拾萬圓ノ巨額ニ達スル等法律的ニモ經濟的  
ニモ取引所ハ極メテ不利ノ地位ニ置カレタルヲ以テ今日迄屢延取引ノ取締及稅率  
輕減等ニ關シ具陳スル所アリシモ御當局ハ取引所法令ヲ施行スルニ非サレハ之カ  
統制ヲ全フスル能ハストモテ願ミラレサルニ由リ速ニ法令ヲ御制定セラレンコト  
ヲ起望スルコト茲ニ年アリ然ルニ該法令案ハ目下法制局ニ於テ御審議中ニシテ速  
カラス御發布ノ遲ニ進ミシコトハ欣快ノ至リニ不堪嘆而シテ法令ノ内容ニ付テハ

素ヨリ察知スルコト能ハサルモ多年慎重ナル調査ト研究トヲ重ネシタルモノナル  
カ故ニ昨々朝鮮ノ經濟事情ニ適應シ一般ヲシテ首肯セシムヘキモノナルコトヲ信  
シテ疑ザルモ其ノ期待ニ反スルトキハ初是初議ヲ生シ或ハ官民ノ抗爭トナリ  
或ハ法令運用ノ滯滯ヲ來ス等收治スヘカラサル事態ヲ惹起スルヤモ固リ難キハ既  
往内地ニ於ケル取引所法令實施ノ歴史ニ照シ明白ナル事實ニ付之候就テハ新政  
行後二十餘年餘ニシテ漸ク制定セラルヘキ取引所法令ハ其ク理論ト眞情トノ調和ヲ  
圖リ徒ラニ一方ニ偏シテ運用ノ困難ヲ暗示スルカ如キコトナキ極覺望シテ尸マサ  
ル次第ニ御審議然ルニ偶初固紙ノ傳フルハニ依レハ法令案ノ骨子トモ謂フベキ重  
要ナル事項ハ「一」會員組織及信用擔保制「二」有價證券ト付屬トノ同時上場禁  
止ノ二點ナルカ果シテ眞實ノ秘密カ漏洩シタルモノナリヤ否ヤ疑ハシク候モ法令  
案ニ合致スルモノト假定シ之ヲ前提トシテ左ニ卑見ヲ記述シ御判覽ニ供シ候茲  
ノ言亦以テ他山ノ石トナラハ光榮之ニ過キス候 謹言

昭和五年十二月 日

株式會社仁川米豆取引所  
取締役社長 荒井 初太郎



朝鮮總督子爵嘉藤 實閣下  
政務總監伯爵兒玉秀雄閣下



一、會員組織及信用擔保制度ニ就テ

日本ニ於ケル會員組織制度ノ問題ハ明治十六・七年ノ交當時農商務次官吉田清成氏カ佛國より來ルテ其制度ヲ研究シ會員組織ノ取引ハ創設シタルニ端ヲ發シ明治二十四八月迄二十八ヶ月ヲ算シ同年取引ハ條例ヲ發布シテ之ヲ公認セシカ實ニ彼ノ成績極メテ不良ニシテ金融解散消滅シ大正十年取引ハ令改正後新設シタルモノニ大阪ノ砂糖・名古屋ノ綿絲・組織ヲ變更シタルモノニ小樽米穀取引場アルノミナリ

進ムテ會員組織ト株式組織トノ利弊ニ仔細ニ之ヲ論評スルコトヲ避ケ其ノ要旨ヲ約言スレハ會員組織ニ在リテハ個人信用ヲ基礎トスルカ故ニ會員ノ實質ヲ改善向上シ賠償擔保機關タル株式会社カ經營セサル為買賣手續料ヲ減少シテ商品ノ負擔ヲ輕減シ市場ノ管理ヲ自治的ナラシムル等ノ利便アリト稱セラル、モ當業者ノ薄弱ナル資力信用ヲ以テシテハ到底其ノ理想ヲ實現シ難キノミナラス買賣ノ正確ト敏捷ヲ快キ大敵ノ取引ヲ消化スルコト困難ナルカ故ニ取引場ノ保障的機能ヲ充分發揮シ難シ自治的經營ノ結果トシテ會員カ自ラ役員ヲ選舉（内閣法令ニ於テハ會員ニ非サル者ヲモ選舉シ得ル規定ナルカ假ニ會員外ノ者ヲ以

テ之ニ依ツルモ會員ヲ制肘スルノ力乏シキヲ以テ嚴正公平ヲ期シ難キハ曾テ類タス）シテ取引場ヲ管理スルモノナルカ會員ハ自用ニ買賣思惑ヲ為シ得ルヲ以テ委託者ノ證據金ヲ之ニ利用シテ乾地一擲ヲ行フ弊ヲ生シ易ク為ニ公平ニ法規ヲ適用シテ其ノ職務ヲ執行シ或ハ公益ノ為ニ自己ノ興廢ヲ度外視スルカ如キコトハ到底望ミ難ク延テ取引場ノ信用ヲ毀損シ公共機關タルノ使命ヲ果ス上ニ於テ遺漏ノ點少シトセス斷難遠カラス會員組織取引場トモ稱スヘキ群山・大邱市場等カ夫レカ為ニ廢立會停止ヲ行ヒ或ハ解任ヲ為シ或ハ買賣ノ決済ニ妨礙ヲ生シ或ハ破産者倒産者續出シ其ノ都度委託者ニ多大ノ損害ヲ及ボシタルコト少カラス株式会社組織タル仁川取引場ト其ノ相違何レガ大ナリヤ實地ニ就キ比較調査セラレムコトヲ望ム故ヲ以テ内地ニ於テスラ會員組織取引場ハ發達シ得サルモノニシテ我國情ニ適應セサルコトヲ立證シ居レリ況ンヤ之ヲ朝鮮ニ實施セムトスルコトハ時期尚早ノ感アルモ取引場ノ利便的設立運動ヲ防止スルノ具ニ世スト取引場ノ分散設立主義ヲ取ル場合ニ於テ地方的小取引場ヲ認ムルニハ會員組織取引場ルコトモ善シ已ムヲ得サル措置ナルベシト思料ス唯朝鮮米ノ指定的相場ヲ作成シ保障機關タル機能ヲ發揮セシムル中央的大市場ハ株式組織ニ屬



ルヲ得策トスヘシ是決シテ余ノ我田引水論ニ非ス。故下國政務總監力盡米増殖計畫樹立ニ際シ其ノ意圖ヲ洩サレタルコトアリ余モ深ク其ノ卓見ニ敬服スルモノナリ株式會社組織ノ取引所ニ在リテハ役員及所員ハ取引物件ノ實質ヲ禁止セラル取引所員トノ間ニ資金ノ供與・損益ノ分配其ノ他之ト利害關係ヲ有スルコトヲ得ス又賠償責任ヲ負擔スルカ爲ニ取引員ノ選任監督ハ勿論相當ノ身元保證金及實質證據金ヲ徵收シテ放漫濫節制ノ取引ヲ抑壓シ若シ取引員中實質及受託ノ義務ヲ履行セサル者アルトキハ取引所ハ完全賠償ヲ爲スカ故ニ實質取引カ安全確實ニ行ハルルコトハ多言ヲ要セス

因ニ仁川取引所ガ大正八年ニ大破綻ヲ來シタル際ハ百八拾萬圓ノ損害ヲ賠償シタル事實アリ

## 二、異種物件ノ同時上場問題ニ就テ

一物件一取引所主義ハ會員組織ニ於テハ當然ノ歸結ニシテ敢テ明文ヲ俟ツノ要ナシ從テ直ニ之ヲ株式會社取引所ニ適用セムトスル立法ノ精神ナラハ遺憾ナガラ斷平トシテ之ニ反對セサルヲ得ス何トナレハ數年來ノ懸案タル京仁取合併問題ヲ根本的ニ否定シ去ラムトスル實意ニ外ナラスト思料スルノ外ニ其ノ不可ナ

ル所以ヲ知ラサレハナリ内地ノ當該法令ニスラ缺如セル餘以テ設ケテ一取引所一物件主義ニ限定スルコトハ舊ニ既設會社タル京取及仁取ノ發展性ヲ阻害スルニ止マラス場合ニ依リテハ其ノ存在ヲ危地ニ陷レ兩社株主及金融業者等ニ甚大ナル損害ヲ加ヘ財界ヲ動搖混亂スルノ結果ヲ來スノ虞アリ現ニ仁取取引員モ京取取引員モ一極ノ營業ノミニテハ經營ノ維持困難ヲ訴ヘ米米其連ノ營業ヲ爲シ得ル途ヲ講シ之ヲ緩和スル爲ニ兩社ヲ打ツテ一丸トナシ夙ニ一新生面ヲ開カント苦慮シツツアルニ斯クテハ全米米連ニ歸スルノミカ未來永劫其ノ希望ヲ梗塞セラルルトキハ取引員及仲買人ノ營業者ノ勝敗シテ會社解散ノ悲運ニ懸着スルノ外ナキニ至ラン左ナキダニ米ニ對スル國勢家ノ統制管理年々周密ノ度ヲ加ヘ米ノ專賣說サヘ噴霧セラルル機運ニ向ヒ米取引所ノ將來ハ決シテ樂觀ヲ許スササルヲ以テ事前ニ京仁取兩社ノ合併ヲ行ヒ置タトキハ其ノ期ニ臨ミ容易ニ株式會社間ノ取引員ニ轉業シ得ヘク取引所モ亦産業經濟ノ進歩ト相俟テ有價證券ノ買賣ハ漸次隆盛ニ進ミ其ノ存立ヲ維持シ得ルコトハ信ス又内地ニ於テ現ニ京都ハ米米・神戶ハ米米・生絲・大豆ハ米・納絲等ヲ發賣シ居ルモ大レカ爲ニ何等弊害アルヲ見聞セス況ムヤ朝鮮ノ如キ經濟力貧弱ナル地域殊ニ相當ノ統制ヲ有ス



ル既設會社ノ合併ヲ法文ヲ設ケテ起閉止スルノ必要那邊ニ存スルヤ付度ニ苦シム同時上場ノ可否ノ如キハ行政上ノ御措置トシテ容易ニ之ヲ左右シ得ヘキ等ナリト思料セラル

三・既設取引所ノ處置ニ就テ

法令發布後既設取引所ヲ如何ニ處置セラルルヤ全ク未止ノ問題ナルカ若シ會員組織改訂ニ急ナルノ餘リ營業年限ヲ眼中ニ置カスシテ第一短期間ニ結算會社ニ引直サムトスル御方針ヲ決ルカ如キコトアラバ必ズヤ既得權侵害論ヲ生シ或ハ取引所ト取引員トノ利害衝突ヲ來ス等種々紛糾シテ或止スル所ヲ知ラサルヘキニ由リ急激ナル變革ヲ要クルヤウ御配慮ヲ望ム

四・取引所稅及取引費ノ輕減

朝鮮ハ民衆經濟貧弱ナルノミナラス産業ノ大宗タル米ノ取引ニ對シ内地同様ノ稅率ヲ賦課スルコトハ過酷ニ付取引所法令ノ御發布ヲ機トシ適當ニ輕減セラルムコトヲ望ム

以 上



仁川米豆取引所取引員組合

會昌  
げま  
一  
非  
低  
で  
増  
が  
價

陳者五ヶ年來の懸案である兩取合併問題も其の成否は兎も角として將に  
の終焉を告げんとするの域に到達しました。  
府民各位が本問題に對して極力反對せらるゝ所以は私共の衷心から御同  
申上げて止まぬ次第でありますが取引所令の發布を眼前に控へて私共營  
上の立場から此の重大の時機に處するに如何にすべきかは事生存權に係  
重大問題でありまして過去を顧み現在に則し將來を慮り即ち慎重凝議の  
果遂に府民各位と反對の立場に立たねばならぬ事となりましたことは誠  
遺憾に存じますが茲に私共の苦衷を御訴へ申上げて何卒業者の立場に御  
情と御賢察を賜り度只管御願ひ申上げます。

過去十ヶ年間は實に仁取受難の時代であります即ち大正十年内地同様の引所税を課せられ負擔の加重と取締の拘束を受け之が非常に賣買を抑制するに至りました搗て加へて其の前年市場規則が改正せられ各地の穀物現市場が延取引の名稱の下に無税自由放漫に清算取引を旺行し其の地方の意先は全部之に奪はれ私共の營業は内外よりして抑制閉塞せらるゝの窮に陥りました即ち左表に示す通り逐年賣買高の減少に伴れて取引員も減し本年末の僅か八名に止まる誠に心細い状態にあります。

	大	同	同	同	昭	同	同	同	同	次
	正	十	十二	十三	元	二	三	四	五	に當所と堂島の賣買高の對比を見ますれば如何に當所が前述の外外の情に因つて打撃を受けて居るか明瞭であります。
	年	一	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	
賣買出來高 <small>(單位千石)</small>	四七、四一一	三九、六一七	三一、四〇九	二六、一七二	一七、五五四	一二、〇一四	一一、一五二	一一、七〇九	一二、九二〇	一二、二九九
取引員數	二九	二四	一八	一六	一四	一九	一九	一〇	九	八

(▲印=減少)  
單位千石

川島・仁川兩取引所取引高比較表

次に當所と堂島の賣買高の對比を見ますれば如何に當所が前述の内外の情に因つて打撃を受けて居るか明瞭であります。

	年次	取引高	十年ニ比シ 増減歩合	取引高	十年ニ比シ 増減歩合
大正十一年	七三、八六九	▲・一六六	四七、六一一	▲・一六四	
同十二年	八一、〇一四	●・二六四	三一、四〇九	▲・三三七	
同十三年	八七、〇六九	○・一七九	二六、一二二	▲・四四八	
同十四年	七五、一一一	○・〇一七	一七、五四四	▲・六三三	
昭和元年	六六、九〇九	▲・〇九四	一一、〇一四	▲・七四七	
同二年	六〇、〇三二	▲・一八七	一一、一五二	▲・七六五	
同三年	五九、四〇六	▲・一九五	一二、七〇九	▲・七七二	
同四年	六三、〇〇九	▲・一四七	一二、九二〇	▲・七二七	
如何で御座います。前表に依つて見ますれば堂島は大正十年以降最大減額を來して居ります。					
昭和三の一年割九五厘でありましたが當所は昭和元年以降七割二分七厘の金餘となつて居ります。					
至甚しきは七割六分五厘約八割の減少を來たして居り乃至一割七分九厘の金餘となつて居ります。					
正十二、十三、十四年の三ヶ年間は却つて一分七厘乃至一割七分九厘の金餘となつて居りますが斯くも減少を來たしたことは之を一を加へ示して居るに拘らず當所のみが斯くも減少を來たしたことは之を一を加へ示して居るに拘らず當所のみが斯くも減少を來たしたことは之を一を加へ示して居るに拘らず當所のみが斯くも減少を來たしたことは之を一を加へ示して居るに拘らず當所のみが斯くも減少を來たしたことは之を一を加へ示して居るに拘らず當所のみが斯くも減少を來たしたことは之を一を加へ示して居るに拘らず當所のみが斯くも減少を來たしたことは之を一を加へ示して居るに拘らず當所のみが斯くも減少を來たしたことは之を一を加へ示して居るに拘らず當所のみが斯くも減少を來たしたことは之を一を加へ示して居るに拘らず當所のみが斯くも減少を來たしたことは之を一を加へ示して居るに拘らず當所のみがス					
結果に外ならぬのであります。試みに大正十一年以降昭和四年に至る間の取引高を表示しますれば					
と群山・大邸・釜山、三市場の出來高を表示しますれば					

出 來 高  
市 場 名  
大 正 十 二 年 十 三 年 十 四 年 元 和 二 年 三 年 四 年

市 場 名	大 正 十 二 年	十 三 年	十 四 年	元 和 二 年	三 年	四 年
仁 山 (延)	三三〇〇	六二五〇	一七五五	一〇〇〇〇	一四一四	一四六〇
大 山 (延)	一〇七四〇	四一五五	一三二五	八三六〇	一〇六〇〇	一〇六五〇
群 山 (延)	一四〇五	一四一五	一〇六五	九三〇一	六六四〇	九六五〇
延 山 (延)	一四〇五	一四一五	一〇六五	九三〇一	六六四〇	九六五〇
計	六六六五	二五五五	一五五五	三三六五	四四六五	三三六五

通りでありまして當所は年と共に激減して居ますが三延市場は各々消長あつても當所程の減少でなく大邱の如きは殆んど不變の状態に置かれてます而して右表合計の全鮮投機取引の總量は少くとも一ヶ年三千萬石以存在して居るのであります然るに過去五ヶ年間當所の賣買數量が千百萬乃至千百萬石臺に止まるのは當所の權益が如何に延市場に依つて侵害られて居るかを如實に物語るものであります而して前表統計數字は所謂場に於て賣買せられたもののみでありまして此處に見逃すことの出来る吞行爲の賣買が何程存在するかであります内地に於ても取引所稅實施前殆んど其の七割は吞まれて居た歴史があります私共は徒らに他市場の權を傷くるを好みませんが延市場には否が大量に存在して居ることは否定の譯に參りませぬ從つて私共は全鮮投機取引の量は一ヶ年五千萬石を降ぬものと思つて居ります然らば當所は約其の五分の一を吸収して居ることになります四圍の情勢斯の如く當所に不利にして今や私共は死線に立つ悲境にあります否死線を越へて居ると痛感して居ります實に此の十ヶ年といふものは延市場の取締要望に減稅運動に私共は奔命に疲れ切りましたやうして何物をも報ひられなかつたことを只々悲しむのみであります

最近當所の取引員を出願するものが勧誘しても皆無の  
でありますその主なる理由は各地に延市場が存在し  
る必要がなくなつたのと採算が引合はぬからで

に比し私共取引員が如何に不利の地位に置かれて居るかを一通り申上  
る。口に延市場と申しましてもあれは會員組織の取引所であります従つて  
利害團體でありますから私共取引員の様に株主配當金を負擔することが  
ので取引員の收入する委託手数料及取引所が收入する賣買手数料共に  
てありまして現在の米價で私共の收入する委託手数料は百石に付七圓  
あります（尤も米價二十圓一錢以上は二十五圓迄一圓を増す毎に十錢を  
二十五圓一錢乃至七圓の定額であります、そして私共は此の内から米  
市場では五圓乃至一圓の定額であります、そして私共は此の内から米  
分の五の取引税と賣買手数料百石に付一圓五十錢を取引所に納めなけ  
なりませぬが延市場では取引税の約五分の一の市場税と市場手数料を  
なければなりませぬ、一例でありますがお膝元の京城延市場の例を採  
れば（米價十五圓として）

取	委託手数料	賣買手数料	税金
七〇〇	円	一・五〇	円
			金
			はて

延 五〇〇 二一〇〇 賣買手數料ニハム

りますが延市場は各地共バイカイ付出（同一仲買人が同時に同一値段  
買したもの）は税金を含み一圓でありますから委託手數料五圓として  
買入の手取は四圓となり私共は七圓貰つても四圓七十五錢で其の差僅  
七十五錢で取引所に納入する手數料税金は合せて私共が二圓二十五錢  
のに京城の延市場であればバイカイの場合は一圓でバイカイでなく  
國で済み結局私共は二十五錢乃至一圓二十五錢多く取られる勘定とな  
てあります之を大邸、群山の如く七圓の委託手數料を貰へば仲買人の  
はバイカイの場合六圓で私共より一圓二十五錢多く其の他の場合でも  
の手取となり私共より遙かに有利であります、またこれ丈ではありま  
す前に述べました通り吞行爲自由でありますから吞めば委託手數料丸取  
共は到底底元にも寄付けぬ所であり、また、それ丈ではありま  
延市場は非營利團體でありますから決算期に營業費を支拂つた剩餘金  
の百分の六十以上を賣買手數に比例して仲買人に割戻しますこれが仁  
株主配當となるのであります、そして其の残りが積立金其の他に振  
れば聊か野郎と言葉でありますが私共に比ぶれば全くボロ過ぎると云  
過言ではありません。

結 樣 難 四 年 所 自 せ け は 私 令 不 快

市場は九月二十五日賣買取引を開始しましたが此の月は營業日數五日に來高僅かに二萬四千五十石に過ぎませぬが十月に入り市場の周圍に店舗架設等の架設等市場の態形稍整ひ俄然出來高の増加を來たし十月三十一日中三萬四千五百五十石の出來高を示し之を當買高に對比しますれば

別	十一月	十一月
城延	三三四、五五〇	三六〇、四五〇
所	一、四一九、八〇〇	一、一九一、〇〇〇
ニ對スル歩合	〇、二二九	〇、三〇二
委託買賣高と京城延市場の出來高の對比		

城延	賣買高	別	三二四、五五〇	五月
所委託賣買高	賣買高		一〇七六、五〇〇	五月
			九二五、四〇〇	五月
			三六〇、四五〇	五月

[illegible]

て四圓以上變動の値巾は近  
方針の恐怖人氣相場を現出  
萬六千九百石の出來高を示  
り其の差約六十萬石の減少  
月の兩月は整理商内に限局  
相當大きかつたに伴ひ増加  
六分、九月五割八分の激増  
増加に止まつた所以である  
し幾分増加したからとて直  
いなどゝ見るのは全く本年  
京城延市場の賣買はそれま  
ります、而して近時市場の  
五百名來集し外觀から見て  
して居なかつた内鮮の組合  
次第でありますから我仁取  
來述べました通り私共に取  
時代であります、株主各位  
の配當を受けられますが私  
懸案である取引所法令の發  
ありまして法令の内容は一  
の運命は自己で開拓せよと  
安と焦燥に驅られ遠に慮は  
て法令發布の近き將來を慮  
んことを一重に御願申上げ

來  
を

聞の報道によれば取引所法は茲に會員組織の經濟學的發布せられたならば會員組織と丈は會社に對して要求するところが出来ませうか、減額を要求して來ませうか、前述の通り延市場及内地取引會社の今日の業結から早急に影響を及ぼしますので株忍して居るのであります。

取引所法の内容は如何に組織取引所となつた場合に兼ねますが、現行内地取引所は根本に於て非營利法人では株主配當丈けでも多く負擔に於ても朝鮮の法令は如何に會員組織であれば一萬圓以上と公稱して當所に公稱して居りまして一萬五千圓を徵せられて如き非常に會社組織に於ける引員は商工大臣の許可を受に依つて商議員會の決定に取引所法第十一條に定むる破産者及除名せられた者以員は懲役若しくは重禁錮一年以他仲々むづかし規定せらるるに内地取引所法の改正をいたしましたので會員組織は株式取引所が果して如何の報する次第でありますか、取引所は次第もなく誠に寔に憾を得權は認めらるるものと見て論せられて居りました、所が認めらるるに至りしは社會の有力な團體もあり之を排除し市場は常にある又、會員組織であつて任意又、木前監督官が云はれた通りふ見地に立つて考察したなるとか、社會の安寧秩序に於てさへ當局は之を放任の通り盛大に公然賣買が行は仁取のみ甘受して居る。之が撲滅を圖らんとすれば運動を起すは必然のことであるに限り之を抑止す







W.P.  
昭和六年十月

民有林改善策の一

植樹偏重より伐り惜しみの

矯正へ

651.14

790  
(755)

植場定去



651.14 34

邊

之

同

夜

下



京畿道山林課長

柳 芳 三 氏

京 畿 道



民有林改善策ノ一  
「植樹偏重ヨリ伐り惜シミノ矯正へ」

掛  
揚  
定  
吉



民有林改善策ノ一

「植樹偏重ヨリ伐り惜シミノ矯正へ

掛 場 定 吉

植エヨ、伐ルナ式ノ殖林

朝鮮ノ如ク民衆ノ低イ地方ニ於ケル殖林事業ハ現在ノ林相ヲ善用シ其ノ伐採方法ヲ指導シ主トシテ天然力ヲ利用スルコトニ力ヲ注グベキデアルト思フノデアアルガ始政以來未ダコノ方面ハ殆ンド顧ミラズ依然トシテ植エヨ伐ルナ式デ大体植樹一點張りニ進ミツ、アルハ單ニ技術上不利不安アルノミナラズ林野所有者ヲシテ造林費ノ負擔ニ非常ナル困却ヲ感ゼシメ又伐採ノ制限ガ往々適度ヲ失シテ禁伐的取締トナリ延テハ地被下木ノ濫獲ヲ促ガシ彼此相俟ツテ殖林事業ノ進展ヲ阻害シ愛林思想ヲ減殺スルノ結果ヲ招キツ、アルノ感深ク永ク現状ノマ、推移スルコトノ許サルベキデナイト思フノデアアル

伐レ、植エナクトモ良イヤウニ

ソコデ余ハ植エヨ伐ルナ式ノ殖林獎勵ヨリ一步轉ジテ新ニ「伐レ、植エナクトモ良イヤウニ」ヲ提唱シ之ニ依ツテ林利ノ増進、愛林思想ノ涵養、造林費



ノ節減、殖林事業ノ確實性增加ヲ計リ依ツテ殖林事業進捗ノ一轉機ヲ得ムトスルノデアアル而シテコノ考ヘ方ハ朝鮮ニ於ケル官民多數者ガ今日抱イテ居ル考ヘ方ト非常ニカケハナレテキルガ爲メ奇矯ナル一説トシテ見ラレルウモ知レヌガ余ハ余ノ經驗ニ基キ今ヤ最善ノ一策トシテ此ノ「伐レ、植エナクトモ良イヤウニ」ノ一語ヲ「モットー」トシテ京畿道管内殖林事業ノ進捗ニ邁進シムトシ既ニクヌギ、アカマツ等ノ新規養苗事業ヲ停止セシムル等着々所信ノ實現ニ努メツ、アル次第デアアル以下其ノ理由ヲ詳述シ大方ノ批判ヲ受ケタイト思フ

#### 先ツ林野ノ現況ヲ凝視セヨ

朝鮮ニ於ケル民有林野ハ現在如何ナル狀態ニ在リヤ又如何ニ推移シツ、アリヤヲ吾人ハ先ツ凝視シナケレバナラヌ余ノ觀ル所ニ依レバ大部分ノ民有林野ハ殆ンド例外ナシニ

一 林冠層ノミヨリ成リ生枝、下木及下草ヲ有スルコトガ尠ナイ即チ林間裸地又ハ之ニ近似スル林相ガ極メテ多イコト

二 林木ノ伐採ヲ喜バヌ爲メニ稚樹、萌芽、下草類ヲ濫採スルノ弊ヲ矯メ難

ク自然林間裸地ヲ誘生シ近時堆肥獎勵ノ盛ンナルヤコノ傾向益顯著ナルコト

此ノ二點ガ現在林相ノ概觀デアリ推移デアルコトハ余ガ今マデ先輩知友ニシタル所ニ徴シテモ間違ノナキ事實ト認定スルノデアアル依ツテ余ハコノ認定ヲ根據トシ更ニ之ヲ前論トシテ本問題ヲ考究シタイ

#### 誤レル伐り惜シミ

林相並ニ其ノ推移ガ前述ノ通トセバ斯ル林相ハ極メテ不安定ニシテ且ツ治山ノ目的ヲ達シ得ザルノミナラズ林間裸地ノ發生ヲ防止シ得ザル限り如何ニ植樹造林ヲ行フモ大局的ノ效果ヲ舉グル望ミ渺ナク地方林政上由々シキ大問題ニナルノデアアル從ツテ本問題ハ地方林政上先ツ第一ニ解決セラルベキデアリ然ル後又ハ同時ニ植樹造林ヲ考フベキデアルト思フト共ニ憂慮スベキ弊害ヲ除去セズシテ造林ノミニ勞費ヲ投ズルハ貴明ナル指導者ノ採ルベキ方途デナイト信ズル

然ラバ林相並ニ其ノ推移ガ何故ニ斯クナリシヤ其ノ原因ハ火田、濫伐採、松種偏重、堆肥獎勵、根炭製造等々各方面ニ在ルガ如シ追テ之等對策ニ就テモ



余ノ考フル所ヲ述ブル機會アルベキモ就中最重大ナル原因ハ全ク「伐り惜シミノ弊害」ニ在リト信スルノデアツテ余ガ民有林改善策ノ第一トシテ先ヅ伐採指導ガ必要ナリト提唱スル所以モ亦之ガ爲メデアアル

### 根本觀念ノ是正

殖林事業進展上伐り惜シミハ大イニ良イコトデアアル然ルニ「伐り惜シミノ弊害」一誤レル伐り惜シミ」ガ何故ニ民有林改善ノ第一着手ニ矯正ヲ要スル程大ナル問題ナリヤ余ハコノ質問ニ對シ次ノ如ク答ヘタイ

イ、伐採スルノガ惜シイカラ枝打ヲ許ス

ロ、大キイ樹ハ惜シイカラ先ヅ小木稚樹ヲ伐ル

ハ、主林木ヲ殘シテ下木ヲ伐ル

ニ、樹ヲ伐ル代リニ下草ヲ刈リ落葉ヲ掻ク

ホ、皆伐ヲ避ケテ間伐ニスル而モコノ間伐ハ事實ニ於テ副林木ノ全部ヲ伐ル

ヘ、アカマツヲ殘シテ闊葉樹ヲ伐ル

ト、道路沿線ヤ耕地續キ等ノ優良林地ノ大木ヲ殘シテ山奥峯筋等劣位林地

### ノ稚小樹ヲ伐ル

チ、植栽樹ヲ間伐シ又ハ蠶切りスルノヲ惜シンデ居ル間ニ下枝枯レ上リヤ

ガテ地被ヲ掻キ林間裸地トナル

等々ノ伐り惜シミハ朝鮮到ル處隅カラ隅マデ而モ指導ノ任ニアル者マデ皆々同ジ心持ニテ樹木ノ伐採ヲ取扱ツテキルノデアアルマイカ鐵道ノ沿線デアアルシ父折角成林シタノニ伐ラシテハ惜シイト云フヤウナ理由デ伐採ヲ許可セヌ等ノ話ハヨク聽クコトデアアルガ之ガ爲メ何時ノ間ニカ枝打、稚樹刈取り萌芽採取等ガ行ハレルノデアアル

此等ノ伐り惜シミハ結局多數ノ稚樹小木ヲ犠牲ニシ其ノ將來アル生長力ヲ減失スルノミナラズ生長力ニ乏シキ主林木ガ大樹トシテ枝打ノ殘虐ニ悩マサレナガラ殘サル、ニ止マリ而モ地被物濫採ノ爲メ地力減退シテ其ノ生長サエ容易デナイ結果ニナルノデアアル實ニ恐ルベキ不經濟デアリ森林虐待デアツテ朝鮮ノ民有林ハ樹木ノ生長力ヲ利用シテキナイ從ツテ民有林ニ眞ノ林業ガナイト言ツテモ差支ナイ位デアアル故ニ誤リタル伐り惜シミヲ矯正シ林木伐採ニ關スル根本觀念ヲ官民共ニ是正セザル限り林相ノ破壞ハ依然トシテ繼續スルノ



デアツテ如何ニ植樹ニ勞費ヲ投ズルモ結局ハ完全ナル成林ハ望マレヌコトニナルノデアアル

#### 施設ノ緩急

凡ソモノガ破壞シ又破壞シツ、アル場合ニ於テ之ヲ復舊シ若ハ防止スルニハ全局的ニ效果アル方法ヲ選ブベキハ當然デアツテ若シ同一面積ナリ同一量ヲ完成スルニ復舊ヨリモ防止ノ方が勞費少ナクシテ效果アル場合ハ當然先ヅコノ防止ニ同ツテ力ヲ注グベキモノト信ズル況ンヤ森林ノ如ク天然力ニヨツテ育ラ恢復セムトスル力ヲ多分ニ有スル對照ニ就テハ僅少ノ施設ニヨリ大面積ノ荒廢ヲ防止シ得ル場合ガ頗ル多イト思フノデアアル妙防事業及造林補助等ノ荒廢復舊施設モ必要デアリ保護取締等ノ荒廢防止施設モ亦必要デアアルガ單ニ林木伐採ニ關スル觀念ヲ是正シ伐採方法ノ指導ニ依ツテ即チ伐採利用シツツ林相ヲ改善シ荒廢ヲ豫防スルコトハ其ノ效果ノ確實ナル點ヨリ經費ヲ殆ンド要セザル點ヨリ又朝鮮民度ノ實際ニ即スル點ヨリ見テ荒廢復舊ヨリモ荒廢防止ヨリモ尙ホ一層緊要焦眉ノ問題デアラウ

#### 伐り惜シミ對策

伐り惜シミハ概ハ伐りタクナイ大木ハ惜シイト云フ人ノ感情ニ基クノデアツテ理論カラデナイ而モコノ感情ガ永年ニ涉リ人ヲ支配シテ來タノデアアルカラコノ感情ノ現ハレトシテ如何ニ大ナル弊害ガアツテモ通ニ之ヲ矯正スルコトハ困難デアアル先般管内江華郡ニ於テ或ル有力者ト會談中「百本ノ伐採許可ヲ受ケ愈山林ニ入ツテコレカ、アレカト選ビ始メルト皆惜シクナツテ結局七十本カ八十本シカ伐レナカッタ」ト云ハレタノニ對シ余ハ「成ル程結構ナ心掛ケデアアルガ然シ其ノ考ヘ方ガ斯クノ如ク林冠層ノミノ森林トナリ下枝、下木雜草等ヲ失ヒ殆ンド林間裸地ト選ブナキ現況ニ導イタノデアアル何故ニ大ノ數本ヲ伐ツテ小ノ數百本ヲ生長セシムル途ヲ取ラザリシヤ」ト答ヘタノデアアル伐り惜シミハ感情デアツテ理論デナイカラ之ニ對スル人々ノ見方モ考ヘ方モ區々デアツテ一樣デハナカラウ自然其ノ對策モ種々アラウ議論モ出ルデアラウケレドモ今迄本問題ガ何人ニモ議論セラレタコトガナイ様デアアルシ實行價値ノ不明ナ理想論ヲ考ヘテ見ル邊モナイガ故ニ余ハ余ノ對策ヲ述ブルニ當リ先ヅ自ラノ經驗ヲ述べ更ニコノ經驗ガ余ノ今有スル唯一ノ對策ソノモノデアアルコトヲ告ゲテ他ハ今後ノ研究ニ譲リタイ



余ガ京畿道ニ赴任セル當時ノ管内ノ林野ハ到ル處枝ノナイアカマツ疎林デア  
リ前述ノ諸弊害ハ悉ク具備シテ居タノデアアル「滿目荒涼」ノ四字ガ當時公文  
ニ私文ニ良ク用ヒラレタル程林野ハ荒廢シ又溫突燃料ヲ京城へ搬入スル駄牛  
ハ毎日各門里餘ニ亘ツテ繼キ而モ其ノ殆ンド全部ガアカマツ葉附枝デアツタ  
コノ實狀ヲ對象トシテハ考慮ニ考慮ヲ重ネタル後對策トシテ漸次次ノ如キ措  
置ヲ執ツタノデアアル

イ、先ヅ生枝ノ伐採制限ヲ高メ遂ニ之ヲ禁ジタ

ロ、同時ニ小木ヲ極力殘サセテ比較的大木ヲ伐ラシムル爲メ極木ノ伐採制  
限年齢ヲ低下シ

ハ、又下木ヨリモ主林木ヲ伐ラシメ以テタトヘ林相ハ一時景觀ヲ失フトモ

燃料採取ノタメ伐採又ハ伐枝セラル、樹木數ヲ極力減少セシムルト共

ニ燃料ノ不足難ヲ緩和シタ

ニ、闊葉樹ノ保育ヲ強調シ伐採季節ヲ制限シ同時ニ之ガ緩和策トシテアカ  
マツノ伐採ヲ緩和シ

ホ、監督指導困難ナル間伐ヲ極力避ケテ皆伐ヲ獎勵シ森林組合ヲシテ之ガ

#### 勵行ヲ計ラシメ

へ、耕地細キ、道路沿線、谷間等生産力多ク弊害少ナキ優位林地ノ伐採ヲ  
寛大ニスルタメ伐採制限標準ヲ樹齡ノミニ限ラス極高ヲ副標準トシテ

道令ヲ定メ同時ニ荒廢シ易キ林地ノ伐採ヲ取締ル等

十數年ニ涉ツテ一步マツト弊害ノ除去ニ努メテ來タノデアアル勿論コノ經過中  
ニ於テ種々ナル批判ヲ受ケタノデアアルガ一層モ地元住民ヲ顧ガサズ且又負擔  
ヲモ爲サシメズ單ニ方針ノ徹底ニヨツテ永年ノ惡習ヲ漸次減少シ得タルハ大  
イニ幸福トスル所デアツテ京畿道今日ノ林相ガ殖林ヨリモ寧ロ弊害除去ニヨ  
ツテ誘導セラレタモノデアリ上述ノ對策ガ少クトモ京畿道ニハ相當ノ効果ア  
リタルモノト思料セラル、ノミナラズ他ニ簡易ナル實施策ヲ案出デキナイノ  
デアル故ニ今後モ大体コノ方針ニ依ツテ進ムコト、シテ近時更ニ主旨ノ徹底  
ヲ期スルタメ大イニ陣容ヲ整ヘテ我等ノ標語タル「伐レ、植エナクトモ良イ  
ヤウニ」ノ周知ヲ計ラムトシテ居ルノデアアル

#### 木ハ斧デ倒セ鎌デ刈ルナ

伐り惜シミノ弊害對策タル前記各項ノ指導ハ要スルニ大木（大木ト云フ程ノ



大木デハナイ本道ノ普通ノ民有林デハ二十年生以上ノアカマツ、八九年以上ノクヌギヲ一括指稱スルコトニナラウノ小數ヲ犧牲ニシテ今後大イニ伸ビントスル稚樹萌芽類ノ多數ヲ徹底的ニ保育セシムルコトデアル是レ孟子ノ「斧斤以時入山林材木不可勝用」ノ時ヲ勵行セムトスルモノデアル又見方ニヨツテハ朝鮮ノ山林ヲ荒シタモノハ録デアル大キナ木ガアツテモ録デハ刈レヌカラ自然録デ刈レルヤウナ枝ヤ稚樹、萌芽ヲ第一番ニ刈リ取ルコトニナルノデアルカラ端的ニ之ヲ云ヘバ「木ハ斧デ倒セ録デ刈ルナ」ヲ強斷スルコトニナルノデアル

#### 伐り惜シミ對策ノ利益

「伐レ、植エナクトモ良イヤウニ」ヲ振リカザシテ進マムトスル余ノ對策ニ如何ナル利益ガアルデアラウカ尙ホ少シク之ヲ述べタイト思フ

- 第一、樹木ノ生長力ヲ利用シ稚樹ヲ育テ、カラ伐ルコトニナル之ハ非常ニ大キイ利益デ丁度從前トハ反對ノ結果ニナルノデアル
- 第二、相當ニ下木ガアルカラ上木ヲ伐採シテモ下木ガスグ第二代ノ林相ヲ形成スル故ニ單ニ造林費ガ節約セラル、ノミデナク林面ヲ永ク露出スル不

利モ渺ナク又一時林地ヲ遊バセルヤウナコトニモナラヌ

第三、下木ニヨル第二代ノ林相ハ成林ノ安全度ニ於テ又生長量ニ於テ特別ノ樹種ナリ用材林ナリヲ求メムトスル場合ノ外ハ非常ニ有利デアル

第四、松樹偏重ノ誤リタル觀念ト上木伐り惜シミトニ依リ虐待セラレタル闊葉樹ガ先ヅ適當ナル下木トナリ次デ針闊混生林トナリ闊葉樹ノ増加ニ伴ツテ草類ノ繁茂ヲ促シ理想的ナ森林ヲ形成スル

第五、大キナ木カラ伐ルコトニナツテ下木、枝打ノ如ク多數ノ木ヲ伐ラズトモ燃料ハ得ラレルカラ甚ダ好都合デアル又弊害少ナキ後位林分ノ大木ハ思ヒ切ツテ伐ルコトガ出來ルカラ森林ノ收益ヲ如實ニ體驗セシムルコトガ出來テ今迄禁伐的取扱ノ爲メ盡餅ノ如カリシ感ジカラ一躍森林收入ノ有難味ヲ會得セシメ殖林思想ヲ刺戟スルコトニナル本道管内ニ於テ製炭ノ利益ヲ知ツテクヌギ造林ヲ熱望シ又ハ闊葉樹伐採禁止年限延長ヲ申出ヅルガ如キハ其ノ一例デアル

等々數ヘレバマダ「アルデアラウガ要スルニコノ對策實施ニヨツテ植エナクトモ次代ノ森林ガ安全有利ニ形成サレ而モ燃料等ノ林產收入ガ生長量ヲ利



用シ得ルダケ増加出來ルカ又ハ蓄積ヲ増シ得ルノデア

### 林間裸地ノ取扱法如何

伐リ惜シミノ弊害ヲ除去スル爲メ伐採方法ヲ前述ノ如ク指導セムトスル場合最モ困難ヲ感ズルハ林間裸地ノ取扱デア何トナレバ一應林木ヲ伐採セムカ忽チ禿裸地トナリ要砂防地ニ化スルカラデア故ニ多クノ人ハタトヘ禿ノ如キ林冠ダケノ無價値木デモ中々伐ラナイデ燃料供給ノ最後手段トシテ僅カニ點生セル下木ノ刈取りヤ更ニ樹勢ヲ弱メル枝打チヲ惡イコトデハアルガ已ムヲ得ナイコト、シテ之ヲ默過スルノデア然シコレデハ「モルヒネ」中毒患者ガ已ムヲ得ズ「モルヒネ」注射ヲ續ケルノト同様デアツテ山林ハ益劣化スル一方デアアルカラ一面溪筋等優位林地ニ植樹ヲ行ツテ蓄積ノ増加ヲ計リ溫突改良ニヨツテ燃料ノ節約ヲ爲サシムルト同時ニ已ムヲ得ナイ所要燃料ニハ主木伐採ヲ敢行シ即チ一部ヲ犧牲トシテ他ヲ保護シ力メテ其ノ主木又ハ稚樹ヲ保育シ地被保存ノ途ヲ講ジ一部禿裸地ヲ生ズルモ意ニ介セズ邁進スルヨリ外ニナイデアラウ何トナレバ甚ダシク枝打タレタル生長不振ノ立木ガアツテモ既ニ林間裸地トナリタル上ハ治山上禿裸地ト選ブ所歟ナク要スルニ五十歩

百歩ノ問題タルニ過ギザルガ故デアル待ラニ現在立木ニ戀々トシテ施業方法ノ指導ヲ誤ルガ如キハ余ノ斷ジテ首肯シ得ザル所デア

### 結 論

民有林野改善策ノ一トシテ伐リ惜シミノ弊害打破ヲ先ヅ行フベシトスル余ノ所論並ニ實施策ハ大体上述ノ通ニシテ題目ガ大ニシテ且ツ奇異ナルニ反シ内容ノ頗ル平凡ナルハ聊カ羊頭狗肉ノ感ナキニアラザルモ要スルニ民有林ガ舊穀ヲ脱シテ新ナル進展ヲ計ラムトセバ今日ノ如ク植樹及保護ノミニ偏セズ寧ロ伐採指導ニヨツテ林利ヲ擧ゲツ、造林費ヲ要セザル殖林成績ヲ擧ゲナケレバナラヌ而モコノ指導ニハ殆ンド經費ヲ要セズ且ツ林野所有者ヨリ歡迎ヲ受ケツ、行フコトガ出來ルノデア

ル吾人民有林指導者トシテ今日ノ人工造林ガ經濟的ニシテ且ツ安全ナル植樹ト方法トニ依リツ、アリヤ、伐採方法ノ指導ヲ行ハズシテ今人工造林ガ果シテ其ノ勞費相當ノ効果ヲ擧ゲ得ルヤ、毎年何億ニ達スル植樹（成林不安全ナル）ヲ行フ反面ニ於テ之ニ幾倍スル稚樹萌芽（成林比較的安全ナル）ガ濫伐セラレテキル不合理不經濟ハ何故ナルヤ、憂フベキ林間裸地ガ如何ニシテ生成スルヤ、植エヨ伐ルナ式ノ指導ガ果シテ林



業進展ノ捷徑ナリヤ否ヤ等ヲ深ク究メレバ誤レル伐リ惜シミノ弊害ヲ一日モ  
早ク打破セザルベカラザルコトヲ更ニ痛感スルノデアアル然リ而シテ伐リ惜シ  
ミノ觀念ハ大衆ノ腦裡ニコビリツイテ中々離レナイデアラウシ又ソレヨリモ  
寧ロ先ツ實施方法ニ付指導階級ノ贊成ヲ得ルコトガ容易デナイカモ知レヌカ  
ラ余ノコノ新タナル提唱が大衆ノ理解ヲ受クルマデニハ尙ホ相當ノ年月ヲ要  
スルデアラウ







桑を山に

掛場生

養蠶を有利ならしむる爲め桑を地代のか、らぬ又肥料のあまり入らぬ土地に植ゆる事を考えてもよいと思ふ、其の土地は山林である、山林中から適地を選べばどうか

桑は元來山林の木である壤土を好む木であるそれを無理に平地に植え而も樹性に順着なくどんな土性の耕地にも植込む即ち我等林業界人の常に頭を悩ます適地適木と云ふやうな注意を餘り拂はない従つて生長が悪いから肥料で之を助けねばならぬ事になる全く不自然である故に桑を山林に植えたらどうか第一地代は殆んど入らぬ、第二山林は廣いから充分適地を求めて植えれば肥料代は大に減少する品種を適當に選べば肥料は不用かも知れぬ又根瘤菌を有するハンノキ類を混植して肥料の天然給源としてもよい、第三には傾斜方位を適當に選定すれば霜害が少ない特に高木仕立てにすれば然りである以上ザットこんな利益がある  
そこで道地方曾で六年春も少し植えたが七年春には造林式にうんと桑を植え込んで安價に桑葉を生産しやうと考へてゐるうまく行つたらこの安



い桑で條桑育でもやつて生産費はうんと低下するであらう  
廣で造林式に植ゆる場合其の植え方をどうしたらよいか

第一、適地を充分吟味する

第二、從來のやうな大きな植穴を堀つたり堆肥を底に入れたりはせぬ  
これは土壤の細毛管引力を破壊し活着と生育とを害するから我等の極力嫌つてゐる所である又其の沈下と腐朽とで根が益深過ぎる結果をも生ずる故に唯地表の雜草根を比較的廣く除いて後普通の造林式に植える堆肥糞灰等の肥料をやれば横の方へ埋めてやる

第三、圃地全部平等に植えたい列植や並木式では將來餘りに廣い日蔭の不生産地（一本當りに考ふれば）を生ずるからである山林と雖不生産地を作ることとは避けねばならぬ

第四、今迄の桑の植え方は深過ぎると思ふ樹は總て深植を嫌ふからである

造林式に植えた桑はドシドシ生長させて高木仕立てなり頭木仕立てなり



にして不況不引合等で養蠶を休む年は刈込む手數も入らず其の無生長させる事にすればよい

余のこの提案は余の想像するやうに成功せぬかも知れぬ然しものは見た考かたである山桑を摘み取つて養蠶してゐる處もあるのであるから過地を選んで一大圃地に桑の造林を行つて其の葉を利用することは強ち實現性のないものとして斥けんでもよいと思ふか然し若し葉を利用出來ない場合は桑材生産の森林に仕立てればそれでもよいではないか

前にも述べたやうに京畿道では六年春から道地方營林に桑の植栽を始めたのであるが先般本多博士來城の際歡迎會席上に於て博士より養蠶費遞減策として桑の山林植栽有利説を承り大に意を強ふした次第で七年春には規模を大にして之が試験的植栽を續行したいと思ふのである



堆肥とはどんなものか

掛場生

近頃堆肥用山草濫採の爲め林間裸地が増し治山上甚だ困つた問題を起こしてゐるが一体堆肥とはどんな效能があるものか？伊吹技師に調査してもらつた野草一千貫（生のまゝ）の利用方法別窒素の量を表示すると

利用方法	原料	出来上り	含有窒素	
			%	全量
野草を生ゝまゝ利用	生 1000 貫	生 1000 貫	25.4	25400
野草を乾かして利用	生 1000 貫	乾草 348	25.5	2594
野草を堆肥に製造	生 1000 貫	堆肥 600 土共	?	?
普通の堆肥	?	?	25.4	

此の表では野草を原料とせる堆肥の窒素量は不明であるが厩肥や其の他のものの混入した普通堆肥さへ含量は〇、五四パーセントに過ぎないから野



草堆肥の窒素量は極めて少ないものと想像できる今假りに野草堆肥と普通堆肥とが窒素量に於て同一なりとしても原料一千貫から土共六百貫の堆肥が出来るとせば原料一千貫當りの窒素含量は0.54%の三貫二百四十匁に過ぎずして生草又は乾草のまゝ、利用した場合の五貫四百匁に比較すれば著しい減少である況んや野草堆肥の窒素が更に少ないものと想像せらるるに於ておや又堆肥を本式に作る事は非常に手数のかゝるもので多くは管理方法適當ならずして製造中の化學變化に依り肥効分の多くを逸散してしまふに於ておやである

そこで私は農村自給肥料供給方法として次の如く提唱したい

一、畚に堆肥をやるのは全く不經濟である野草を生ゝまゝ、又は乾草として貯藏せるものを用へ

二、厩肥の如く窒素分の多い材料を堆肥にして窒素の大部分を失ふ事は餘りに惜しいこれは其のまゝ、畚に入れよ

三、田には生草乾草又は厩肥を直接用ひられぬ場合が多いから田専用の堆肥を作る事は已むを得まい然し深耕等の方法で田にも生草や乾草



厩肥を直接用ひ得る方法を研究したいものである

要するに堆肥は骨はかり折れて肥効分は半分以上も消失する不經濟なものであるどうせ野草を肥料に用ふるなら有利な方法で指導したいものである尤も堆肥の効果は單に窒素ばかりではない燐酸や加里も重要な肥効分であり又土地に有機質を増加し理學的に土性を改善する効果はあるけれども此の効果だけでは堆肥施用に要する犠牲はあまりに大である部落の繁榮に密接な關係ある里山を荒らしてまで山草を採取し而も肥効分の渺ない堆肥を製造せしむる理由は吾人に明かでない夫れよりも先づ畚の稻株丈けでも有機質材料として完全に畚にすき込ませて燃料にする事を避けしめたいと思ふ

農村に關係ある諸君の一考を煩したい



廉價燃料として無煙粉炭

價が安くて火力の強い燃料としては先づ無煙粉炭が第一位であつて一車二十八噸繼めて買入れれば噸當り八圓七十二錢で京城に着く 京畿道内局線各驛では大体之れと大差なき價格で買入れ得るであらうからどうせ燃料を買入れる家庭では無煙粉炭の利用を先づ考ふべきであると思ふ 昨年驪州で試験したかこれは鐵道以外の運賃が高くかかり成功しなかつたが今年は局線驛所在地たる長湍で試験をしたから其の成績を紹介したい

森林組合聯合會と長湍郡森林組合とで幹旋したのは二貨車五十六噸でこの噸當り九圓四十八錢（若干の牛車賃を加えて）これに粘土一割を加えて角型練炭（型は聯合會より提供）を製造したから出來上り練炭一噸代金は粉炭代八圓五十三錢粘土代及雜費二十二錢製造費二圓十錢合計十圓八十五錢であるこれを京城の市價に見るに粘土入り練炭一噸二十圓五十錢であるけれども市價の一噸は正味重量の一噸にあらずして千二百個を一噸とする商慣習で重量から見ると一噸の八分五厘見當と云ふことであるから京城市價の正味一噸は約二十四圓で之を長湍の實蹟十圓八十五錢に比較すると長湍



の手製練炭は非常に廉價と云はねばならぬ

長湍の手製練炭は一噸出來上り十圓八十五錢であるから一貫匁當り四錢一厘にしか當らぬ若し粉炭のみを買つて支那人式で手製團子を作ることになれば原料代だけで一貫匁三錢二厘にしかならぬ而も火力は薪に比べて非常に強く同じ一貫匁でも火力が違ふから溫突燃料としての無煙粉炭は安いものであると云はねばならぬ薪を右の價格よりも安く買ふことの出來ない鐵道沿線地では大に考ふべきことであつて差し當り京畿道内では開城、長湍、汶山、永登浦（素砂以西は仁川の杓穀で充分であらう）安養、水原、西井里、烏山、餅店、議政府等は識者の一考を願ひたい地方である又安城の如き大きい都邑では多少鐵道關係が面倒であるが之又考慮の餘地があらう此等の地方の燃料購入消費階級の爲め粉炭共同購入の便を開きたいものである

無煙粉炭を溫突燃料として使用するに際し注意すべきことは

- 一、焚き口に**ロストル**を裝置し**ロストル**の面を狭くし兩側を急斜とし卽ち大より拳大に割つた練炭が周圍にくずれ落ちぬやうすること
- 二、焚き付けとして最初相當の薪を用ふること



等が肝要で其の他別に面倒なことはない長湍に於ける本秋の使用成績を聞くと初め使ひ慣れぬ内は兎角の評があつたけれども今までは引張り合ひで實は最初一車二十八噸試製して更に又一車追加したやうな状態である使用の際出来る粉や燃え残りの粉は水を加えてこね直せば又立派な燃料になるから聊かの不經濟もないのである兎に角今迄用ひ慣れぬ燃料であるから最初災き方を少し注意して研究することが必要である



昭和六年

177

朝鮮總督府  
設立に就いて

賀田直治

335.4

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 230 1 2 3 4 5 6 7 8 9 240 1 2 3 4 5 6 7 8 9 250 1



作  
多  
人

3354

朝鮮農事信託機關設立就了



朝鮮農事信託機關設立ニ對スル主張（要旨）  
朝鮮農事信託株式會社設立別紙事項田ニ依リ朝  
鮮產業上ノ必須ノ重要事項タルハ勿論朝鮮統治  
上ノ要急経緯ナリトモ祇考更ニ内地財界ニ交渉シ  
有スルコトモ頗ル甚大ナリト認メラレ別紙計畫案ト虽  
モ我等同志ニ於テ相應ニ研究スル所アリ更ニ是迄  
可ナリニ多ク内鮮各方面ノ人々ニ接觸シテノ意見ヲ  
輯合シテ作成シタル次第ナルヲ以テ幸ニ參考ニ供スル  
ヲ得商量修整官民共同ノ力ニ依リ之ガ成立ヲ見  
ルニ至ラントテ庶幾スル次第ナリ



朝鮮農事信託機關計画に對する

我等同志の運動経過及希望要項

(一) 朝鮮に農事信託機關の入り用ありと云ふことは大正十一年朝鮮産業調査委員會に於て暗示を與へられ、而かも朝鮮勸農株式會社、即ち明治四十年當時韓國統監伊藤公の御勸誘に應じて設立せしと云ふ一種の農事信託機關に關係するに至りてから一層にこの考を深められ、實行の便宜上既設のこの歴史ある當會社を土台として發達を講ずることを得策と認め、昭和二年八月には朝鮮勸農信託株式會社と改称し、更に同會社を増資改定するの案を立て、非公式に總督府主腦部にも諒解を求め、且は内地の資本、技能疏通の豫定の目的に順ひ、内地の先輩信託系統機關の人々、其他朝鮮重視の人々の理解を得ることに心懸け、當初の内は單身徐ろに其種子を播き付くることに努めたのである。

(二) 昭和四年十月山口大兵衛、藤川利三郎、東條正平、浅井佐一郎、賀田直治五人の間に既設朝鮮勸農信託株式會社を資本金參百萬圓の會社に増資改定するの計画を樹て、更に東京、大阪方面に鈴木重臣、井上岡、其他数氏の賛同を得、昭和五年七月より徐ろに株式募集に着手することゝあつた。

(三) 然るに財界の收斂は計画後俄然極度に急変し、我等の趣旨には各方面均しく好意の賛同を表せられ、新株募集の事必ずしも容易なりざる形勢に面し、去りとして無理の勧誘は此際決して爲さざることゝあし、



且は社業の將來に鑑み、中心株主を先決するを所要と認め、目下專ら此方面に力を注ぎつゝありたる次第である。

(四) 基本制度には引續き重きを置き、成るべく廣く信託精神を朝鮮産業事情の宣傳に努め、且は昨年来農家經濟事情の激変に應ずる爲め、断然當初計画の増資改進黨を變改するを妥當と認め、更に有力有能なる資本家或ハ高田の朝鮮農事情信託株式會社を新設す所の趣旨及目標見に據りたる一計画案を作成した。

(五) 今や朝鮮信託法規の制定を見、益々以て有爲有能なる信託機關實現の急務を告ぐるに至り、以て際一局部よりこの計画を進めんよりは、断然官民合同の創立方針に據り、一層適切有力に目的を達するに至らんことを希望すべきであると信ずる。

聊か我等同志の復興を期し運動經過を畧叙し、併せて現下の位置及希望を以て披瀝し、以て今後に於ける朝鮮信託機關創設計画の一参考と供せんことを期する次第である。

昭和六年八月

同志代表

賀田直治

敬白



朝鮮農事信託株式會社創立計畫ニ就テ



# 朝鮮農事信託株式會社創立計畫ニ就テ

一 朝鮮ニ於テ人民ノ最主要財産ニシテ而モ益口改良緊連  
ニ必要トスル耕地其他各種ノ不動産其價格ニ於テ數拾億圓  
ニモ達スル大財物ニ對シ之ガ管理經營モ取引ニ任ズベキ一  
適當ナル信託會社ノ存セザルハ實ニ朝鮮産業界ノ一大  
欠陥ナリト謂ハルベキナス

之ニ對シ殖銀並ニ東拓ハ存在スルモ更ニ農事ノ指導、轉  
旋並ニ土地ノ經營、委託者ノ取引等ノ事ニ關シ有力ナル農事  
信託會社ノ出現ヲ待テ居ルニトハ明カナル事實ニシテ現下ニ於  
ケル四圍ノ情勢ニ照シテ特ニ多ク之ガ必要ヲ痛感セザル能ハズ  
要スルニ殖銀、東拓、農信ト三者相提携協調シテ初メ其  
機能ヲ十分ニ實行シ得ルニ至ルベキニト認ム

二 日本内地ニ於テ大正十二年信託法規制定以來成立シタル信託  
會社實ニ三千七社、資本金三億圓、拂込資本金九千萬圓、  
信託總財産拾四億圓ニ達スル規模ナルニ比シ、朝鮮ニ於テ  
各地散布ノ小信託會社、極メテ微々タル現状ニ過ギザルハ到  
底之ガ機能ヲ發揮スル所以ニ非ズ

三 今般朝鮮信託法規ノ制定ヲ機トシ是非共有カナル  
信託會社ノ改造又ハ創立ヲ見ザルベキナズ、而モ其際内鮮  
ノ間ニ立ケ内地ノ資金及技能ヲ朝鮮ニ誘導、疏通且消化シ  
得ル有カナル信託會社ノ成立ハ極メテ切要ニシテ緊急ノ事業ナルベシ  
以上ニ對シ朝鮮ノ最大財産ニシテ而モ之ガ改良並ニ取引等ニ大改善  
ヲ肝要トスル不動産ヲ主目的トシ一般信託業務ヲモ加ヘ、資本金  
貳千萬圓程度ノ農事信託會社ヲ創設スルニトハ極メテ適  
切ナル計畫ニシテ組織方針次第、其營業ノ順調有利ニ發達シ  
得ルハ勿論、國家社會ノ爲メニ貢獻スルニト極メテ大ナルベシ



四、今日ノ財界ニ於テ一會社ノ新設ノ如キ素ヨリ容易ナラザル業  
ト想望セラル、モ一日モ緩フスベカラザル事業ニ屬シ而カモ國家  
産業政策上ヨリモ缺クベカラザル重要經濟事項ニ該當スベシ、  
官民共ニ切望期待スル事業ナルヲ以テ之ガ創立方針ト、其努力  
次第必ズシモ成立ノ望ナキニ非ザルベシ、信託法規制定ノ以機  
會ニ可成、適切有切ニ之ガ創立ヲ計畫着手スベキノ要々急事  
業ナリト認ム

(昭和六年六月九日朝鮮信託業令公布)



(總論) 朝鮮農事信託株式會社設立の關シ

政府ニ懇請スルノ必要ト認ムル事項

朝鮮農事信託株式會社ノ設立ニ關シ株式ノ引  
受及將來ノ運用資金導入上内地ニ於テ賛成者ノ  
多クヲ求ムルコトヲ必要トスバヤニ於テ内地ノ財界並ニ財  
人心理ニ照ラシ熟考スルニ單ニ別記ノ收支豫算書位  
ニテハ到底財界ノ人氣ヲ集結シテ彈力的有爲ニ組織  
運用スル能ハザルモノト思料セラル仍テ當會社ノ設立ニ  
對シテハ須ラリ國策上ノ方針ニ基キ政府ニ於テ特  
典ヲ與ヘ之ヲ根據ニ官民協力克ク其目的ヲ達成スルニ至  
ラントコトヲ庶幾スル次第ナリ

即チ

一、當分ノ間配當ハ分ニ達スルマデハ補助金ヲ與

ヘラルコト

ニ右急ニ不能ノ場合ハ朝鮮總督府ニ於テ株式ノ  
一部ヲ引受ケ併セテ社債又發行其他當社ニ充  
テ諸便宜ヲ提供セラルコト

以上



朝鮮農事信託株式會社

設立趣意書

設立目論見書

營業收支豫算書

定

款



# 朝鮮農事信託株式會社設立趣意書

現代の複雑なる經濟組織に於て財産の保護、管理、運用並に處分と云ふ事は容易の事ではなく、其必要上から生れたのが信託會社で、其來に於て發生、發展し、日本内地に於ては大正十二年信託法及信託業法が實施せられて信託會社が急激なる發達を致し、朝鮮に於ても産業及民度の實際に照らし最もこの方法の適切、必要あるを認むるに至り、茲に信託法規の發布を見ることが、ありました。この場合、本法は制定の趣旨に鑑み、又社會の必要、要求に應じて茲に朝鮮農事信託株式會社の設立を計画すること、致しました。

抑も當會社は信託法規に準據し、金銭、有價証券、不動産等の管理、運用若くは處分に對し、誠實に

業務を行ふのでありますが、朝鮮に於ては産業の大宗は農事で、民間財産の第一は田畑でありまして、農耕地としては水田は百六十萬町歩、畑は百九十五萬町歩、合計四百五十五萬町歩、其大きさは内地耕地面積の七割より達し、地價は現在の最低時でも貳拾餘億圓を推算し、農産物も年産拾數億圓に達して居る次第で、之に山林は千六百餘萬町歩及市街空地其他を加へれば少くとも參拾億圓と推算し得るものがあります。

然るに現在朝鮮の金融機關は是等不動産を担保として貸出せる概數は大体參億圓位だと推算せられ、即ち不動産價格の約一割位に過ぎないのであります。是は即ち国内内地約二割、米國約四割、下村約五割の金融程度と比較し、朝鮮の未だ現在尙極めて低位にあること



は明かして、而かも朝鮮の農地は今後益々改良発展の時代に入るべき所謂成長時代とも申すべく、之に要する資金を事情が将来益々多量と考へらるゝのであります。尤も朝鮮人同士の間にはこの外にも高利の貸借が澤山に行はれ、一般に非常に悩んで居るは實情であるので、是等整理救済の爲にも公私の合理的融通改革を要する事は頗る緊要である義務であると認めらるゝのであります。例へば朝鮮に於ては土地の價值は現在は勿論、将来は益々好望のものと認め、これを得べく、この得たる資金に依りて改良し且つ四圍の交通運輸状態等の發達に依り向上し得る農場の現在より二三倍の價值としあり得ることは何人も豫想出来るのであります。仮に其二三倍とあらうたとしても、尚内地の現地價に比し半額にも達しないのであるから、総じて将来に於ける朝鮮

不動産の担保力は益々向上増進を加ふるものと考え（らるゝ）、のであります。是等は金融と指導との方法單一を導るに従い益々其効果を進捗することか出来るのであります。

換言すれば之れからの改良事業は改良に要する資金と左時に、経営上の知識及技術の運用を緊要とするに至つたのであります。之れは即ち既述の金融機關外に信託會社の如き機關に於て農事智識及農事技術を豊富に有する人々を配し、金融と併せて其指導元に導引し當りせることを要する次第とあるのであります。この種改良に分配的事業は實に朝鮮に於ては充分ある材料と必要度を有して居る現状であるので、之を處理媒介する會社も亦内解双方に信用あり、連結ある有力會社を緊要とするものと信ぜらるゝのであります。而かも此種の事業は飽まで健全なる



發展を期圖すべく、経済的に確實なる成績を挙げやうとするには會社創立早は直ちに澤山の業務を拡ぐるより、漸進的に擴張すべき性質であると思われず。従つて當會社の収益を舉ぐる上に於て先づ最要は一般の信託會社の業務に當り、漸次其大目的たる朝鮮の農林地並に不動産一切の信託的諸業務を多分に採り入るべきものと考へます

以上に依り當會社が朝鮮第一の財産且最重要の農事土地に對し能く有力なる信託任務を尽すを得ば是ぞ即ち朝鮮を富強とし人民生活を幸福にするこゝとあり。會社も亦相當の營業收益を舉ぐるを得べく、換言すればこの業務に依り以て内鮮民族共存共栄の實を挙げ、併せて國家の産業政策にも貢獻する所以であると信ぜらるゝのであります。

以上の趣旨に依り當會社設立を計画する次第でありますから宜しく内鮮各方面の熱誠ある賛成を仰ぎ、有力且健全員を設立運用するに至らんことを庶幾する次第であります

昭和六年 月

發起人



設立目録見五  
 以支那資本に  
 高橋社が有力  
 二設せしつて  
 三設せしつて  
 四設せしつて  
 五設せしつて  
 六設せしつて  
 七設せしつて  
 八設せしつて  
 九設せしつて  
 十設せしつて

# 設立目録見書

朝鮮農事信託株式會社ハ資本本金貳千萬圓(四拾萬株)トシ第一回拂込ハ四分一即チ金五百萬圓トス而シテ最初ノ三箇年間ヲ第一期トシ第二回拂込ハ範圍内ニ於テ左記ノ業務ヲ實行シ健全ナル根柢ト體験ノ下ニ第二期以後ニハ更ニ多ク内鮮間ノ資金並ニ産業連鎖及媒介ニ任ジ便益奉仕ノ任ヲ盡シ併セテ業務ノ發展並ニ社運ノ隆盛ヲ圖ラントス左ニ第一期ニ於ケル目録見書ノ概要ヲ述ブヘシ

## 一 拂込資本本金

拂込次員本金ハ國債、地方債、及確實ナル社債類ニ株資シ並ニ有價証券及不動産ヲ担保トシテ貸付金ニ放資シ成ルベリ、安全確實ニ運用スルトハ時ニテ準備金トシテ充テタルコトナキヲ期ス、不動産貸付ノ如キハ東拓、殖銀、左様ノ利率

## ニ 準ハルモトス

以上ヲ通算シテ拂込資本本金ノ收益ハ初年度利廻年七分トシ第一年度ニ至リテ漸次有利ニ運用スルノ豫定ナリ

## ニ 金錢信託

内地ニ在リテハ大正十二年信託法規制定後勃興シタル信託會社ノ金錢信託ハ社多キハ七千萬圓ニモ及ビ現在ニテハ内地信託會社金錢信託總高拾億七千萬圓ノ多キニ達スル状勢ナルモ朝鮮ニ在リテハ時勢ノ變遷及朝鮮ノ實情ニ鑑ミ當社期末金錢信託殘高ヲ參百萬圓トシ其殘高ノ約七分割ニ相當スル額ヲ期間中ノ平均殘高ト見積リ其受益者ニ與フル運用收益率ハ大体年七分見當トシ信託料ハ成ルベク低率ニ定メ初年度一分前後トシ總收益率ハ年八分ノ豫想ヲ以テ運用セントス



### 三、信託有價証券

内地ニテハ大正十二年信託法規制足後設立セシ信託會社、初年度末信託有價証券ハ多キハ社ニテ七百萬圓ニモ及ビ現在ニテハ信託有價証券總高壹億九千六百萬圓ニ達スル状態ナルモ朝鮮ニ在リテハ其實情ヲ参酌シテ初年度残高五拾萬圓ト見込ニ其大割ニ相當スル額ヲ期間中ニ於ケル平均残高ト見積リ之ヲ安全有利ニ運用シ委託者ニ對シ年率五厘見當ノ収益ヲ與ヘ尚年率五厘程度、信託料ヲ收得セントス

### 四、市街地不動産信託

市街地不動産ノ管理ハ朝鮮ニ居住スル者ノ所有ノ外、内地居住者ニテ朝鮮ニ不動産ヲ所有スル人數カズ是等ノ人ノ爲便、信託ヲ受クルモノニテ年所得高ニ對シ平均年百分ハノ

### 信託料ヲ收得セントス

### 五、農耕地不動産信託

鮮内各地方ニ農耕地ヲ所有シテカウ直接之ガ管理若クハ處分等ニ不便或ハ煩累ヲ感スル人ニ對シ其信託ヲ引受ケ之ガ改良及處分ヲ代行シ所有者ト小作人トノ間ニ適シ公平円滑ニ小作料ノ收納・關スル業務ヲ掌リ係セテ時代の適當ナル經營方法ヲ施シテ農耕地ノ價額及収益ヲ増大スルコトハ最も緊要ナルト共ニ所謂共有共榮ノ實質ヲ達スル所以ニテ將來其業務ノ増加繁盛スルコト明ナリ仍テ當社ハ委託管理ト夫ニ之ガ改良經營並ニ施設管理ヲ引受ケントス農耕地ノ見積所得ハ朝鮮ノ實際例ナル其價額ノ割トシ信託料ハ其所得全高ニ對シ百分六ヲ徴收セントス

### 六、林野不動産信託



朝鮮國キセ割ツ占ムル林野中至花經營ノ必要ナル山林解サナラ  
スト虽モ是レガ信託ヲ受クルニ付テハ交通ノ便否、遠近等考慮、  
餘地アルヲ以テ當初ハ單ニ少額ノ見積リトセリ

#### 七、不動産ノ賣買仲介

朝鮮ノ不動産ハ既述ノ如ク朝鮮最重要ノ財物ニテ數千億  
円ノ價格ヲ有シ之ガ取引ノ頻繁ナルベキハ自然ノ現象ナルニ之ガ  
賣買取引ヲ媒介スル機關ハ現在ノ腐極ナラ不備ニテ一解ノ煩  
苦痛ニ感ズル事項トス從テ茲ニ當社ノ如キ有力ニテ信用アル  
機關ハ仲介者トテ合理ナル取引轉換ニ任スル場合ハ其業務  
ハ實ニ多額トナリ其結果ハ不動産信託若クハ農業金融、  
農事改良ノ業務ニ對シテモ關係シテ多大ノ好果ヲ得末スルニ  
至ルベシ然レモ創業當初二期ノ當初ハ單ニ少額ヲ豫定シ漸進  
的健實ナル發展ヲ期セントス

#### 八、不動産ノ賣買

朝鮮ノ農耕地ハ現在頗ル格別ナルが是等ノ格別ノ不動産ヲ  
法規ノ範圍内ニ於テ之ヲ買収シテ轉賣シ又ハ暫時幾分ノ改良  
施設ヲ加ヘ之ヲ有利ニ轉賣スルガ如キハ内地ニ於テ到底企及シ得ザル  
頗ル其左ニシテ收益アル資金運用方法ナリ併シ當初ハ當社ニ  
於テ固定的ノ不動産ヲ所有經營スルコトヲ見后セ單ニ流動  
的轉賣ノモノニ留メトス

#### 九、有價証券ノ發行及引受

朝鮮ニテハ比較的其業務ヲカラザルベキモ信用アル信託會社ト  
シテ相當ノ社債ヲ發行及引受ヲ爲シ得ル見込ナリ

#### 十、有價証券ノ賣買仲介

朝鮮ニテハ有價証券ノ賣買ニハ相當不便ヲ感じ居ル者尠  
カラズ其手数料ノ如キハ極メテ低率トシ取極高ニ對シ高分ノ五



ヲ徴収セルトス

以上各項目ノ外各種代理事務其他ノ附随業務中ヨリ  
少ノ利益ヲ收得シ得ルモノモ當初ハ計算ノ母左確算ヲ期  
シ是等ハ第一期目論見ニ於テ計上ヲ見合セタリ



# 營業收支豫算書

一 初年度一部

滿一箇年末ニ於ケル營業成績豫想尤ノ如シ

一 拂込資本金	五百萬円
二 金銭信託引受残高	参百萬円
三 信託有價証券残高	五拾萬円
四 市街地不動産信託残高	老百萬円
五 農耕地不動産信託残高	参百萬円
六 林野不動産信託残高	貳拾萬円
七 不動産賣買仲介高	百五拾萬円
八 不動産賣買高	五拾萬円
九 有價証券発行及引受残高	五拾萬円
十 有價証券賣買仲介高	五拾萬円

## 収支計算

一 拂込資本金運用依収益	参拾五萬円
(拂込金額ニ對シ年七分)	
二 金銭信託財産運用依収益	貳萬円
(年所得金五萬円ニ對シ年二分)	
三 信託有價証券運用依収益	壹千五百円
(年所得金五萬円ニ對シ年二分)	
四 市街地不動産信託料	四千円
(年所得金五萬円ニ對シ年二分)	
五 農耕地不動産信託料	壹萬八千円
(年所得金五萬円ニ對シ年二分)	
六 林野不動産信託料	五千円
(年所得金五萬円ニ對シ年二分)	



七、不動產賣買仲介手数料 (取扱高・對レ千々千五)		貳萬貳千五百円
八、不動產賣買益 (賣買高・對レ百分五)		貳萬五千円
九、有價証券發行引受手数料 (取扱高・對レ千々百五)		参千五百円
十、有價証券賣買仲介手数料 (取扱高・對レ萬々五)		貳百五拾円
合計金		四拾四萬九千七百五拾円
支出		
一、人件費		七萬円
二、旅費、廣告、通信費		参萬円
三、補給		七萬五千円
四、事務所賃借料		六千円
五、營業用什器銷却		壹萬四
六、雜費		貳萬四
合計金		拾五萬壹千円
差引純益金		貳拾九萬八千七百五拾円
利益金分配案		
一、法定積立金		参萬円
二、別運積立金		貳萬四
三、役員賞與金		壹萬五千円
四、後期繰越金		貳拾参萬参千七百五拾円
合計金		貳拾九萬八千七百五拾円



一次年度ノ部

満二箇年末、於ケル營業成績豫想尤、如シ

一、拂込資本金	五百萬圓
二、金錢信託引受残高	五百萬圓
三、信託有價証券残高	八拾萬圓
四、市街地不動産信託残高	百五拾萬圓
五、農耕地不動産信託残高	五百萬圓
六、林野不動産信託残高	五拾萬圓
七、不動産賣買仲介高	貳百五拾萬圓
八、不動産賣買高	壹百萬圓
九、有價証券發行及引受取扱高	八拾萬圓
十、有價証券賣買仲介高	八拾萬圓

収支計算

収入

一、拂込資本金運用ニ依ル収益 (拂込資本金額ニ對シ年七分重)	叁拾五萬五千圓
二、金錢信託財產運用ニ依ル収益 (年度末残高並前高内、對前期中末均残高、 對前期末高内、見積、其運用收益率年々分)	叁萬五千圓
三、信託有價証券運用ニ依ル収益 (年度末残高、對前期中末均残高、 對前期末高内、見積、其運用收益率年々分)	貳千五百圓
四、市街地不動産信託料 (年所得金七萬五千圓、不動産信託残高對前 期中末均残高、見積、其料率年々分)	六千圓
五、農耕地不動産信託料 (年所得金五拾萬圓、不動産信託残高對前 期中末均残高、見積、其料率年々分)	叁萬圓
六、林野不動産信託料 (年所得金一萬五千圓、不動産信託残高對前 期中末均残高、見積、其料率年々分)	壹萬貳千五百圓



(不動産使託現高千分五)			
七、不動産賣買仲介手数料			参考七千五百円
(取扱高千分十五)			
八、不動産賣買益		五	萬 円
(売買高千分五)			
九、有價証券発行及引渡手数料		五十六	百 円
(取扱高千分七)			
十、有價証券賣買仲介手数料		四	百 円
(取扱高千分五)			
合計金		五拾参考萬四千五百円	
支 出			
一、人 件 費		八	萬 円
二、旅費、廣告、通信費		四	萬 円
三、諸 経 費		貳	萬 円
四、事務所賃借料		六	千 円
五、營業用什器銷却		壹	萬 円
六、雜 費		貳	萬五千円
合計金		拾八萬七千円	
差引純益金		参考五萬参考十五百円	
利益金分配案			
一、法定積立金		参	萬六千円
二、別途積立金		貳	萬 円
三、役員賞與金		貳	萬 円
四、配 當 金	(年五分)	貳拾五	萬 円
五、後期繰越金		貳	萬七千五百円
合計金		参考五萬参考十五百円	



一、三年度ノ部

満三箇年末ニ於ケル營業成績豫想凡ノ如シ

一、拂込 資本金	五百萬圓
二、金錢信託引度残高	八百萬圓
三、信託有價証券残高	壹百萬圓
四、市街地不動産信託残高	貳百萬圓
五、農耕地不動産信託残高	八百萬圓
六、林野不動産信託残高	壹百萬圓
七、不動産賣買仲介高	五百萬圓
八、不動産賣買 高	百五十萬圓
九、有價証券發行及引度取扱高	壹百萬圓
十、有價証券賣買仲介高	壹百萬圓

収 支 計 算

収 入

一、拂込資本金運用ニ依ル収益 (拂込資本金額ニ對シテ年々七分五厘)	參拾七萬五千圓
二、金錢信託財産運用ニ依ル収益 (年産利息高ノ百圓四三對ニ期間中平均利息高ノ六百萬圓ト見算 在在年々一分)	六萬圓
三、信託有價証券運用ニ依ル収益 (年産利息高ノ百圓四三對ニ期間中平均利息高ノ七百萬圓ト見算 其運用收益年々五厘)	參千五百圓
四、市街地不動産信託料 (年所得金ノ百圓四三對ニ期間中平均利息高ノ七百萬圓ト見算 所得トハ三對六ノ百圓ノ八)	八千圓
五、農耕地不動産信託料 (年所得金ノ百圓四三對ニ期間中平均利息高ノ七百萬圓ト見算 所得トハ三對六ノ百圓ノ六)	四萬八千圓
六、林野不動産信託料	貳萬五千圓



(不動産信託残高、千分、五)			
七、不動産売買仲介手数料			七萬五千円
(取扱高ニ對シ、千分、十五)			
八、不動産賃貸収入利益			七萬五千円
(賃貸買高ニ對シ、千分、五)			
九、有價証券及び銀行及び引受手数料		七	千円
(取扱高ニ對シ、千分、七)			
十、有價証券買賣仲介手数料		五	百円
(取扱高ニ對シ、千分、一、五)			
合計金	六拾七萬七千円		
支出			
一人件費		九	萬円
一、旅費、廣告、通信費		四	萬五千円
二、諸税		貳	萬五千円
四、事務所賃借料		六	千円
五、管業用什器銷却		壹	萬円
六、雜費		参	萬円
合計金	貳拾萬六千円		
引当金	四拾七萬壹千円		
利益金分配案			
一、法定積立金	四萬八千円		
二、別途積立金	貳萬円		
三、役員賞與金	貳萬円		
四、配當金	参拾五萬四(千、七、分)		
五、後期繰越金	参萬参千円		
合計金	四拾七萬壹千円		



朝鮮農事信託株式會社定款

第一章 總則

第一條 本會社ハ朝鮮農事信託株式會社ト稱ス

第二條 本會社ハたノ業務ヲ営ムシテ目的トス

第一ニ掲グル財産信託業務

一 金 錢

二 有價証券

三 金 錢 債 權

四 土地及其定着物

五 地上權及土地、賃借權

第二ニ掲グル業務ヲ併管

一 保 費 預 り

二 債 務 ノ 保 証

三 不動産賣買、媒介ヲ金 錢 若クハ不動産、貸

借、媒介

四 國債、地方債、社債若クハ株式、募集、其利金

、受入ヲ其元利金若クハ配當金、支拂、取扱

五 會計、帳本

六 他ノ事項ニ關スル代理事務

ハ財産取得、管理、處分ヲ貸借

口財産、整理又ハ清算

ハ債權ノ取立

二 債 務 ノ 履 行

ホ 保 險

第三條 以上各項ニ附帶關聯スル業務

第三條 本會社本店ヲ朝鮮京城ニ置キ必要ニ應ジ各地



ニ出張所ヲ設ケ

第四條 本會社ノ存在期間ハ設立登記ノ日より滿五十年トス  
第五條 本會社ノ公告ハ本社所在地所轄地方法院ノ登記公  
告ヲ爲シ新聞に掲載ス

## 第二章 資本金及株式

第六條 本會社ノ資本金ハ金貳千萬円トシ之ヲ四十萬株  
ニ分ケ一株ノ金額ヲ五拾円トス

第七條 本會社ノ株式ハ記名式トシ一株式五株券、拾株式  
五拾株式、百株式ノ五種トス

第八條 株式ノ拂込期日及金額ハ取締役會ノ決議ヲ以テ  
之ヲ定ム

第九條 株式ノ拂込ヲ怠リタル株主ハ拂込期間滿了ノ翌日ヨ  
リ拂込完済ノ日迄金百円ニ付一日金四銭ノ割合ヨリテ

延滞利子及延滞ヨリ生スル總テノ損害ヲ賠償スベシ

第十條 株式ノ譲渡ニ依リ名義ノ書換ヲ爲サントスル場合ハ  
本會社所定ノ書式ニ依リ双方記名調印シ其株式ヲ  
取ハ差出スベシ

相續遺贈、又ハ法律ノ結果ニ依リ株式取得ノ名義書  
換ヲ爲サントスル場合ハ取得原因ヲ証明スベキ書類ヲ  
添付シ前項ノ手續ヲ爲スベシ

株主ガ其氏名ヲ變更シ又ハ株式ノ法定代理人ノ異動  
セシ場合ハ於テハ前二項ノ規定ヲ準用ス

第十一條 株式ノ喪失ノ爲メ新株式ノ交付ヲ受ケントスル場  
合ハ本會社所定ノ書式ニ依リ保証人ニ名以上ノ連署ヲ  
以テ其請求ヲ爲スベシ

前項ノ請求アリタルトキハ本會社ハ請求者ノ費用ヲ以テ



其旨ヲ公告シ其最終公告一日ヨリ三十日ノ経過シ異議ノ申立ナキトキハ新株券ヲ公告シ旧株券ヲ無効トス但喪失株券ニ因リ生ジタル被害ハ株主ノ負担トス

株券ノ毀損ヲハ種類変更更ノ爲メ新株券ノ交付ヲ受ケントスルトキハ本會社所定ノ書式ニ依リ其旧株券ヲ添ヘ之ヲ返出スベシ

本條再交付手数料ハ株券一枚ニ付金貳拾圓トス

第十三條 株式ノ名義書換ハ毎決算期ノ終リノ翌日より定時株主總會終結ノ日迄之ヲ停止ス

臨時株主總會招集ノ通知ヲ發シタル日より其總會終結ノ日迄亦同シ

### 第三章 株主總會

第十四條 定時總會ハ毎決算期後六十日以内ニ之ヲ開キ臨時總會ハ商法ノ規定ニ依リ之ヲ招集ス

第十五條 總會ハ豫メ通知シタル目的及事項外ニ涉ルコトヲ得ス

第十六條 株主其議決權ノ行使ヲ他ノ出席株主ニ委任スルコトヲ得

但し其委任狀ハ本會社ニ提出スベシ

第十七條 總會ノ決議ハ法律ノ別段ノ規定アル場合ノ外出席株主ノ議決權ノ過半数ヲ以テ之ヲ爲ス可否同数ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第十八條 總會ノ決議事項ハ之ヲ記録シ議長監督役及出席株主三名以上連署シ之ヲ保存ス

第十九條 總會ノ議長ハ會議ヲ延期シテ其場所ヲ變更スルコトヲ得



但し延期會議、議事、前會議ニ於テ議リセザリシ  
事項ノ外ニ涉ルコトヲ得ス

#### 第四章 役員

第十九條 本會社ハ取締役一名以内、監査役一名以内ヲ  
置キ、本會社株式貳百株以上ヲ所有スル株主中ヨリ株主総  
會ニ於テ之ヲ選任ス

得票數多數ナルトキハ抽籤ヲシテ之ヲ決ス

第二十條 取締役ノ任期ハ三年、監査役ノ任期ハ二年トス  
但補缺選舉ニ依リ就任シタル取締役子ハ監査役ノ任期  
ハ前任者ノ残任期間トス

前項ノ任期ハ任期中、最終ノ決算期ニ關スル定時総  
會終結前ニ滿リスルトキハ其定時總會ノ終結ニ至ル  
迄之ヲ伸長ス、役員中缺員ヲ生シタルトキハ補缺選舉ヲ

行フス但し法定員數ヲ缺カス且其業務ニ著シキシト  
認ムルトキハ次期ノ總會近選舉ヲ延期スルコトヲ得

第二十一條 取締役ハ取締役會ヲ組織シ、本會社ノ業務  
方針、事業計畫其他重要ナル事項ハ取締役會、  
決議ニ依リ決ス、取締役ハ取締役會、決議ヲ以テ社長  
一名、事務取締役一名ヲ互選シ、事務ヲ專任セシムルコトヲ  
得

取締役會ハ決議ハ出席取締役ノ過半數ヲ以テ之ヲ  
決ス

監査役ハ取締役會ニ出席シ意見ヲ述ブルコトヲ得  
取締役會ニ於テ必要ト認ムルトキハ其決議ヲ以テ相俟  
役員顧問ヲ囑託スルコトヲ得

取締役ハ其在任中所有ノ株式貳百株ヲ監査役ニ供



託スベシ

取締役及監査役、報酬ハ株主総會ノ決議ニ依リ  
之ヲ定ム

### 第五章 計算

第三十條 本會社ノ營業年度ハ毎年六月一日ヨリ五月  
末日迄トシ、五月ヨリ翌年五月三十一日迄ト二期ニ分リ

第三十一條 每期ノ總會益金ヨリ、總損金ヲ控除シ、  
一、純益金トシ、たゞり、  
二、別途積立金  
三、役員賞與金  
四、株主配當金  
五、後期繰越金

一、法定積立金 百分ノ十以上

二、別途積立金 若干

三、役員賞與金 百分ノ十以内

四、株主配當金 若干

五、後期繰越金 若干

第三十二條 株主配當金ハ、毎營業年度毎期末日現在  
ノ株主ニ之ヲ配當ス

### 第六章 附則

第三十三條 本會社ノ員租スベキ、設立費用ハ金 円トス

第三十四條 本會社ノ發起人氏名、住所ヲ如シ







朝鮮勸農信託株式會社概要

(昭和五年度現在)



### 朝鮮勸農信託株式會社概要

當社は日韓併合以前時の統監伊藤公の御勧誘に依り朝鮮農事開發及土地經營の一機關として、明治四十年七月八日設立を了し、本店を京城に置き資本金壹百萬圓、大韓勸農株式會社と称し、日韓双方の株主に依りて組織せられたのであります。伊藤公は常に朝鮮の爲至誠達識ある慮を費され、畢竟人民同志の協力と互助とを根本基調とし、農事經營改良の模範を作り、人民相互の經濟的接觸を密にし、信用を厚くするを切要ふりと認められ、勸業模範場を起し、(水原)内地人の模範農場を獎勵すると共に、



當初は南鮮地方を主とし是等の金融、経営、幹  
旋、及取引の機關として當社の設立を勧誘せら  
れた次第でありました即ち今よりすれば一の農事  
信託機關として設立を望まれたものと察せらるゝ  
のであります。

當社の初の頃は實に漢城の天地時に砲聲を聞  
きつ、算盤を執つた時代でありまして、實際其創  
立に於ては東洋拓殖株式會社よりも正に一年前であ  
つたのであります。當社は實に斯かる忽ち混沌の時  
代であつたから、業務も農事経営の外市街地、債  
若しくは不動産金融を常とし、時に桑苗又は樹  
苗の養成、販賣若しくは肥料、農蚕具の取扱等雜

多に附隨せらるゝ其當時市街地経営としては、聊  
か時機尚早の爲資金著しく固定し、加ふるに商業  
部の成績も樹賣代金の回收難の事情で整理改  
革の必要切ふるに至りて、當時朝鮮産業界  
と同しく統監府時代以来内地、台湾の外朝鮮  
にも事業を經營し居たる賀田金三郎氏に會社  
の全引受を求め（大正七年一月）其手より依り改革整  
理を断行せらるゝこととなり、公称資本金壹百萬圓、  
拂込金四拾萬圓の減資即ち貳拾五萬圓の公称資  
本且金額拂込済の内容整理の會社として引受  
け商業部を廢止し、農林業及京城市内の貸  
家経営のみを維持改善しつゝ、極度に節約を勵



行し、諸般の調査研究に努め追て時機を待ちて確實に展開する目的を立て、此間人件若しくは物件上の種々ある犠牲や苦心を拂ふこと少からざりし中、心株主たる賀田家及賀田組より出て出来る丈の便宜を提供するあり、能く維持経営して、昭和二年八月を以て朝鮮勸農信託株式會社と改称し、更に定款の一部改正に依り在来業務及財産経営の外、一般信託業務をも営むこととし、更に又前記二十餘年以來の歴史ある老舗と地盤とを土台として、時勢に順ふて有力なる資本及内容充實の信託會社と改造擴張の計画可能とするに至つた次第であります。要するに長き沿革より發し、會社資本は不相應

ある大規模性農林財産を有すること、並に刻下に適切なる金融其他の収益業務の運轉資金に乏しき等の缺欠あるも、一貫せる信託精神、経験、地盤、乃至内鮮の連絡を既有するに於て他の容易に模し難き根柢と強味とを有し、改造擴張成立の曉は農事信託會社として穩健着實相應する成績を挙げ、顯著なる發展を漸成し得るものと確信せらるゝのであります。

以上に依り更に参考の爲當社の概勢を摘要すれば次の通りであります。

一、沿革 明治四十年七月八日設立、大韓勸農株式會社と稱し、日韓併合と共に朝鮮勸農株式會社



ト改称シ、更ニ昭和二年八月二十九日ヲ以テ現在、社名  
朝鮮勸農信託株式會社ト改称

二、資本金 貳拾五萬圓 全額拂込済

三、株主及株数 拾七名 五千株

四、營業科目

1. 各種財産、信託引受
2. 不動産、賣買、貸借並ニ其仲介
3. 不動産、經營
4. 不動産、委託管理
5. 不動産及有價證券、担保貸付
6. 代理業務
7. 農林業、經營

八、以上各項ニ附帶關聯スル業務

五、本社 朝鮮京城府旭町二丁目十番地

六、出張所 東京市日本橋区本石町一丁目一番地

全 大阪市西区立賣堀北通五丁目百番地

七、重ナル所有財産

八、市街土地並ニ住宅

京城府旭町、大和町、龍山元町、漢江通等ニ土地

家屋ヲ所有シ確實ナル家賃收入ヲ有ス

2、高陽農場

京畿道高陽郡松浦面ニ在リ面積四百三十町步、  
一大集團農耕地ヲ形成シ漢江ニ沿ヒ京城ヨリ極メ  
テ近距離ニ在リ（全浦、鮮滿開拓會社農場、向



側水陸共ニ運輸ノ便ヲ占メテ地味肥沃ナルモ漢江出水ニ際シ往々浸水スルコトアリ幸ニ地理的關係ヨリ自然排水迅速ナリ、是迄ハ適切ナル改良施設ヲ見合セ居リシモ朝鮮總督府ノ土地改良制度モ確立シ補助規定モ制定セラレ施策上多大ノ便益ヲ得ルニ至リタルヲ以テ當社ニ於テモ先以テ當面的ニ該農場改良ノ事業計畫ヲ立テ河岸ニ燃料又ハ工藝用トシテ地方ニ需要饒多ナル茅草ヲ立テ「ポプラ」柳等ノ如キ河岸性樹木ヲ配シ其内側ノ安全地帯ヲ畑トシ、當ハ従来天水水田ナリシモ追テ小資本ヲ投ジ一部ニ築込ヲシ他ハ地下水利用ノ目的ヲ以テ井戸數ヶ所ヲ掘鑿シ動力機ヨリ

揚水灌概ヲ期セントス目下ノ所資金ノ都合上遺憾ナカラ以上ノ起工ヲ見合セ居ルモ大抵方法ニ從ヒ得ル成果ヲ有シ小資本ニテモ相當ノ成果ヲ擧ゲ得ベク逐次十分ナル企業ヲ進メ愈々竣工ノ曉ハ正ニ京城附近ニ於ケル合理的經營ノ一大良農場タルコトヲ得、生産モ頓ニ増加シ従テ土地ノ價值著シキ向上ヲナスミズルベシ

以上自營的改良法ノ外、組合的帳同事業ノ望モアリ遠カラズ面目ヲ革ムルニ至ルベキハ明瞭ニテ、當社決算ニ於テ僅カニ九萬圓台ノ土地財産價格ニ見積リ居ルモ現在ニテハ既ニ數割ノ上價ニ認メラレワ、アリ

然ルニ貧民救濟事業トシテ朝鮮總督府ノ手ニ漢江下流防水工事（三年計畫總工費六百四萬圓）實施



セラルバキニ依リ當農場ハ益々安全有利ヲ加フルニ  
至ルベシ

### 3. 永登浦農場

京畿道始興郡永登浦面ニ在リ大日本麥酒工場豫  
定地ニ隣接シ面積五萬餘坪一集團地ニシテ所  
謂工場地帯ノ中心ニ位ス目下ハ蔬菜栽培地トシテ小  
作経営中ナルモ更ニ豚鶏菜園的収益経営ノ望アリ  
追テ工場又ハ住宅敷地トシテ至ル可能性ヲ有ス

### 4. 天冠山造林地

全羅南道長興郡古邑面大徳面ニ跨リ面積千七  
百五拾町歩ノ國有林野受貸付造林地ニシテ交通運  
輸便利ノ位置ヲ占ム地味ハ南鮮林野ノ常トシテ肥

沃ト称スル能ハサルモ交通至便ニシテ既ニ天然性ノ松ヲ  
補フニ櫟、栗等ノ闊葉樹ヲ以テシ累々一期ノ事業  
ヲ了シタリ

總テ農業集約地方ノ林業ハ當農者ノ所屬事  
業トシテ益々有望ヲ加フルヲ以テ経営ノ方法如何ニテ  
ハ將來好箇ノ財産タリ得ベシ

### 八. 土地信託業務

現在信託ヲ受ケ居ル農場、山林、市街地ノ主ナルモノ次ノ  
如シ

#### 1. 古河農場

黃海道延白郡石山面、道村面、鳳北面ノ三面ニ跨リ  
一大集團地ニテ面積四百五拾町歩餘ヲ有シ二十年近



ク小宮家ニ於テ所有經營シ来リシモ一大盆地ニシテ従  
来排水悪シカリシ為豪雨ノ都度屢々水害ヲ蒙リシ  
カ先年来當社ニ於テ信託管理スルニ至リ約六十五馬  
力ノ原動機及ポンプヲ据付ケ且閘門ノ改善等排水  
施設実行中ニシテ一方國費ヲ以テ羅津浦川改修ヲ  
見ルニ至リ機械排水ト自然排水ノ改善ニヨリ本年度  
ヨリハ全々水害ヲ免除シ農事ノ改良ヲ施シ確實ニ  
增收ヲ期シ得ルニ至レリ

### ニ委託林野

所在地 咸鏡北道富寧郡觀海面  
面積 七百五拾叁町壹反歩

右林野ハ朝鮮皮革株式會社ニ於テ大正八年九月軍

寧工業備林トシテ造林ノ目的ニテ貸付ヲ受ケ轉ラ  
ナラカシワヲ主トシアカマツノ稚樹保育ニ意ヲ注  
ギ末立木地約五拾町歩ニ年々カラマツノ人工植栽  
ヲ行ヒ来リ當社ノ信託管理ニ移リテ今秋全部成功  
譲與ヲ受クルニ至リ引續キ林相ノ改良及林產物ノ  
採取ニ勉メントス

### ハ市街地

京城府外阿現里ノ大坂本山家所有土地及借地人管  
理ヲ委託サレ京城麻浦街道ニ沿ヒ面積六千二百四  
十二坪貸地件數三百三十六戸目下經營改善ヲ計画  
シテアリ

以上ノ如キ信託物ハ多數ニ委託ノ餘地アレドモ會社改造



以前「軍」以上、如ク内端ニ引受ケテ爲シワ、アル次第ナリ

第三十三期財産目録

(昭和五年六月三十日現在)

科目	摘要	金額
貸付金	証書拾貳通	六七、〇九六 <sup>四</sup> 六四五
農場勘定	耕牛、貸付穀物等	六一、〇六一二〇
山林	一、七四九町七七	三〇、〇三九七一〇
土地	貸一〇、六八三坪 畑八三、六九一坪 水田四九、七五八坪 雑六、六〇五坪	二四〇、〇一〇六八〇
建物	六一五坪七六	三一、四〇五二三〇
什器	四拾貳種	一、五七八二五〇
有價證券	土地改良株式一〇〇株	一、二五〇〇〇〇
仮拂金	拾四口	一二、三九〇五二〇
金銀		二二六五七一
計		三九〇、一〇三七二六



第二十三期貸借対照表

資産		負債	
科目	目	科目	目
貸付金	六七〇九六六四五	株	金
農場勘定	六、一〇六一二〇	積立金	二五〇、〇〇〇
山林	三〇、〇三九七一〇	別途積立金	八、六〇〇、〇〇〇
土地	二四〇、〇一〇六八〇	借入金	九〇、二九三六三〇
建物	三一、四〇五二三〇	仮受金	二、九三五〇四〇
什器	一、五七八二五〇	銀行勘定	三四七九四二〇
有価証券	一、二五〇、〇〇〇	前期繰越金	九、六四七三九六
仮拂金	一二、三九〇五二〇	当期純益金	一、八四八二四〇
金銀	二二六五七一		
計	三九〇、一〇三七二六	計	三九〇、一〇三七二六

株主姓名表

株数	氏名	株数	氏名
一〇九三	賀田以武	一二	上野定一
九二〇	賀田直治	一二	原田岩次郎
八〇〇	合資會社賀田組	一二	見島秀太郎
五〇〇	豊田正平	一二	竹下満藏
五〇〇	大島十郎	五	松永吉二郎
五〇〇	中川以良	二	石野新一
五〇〇	松本卯市	一	原田安一
八〇〇	國重政亮	一	村岡重吉
五〇	山本庸彦	計五、〇〇〇	拾七名



役員

専務取締役 社長 豊田 正平 (銀行出身、三十八年朝鮮在住、実業家)

取締役 賀田 直治 (林學士、内鮮實業家)

同 國重 政亮 (元社長、農業者)

同 大島 十郎 (工學士、朝鮮實業家)

監査役 賀田 以武 (早稲田科出身、実業家)

同 中川 以良 (農學士、朝鮮實業家)

職員

支配人・事務取扱 香積 輔雄

事務 (調査、設計) 古本 喜太郎

同 (庶務、會計) 金 世 稷

同 (同) 山縣 浩行

事務 (林野技術) 肱 黒 早苗

技術 (高陽農場) 松 原 元

同 (天冠山造林地) 木 下 久吉

外現場員及件介人トシテ多数、朝鮮人ヲ使用セリ

一、本社所在地以外、直営機関及連絡機関

一、朝鮮内

京畿道 高陽 神松浦面 高陽 農場

左 始興 郡永登浦面 永登浦 農場

全羅南道 長興 郡大徳面 天冠山 造林所

以上直営機関

京畿道 始興 郡永登浦面 合資會社 賀田組



全羅南道木浦府

左 靈岩郡靈岩面

全羅北道扶安郡上西面

黃海道延吉白郡石山面

咸鏡北道清津府

以上姉妹機關

二内地

東京市日本橋区本石町一丁目一番地

大阪市西区立賣堀北通五丁目百番地

東京市日本橋区本石町一丁目一番地

山口縣阿武郡秋町大字樽屋町

大阪市西区立賣堀北通五丁目百番地

賀田組土地取扱所

合資會社賀田組造林所

左 農場

右 河 農 場

合資會社賀田組出張所

當社出張所

全

合資會社賀田組

左 出張所

全

以上、外朝鮮全道各所ニ多年ヲ通ジテ多數ノ良好ナル連絡者ヲ取引者ヲ有ス



2

本町志不製



335.4

我邦産業振興の一方策として信託機關の  
充實、殊には農事信託機關の必要に就て



## 我邦産業振興の一方策として信託機關の充實 殊には農事信託機關の必要に就て

賀 田 直 治

我邦産業の不振今や其極に達し、之が振興即ち立直しに就ては種々の方策も考へらるゝのであるが、殊には財政並に事業と金融との協調宜しきを得て、産業界に横はる幾多の病弊を免除し、經濟合理の方法を適切に運用するを最緊要とし、正に國民一般の自省自奮を要望すべきの重大時機に直面し居るものと思ふ。隨て之が具體的方法に關しては政府並に社會の有識者率先して國民と共に一般的世相並に輿情にも照らし、熟慮編成以て普遍實行を期すべきものにして、實に刻下眼前の最急要事且つ國民の一大事であると思ふ。

予の見る所に依れば今日の産業行詰りは寧ろ我邦の物産上に於ける天惠薄と國民一般の負ふべき歐洲大戰好景氣時代馴致の放漫、贅澤、不整理等の責任にして且つは關東の大震災火災の惡影響の全國に波及するあり、剩さへ世界的不景氣の打撃なか／＼に濃厚なるものありて是等皆因縁關聯して、總じては明治維新以來産業の發展決して見るべきものなきにあらざるも、而かも(1)各産業間の排列調和未だ宜しきを得ざること、(2)生産力眞に不平均に、中には設備も生産も共に／＼過剩的となり、去りて國外輸出の實力實勢の未だ之に伴はざるものあること、(3)不景氣の整理に於て未だ徹底ならず、所謂誤間化し、糊塗若しくは依頼心、不



決斷等に拘束されて自主展開の奮發を缺く等諸種の原因相關聯合して今日に於ける最大行詰りを生じたるものと思惟せざる能はず。この點より云へば此際は國民一般正に天意、天命の儼として存する所を觀念して飽迄自主の發奮を本とし、之に政府の政策施設の宜しきを得て、所謂官民一致、一生懸命に切抜けもし振興をも圖らざるべからざるの要あるものと信せらる。之には即ち國民に一箇の理想、信念と前途の光明、希望とを開示し、而かも國民各分相應に飽迄勤儉力行につとめ、無駄を省き病源を治し、自主公正の風を起し、是等の氣風が健全に運行し互に鼓舞獎勵して以て國民的維新氣分と化し、之を根柢として極力事業の整理、行政の緊縮、學制の改善並に事業の經濟化を斷行し、財政と金融と事業との調和緩急を圖りつゝ飽迄有効有義に仕事をなす事を期せざるべからず、要は現在の如く人々萎靡退嬰何の光明をも見出さず、單に苟且に無氣力に過ぐるが如きは最も憂ふべき事象なりと云はざるべからず。是等は到底内地並に新領土全局を振作する所以に非ず、爲に現前に多數の失業者若しくは生活難を現出して、恐るべき惡思想の醗酵をすら馴致するの虞なきにあらず、深く慮らざるべからざる事項なりと思惟せらる。

是に對するの方策多々あるべきも、予の見る所にては其の眼目たるべき事項は次の三點に歸し得るものと考えふ。

- 一、希望を具ふる國民の理想信念の樹立
- 二、各自、各團體日常生活の立て直し斷行
- 三、財政と事業と金融乃至學制の徹底的立て直し

以上の三點、題目は極めて簡單なりと雖も内容は素より廣汎にして而かも實行的に誘導運用を要するものにして且つは其一つ／＼に就て具體的に研究する外、各自の關聯協調をも考慮して直ちに實行に移すの決心あるを要するのである。この際事業界は勿論、學制並に教育方法の改造革新に向て最も緊要なる時期なる事を確信する。

予は是等の見解を持ち、不肖乍ら我邦産業振興の方法に就き常に考究を期しつゝあり、就中最も緣故多き朝鮮の産業問題より着手し、追々内地の産業問題に及ぼして相仍相持、以て其の成案を得んことを期し、常に注意と觀察とを怠らざるが、素より不敏微力にして未だに其の目的を達するに至らざるを憾とす。然れども朝鮮の産業振興に關しては多年研鑽の結果、意見を立て先以て『朝鮮産業の現勢並に振興策』の小冊子として發表する所あり、殊には朝鮮産業の大宗たる農業振興の一方法として『農事信託』の必要な所以を指摘し、而かもこの觀念の韓國時代統監伊藤公の腦裏に發したるものなることを發見し、何とか實行の方法をも案出して之が實現に至らんことを期圖しつゝある次第である。

是等に關し予の研究の結果はこの『農事信託』がやがては又内地の農村救済に向ても有効なる一方法たるべく、將又現存の信託會社又は不動産銀行の向ふべき一方法なるべきことを推斷するに至つたのである。

抑も我邦の不動産金融は種々の沿革の下、現在にては大別して次の通りとなつて居る。

甲、純粹不動産銀行

1、日本勸業銀行



- 2、府縣農工銀行
- 乙、兼營不動產銀行
  - 1、北海道拓殖銀行
  - 2、朝鮮殖產銀行
- 丙、不動產金融を行ふ會社
  - 1、復興建築助成株式會社
  - 2、信託會社
- 丁、補助的不動產金融機關
  - 1、日本興業銀行
  - 2、東洋拓殖株式會社
  - 3、普通銀行
  - 4、貯蓄銀行
  - 5、保險會社
  - 6、無盡會社
  - 7、土地建物會社
  - 8、產業組合及產業組合中央金庫

- 9、爾餘の各種組合
- 10、個人の金貨業

以上は即ち一切の不動産に對する金融機關の全般なるが、就中農事金融（廣き意味に於て關聯の林業金融迄を含む）に對しては勸業銀行・府縣農工銀行、北海道拓殖銀行、朝鮮殖產銀行、東洋拓殖會社を首とし信用組合、產業組合中央金庫並に普通銀行、貯蓄銀行、保險會社、無盡會社、信託會社の一部並に私設組合又は個人の手に依り不動産擔保又は連帶保證を以て農家の事業經營又は舊債償還等の用途に對し金融を爲すものにして、農家としては人に依り金融を得ること決して容易ならず、政府指定の銀行、組合は格別、一般には利率高くして一割以上なるもの少からず、個人間には實に數割の高利なるものもあり、農事金融なるもの未だ決して順調圓滿なりと稱するを得ずと云ふて可なり。例せば現在に於て我邦農家に對する貸付は其不動産の總價額に比し擔保に供せられ居る金融額は僅に二割弱に過ぎず、之を夫の亞米利加の四割、丁抹の五割杯に比すれば尙ほ頗る低位に在りと云はざるべからず、去れども如何にせん我邦農家負債の總額は全國を通じ六拾億圓にも達すと稱せられ、其れが有効に農事に使用せられて、改良増收の實績を擧げ、繁榮安定の目的を達し居るもののみならば尙ほ之が倍額の借金の増加も敢て厭ふべきにあらざるも、現在の事情は全く之に反し、農家の困憊は眞に其極に達するが如く、利拂すらも困難なるもの少からず、中には是まで國民の良慣習として最も遵守し來りたる納稅義務すら果し得ざる者さへ生じつゝありと聞く、誠に容易ならざる事象なりと觀察せざるべからず。是等は素より農業政策全局の經綸運用に待つべきものなりと雖、殊には其の基調として農事の改良と金



融との宜しきを得るにあらざるべからず、即ち第一に農家各自生活の立直し、換言すれば勤儉力行を本とし成るべくは借金に依らず自己節約の預金に仍るべきものなれども、現實としては舊債に關し出來得る限り輕減せしむべき整理を爲し、更に農事の改良増益に關し新資金を得るの道を講ぜざるべからざるものと思ふ。

以上の如き農家救済改善の目的に對し現在既存の不動産金融機關を一層に充實發展するの必要を感ずるは勿論なれども、同時に予は一の新味ある方法として『農事信託機關』を提唱せん。尙又之が主張に先だち參考の爲め聊か『信託』又は『信託機關』の意義に就き解説して見やう。

信託とは相互の信用に本づき財産の管理經營を委託し若しくは委託さるゝ行爲を指し、之が實行機關として株式組織となれるもの即ち信託會社なりとす。

元來信託會社の制度は源を英國に發し、米國に移植せられて其國の事情に適合し、漸次大に發展したるものなるが、信託の觀念はもとゞ人情の自然より發し、社會並に經濟の進歩につれ、各自相互に必要を感じるに至るべき仕組なりと稱することが出来る。我邦に在りては不動産銀行に就ては歐洲大陸の制度に象りしもの多きも、信託の制度は英米の制度に倣うて起り、今や我邦は正に兩者を併用して不動産金融を發展せんとするの道途に上より居る状態に在るのである。

一方に信託會社と銀行業とは互に關聯協調して各自の機能を達すべきものにして、自ら其の分野を異にし又能所を異にするものである。

學者の見解に従へば、

信託會社に在りては専ら社會の靜的資金の運用利殖に従ひ、銀行は商業上動的資金の需要供給集散を掌る。

又實際の信託に關する見解に従へば、

信託の意義と法典の精神とが徹底し、信託會社が完全に財産の重要な保護者たるの實を擧ぐると共に投資機關として十分の職分を遂ぐるを得ば其の個人の福利を増進すると共に國家經濟に貢獻する所大なるべし。

死藏され或は浪費されんとする靜的資金を蒐めて大資本とし自己の調査機關を経て適當と認めたる事業に投資して以て資金の有する本來の偉力を充分に發揮せしむると共に、我が産業の發展と國富の増進とに貢獻せんとするもの即ち信託會社の使命とす。

又常識的に平たく信託會社を説明したる語に曰く、

信託會社は人情自然の店舗なり。

信託會社は事業の病院なり。

信託會社は醫師なり、看護婦なり、辯護士なり、將た宗教家なり。

以上は即ち信託會社が互信、互商、互働の觀念を土臺として社會各般の財産上の運用を受け委託者便益と併せて受託者自己をも便益する所以の仕組にして、社會の實相に照らし、この精神と仕組との好適すること正に明瞭にして、殊に我邦に於ては刻下社會並に産業の實狀に即し自然に適當なるの機關なりと考へ



得るのである。

我邦に於て信託會社の發達は大正十二年一月一日信託法及信託業法の實施以來にして、それ迄にも信託會社の名を冠して雜多會社の濫立せしを整理、改造並に新設に依り成立したるもの即ち現在國家特許の信託會社とし、最近の調査に依れば、(昭和五年四月調)

本邦信託會社數	三十七社
拂込資本金	九千萬圓
信託總財産	十四億四千萬圓

是れ畢竟創立以來當事者の努力に賴るとは云へ、もとゞ人情の自ら歡迎し且歸依する機關的性質を有するからである。併し創立以來未だ日は淺く、財界波浪の洶湧たるものあり、其の成績は仕組の強弱に依り若くは背景の如何に依り區々たるを免かれず、前途頗る努力を要するの時機に面し居るものと云ふ事が出來やう。信託預金は豫想以上増加したるが、今後の伸び方果して如何、將又其資金運用の途は刻下決して簡單ならざる時機にして、而かも貸出に於ても有價證券に比し不動産に輕きの感がある。是れ或は不動産運用に關する制度や法規並に慣習よりの支障もあるべく、急には意の如くはなり得難かるべきも、是等の改善を以て本業務の發展を講すべく、他方又不動産銀行との連絡に就ても一段の考慮を値するものと考ふ。畢竟夫の信託機關の最も進歩し居る亞米利加にありては二千七百餘の信託會社が銀行との連絡宜しきを得て、不動産の資金化、取引の圓滑、不動産の改良等々其成績を擧げつゝあるに照らし、我邦信託會社の前途は益々好望

なりと考へらるゝも、須らく環境と使命とに鑑み將來の進路を決定せなければならぬものと思ふ。其他に信託會社として爲すべき業務は多々あらう、例せば英國に源を開いて米國にも採用して成績良き投資信託の如き又は遺言執行なり、保險取扱なり、公益公共業務の運用等種々社會的に關係の事業の經營をも爲すべきものであるが、更に又不動産信託の一主要方面たる農事信託の重要性に就き考察する事が必要であると思ふ。

翻つて農村と信託との關係を考察するに農家は改良事業の爲め土地を擔保として金融を得、其金の經濟的使用に依りて増産增收の目的を達し、期間内に元利を償還するを期すべきものなるを以て農家の勤勞努力を先きとするは勿論、其の經營方法の宜しきを得るにあらざれば不可能なりとす。この性質に照らし若しくは農民の立場に徴し、是等の運用が上述の如き互信、互商、互働の信託會社の運用に待つことの自然的傾向なるは明瞭なる數にして之には即ち信託會社に農事信託部を置き、資金の集積、供給、管理、指導、仲介等に任する時は彼我共に利便の事となり、併せて農事の改良、農村の振興を助くることは自然の結果だと思ふ。又山村の如きは單獨としては信託機關の特設は到底引合難かるべき性質を有するも農林併營の原則並に位置と農村連絡の點よりして主業を農事信託に置いて側ら附隨的に或る程度の林業信託を取扱ふ事は最も實際的の一方法なりと考へらるゝのである。

以上の目的を達するに(1)一般信託會社の一部として農事信託部を置くこと、(2)専門の農事信託會社を置くことの場合あり、更に地方的孤立を避け、親子の關係にて勸業銀行又は大信託會社と連絡することが最も得策と認めらるるのである。



殊に朝鮮の如き農業の事情にありては農事信託會社は誠に適當なる必要施設と認められ、將來大に發展すべき要素と事由とを具有する次第なるを以て、獨立に農事専門の信託會社を設立するの可能性ありと信ずることを得。其の理由は則ち次の記載に依りて其の一斑を理解することが出來やう。

賀田 編 朝鮮産業の現勢並に振興策  
直治

#### 第六章 農事土地信託機關の施設 參照

朝鮮に於ける産業の第一は農事であります。從て人民の財産も第一は田畑でありまして、水田百五十九萬町歩、畑二百八十萬町歩、火田十五萬町歩、合計四百五十四萬町歩、其の大きな内地のその七割にも達し、其の總地價實に幾拾億圓、農産物年額實に拾參億餘圓に達して居る次第であります。實際に田畑は朝鮮の主要財産であると共に、一方には内地に於ける動産又は有價證券の如く民間金融に對して一般普遍に使はれてあるのであります。次に朝鮮に於ける田畑は増産の餘地頗る多く、地價も現在に於ては尙ほ一般に低きも、將來は土地の改良及利用が進み、交通網の開くるに従ひ、益々向上すべき趨勢を有して居るものと考へらるゝのであります。朝鮮を富強にし、人民生活を幸福にするには、第一に土地の分配及改良に重きを置かねばなりません、之には則ち農家の土地所有狀態を適當に整理改善するは勿論、是迄の如く半農半商と云ふ工合に商家が土地を所有し、若しくは兼營すると云ふことも、朝鮮の實情に恰當し、且は朝鮮の財力涵養若しくは土地の分配及改良を進捗する爲に極めて緊要なる一方法であると思はれます。事實に於て朝鮮人にとりては勿論、内地人の財産を朝鮮に於て造つたのは概ね土地であるのでありまして、今

後朝鮮に在りては農耕地を中心とし、夫れに市街地若しくは山林等をも適當に分配併營することが最も安全にして、且つ有利なる財産經營法であると認められてあります。故に朝鮮人並に在鮮内地人の間に立ちて土地の管理、經營又は處分を世話するは勿論、更に内地に在る人々に向つても朝鮮の土地所有を勧め、之を仲介斡旋し、乃至是等の管理、保護、經營若しくは賣買等を取扱ひ遣ふことは相互的に極めて有益なる事業でありまして、現在ですら仕事の分量はなかく多いのであるが、今日以降は一層に有用なる事業となるであらませう。加之朝鮮に於ける産米増殖計畫（拾四年計畫三億五千萬圓）及鐵道網計畫（拾二年計畫三億二千萬圓）の二事業は夫々五十一、五十二議會の協賛を経て、恰も朝鮮産業界の二大柱の如く樹立せられ、更に百三十一萬町歩と云ふ國有林野の不要存置處分も十五箇年計畫を以て、既に着手せられてあります。何れも土地に關する基礎的施設でありまして、之が實行には十分の配意と努力とを要するのであります。之に伴ひ今後は等土地所有又は投資の仕事は愈々重要となるに至ると思はれます、既に今日迄にも、叙上の狀勢に處し、前記の産米増殖並に鐵道網計畫と並んで鼎立すべき斯種有力なる農事土地信託機關が今に尙ほ缺如して居る有様であります、誠に朝鮮の産業界の一大缺陷とせねばなりません。次に朝鮮の農事金融は現在とても銀行、東拓、金融組合、勸農共濟組合、稷等に依りて相當の金融機能發揮しては居りますが、其金融の仕方が兎角一方に偏し易く、其の範圍尙は行渡らず、此上にも朝鮮の主財産たる農地を擔保として適切に金融を爲し、同時に農事の改良増産を指導しやる性質の信託金融を發達することは朝鮮にとりて極めて有益なる仕事の一でありまして、其遺方次第、頗る安全にして利得ある仕



事となれるのであります。之には即ち信託法上に於ける政府の保障及内地の信託先輩會社との連絡宜しきを得て、内地の資金を圓滑に朝鮮に運用することに努め、成る可くだけ金利を低め、機能が大にする要あるものと思はれます。信託機關の發達は或種の業務に於て銀行と抵觸する如くにて却て銀行を裨補し、相互の繁榮を生ずる所以であります。而して朝鮮の現在に於ては、内地とは自ら趣を異にする事情あり、内地の現下金錢信託若しくは有價證券信託を主とし不動產信託を副とするに反し、朝鮮に在りては農事若しくは不動產信託を第一期業務の主幹とし、此間農地の委託管理、改良増殖を引受けて成績を挙げ、逐次爾餘各種の財産信託に進むべきものなることは前述の事情より發するのであります。畢竟忠實なる民衆財産機關として先以て土地の所有、分配並に改良上の便益を圖るの使命を達すべく、正に是れ朝鮮産業上缺くべからざる方策且つ機關なりと信ぜらるゝのであります。而かも是等の業務は確實有爲の株式會社を以て最も利便とし、可成丈斯種信託事業に理解ある人々を中心とし、一面之を通じて内鮮の資本、知識並に資源の流通に便ならしむべく、官民間の諒解及後援を切要とする次第であります。是れ即ち之れ迄にも起るべくして直に起り得ざりし第一原因でありませう、代りに之が順調に都合良く發達し、成績に於て内鮮人共に満足する結果を挙げ得る場合は、夫こそ朝鮮の統治にも寄與し、國家社會にも奉仕し、朝鮮の生活問題解決に働らき得るは勿論、更に刻下吾國最主要と見做されて居る人口及食糧問題にも貢獻する所以でありまして、漸次有利有望なる營業科目を増加すべく、内地信託會社にも劣らず朝鮮に於ける重要第一の會社經營となり得る運命あるものと信ぜらるゝのであります。

#### 朝鮮農事信託機關の緊要性と發展性に就て

朝鮮農事信託機關は朝鮮最重要産業たる農事を主目的として不動產擔保の信託金融事業を營み併せて自社所有農地の改良及び轉賣、他有農地の委託管理並に改良増殖事業を引受け乃至内鮮人間農地の賣買を仲介し又は内鮮人財産の整理を引受ける等關聯連絡各種の業務を實行し其利息、手数料若しくは賣買益を以て純益を挙げ以て相當の會社配當を爲すのみならず又以て社會奉仕の使命を果すに在るのであります。素より地理若しくは業務の關聯に依り林野並に市街地に向ひても業務を擴張し併せて一般信託業務をも兼營することあるべきものである。以上の意義に於ける信託會社は内地信託會社よりも不動產信託に關する業務勢ひ多量を占むべく、將又人民間多年の慣行に依り業務の最も汎く且つ安全確實に運用性あるを特色とし且又擔保物が不動產を主とする關係上、金融上の確實性は一層にして回収も内地に比し決して不良ならざるの實績を示しつつあるのであります。

不動產金融の資金は拂込金以外、内鮮双方より預借金、金融仲介又は保證等の方法に依り最初は少額より始むるも漸進を期し、結局前途は巨額の運用額に達せしめ得る一大彈性を有するものと考察せらるゝのである。

農地信託は朝鮮に於ける農場が現在としても可なりに多數なるに拘はらず内地在住所有者の土地管理の難情若しくは朝鮮人不在地主經營の缺點に比し又は増收増益の彈力性あるに照らし農事信託會社の手に委任するもの益々多量に至ることを考ふことを得、此度合は蓋内地とは全然比率を異にすべく、此業務は地



主、小作の間に立ちて資金の融通より農法の改善、耕地の改良、販賣の改善迄皆信託會社の経験ある經營に依り三方共に便益を感じ最も圓滿に經濟的合理的の結果を得べきに依り最初の内は實費主義に立脚し、成績を擧ぐるに隨ひ將來は業務を發展し最も經濟的經營を爲すに至るべしと思ふ。尙ほ之に伴ふ林野若くは、市街地其他の信託業務も亦漸次多量を加ふるの將來あらんと推測せらる。

不動産銀行の不動産擔保流れは勿論、一般金融業者の分に至る迄之が處分に關しては向後益々不動産信託會社の働きを調法とするに至るものと考察さる。今後不動産の賣買は益々増大するに至るべし、例へば大地主の轉換上土地を處分せんとする場合、若しくは内地より若干の非獨立土地を求め置かんとする場合に適當なる仲介且委託は極めて肝要にして之を忠實に世話しやること實に朝鮮產業上頗る肝要なる業務と云ふべく鮮内は勿論、内鮮間に立ち益々増加するに至るべき將來あるものと考へらる。現在に最も確實なる朝鮮投資物は矢張土地第一なるを以て信託會社が此間に立ち適地を選択し若しくは水利組合、鐵道計畫等に關聯して一應は之を買求め他日適機に加工轉賣して自他を利用するの餘地は甚大なるべしと思ふ。終りに朝鮮人の財産は不動産第一にして是等の整理を要するもの相當多數の現狀なるが、信用あり權威ある信託會社の手に委するを最も得策とするに至るべきものと思ふ。

以上の諸理由に依り朝鮮に於ける農事信託機關の前途は上述の諸業務關聯共同して極めて有望にして多大の繁榮性を有し、而かも國家社會に奉仕するの意義も甚大にして眞に内鮮人共存共榮の目的を達する所以の途なりと信せらる。

農事信託に關しては伊藤統監の時代、夙く朝鮮に於ける重要性を達觀し首唱し斡旋せられしが、(大韓勸業株式會社即ち現在の朝鮮勸業信託株式會社に對し)是迄は他の普通一般の金融若くは業務機關に依り兎に角に間に合ひ來り居りしも方今農事施設並に農家經濟の收約を加ふると共に益々農事信託の必要は眞に緊要にして一日も缺くべからざるものとなるに至れりと認めらるゝのであります。

翻りて日本内地に於ける農村救済策に就て考察するに、予の見る所に依れば目下緊要の施設としては

第一、農家生活の改善、負擔の輕減を講ずると共に、累年惱み居る農家の借債償還又は高利借替を講ずる事。

第二、農事改良に依る農家經濟増進策、即ち農事改良に關する組織、人物養成、資金の供給、乃至共濟、指導、斡旋、委託、代行等の仕事を適處する事。

第三、内地及新領土を通じて農法、農種並に需給に關し適當なる施設を講ずる事。

以上の救済策を達成する爲には、予の見る所に依れば第一前記人民の理想、信念を以ての自主自營に待つ事勿論なるも、これにも政府の方針及助成施設の宜しきを得るにあらざるべからず。其爲には既設現行の各機關の充實擴張を第一義とすること明白である。即ち

一、産業組合、産業組合中央金庫、農工銀行並に勸業銀行等の擴充及活動。

二、爾餘金融機關の協調連絡。

三、資金消化機關の擴充及活動。



以上の目的を達する爲には之が資金に關し次の施設を必要と思ふ。

一、政府の郵便貯金、簡易生命保險等よりの低利資金に今日以上、一層に之が主要關係者たる農村農民の爲め最も有用、有効に融通を圖る事。

二、社債發行を適切ならしむる事。

三、不動産擔保金融、其他農事改良の運用に關し支障ある手續や料金若くは習慣等の改正を講ずる事。

以上の方策實行上緊要なる施設は素より是等資金の配給と農事改良の協同、指導の機關であらねばならぬ。而して之が機關として予は農事信託會社を健實に組織し且つ運用すべしと主張するのである。換言すれば我邦農村、農家の現狀に照らし、之れが救治、立直し上農家經濟上必要なる資金を供給し且つ有効に運用し行くの相信的提携者は自然の必要物であり且つ適恰の組織であるのであつて、産業組合、信用組合其他農村の斯種共濟機關は素よりこの資格を具有し、一層に之が擴充並に活動を要望すべきであるが、更に營業的に實力と技能とを有する上に農事信託機關を結合連絡すること極めて適切有効と思ふのである。之が實行方法として予の考ふる所に依れば、

一、現行大信託會社は須らく不動産金融に向て一段發展の方法を講じ、更に現在の處資金は乏しきも事業饒多なる新領土、殊には朝鮮の農事資金に向て機能を發揮し、其の第一歩として朝鮮固有の斯種信託會社に援助して連絡、媒介の方法を講ずる事。

二、府縣の信託會社は須らく機を見て農事信託併置に適する様に擴充若くは改造を圖り、同時に親を勸銀

又は大信託會社に結び、相呼應して機能を發揮する事。

其他各種關係機關との連絡に對し改善の途を講ずる事。

三、以上の充實と社會的使命の増加に對し政府は斯種信託會社に對し農工銀行に準じ監督を嚴にすると共に低利資金の供給並に社債發行に便宜を提供する事、

惟ふに内地に於ては朝鮮とは趣を異にする所あり、農村の因習や傳説や乃至政黨や社會運動等の複雑なる事情も夤緣するを以て、其れ丈多く農村振興機關は公正にして信用的權威あるものを要する次第であり、信託會社の如き組織が正に之が使命實行に適し、頗るこの間に適應し得る良機關なりと信ぜらるゝのである。

以上に依り予は我邦産業の立直し、殊に國本として而も刻下最も困難の事情に陥り居る我邦農村の救治振興、立直しの急務なることを認め、國策的各種の施設經綸を要望すると共に、適切有効の一方法として農事信託機關の必要且急務なることを主張する次第である。

(昭和五年十月印刷)



農事信託の精神に就て(抄)



## 農事信託の精神に就て(抄)

「信託」なる名稱は近代であるが「信託」の事實は東西共に遠き昔より存続してあつたことを考察することが出来る。

我邦に在りては古來、經濟と道德との調和を期して斯種の信託行爲が連續して行はれ來たと思はるゝ。

即ち普通に云ひ習はせる

信 爲 萬 事 本

互 信 互 助

至 誠 報 德

厚 生 利 用

杯と云ふ標語や觀念がこの相互關係の源泉根柢と認めらるゝのである。是等の行爲は又社會上並に經濟生活上各方面に行はれて居るのであるが、殊には日本の國柄が古來農業本位であつた丈に、農事方面の關係にこの精神の實現しありしことは明である。例へば我邦上代の是等の歴史に關し最も詳密なる日本書紀若しくは古事記に於て我等は「農事」「農地」「溝堤」「屯倉」並に「預」とか「賦」とか「出舉」とかの語の多きことを見出すのである。尙又我邦古代農業が相當に進歩しあつて、商事や工作の觀念にも富み、貨幣のこと、交換のこと、若しくは水陸交通のこと等比較的發達しありし事實を數多立證し得るのである。王朝より封建時代に入りても重農の風習連續して徳川幕府までを通じて是等の慣習の存在せることは明なる事實である。要するに是等農事の互信互助的受委託關係事項を總稱して茲には之を『農事信託』と名づくる次第であつて、名こそ新しいが、是等の事實は古い昔から持續し居るものと推斷して良いと信ずる。併乍ら、茲には古るきことは暫く省略して置て、近來では二宮尊徳翁の如き、所業は立派に一の農事信託家と評して良いと思ふ。語を換へて云へば、我邦固有の精神に基づき、經濟と道德とを調和し、感化を今日に垂れて居る。

明治維新後 明治大帝の農事及農民に關する大御心は眞に洪大無邊であつて、貴き御製に於てこの大御心の厚きを拜誦するのである。大久保公の農事經綸も實に顯著なる事蹟であつて、次で大久保公を承けて日本の政治中心に當られたる伊藤公も亦農事に關する見識が決して少くなく、殊には韓國統監時代の朝鮮に於て、斯種事蹟が頗る饒多に現はれて居る。夫の銀行制度を日本に齎らされし公は更に又朝鮮に向て農事の經營、指導、金融若しくは土地の貸借、賣買、管理の斡旋を主業とする、所謂農事信託の精神を以ての大韓勸農株式會社(今の朝鮮勸農信託株式會社)なるものを東洋拓殖株式會社よりも一年以前に德憑創設せしめられたのである。品川子爵の我國産業組合創設も形こそ獨逸に摸じたりしも、精神は即ち固有の日本精神、殊には松下村塾の吉田松陰先生の至誠報德と二宮尊徳翁の報德主義とに基かれたるものなることは明に窺はるゝ事實である。即ち農事の改良振興上に國民の自主勤勞の方策と共に、叙上の意義に於ける農事信託精神の尊重せられしことは正に明白なる事實と觀察して良いと信ずる。











205--1

分類 表号	書題 件題	3354	整理 番号	棚 通号	調 査	32年3月30日
書題	朝鮮勸業株式會社概要(昭和五年現在)				査	年 月 日
件題					種類	
著・版	賀田直治, 昭和五年, 美雄研12枚					
所在	(接)					
摘要	昭和信託機關に就て2つ袋に入 要					



205-2

分類 表号	書題 件題	3354	整理 番号	棚 通号	調 査	32年3月30日
書題	朝鮮勤農団全社改造趣意書 (全現況及定款)				査	年 月 日
件題					種類	
著・版	賀田直治 昭和七年五月 美濃四信版					
所在	(3)					
摘 要						



205-3

分類 表号	書題 件題	整理 番号	棚 通号	調 査	32年3月30日
書題	我邦産業振興の一策として信託機関の充實 殊に 農事信託機関の必要に就て 附表 農事信託の精神に就て(附)			種 類	年 月 日
著・版	賀田直治, 昭和五年十月, 菊版平文17頁				
所在	(48)				
摘 要	農事信託機関に就て 9 巻に入る。				



朝鮮勸農株式會社改造趣意書

當社は創立多年、現に各種の不動産を所有經營し、他人の不動産をも委託管理し、側々なる調査、斡旋に従事しつゝ、相當に長き經驗と地盤とを有するのでありますが、時勢の進運に伴ひ、一面鮮内農事の業務を發展するの外、刻下逐次好望を加ふべき滿洲農事業務にも關係するを適切に認め、先以て調査、斡旋の業務より發し、序を以て經營管理並に之に關聯する有利の仕事を開始したのであります。この目的を達せん爲め、茲に先づ當社の定款を改正し、本目的に熱誠志を同する者のみの重役に改造を圖り、この土台に據りて更に本計畫賛同の有力者を求め、其の資本並に指導を受けて逐次本目的を遂げたいのであります。

且つは以上の連絡決定と共に更に臨時總會を開いて社號を「滿鮮勸農株式會社」と改め、必要重役を増加し、適當なる組織の下、當社相應の滿鮮農事並に關聯企業に對する經營成績を収めたいのであります。

昭和七年五月三十一日

朝鮮勸農株式會社現況

(昭和七年五月卅一日現在)

立 明治四十年七月八日

- 一、設 立
- 二、資 本 金 貳拾五萬圓 (全額拂込済)
- 三、株主及株數 二十名、五千株
- 四、營業科目

- 一、朝鮮及滿洲ニ於ケル農事ノ調査及斡旋
- 二、農林業及市街地ノ經營
- 三、不動産ノ賣買、貸借並ニ其中介
- 四、不動産ノ委託管理
- 五、不動産及有價証券ノ擔保貸付
- 六、開墾、干拓其他土地改良事業一般ノ調査設計及工事監督ノ代行
- 七、代理業務
- 八、以上各項ニ附帶關聯スル業務

- 五、本 社 朝鮮京城府旭町二丁目拾番地
- 六、出 張 所 東京市日本橋區本石町一丁目一番地
- 七、主ナル財産

- 1. 市街土地并ニ住宅地
- 京城府旭町、大和町、龍山元町、漢江通等ニ土地家屋ヲ所有シ家賃月收入八百餘圓
- 2. 高 陽 農 場
- 京城道高陽郡松浦面ニ在リ面積約二百八十町歩ノ大集團農耕地、地味肥沃、京城ニ近ク運輸水陸ノ便、且ハ國費支辨ノ漢江治水築堤工事明年度迄ニ完成スベキニ付單ニ灌漑施設ヲ施スニ於ケル良機場タラシムルコトヲ得

朝鮮勸農株式會社定款

(昭和七年五月卅一日改正)

第一章 總 則

- 第一條 本會社ハ朝鮮勸農株式會社ト稱ス
- 第二條 本會社ハ左ノ業務ヲ營ムヲ以テ目的トス

- 一、朝鮮及滿洲ニ於ケル農事ノ調査及斡旋

- 二、農林業及市街地ノ經營

- 三、不動産ノ賣買、貸借並ニ其中介

- 四、不動産ノ委託管理

- 五、不動産及有價証券ノ擔保貸付

- 六、開墾、干拓其他土地改良事業一般ノ調査設計及工事監督ノ代行

- 七、代理業務

- 八、以上各項ニ附帶關聯スル業務

- 第三條 本會社ハ本店ヲ朝鮮京城ニ置キ必要ニ應ジ各地ニ出張所ヲ設ク

- 第四條 本會社ノ存立期間ハ設立登記ノ日より滿五十箇年トス

- 第五條 本會社ノ公告ハ本社所在地ニ於テ發行スル新聞紙(二種以內)ヲ以テ之ヲ爲ス

第一章 資本金及株式

- 第六條 本會社ノ資本總額ハ金貳拾五萬圓トシ之ヲ五千株ニ分テ一株ノ金額ヲ金五拾圓トス

- 第七條 本會社ノ株券ハ記名式トシ一株券、五株券、拾株券ノ三種トス

- 第八條 株金ノ拂込期日及金額ハ取締役會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

- 第九條 株金ノ拂込ヲ怠リタル株主ハ拂込期間滿了ノ翌日より拂込完済ノ日迄金百圓ニ付一日金四錢ノ割合ヲ以テ延滞利子及延滞ヨリ生スル總額ノ損害ヲ賠償スベシ

- 第十條 株式ノ譲渡ニ依リ名義ノ書換ヲ爲サントスル場合ハ本會社所定ノ書式ニ依リ双方記名調印シ其株券ヲ添ヘ差出スベシ其手数料ハ株券一枚ニ付金拾錢トス

- 相續、遺贈又ハ法律ノ結果ニ依リ株式取得ノ名義書換ヲ爲サントスル場合ハ取得原因ヲ證明スベキ書類ヲ添付シ前項ノ手續ヲ爲スベシ其手数料亦同シ

- 株主カ其氏名ヲ變更シ又ハ株主ノ法定代理人カ異動セシ場合ニ於テハ第二項ノ規定ヲ準用ス

- 第十一條 株券ノ喪失ノ爲メ新株券ノ交付ヲ受ケントスル場合ハ本會社所定ノ書式ニ依リ保證人貳名以上ノ連署ヲ以テ其請求ヲ爲スベシ

- 前項ノ請求アリタルトキハ本會社ハ請求者ノ費用ヲ以テ其旨ヲ公告シ其最終公告ノ日ヨリ三十日ヲ經過シ異議ノ申立ナキトキハ新株券ヲ交付シ舊株券ヲ無効トス

- 但喪失株券ニ因リ生シタル損害ハ株主ノ負擔トス

- 株券ノ毀損又ハ種類變更ノ爲メ新株券ノ交付ヲ受ケントスルトキハ本會社所定ノ書式ニ依リ其舊株券ヲ添ヘ之ヲ差出スベシ

- 本條再交付手数料ハ株券一枚ニ付金貳拾錢トス

- 第十二條 株式ノ名義書換ハ毎決算期ノ終了翌日より定時株主總會終結ノ日迄之ヲ停止ス

- 臨時株主總會招集ノ通知ヲ發シタル日より其總會終結ノ日迄亦同シ

第二章 株主總會

- 第十三條 定期總會ハ毎決算期後六十日以内ニ之ヲ開キ臨時總會ハ商法ノ規定ニ依リ之ヲ招集ス

- 第十四條 總會ノ決議ハ豫メ通知シタル目的及事項ノ外ニ涉ルコトヲ得

- 第十五條 株主ハ其議決權ノ行使ヲ他ノ出席株主ニ委任スルコトヲ得

- 但委任狀ハ本會社ヘ差出スベシ

- 第十六條 總會ノ決議ハ法律ニ別段ノ規定アル場合ノ外出席株主ノ議決權ノ過半数ヲ以テ之ヲ爲ス可ク否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

- 第十七條 總會ノ決議事項ハ之ヲ他議決權受出常株主二名以上ニ通知シ之ヲ採



- 四、不動産ノ委託管理  
五、不動産及有價証券ノ擔保貸付  
六、開墾、干拓其他土地改良事業一般ノ調査設計及工事監督ノ代行  
七、代理業務  
八、以上各項ニ附帶關聯スル業務

五、本 社 朝鮮京城府旭町二丁目拾番地  
六、出張所 東京市日本橋區本石町一丁目一番地  
七、主ナル財産 1. 市街土地并ニ住宅地  
京城府旭町、大和町、龍山元町、漢江通等ニ土地家屋ヲ所有シ家賃月收入八百餘圓  
2. 高陽農場 京畿道高陽郡松浦面ニ在リ面積約二百八十町歩ノ大集團農耕地、地味肥沃、京城ニ近ク運輸水陸ノ便、且ハ國費支辨ノ漢江治水築堤工事明年度迄ニハ完成スベキニ付單ニ灌溉施設ヲ施スニ於テ良農場タラシムルコトヲ得

3. 永登浦農場 京畿道始興郡永登浦邑ニ在リ大日本麥酒工場豫定地ニ接續シ面積五萬餘坪ノ一集團地ニシテ工場地帯ニ屬シ將來發展ヲ期待セラル  
4. 天冠山造林地 全羅南道長興郡冠山面、大德面ニ跨リ面積千七百二十三町歩餘、國有受貸付林ナリシモ造林成功ノ上昭和六年八月二十九日附所有權ヲ附與セラル  
現在受委託經營中ノ主ナル市街地、農場、山林次ノ如シ  
1. 市街地 大阪在住者ノ所有地ニ係ル京城郊外住宅地タル高陽郡龍江面阿峴里宅地六千二百四十坪二百三十六戸ノ朝鮮人住宅地  
2. 農場 内地在住者ノ所有地ニ係ル黃海道延白郡石山面、道村面、鳳北面ノ三箇ニ跨リ面積四百五十町歩餘ノ集團農耕地タル古河農場  
3. 林野 朝鮮皮革株式會社ノ所有地ニ係ル單寧樹造楠用ノ咸鏡北道富寧郡觀海面所  
在面積七百五十三町歩ノ山林經營

九、當社ノ特色  
當初伊藤統監ノ御慈惠ニ依リ設立シ今日迄各種ノ經驗ヲ積ミ地盤ヲ作り土地事務ニハ相應便利ナル資格ヲ有ス。  
十、役員  
社長 事務取締役 賀 陣 荒 井 初 太 郎 吉 治  
取締役 同 同 同 同 同 同  
監査役 同 同 同 同 同 同  
武 亮 以 田 賀 國 重 政 亮

日ヨリ三十日ヲ經過シ異議ノ申立ナキトキハ新株券ヲ交付シ舊株券ヲ無効トス

但喪失株券ニ因リ生シタル損害ハ株主ノ負擔トス  
株券ノ毀損又ハ種類變更ノ爲メ新株券ノ交付ヲ受ケントスルトキハ本會社所定ノ舊式ニ依リ其舊株券ヲ添ヘ之ヲ差出スヘシ  
本條再交付手数料ハ株券一枚ニ付金貳拾錢トス  
第十二條 株式ノ名義書換ハ毎決算期ノ終了翌日ヨリ定時株主總會終結ノ日迄之ヲ停止ス  
臨時株主總會招集ノ通知ヲ發シタル日ヨリ其總會終結ノ日迄亦同シ  
第十三條 定期總會ハ毎決算期後六十日以内ニ之ヲ開キ臨時總會ハ商法ノ規定ニ依リ之ヲ招集ス

第十四條 總會ノ決議ハ豫メ通知シタル目的及事項ノ外ニ涉ルコトヲ得  
第十五條 株主ハ其議決權ノ行使ヲ他ノ出席株主ニ委任スルコトヲ得  
但其委任狀ハ本會社ヘ差出スヘシ  
第十六條 總會ノ決議ハ法律ニ別段ノ規定アル場合ノ外出席株主ノ議決權ノ過半数ヲ以テ之ヲ爲ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル  
第十七條 總會ノ決議事項ハ之ヲ記錄シ議長殿査役及出席株主二名以上連署シ之ヲ保存ス  
第十八條 總會ノ議長ハ會議ヲ延期シ又ハ其場所ヲ變更スルコトヲ得  
但延期會議ノ議事ハ前會議ニ於テ議了セザリシ事項ノ外ニ涉ルコトヲ得ス

第十九條 本會社ハ取締役參名以上ヲ置キ本會社株式貳拾五株以上ヲ所有スル株主中ヨリ株主總會ニ於テ之ヲ選任ス  
得票同數ナルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ決ス  
第二十條 取締役ノ任期ハ三年、監査役ノ任期ハ二年トス但補缺選舉ニ依リ就任シタル取締役又ハ監査役ノ任期ハ前任者ノ殘任期間トス  
前項ノ任期力任期中ノ最終ノ決算期ニ關スル定期總會終結前ニ滿了スルトキハ其定時總會ノ終結ニ至ル迄之ヲ延長ス役員中缺員ヲ生シタルトキハ補缺選舉ヲ爲ス  
但法定員數ヲ缺カス且シ業務ニ差支ナシト認ムルトキハ次期ノ總會迄選舉ヲ延期スルコトヲ得

第二十一條 取締役ハ取締役會ヲ組織シ本會社ノ業務方針、事業計畫其他重要ナル事項ハ取締役會ノ決議ニ依リ決ス取締役ハ取締役會ノ決議ヲ以テ社長一名、事務取締役一名ヲ互選シ事務ヲ專任セシムルコトヲ得  
取締役會ノ決議ハ出席取締役ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス  
監査役ハ取締役會ニ出席シ意見ヲ述フルコトヲ得取締役會ニ於テ必要ト認ムルトキハ其決議ヲ以テ相議役及顧問ヲ囑託スルコトヲ得  
取締役ハ其在任中所有ノ株式貳拾五株ヲ監査役ニ供託スヘシ取締役及監査役ノ報酬ハ株主總會ノ決議ニ依リ之ヲ定ム

第五章 計算  
第二十二條 本會社ノ營業年度ハ毎年七月一日ヨリ翌年六月三十日迄ヲ以テ一期トス  
第二十三條 毎期ノ總益金ヨリ總損金ヲ控除シタルモモノヲ純益金トシ左ノ如ク處分スルモノトス  
一、法定積立金 百分ノ十以上  
二、別途積立金 若 若  
三、役員賞與金 百分ノ十以内  
四、株主配當金 若 若  
五、後期繰越金 于 于

第二十四條 株主配當金ハ毎營業年度毎期末日現在ノ株主ニ之ヲ配當ス



252

新義州安東間密輸取締件

昭和五十七年

346

M4-127

6 7 8 9 230 1 2 3 4 5 6 7 8 9 240 1 2 3 4 5 6 7 8 9 250 1 2 3 4 5 6



525

朝一  
號三  
二七  
二〇  
一四  
一五

昭和五年十二月

拓月  
務四  
次日

小  
村  
版  
一

朝鮮總督府政務總監伯爵 兕王秀雄殿

新義州安東間密輸入取締ニ關スル件  
首題ノ件ニ關シテハ十一月十七、十九ノ  
日拓務大臣官邸  
ニ外務省ヨリ並細並局長並通商局長朝鮮總督府ヨリ財務  
局長並警務局長關東廳ヨリ警務局長並財務部長出席  
側ト協議ノ結果今後左記ノ方針ニ依リ取締ヲ勵行ス  
ト相成候ニ付右御了知ノ上可然御手配相成度候

ニ中華民國稅關新義州分館設置ニ關スル民國側今同ノ要  
求ハ之ヲ考慮セザルコト  
ニ中華民國稅關側トノ連絡ヲ密ニシ其ノ誠意アル職務執  
行ニ付注意ヲ喚起スルコト  
ニ關東廳令ヲ以テ取締規定ヲ設ケ取締ヲ勵行スルコト



四、朝鮮側税關及警務當局ニ於テモ關東廳側ト一層緊密ナ  
 ル連絡ヲ圖リ密輸入ノ取締ニ協力スルコト  
 五、朝鮮ヘノ密輸入ニ付テハ關東廳ニ於テ朝鮮側ト緊密ナ  
 ル連絡ヲ保テ其ノ取締ニ協力スルコト  
 六、以上ノ取締實行ニ關シ安東新義州ニ於ケル帝國官憲時  
 々會合打合ヲ爲シ適切ナル方法ノ取極ヲ爲スコト  
 七、本取締實行ト共ニ密輸入關係者ノ善導ニ付遺憾ナキヲ期  
 スルコト

以上

昭和六年一月九日安東領事館ニ於ケル密輸入取締  
 共助ニ関スル具體的細目協定

(二月十七日付管ニ第四四四六號)  
 拓務省通知

一 安東警察ノ取締

警察官ノ差繰リ配置ニヨル取締

現員ヲ差繰リシ江岸方面適當ノ部處ニ充ツルコト

A 巡查部長一名兵輸取締方面ノ指導監督トシテ水

上派遣所ニ駐在セシム

B 江岸派出所六名(毎日三名)

C 埠頭派出所八名(毎日四名)

D 水上派遣所八名(毎日晝間ハ二名、夜間ハ他ヨリ二名ヲ補勤)

E 三名ヨリナル移動警邏班ヲ設ケ夜間其ノ他取締

上必要ナル時間ニ江岸一帯ノ警戒ニ當ラシム

二 新義州税関ノ取締

輸出申告者ニ對シ能ノ限リ鐵路運送ヲ爲ス様勧告

スルコト

口輸出品ノ水路輸送ヲ拒否スヘキ法規上ノ根據ナキ



シ以テ右勸告ニ應セサルモノニ對シテハ許可狀ヲ與フヘキモ密輸ノ疑アル場合ハ其ノ都度速ニ安東警察ニ通報スルコト

ハ新義州視閲ニテ發給シタル輸出許可狀ハ其ノ貨物ノ安東輸入ヲ證スヘキ中國海關ノ正當ナル圖書又ハ換印ヲ經ヘク其ノ上同海關ヨリ新義州視閲ニ右許可狀ノ回附ヲ為スコト輸出許可狀ニシテ右回附ナキモノハ密輸者ト認メ爾後許可狀ヲ與ヘサルコトアルヘキコト

三 安義兩地監吏及警官ノ相互兼務方ノ件（當上局ニ稟申ノ上施行）

イ 新義州視閲監視二名及監吏四名ヲシテ夫々安東警察廳東廳警部補ヲ兼務セシムルコト  
ロ 安東警察署勤務警部及警部補ヲ新義州視閲監視ニ同巡査中有資格者四五名ヲ監吏ニ兼務セシムルコト

四 新義州側ニ於ケル一般商人殊ニ密輸關係者等ニ對スル警告

イ 新義州視閲ニ於テ貨物取扱者運送業者等ニ對シ嚴ニ警告ヲ為スコト

ロ 平安北道警察部ニ於テ同地各新聞ニ對シ密輸警告ヲ内容トスル記事ヲ掲載セシメ一段ノ注意ヲ喚起スルコト

五 關係官廳ノ打合會定期開催ノ件  
爾今毎月一日十五日ノ二回ニ各關係官廳當事者ノ打合會ヲ開催打合ヲ為スコト



鴨緑江水路ニ由ル輸出貨物ノ取締ニ  
 關スル件  
 府令案  
 新義州港ニ於ケル貨物、輸出又ハ積戻ハ當分ノ内陸路ニ  
 由ルモノニ限ル但シ旅客、携帶品ハ此ノ限ニ在ラズ  
 附則  
 本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス。



本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス  
新義州ニ於テ水路ニ由ル貨物ノ輸出又ハ積戻免許ヲ受ケ  
タル者ハ當該物品ニ對スル輸出先税關ノ輸入免狀若ハ之  
ニ代ルベキ書類又ハ陸揚證明書ヲ五日以内ニ新義州税關  
ニ提出スベシ  
前項ノ規定ニ違反シタル者ニハ二百円以下ノ罰金又ハ科  
料ニ處ス  
附則  
本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

密輸取締共助ニ關スル件

新義州ニ於テ水路ニ由ル貨物ノ輸出又ハ積戻免許ヲ受ケ  
タル者ハ當該物品ニ對スル輸出先税關ノ輸入免狀若ハ之  
ニ代ルベキ書類又ハ陸揚證明書ヲ五日以内ニ新義州税關  
ニ提出スベシ  
前項ノ規定ニ違反シタル者ニハ二百円以下ノ罰金又ハ科  
料ニ處ス  
附則  
本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス



朝鮮總督府  
新義州港ヨリ水路ニ由リ貨物ヲ輸出又ハ積戻セ  
ル者ハ船舶ノ名稱、國籍、貨物ノ記號、番號、  
品名、箇數、數量、價格、仕向港及積出豫定期日ヲ記  
載シ朝鮮總督ノ許可ヲ受クベシ  
第二條 朝鮮總督ニ提出スベキ許可申請書ハ新義州税關  
ヲ經由スベシ  
第三條 第一條ニ依リ輸出又ハ積戻ヲ許可スルトキハ許  
可書ヲ交付ス  
前項ノ許可書ハ輸出又ハ積戻申告ノ際税關ニ提出スベ  
シ  
第四條 第一條ノ許可ヲ受ケズシテ貨物ヲ輸出又ハ積戻  
シタル者ハ三月以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處  
ス

府令案  
密輸取締共助ニ關スル件

第一條 新義州港ヨリ水路ニ由リ貨物ヲ輸出又ハ積戻セ  
ル者ハ船舶ノ名稱、國籍、貨物ノ記號、番號、  
品名、箇數、數量、價格、仕向港及積出豫定期日ヲ記  
載シ朝鮮總督ノ許可ヲ受クベシ  
第二條 朝鮮總督ニ提出スベキ許可申請書ハ新義州税關  
ヲ經由スベシ  
第三條 第一條ニ依リ輸出又ハ積戻ヲ許可スルトキハ許  
可書ヲ交付ス  
前項ノ許可書ハ輸出又ハ積戻申告ノ際税關ニ提出スベ  
シ  
第四條 第一條ノ許可ヲ受ケズシテ貨物ヲ輸出又ハ積戻  
シタル者ハ三月以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處  
ス  
附則  
本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス



密輸取締共助ニ関スル件

府令案

第一條

清酒、果物、綿絲、綿布、絹布、毛織物、護謨靴及地下足袋ヲ新義州港ヨリ水路ニ由リ輸出セントスル者ハ船舶ノ

名稱、國籍、貨物ノ記號、番號、品名、箇數、數量、價格、仕向港及積

出陳定期日ヲ記載シ朝鮮總督ノ許可ヲ受クベシ

第二條

朝鮮總督ニ提出スベキ許可申請書ハ新義州税関

ヲ經由スベシ

第三條

第一條ニ依リ輸出ヲ許可スルトキハ許可書ヲ交

付ス

前項ノ許可書ハ輸出申告ノ際税関ニ提出スベシ

第四條

第一條ノ許可ヲ受ケズシテ貨物ヲ輸出シタル者ハ三月以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金科料ニ處ス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス



密輸取締ニ關スル法規ヲ設クルコトノ  
適當ナラザル理由  
一、斯ル法規ヲ設クルコトノ理由ナキコト又先例モナキコト

二、密輸容疑貨物ノ認定不能ニシテ實行上批難ヲ受クルコト

三、正當輸出業者ニ不利不便ヲ蒙ラシメ延テ貿易上影響大ナルコト

四、密輸出増加シ之ヲ取締ノ爲増員ヲ要スルコトトナルコト

五、前項取締ヲ嚴ニスルモ尙密輸出アルベク之ニ對シテハ却テ不取締ノ批難ヲ受クルコトトナルコト

六、密輸入増加スルコト







計		其他		地下		公衆	
前年	本年	前年	本年	前年	本年	前年	本年
六、四、六、九、三	一、九、八、四、四	二、五、八、五、五	七、三、八、三	一、七、七、三、四	二、〇、七、八	八、四、六	六、四
四、三、六、〇、九	二、〇、五、〇、九	一、八、五、八、一、五	一、三、八、〇、一	八、六、七、〇	三、七、八、〇	六、七、三、六	四、五、四、五
三、五、一、四、五、四	二、八、三、二、九	九、〇、三、一、八	八、六、一、八、一	二、三、〇、九、六	一、三、四、〇、〇	四、一、〇、五	一、六、八、九
四、三、三	二、九、一、五、九	四、二、三	五、三、六、七、〇	九、七、六、〇	一、四、五、四、五、五	三、三、八、〇	二、三、八、八
一、六、九、〇、五	七、六、一、六、四、五	三、五、三、七、九	一、四、四、一、六、九	五、七、六、〇	八、六、八、三、七	九、六、六、六	一、三、〇、一
一、六、五、四、五	二、九、〇、八、三、〇	一、〇、五、九、六	一、四、四、一、四	一、四、四、一、四	一、七、八、五、七、六	九、九、六、六、六	三、四、六、二、七



220 11111 11101 4444 1111 74444 111111



M4-128

内 込 に 於 け る 預 金 に 関 す る 件

昭  
和  
23  
年  
5  
月  
24  
日

369.37
338.19
331.89

共3枚

11.1.14
---------

89
----

6 7 8 9 230 1 2 3 4 5 6 7 8 9 240 1 2 3 4 5 6 7 8 9 250 1 2 3 4 5 6



昭和二十三年十月十三日

至急

朝鮮事業者會

理事長 白石宗城

殿

内地に於ける預金に関する件

拝啓 陳者貴社の内地に於ける預金の内容について左記区分当商から照会が有りましたから御多忙中毎度御手数相煩はし恐縮であります。左記切取の上折返へし御回答の程御願ひ申し上げます。

一記

一 昭和二十年八月十五日以後朝鮮ヨリノ送金ヲ以テ預入シタル預金額

二 昭和二十年八月十五日以後朝鮮ニ對スル取立金ヲ以テ預入シタル預金額

三 朝鮮ニ在リタル預金 貯金等ニシテ昭和二十年八月十五日以後本邦内銀行ニ預ケ候

シタル預金額

四 昭和二十年八月十五日前ニ存在シタル預金額

五 前各項ニ該當シナイ預金額

切り取り線

朝鮮事業者會

理事長 白石宗城 殿

内地に於ける預金に関する件

首題の件左記の通り御回答申し上げます

記

昭和二十三年六月三十日 現在

預金区別	預入銀行名	預入額	拂出額	現在高	備考
一 昭和二十年八月十五日以後朝鮮ヨリノ送金ヲ以テ預入シタルモノ					
二 昭和二十年八月十五日以後朝鮮ニ對スル取立金ヲ以テ預入シタルモノ					
三 朝鮮ニ在リタル預金貯金等ニシテ昭和二十年八月十五日以後本邦内銀行ニ預ケ候シタルモノ					
四 昭和二十年八月十五日以前ニ存在シタルモノ					
五 昭和二十年八月十五日以後預入シタルモノ一、二、三、ニ該當シナイモノ					

備考欄ニハ預金種別五ノ預金ニ付テハ金種別發生原因ヲ記載シテ下サイ



至急

昭和二十三年十月十三日

朝鮮事業者會  
理事長 白石宗城

殿

内地に於ける預金に関する件

拝啓 陳者現在聯合軍總司令部ノ管理下ニ在リマス各社ノ内地所在財産ノ歸還ニ付テハ有シク多大ノ関心ガ持ツレル処デアリマスガ最近此レモ愈々最後の決定ヲ見ル段階ニ入りツ、アルカノ如クニ察セラレマス。此ガ如何ニ措置セラレルカハ豫斷ヲ許サレマセンガ各自ニ於テ種々ノ場合ヲ想像シテ對策ヲ考究シテ置カレルコトハ敢テ無慮ナコトデハナイ否寧極メテ緊要ナコトデアルト考ヘラレマス就テハ――之ガ無償無條件ニテ引渡サレルト云フコトニナレバ別ニ問題ハアリマセンガ今假リニ有償ニテ引渡サレルトシタラバ如何ニ對処セラレマスカ――引渡額ハ帳簿額ニ依ルカ時額ニ依ルカ或ハ其ノ他ノ標準額ニ依ルカガ問題デアリマシヨウ。今後ノ運営上第二会社ヲ通テニ設立シ得ラレル向キモアレバ又簡單ニハ出表ナイ向キモアリマシヨウ。引受資金ノ調達モ容易ニ出来ル処モアレバ又其ノ資金ハ政府デモ特別ニ繰返シテクレナケレバ如何トモスルコトが出来ナイト云フヨウナ処モアリマシヨウ。事業ノ再開或ハ転換ヲ計畫スル処モアレバ又此ノ際序ニ清算シテ仕業ヒ殘餘財産ハ分配シタイト考ヘラレル処モアリマシヨウ。其ノ他色々莫大ガ考ヘラレマス――此ノ問題ニ就テ御研究ヲ御願ヒ致シ度イト存ジマス。

當會モ此ノ問題ニ就テ諮問ヲ受ケテ居リ其ノ回答資料ト致シ度イト存ジマスカラ御面例デモ御意見ナリ御希望ナリ又云々ノ場合ハドウナルカト云フヨウナ疑問トセラレル莫ナリヲ本月末迄折返シ御回答ヲ願ヒ度イト存ジマス

右御照會迄

敬

具



昭和二十四年 月 日

会社

特殊整理人

銀行御中

大藏省令第三十一号による制限預金支払請求書

昭和二十四年政令第二九一号第四條及び第七條の規定により認められたるた記整理費用御  
支払相成度請求候也

記

一、広告費	金	円也
二、登記諸費	金	円也
三、旅費交通費	金	円也
四、通信費	金	円也
五、雑費	金	円也
六、消耗品費	金	円也
七、雑費	金	円也
合計	金	円也



鈴木武雄

朝鮮産業経済の発展と在鮮日本事業

山口文男

34

334.6  
333  
73/2.34

2 3 4 5 6 7 8 9 230 1 2 3 4 5 6 7 8 9 240 1 2 3 4 5 6 7 8 9 250 1 2 3

M4-129





産業經濟の發展と在鮮日本系事業

朝鮮經濟學會

鈴木 武雄

334.6
333
732.24



一、日本の朝鮮領有朝鮮の市場独占といふ日本資本主義の要求に根源を有したであらうか？

二、日本統治下朝鮮の経済は發展したか？

三、日本統治下朝鮮の経済的躍進は否定し得べからざる事実なるも、それが日本資本によつて遂行されたといふことは、矢張り日本による朝鮮の搾取を意味することにはならないであらうか？

四、日本は朝鮮の文化向上に努力したか？

五、朝鮮に進出した日本人諸事業は専ら日本軍部と結託して日本の事的侵略的大陸膨張のために奉仕したものでないか？

六、日本は朝鮮から米を収奪したか？

はしき

三十六年間にわたる日本の朝鮮統治は、数々の失敗があったことは勿論であるが併しなかりその意圖に於ては決して朝鮮人を搾取し、朝鮮人を奴隸的境遇に追ひやうとしたものでは断じてなかつた。否、同じアジア人バアジア人を統治するのであるから、歐米先進文明国が著しく文明程度の低い異民族を支配する植民政策とは違つた同胞的政策が意圖せられたのである。所謂「一視同仁」政策は、植民政策學上の術語に當るが、同化政策の概念を以てしては適切に説明し得ない特異の性格を有する。勿論理想と現実とは必ずしも一致せず、数々の失敗もあり、また朝鮮民族の正當なる理解を得ず其の反感を激し得なかつた場合も多かつたけれども、それは植民国家としての日本の維新と国力の弱さに基くところが多くなかつたのであつて、例へば国防上の必要から朝鮮の分離



独立を極端に怖れた結果、軍事的、警察的壓力が必要以上に加へられ、ために折角の善政も朝鮮人から誤解された場合が多かつたのである。即ち外領統治の技術としては儘かに歐米列強に比し洗練さ小ないものがかつたのは遺憾であつたが、尠く共その意圖に於ては同胞愛的なものであつた。そして、このことは經濟的分野に於ては特に然りであつて、朝鮮に進出した日本系事業をすべて朝鮮人の搾取機關視することは當らな以下二三の問題を取上げて具體的に考察し度い。

日本の朝鮮領有は朝鮮の市場独占と云ふ日本資本主義の要求に根源を有したのであらうか？

否。朝鮮の開港（明治九年、一八七六年）以来其貿易上日本の占める地位は圧倒的に大きく、一八九四—一八九五年の日清戦争までは清國と多少の競争摩擦はあつたが、それは朝鮮から見ると輸入の場合のみであり輸出においては日本の地位は圧倒的に大きかつた。日清戦争後輸入と日本との独占的地位が確立せられたが、これは次の如き事情に基くと云ふ

ことが出来る。

- (一) 朝鮮と日本との地理的その他の近接性に基く物資交流の必然性——この点においては清國と同じ立場に立つが、朝鮮と支那とは同じ原始産業国であつたから、支那は朝鮮の生産物を殆んど必要とせず、反対に既に工業化の稍進んでゐた日本はその必要が大いにあつたのである。
- (二) 舊時の朝鮮經濟は世界資本主義の魅力的な商品販賣市場たりべく余りにもセラブルな状態にあつたために、歐米列強の朝鮮に對する市場としての関心は極めて稀薄であつた。このことは、朝鮮の開港が日本によつて先鞭をつけられ、歐米列強はその後に追隨したこと、また日韓併合前における朝鮮在住の歐米人は、第一にはキリスト教の宣教師、第二には鉄道鉱山等の利権探求者で、純商業的方面の代表者が比較的少數であつた事實及びロシアは政治的方略に急にして經濟的には殆んど見向きも出なかつた事實等から考察せられるが、更にロシア大蔵省編纂の『韓国誌』（日本農商務省訳本）に記載せられたところの明治二十一年における各国商館数は、日本が二百十、清國が四十二、欧米各三、



併各一と云ふ状態の如きは連年の事情を雄弁に物語るものと言ふことが出来るであらう。

なほ左表は、併合前の朝鮮貿易を相手國別百分比であらわしたものである。

	輸 入				輸 出			
	明治二十六年 一八九三年	明治二十八年 一八九五年	明治三十一年 一九〇五年	明治三十四年 一九一〇年	明治二十六年 一八九三年	明治二十八年 一八九五年	明治三十一年 一九〇五年	明治三十四年 一九一〇年
日 本	五〇・二	七二・二	七三・七	六三・七	九〇・九	九五・三	七八・一	七七・二
支 那	四九・一	二六・二	一八・六	九・七	七・九	三・七	二一・八	一五・二
ロシヤ	〇・七	一・六	〇・三	—	一・二	一・〇	〇・一	五・八
イギリス	—	—	一・二	一・五・六	—	—	—	〇・一
アメリカ	—	—	六・二	八・一	—	—	—	一・六
其 他	—	—	—	二・九	—	—	—	〇・一
合 計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・一	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

以上の事実から、日本の朝鮮領有は決して政治的支配による朝鮮市場の非他國管轄のためでなく、たゞこの首肯される。若し多額の貿易が朝鮮

朝鮮半島に対する政治的、軍事的進出が無かつたら、純経済的には日本は朝鮮の政治的領有を必ずしも必要としなかつたであらう程に、朝鮮は於ける日本の経済的優位始終変るところがなかつたのである。従つて日清戦争後日本が朝鮮に対して採つた態度は、朝鮮の独立であり、朝鮮の封建的諸制度の近代的改革への勧奨援助であつて、その併合ではなかつた。かくて、日露戦争後の朝鮮の保護國化、次いで明治四十三年（一九一〇年）の日韓併合は、経済的動機に基づくのではなく、全く當時の吾國並に極東情勢による国防的、軍事的動機に基づくものであつたと言はねばならぬ。従つて、日本政府は日韓合併後十年間は旧韓国関税を据置いたものであつて、このことは日本の関税線による朝鮮の包攝を延期して朝鮮市場を暫く従来の様に自由な国際競争の舞台としておくことに他ならず、即ち謂はゞ経済的領有は暫くこれを延期したのである。

このやうに、日本の朝鮮領有が国防的、軍事的動機に基き経済的支配の動機に基かなかつたといふことは、其後の日本統治下における朝鮮の産業政策が、時として（特に支那事変以後）軍部の指導に引きさられた



場合が無いでなかつたけれども、全体として朝鮮人を搾取するといふ典型的植民地經濟政策の性格に乏しかつたことを物語らるのである。而して、ここに注意すべきは、日本の朝鮮領有が國際的承認を得たものであつて、軍事的行動による占領、奪取ではないといふことである。この点、今次大戰前夜におけるドイツの隣邦各地の非合法的併合、遂に反植軸諸國の正式承認を得なかつた満州國の支那からの分離独立、支那事変並に太平洋戰爭下の日本軍事占領地域と根本的に異なることを認識すべきであらう。

## 二、日本統治下朝鮮の經濟は發展したか？

然り。統治三十六年間に於ける朝鮮産業經濟の向上發展は實に内外と睽目せしむるものがある。そしてこの驚異すべき躍進が専ら日本の技術的指導と資本移植によるものであることは言ふまでもない。いま、この産業經濟躍進の跡を明らかにするために、併合以前の朝鮮經濟を回顧するに、先づその産業構造は農業と生産力の支柱とする原始産業構造であり、工業は殆んど農村の家内手工業の程度に止つてゐた。

善生永助博士の調査にかゝる『朝鮮の物産』は、李朝初期、李朝中期、李朝末期に分つて、李朝時代朝鮮の物産を詳細に記述した後、「朝鮮の物産が農産、林産、水産を主としてゐることは昔も今も變りがない。物産の分布状況を通じて觀たる朝鮮の国民生活が、約四百年前、約百五十年前、また約五、六十年前も、共に原始的生活の域を脱してゐない」と結論し、また「李朝末期における生産品は、農産品、林産品及び水産品を主とし、工業品にありても機械を用ふる工場工業は殆んど無く、いづれも小規模の原始的手工業に依る生産に過ぎなかつた」と結論してゐる。露岡大藏有編纂の『韓國誌』もまた「韓國は未だ家族經濟の域を脱せずして……生活上の必需品は大抵家族の手によりて凡てを準備し去々」と記してゐる。これらの記述によつても、併合前の朝鮮經濟が極めて低度の工業生産力しか有しない典型的、アジア的な原始産業構造にあつたことが理解されるが、而してまたその原始産業生産力は驚くべき低位にあり縮小再生産的傾向すら認められないうち程の靜止的、停滯的狀態にあつた。併合前における朝鮮經濟の支柱であつた農業生産力の停滯西



荒廢は、自然的条件に基くよりは政治的、社会的条件にその原因を有し  
たと言ふことが出来るが、一言にして言へば李朝政府及び官吏の施政と  
苛斂誅求、封建的寄生的地主の高率小作料の收取が農耕農民を極度の  
貧窮と低劣な文化水準に追ひ込んだために、灌漑、排水、防水等の農業  
施設は着しく荒廢し、農具、耕牛、種子、肥料の如き生産手段は不足と  
告げ、而して極めて幼稚、原始的なものであった。従つて「三年一作、十  
年三作」とまで言はれた頻繁たる旱害と水害、この自然の酷烈さ、そ  
れが朝鮮農村を疲弊せしめた大きな原因である、これは相違ないが、また農  
村を疲弊せしめた政治的、社会的条件が原因となつて、自然を一層酷烈  
ならしめてゐたと言ふことが出来る。それは、かの朝鮮名物とまで言  
はれた泰山、即ち治山の積廢が如何に水害を苛酷ならしめたか、また韓  
未嶺全面積の約八割にも及ぶ天水岳（灌漑設備なき水田）が如何に旱害  
を甚大ならしめたかといふことは想し易い、容易に首肯され得るところ  
である。かくて、併合以前の朝鮮經濟の靜止的停滯否縮小再生産とす  
るも言ひ得る、ミゼラブルな状態は、次の簡單な數字を以て最も適切に要

約することが出来る。即ち、耕地面積は李朝開国二百一年より隆熙元年  
に至り二百十五年間に四十五万九百十四結（結は地稅の課稅標準の單位）  
に割合は、約四割弱の絶對的減少を來し、人口は李朝英祖二十九年  
より光武八年に至り百五十一年間、即ち李朝の中葉より末期に至る期間  
において百三十六万九千九百二十九人、割合にして二割弱の絶對的減少  
を來したものである。

朝鮮の經濟がこのやうなミゼラブルな状態から、併合後僅か三十数年  
の間は今日見る様を一大發展を遂げると至つたのは、日本の指導と  
資本移植の結果であると言ふも過言ではない。左表は朝鮮經濟力向上と  
示す若干の數字である。

朝鮮人口	明四三	一三、二八、七八〇	昭一六	二五、九一、五、〇六二	昭一八	二五、八二、六、三〇八
耕地面積(千歩)	明四三	二、四六、四	昭一六	四、八八、八	昭一七	四、八四、九
生産價格(千円)	明四四	一、五八、四、一四〇	昭一五	四、八一五、五九六	昭一八	六、四八五、六三二
移輸出額(千円)	明四五	一九、九一三	昭一六	九七三、二九六	昭一九	一、〇〇四、九九八
輸移入額(千円)	明四三	三九、七八二	昭一六	一、五一九、五三七	昭一九	九五五、八九五



電力 (KW)	明治四十四年	昭和十六年	昭和十八年
電燈数	明治四十四年	昭和十六年	昭和十八年
鉄道營業里程	明治四十四年	昭和十六年	昭和十八年
道路延長 (km)	明治四十四年	昭和十六年	昭和十八年
運賃郵便物取扱 (千円)	明治四十四年	昭和十六年	昭和十八年
電話加入数	明治四十四年	昭和十六年	昭和十八年
會社株式資本金 (千円)	明治四十四年	昭和十六年	昭和十八年
銀行預金 (千円)	明治四十四年	昭和十六年	昭和十八年
銀行貸出 (千円)	明治四十四年	昭和十六年	昭和十八年
金融組合預金 (千円)	明治四十四年	昭和十六年	昭和十八年
金融組合貸出 (千円)	明治四十四年	昭和十六年	昭和十八年
郵便貯金 (千円)	明治四十四年	昭和十六年	昭和十八年
總務府特別會計 (千円)	明治四十四年	昭和十六年	昭和十八年
租税收入 (千円)	明治四十四年	昭和十六年	昭和十八年

なほ右の数字にはあらはなかつたが、生産額の躍増と生産部門別に見ると、農業その他原始産業等の向上も頗る顯著であるが、それに見つて工業等近代産業の飛躍がめざましく、最近十年間の朝鮮は最早原始産業地域と云ふことが適切でない程に「農工促進」する複雑な産業構造を形成するに至り、且つ工業生産力も、支那事変以来の戦争の必要に基いたとは云へ、重工業、化学工業の生産財産の躍進と並し、それ以前の軽工業、平和産業の飛躍と相待つて一應の体系を形成するに至った。

各種産業別生産額 (X印推定)

	明治四十四年	昭和十六年	昭和十八年
農産物	三〇七、二三六	六七三、一〇〇	一、四九〇、八九二
畜産物	二二、一三三	二九、七五五	六九、五九四
林産物	一九、七九五	五九、三九八	一三八、七〇九
水産物	九、四一八	七、五六二	一八、九五三
鉱産物	六、一八五	二、七四一	一、八〇、〇〇〇



工  
庄  
物  
計

三	一
八	二
一	三
二	四
三	五
四	六
五	七
六	八
七	九
八	十
九	十一
十	十二
十一	十三
十二	十四
十三	十五
十四	十六
十五	十七
十六	十八
十七	十九
十八	二十
十九	二十一
二十	二十二
二十一	二十三
二十二	二十四
二十三	二十五
二十四	二十六
二十五	二十七
二十六	二十八
二十七	二十九
二十八	三十
二十九	三十一
三十	三十二
三十一	三十三
三十二	三十四
三十三	三十五
三十四	三十六
三十五	三十七
三十六	三十八
三十七	三十九
三十八	四十
三十九	四十一
四十	四十二
四十一	四十三
四十二	四十四
四十三	四十五
四十四	四十六
四十五	四十七
四十六	四十八
四十七	四十九
四十八	五十
四十九	五十一
五十	五十二
五十一	五十三
五十二	五十四
五十三	五十五
五十四	五十六
五十五	五十七
五十六	五十八
五十七	五十九
五十八	六十
五十九	六十一
六十	六十二
六十一	六十三
六十二	六十四
六十三	六十五
六十四	六十六
六十五	六十七
六十六	六十八
六十七	六十九
六十八	七十
六十九	七十一
七十	七十二
七十一	七十三
七十二	七十四
七十三	七十五
七十四	七十六
七十五	七十七
七十六	七十八
七十七	七十九
七十八	八十
七十九	八十一
八十	八十二
八十一	八十三
八十二	八十四
八十三	八十五
八十四	八十六
八十五	八十七
八十六	八十八
八十七	八十九
八十八	九十
八十九	九十一
九十	九十二
九十一	九十三
九十二	九十四
九十三	九十五
九十四	九十六
九十五	九十七
九十六	九十八
九十七	九十九
九十八	一百
九十九	一百零一
一百	一百零二
一百零一	一百零三
一百零二	一百零四
一百零三	一百零五
一百零四	一百零六
一百零五	一百零七
一百零六	一百零八
一百零七	一百零九
一百零八	一百一十
一百零九	一百一十一
一百一十	一百一十二
一百一十一	一百一十三
一百一十二	一百一十四
一百一十三	一百一十五
一百一十四	一百一十六
一百一十五	一百一十七
一百一十六	一百一十八
一百一十七	一百一十九
一百一十八	一百二十
一百一十九	一百二十一
一百二十	一百二十二
一百二十一	一百二十三
一百二十二	一百二十四
一百二十三	一百二十五
一百二十四	一百二十六
一百二十五	一百二十七
一百二十六	一百二十八
一百二十七	一百二十九
一百二十八	一百三十
一百二十九	一百三十一
一百三十	一百三十二
一百三十一	一百三十三
一百三十二	一百三十四
一百三十三	一百三十五
一百三十四	一百三十六
一百三十五	一百三十七
一百三十六	一百三十八
一百三十七	一百三十九
一百三十八	一百四十
一百三十九	一百四十一
一百四十	一百四十二
一百四十一	一百四十三
一百四十二	一百四十四
一百四十三	一百四十五
一百四十四	一百四十六
一百四十五	一百四十七
一百四十六	一百四十八
一百四十七	一百四十九
一百四十八	一百五十
一百四十九	一百五十一
一百五十	一百五十二
一百五十一	一百五十三
一百五十二	一百五十四
一百五十三	一百五十五
一百五十四	一百五十六
一百五十五	一百五十七
一百五十六	一百五十八
一百五十七	一百五十九
一百五十八	一百六十
一百五十九	一百六十一
一百六十	一百六十二
一百六十一	一百六十三
一百六十二	一百六十四
一百六十三	一百六十五
一百六十四	一百六十六
一百六十五	一百六十七
一百六十六	一百六十八
一百六十七	一百六十九
一百六十八	一百七十
一百六十九	一百七十一
一百七十	一百七十二
一百七十一	一百七十三
一百七十二	一百七十四
一百七十三	一百七十五
一百七十四	一百七十六
一百七十五	

一	一
二	二
三	三
四	四
五	五
六	六
七	七
八	八
九	九
十	十

三  
二  
六  
四  
五  
九

六、四八五、六三二

各種産業別生産額百分比及指數

	農產物	畜產物	林產物	水產物	鉱産物	工業物	總計
明治四十四年	八・一%	一〇・〇	一〇・〇	二・	二・	四・	一〇・
昭和六年	六・〇%	一一九	三〇・〇	七・	三五・一	六六一・七	三九二
昭和十二年	四九・%	四八五	七〇・一	六・	一九一・〇	六一三・二	七九四
昭和十八年	三二・%	六五〇	二三三五	五・	一二、二六	四二、一九一	一〇〇、七七〇

即ち各種産業共その生産價格は激増しとなり、特に鉱工業生産額の増加は飛躍的であり、また総計中に於て占める工業の百分比は近年に至る程激増し、昭和十八年においては、工業生産額が農業生産額を凌駕

工場生産額類別

すゝに至つたのである。し  
「農工係連」の産業構造がここに明瞭に看取さ

生	昭
產	和
額	十
百分	一
比	年

昭和十七年  
生産額 百分

紡織工業	金屬工業	機械器具工業	窯業	化學工業	木材及木製品工業	印刷製本業	食糧品工業	ガス電気業	其他工業
九〇、三七八	二八三六六	七、三九九	一九、〇三二	一六二、四六二	一九、二三〇	一二、四二七	三二〇、五八〇	三九、九八九	一〇、〇〇三
一、二七	四、〇	一、〇	二、七	二、二九	二、七	一、八	四、五二	五、六	一、四
一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇
三一三、三二七	二〇七、五四七	一〇五、九七〇	八二、一八〇	五六六、七二八	一一一、二一三	二三、七六七	四〇八、二二三	二六、三二九	二三、六二三
一六、八	一一、一	五、七	四、四	三〇、一	六、〇	一、三	二、一九	一、四	一、三
三四六	七三一	一四三二	四三一	三四五	五七八	一九一	一二七	六五	二三六



（五人以上の職工を使用する設備を有し、又は常時五人以上の職工を使用する工場の生産額であつて、官營工場を生産並に修理加工に係るものを除く、従つて前掲各種産業生産額中の生産額は一段セズ）

即ち、金屬、機械器具、窯業及び化學の所謂重化學工業の比率は支那事変前年の昭和十一年には三〇・六%で、その頃までの朝鮮の工業化が輕工業、平和産業中心であつたことを物語つてゐるが、昭和十七年には重化學工業の比率は五・一・三%に躍進し、重需基礎産業即ち生産財産業への重需移行を如実に示してゐる。

之を要するに、人口約二倍、耕地約二倍の増加は、前述せし李朝時代における人口及び耕地の絶對的減少と對比するならば、日本統治下における朝鮮産業の躍進が決して朝鮮人の犠牲としての躍進でないことを首肯せしむるものであらうが、また「農工進」の産業構造を確立し、内地經濟と小型にしたやうな一種の綜合經濟圈をここに樹立しつつあつたこと

は、假令それが中途に止つて戦況の不利、次いで終戦となり、例へば民需消費財産業の自立、生産財産業中特に機械工業の自立においてなほ不充分の果を齎したと云へ、兎も再母國隷屬の偏倚産業構造を特徴とする公式的植民地經濟とは著しく異なる行方であつたと言ふことが出来る。所謂「一視同仁」政策は、日本の朝鮮統治の根本方針であつたが、それは公式的植民地政策を否定する一面を有してゐる。その特異の一面は、左の朝鮮産業政策の上によく現はれてゐるのであつて、強いて類似の例と他に需むるならば、イギリスの自治領經濟に相似たるものがある。尤もその規模において比較すべくもないが、しかし植民地に本國經濟の縮圖の如き産業構造を樹立し、謂はば「第二の本國經濟」を實現せんとした事例はアングロサクソンの移民經濟たる自治領經濟を除いては、異民族支配の本質とする植民地には決して見られなかつたところであらう。

三、日本統治下朝鮮の經濟的躍進は否定し得べからざる事實なるも、

それが日本資本によつて遂行されたといふことは、矢張り日本によ

る朝鮮の掠取を意味することにはならないであらうか？



資本は所謂剩剰價値の搾取を本質とするといふマルクスの理論に立脚するならば兎も、然らざる限り朝鮮の経済的躍進が日本資本によつて遂行せられたといふことは、それ自身直に民族的搾取を結論することにはならぬ。

もとより朝鮮のこの驚異すべき経済的發展が若し朝鮮の民族資本を主体として実現せられたのであるならば、朝鮮民族内部の搾取問題は依然として残るけれども、少くも民族的搾取の問題は最初から問題とならなかつたに相違ない。しかし、朝鮮の民族資本は種々の事情によつてその成長が頗る困難であつた。第一に、併合前の靜止的、停滯的原始産業經濟の下に民族資本の形成を云為することは勿論不可能である。國家及び官僚は單に苛斂誅求によつて消費し、封建的地主は高率小作料の収取關係の上に寄生してゐたのであるから、國家資本及び私的資本の形成は、餘地は全く存しなかつた。併合前のミゼラブルな朝鮮經濟はここにその原因をもつと言つてもよい。第二に、このやうな状態から出發した併

合後の朝鮮産業開發は朝鮮の民族資本の自然的成長を待ち得ず、日本資本の移植に依らねばならなかつたことは当然である。ここに大きなハンディキャップが生じ、たゞにその後において民族資本の成長は競争上頗る困難となつた。第三に、しかしそれは理論上一應言ひ得ることでは、實際上は朝鮮人自身民族資本の成長を阻んだ事情が注目せられねばならない。それは、封建的高率小作料の残存による土地利廻の高水準のため、朝鮮人の有産者はいつまでも土地に執着し証券や銀行預金等の近代的形態における財産所有を選好しなかつたからである。

右のやうな事情によつて、朝鮮の産業開發は國家的又は私的の日本資本によつて遂行せられた。朝鮮事業公債法による公債を通じての日本投資約二十億圓、民間投資約七十億圓、他に朝鮮在籍會社中内地人系と見らるゝもの、拂込資本金約十八億圓（昭和十三年の調査、内地人系八九%を昭和二十年六月現在の朝鮮在籍會社拂込資本金額に求めたるもの）を日本人の現地再投資と看做すならば（勿論前記民間投資と重複する部分もあるが）百億圓以上の日本資本が投下された動因になり、而して朝鮮の産業開發はなほその途上にあり、既存投資の果実の内地への還流と遂



から超える内地より朝鮮への資金流入の續き、資金の内鮮流出入関係は連年朝鮮側の巨額の入超であった。(例へば数字は少し古いが昭和八年の内鮮貿易外収支を見ると、証券利子及配當金は朝鮮の支拂超過で四千一百万円、事業及勞務利益も同じく朝鮮の支拂超過六百万円、これに對し放資乘に回収関係は朝鮮の受取超過一億九千五百万円となつてゐる)このやうな日本資本の投下によつて、併合前のあのミゼラブルな朝鮮經濟は全くその面目を改め、産業の著しい後進性を特徴とするアジアにおいて、兎し再と日本内地に次ぐ先進性を誇り得る状態にまで到達し得たのである。そして「農工保護」するこの綜合的産業構造の發展は、朝鮮人に新たな稼得場所と稼得機會を與へ、農業の生産力——それと靜止的停滯状態にあつた——によつて僅かに支へられぬ朝鮮人の民度が全体として大いに向上する原因となつたことは否定すべからざるところである。例へば朝鮮人の職業別人口推移を見ると、農業林業水産業等の原始産業人口の全人口に對する比率は大正元年の八二・九%から、昭和十六年の七三%に減じ、工業、商業及交通業、公務自由業は夫々相對的

比重を増加してゐる。(工業は一・四%から三・九%へ、商業及交通業は大八%から八・一%へ、公務自由業は一・二%から三・五%へ)そして無職者の數が絶對的にも比重においても減少してゐるのであるが、以上のことは原始産業がなほ朝鮮人の過半の生活を支へてはゐるが、併合以前と比較すれば、原始産業以外の新たな所得源泉が朝鮮人のために増加し、未だことを示すものに他ならない。人口の絶對的減少からその二倍弱への増加及びその職業別分布の多様化——これ程雄大な民衆向上の指標はない。そしてこれは日本資本による複雑な産業各部門の發達に負かすものである。勿論朝鮮人の所得水準を内地人の水準にまで引揚げること及び朝鮮人内部における階級分化従つて所得分布の差別を無くすること、は出来なかつたけれども、前者については併合以來僅かに三十數年の年月を以てしては言ふ迄もなく困難であり、後者については朝鮮經濟の近代化即ち資本主義經濟發達の當然且つ己むと得ざる所産と言はぬはならない。



日方朝鮮の文化向上に努力したか？

然り、特に朝鮮人に対する教育は同一視同仁し政策の立場から、施政當局の最も努力するところである。朝鮮における近代的な初等教育機関は日本の保護政治時代日本人の参劃の下に始めてその創設を見られたのであるが、併合以前にあっては官立九校、公立五十一校、私立として公立と同一の取扱を受けたもの四十校を算するに過ぎなかった。然るに併合以来は著しくその数を増加し、殊に大正八年度より四ヶ年にわたつて三面一校計劃を完成し、昭和四年以降八ヶ年を以て一面一校計劃を完成し、昭和十一年度には學校の無い面（村）は一つも無いことになった。更に昭和十二年度より同十七年度にわたり倍加拡充計畫を完成し、昭和十八年度より二十一年度にわたり第三次朝鮮人初等教育普及拡充計畫を実施しつゝあつた。

昭和十七年五月底現在における初等學校狀況は左表の如くである。

		児童		教員	
		朝鮮人	他	朝鮮人	他
官立國民學校	一四	六二五	六二七〇	一	五八九五
公立一部國民學校	五五二	九七、一三七	五六五六	一六	一〇二、八〇九
公立二部國民學校	三一、一〇	一、〇四〇	一六八三、八九四	一一	一六八四、九四五
私立認定學校	一四一	二八	六三四二六	—	六三、四五四
公立簡易學校	一六八〇	二	一一七、二〇九	—	一一七、二〇一
合計	五四七	九八、八三二	一八七、六四五五	二七	一九七五、三一四

主として内地人児童を收容する公立一部國民學校を除き四、九四五校（修業年限二年の簡易學校を除いて）三、二五校一を算するに至つたことは併合当初と比較して寔に雲泥の相違がある。なほ朝鮮人生徒数は百八十七万六千余人に上り、これを併合直後明治四十五年五月底の朝鮮人生徒数四万四千六百三十九人に比較するとき朝鮮人に対する初等教育普及の效果は顯著なるものがあると言はなければならぬ。而もこの就學児童数



も以てして、その推定年齢児童に対する比率即ち就學率口約五割五分であるが、前述した昭和十八年度より実施中であつた第三次朝鮮人初等教育普及拡充の完成年度たる昭和二十一年度には就學率は約七割に達する豫定であつた。かくて朝鮮人に対する義務教育制度は昭和二十一年度より実施せられることになり、多年にわたる初等教育普及拡充の努力は茲に愈々その実を結ばんとするところである。左は中等学校以上について、銳意増設が行はれ、各種専門学校より綜合大学まで一應の体制が確立された。また朝鮮人子弟は内地の各種教育機関に進学してゐたのであつて、昭和十七年五月末における韓内中等学校以上の朝鮮人学生生徒数は八五、四八七人であるが、内地の中等学校以上に在学する朝鮮人学生生徒数は同年度一五、八七八人を算してゐるのである。

以上は一例であるが、これを以て見ても日本は朝鮮人の文化的向上に大いに努力したと言ふことが出来る。そしてそのことは、日本が朝鮮人の奴隸的搾取の専ら終結したことを示してゐるのである。

### 五 朝鮮に進出した日本人諸君の専ら日本軍部と結託して日本の軍事侵略的大陸膨張のために奉仕したものでないか？

否。日本軍部が朝鮮の産業政策に積極的を干渉し行ひ始めたのは支那事変以後——正確には事変前年の昭和十一年（一九三六年）秋総督府に開催せられた朝鮮産業經濟調査會以後のことであつて、太平洋戦争以後は特に積極的であつたが、この所謂戦時經濟期を除くは、朝鮮の産業開發は軍部の指導するところではなかつた。勿論鉄道、道路等の建設につき軍部の国防戦畧上からの要求が重要な意義をもつたが、それは概ね國家資本の投下部面であつて、私的資本の投下部面においては必ずしもさうではなかつた。このことは、朝鮮が満州事変以後においても「統制主義」を仲々採らず、寧ろ當時内地から「統制破り」或は「自由主義」として批難を浴びた程、凡そ統制主義とは対蹠的な態度を採つてゐたことによつても窺知され得る、即ち内地の重要産業統制法の朝鮮施行を朝鮮が容易に肯でせず、たゞ朝鮮といふ地域そのものが内地から見ても、殆



かゝるチル・アウツサイダ。如き觀を呈し、統制を講ずるに内  
地過剩資本の朝鮮進出を促進したことが、今日の朝鮮工業化の發端であ  
つたことは大いに注目すべき要するものと言はねばならない。概言すれば、  
朝鮮の工業化は平和産業から出發したのである。

この戦時經濟下、軍部の干渉の下に立たざるを得なかつたのは已むこ  
得なかつたとしても、朝鮮においては滿州その他占領地域と異り、朝鮮  
總督府が嚴然たる存在を誇つてゐたから、そして朝鮮軍司令部と總督府  
の立場をよく諒解してゐたから、直接に朝鮮産業を指揮するやうなことは  
先づ無かつたと言つてもよい。たゞ日本の經濟全体が、軍需産業化した  
のであるから、朝鮮ひとりその例外たり得なかつたといふに過ぎない。  
このことは、例へば企業整備において、内地は極端な民需産業の軍需轉  
換を断行したが、朝鮮は最初「維持育成」方針を堅持し、次で軍部の圧  
力がそれを維持し得なくなつて後、能く限り民需産業の圧縮を回避す  
る企業整備方策をとつたことによつても窺はれる。

之を要するに、朝鮮關係事業者は今次戦争以前より朝鮮開發、民生福

利増進に貢献せるものであつて、軍閥により侵略戦争に利用せられたの  
りは戦時下の一時的現象であるに過ぎない。

## 六、日本は朝鮮から米を収奪したか？

否。なる程大規模な産米増殖計畫が朝鮮に実施さるゝに至つた直接の  
動機は、第一次世界大戦を契機とする日本工業の躍進に伴ふ内地におけ  
る深刻な食糧不足（大正七年、一九一八年米騒動勃發）に對處するた  
めであり、且つ産米増殖率以上に鮮米の内地移出が激増し、ために鮮内に  
おける米消費量が減退するに至つたのは事實である（朝鮮産米増殖計畫  
は大正九年より実施、同十五年改訂、昭和九年打切）。それは左表、示  
す如くであるが、しかしこれを以て直に日本が朝鮮から米を収奪したと  
なすことは早計であり、況んやこれを以て日本人農事關係事業者が鮮米  
の対日供給のためにのみ朝鮮において農事に精勵したとなすことは出来  
ない。



左の統計表を左に掲げる。

米穀年産 五ヶ年平均	米生産高	指数	移出高	指数	総消費高	一人當消費高
大正一五	一二、三〇三	一〇〇	一〇、五五六	一〇〇	一一、一一四	〇、七一一八
二一〇	一四、一〇一	一一五	二、一九六	二〇八	一、七〇九	〇、六八六〇
二二五	一四、五〇一	一二八	四、三四二	四一一	一、六六三	〇、五八七一
昭和二六	一五、七九八	一三八	六、六〇七	六二六	九、六六九	〇、四九六四
二二	一七、〇〇二	一三八	八、七五七	八二九	八、四五四	〇、四〇一七

(一) 総消費高は、生産高に前年度よりの特越高及び輸移入高を合計したる供給高より輸移出高及び翌年度への繰越高を加へたるものと差引きたるもの。昭和十二年以降については後掲一

の表に、右表は一應日本の米収奪を証明してゐる如くであるが、この小については次の諸点を考慮する必要がある。

(イ) 大正元一五年間平均の朝鮮における一人當米消費高は前掲表の如く、七一八八石であるが、この期間における雑穀消費高は一、二五三六石

で、米と雑穀を合した一人當消費高は一、九七二四石となる。この二石内外の消費高は寧ろ多い位で、昭和年代に於ける主食糧の減退は内地のそれと比べると考へられ、内地と多少の開きがあるが、問題とする程大きな開きはない。いづれにしても朝鮮人の大多数を占める朝鮮農民は日本の産米増産計画実施以前から、米よりも雑穀の方をより多く食つてゐたのである。

(ロ) 産米増産計画実施期即ち昭和年代の初期において、鮮米の対日移出が旺盛であつたことは前掲表の如く事實であるが、この対日移出米は戦時下の如き強制供出によつて朝鮮農民から取上げられたものではない。ことに注意しなければならぬ。朝鮮農民は寧ろ雑穀を食つて高い米を賣つたのであり、この米の最も強い需要者として日本内地があつたことを云ふ純然たる経済現象がここに見られ、過ぎないものである。そして戦時下の強制供出時代には、米の不作が續いたため拘らず、満州支那等大陸向け鮮米輸出が増加したに拘らず、一人當消費高は却て増加した。この事實を注目すべきである。左表は昭和十二年以降の統計である。



これを見て一人当米消費高は昭和二一七年の五年平均が最低であった  
ことを知ることが出来る。

米穀年度	米生産高	移出高	総消費高	一人当消費高
昭和十二年	一九、四〇 <small>七</small>	七、一六 <small>七</small>	一、二五 <small>九</small>	〇、五六 <small>七</small>
十三年	二六、七九六	一〇、七〇二	一、五七 <small>八</small>	〇、七〇三
十四年	二四、一三八	六、〇五一	一、七六 <small>四</small>	〇、七六 <small>一</small>
十五年	一四、三五五	四、二九	一、三九 <small>八</small>	〇、六二 <small>八</small>
十六年	二一、五二七	三、六八一	一、七五 <small>一</small>	〇、七二 <small>八</small>
十七年	二四、八八五	五、六四四	一、九一 <small>三</small>	〇、七五 <small>一</small>
十八年	一五、六八七	〇	一、六五 <small>二</small>	〇、六二 <small>四</small>

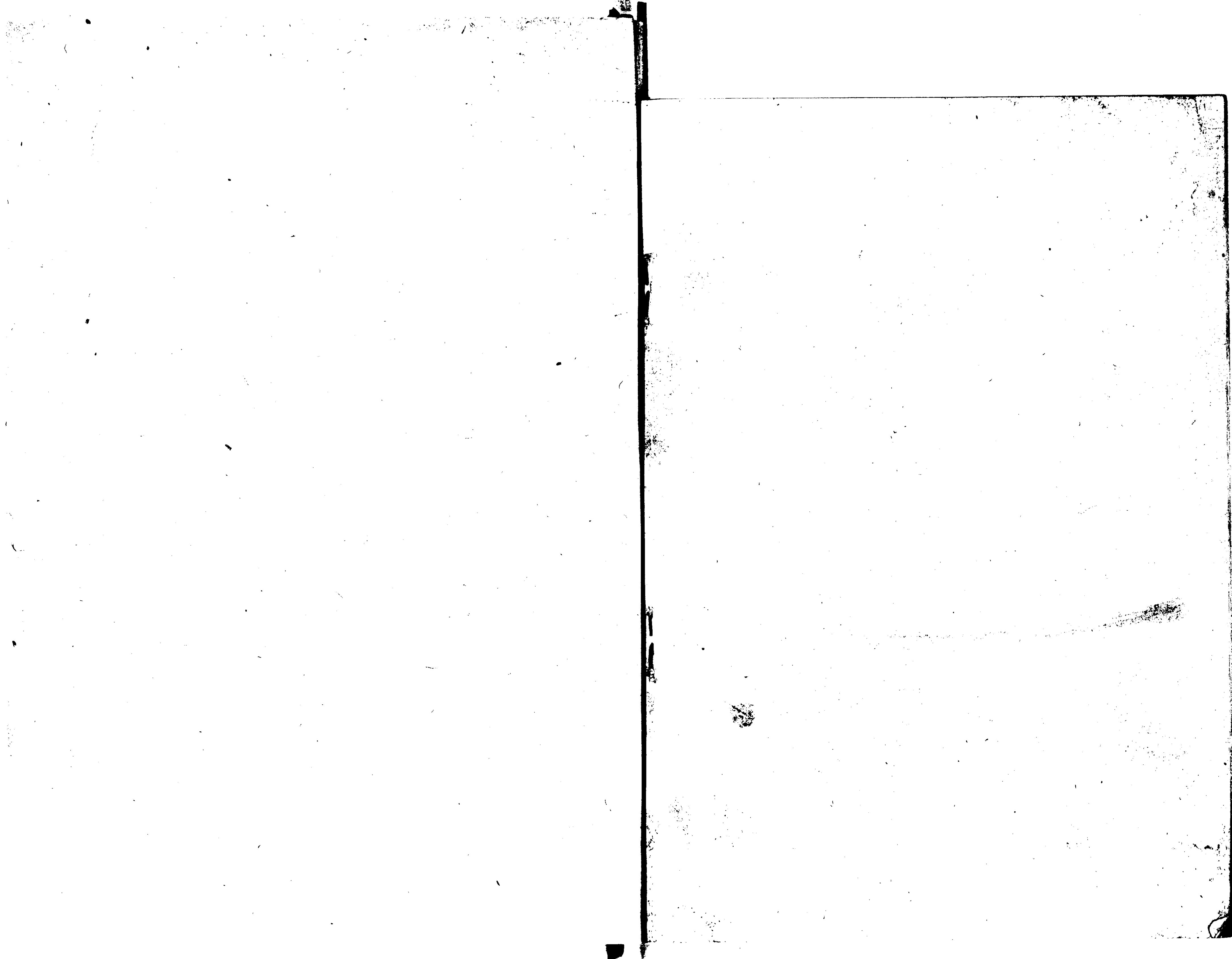
(ハ) 朝鮮人の主食消費の内容が米より雑穀の方が多かったといふことは、倭令産米増殖政策以前より事実であったとしても、一應の問題とはなり得る。しかし、これこそ大正九年より昭和九年までの朝鮮経済を特徴づけた米穀單種耕作型産業構造の反映に他ならず、米の商売生産

の結果である。この時期において何故米穀單種耕作型産業構造がとられたか、それは日本が食糧問題解決のために朝鮮に押しつけられた産米構造ではないか、との批難もあり得るが、前述した併合前の朝鮮経済のミゼラブルな状態から朝鮮経済を立ち上げしめすためには、米穀單種耕作型産業構造の採用以外に如何なる手段があつたであらうか。即ち當時の朝鮮産業経済の諸条件の下において、米以外その生産に主力を注ぎ、その對外輸出によつて経済向上のために必要な諸物資を輸入するに適當な生産物が果してあつたであらうか。また当時日本が國外朝鮮米の強い買手が他にあつたであらうか。斯く考へるときは、大正九年から昭和初年にかけて朝鮮の産業政策の重心が産米増殖に置かれ、従つて米穀單種耕作型産業構造が確立せられたことは決して批難するべきことではなからう。この後の朝鮮経済躍進の礎石を築いたものと云ふことが出来る。尤も朝鮮が独立国であるの産業政策を自主的に決定し得る立場になつたとしても、当時の諸条件の下において朝鮮経済の向上を圖るためには必ず米の對日輸出をいさぐす米穀單種耕作型産業構造の採られたに相違ない。



を小改り、朝鮮が安い雑穀を食つて高い米を移出したのは、今日の幾達した朝鮮経済に到達するためには必然的に経過しなければならぬ朝鮮経済発展の一段階であつたと言はねばならない。このことは、民族の差異や国境の問題を離れても、社会経済的に農村が一度は通過せねばならぬ段階であることと思へば、米穀單種耕作型産業構造に立つ朝鮮の内地と都會とすれは恰かも農村の如き立場にあつた譯であつて、ここは特別の民族的差別政策の意圖をまだ付度する必要は必ずしもないのであらう。











M4-131

大正十年九月

産業政策第一關スル管見

宋秉峻



五

産業政策ニ關スル管見



# 産業政策ニ関スル管見

今度新ニ開カレ、朝鮮産業調査會ニ於テ總督府ヨリ提出シタル案件、重ナル者ノ中ニ本委員、切實ニ感ズル處ハ

- 一、産米改良增收ニ関スル件
- 一、米以外ノ重要作物ニ関スル件
- 一、養蚕ニ関スル件
- 一、林野處分ニ関スル件
- 一、金融ニ関スル件
- 一、鐵道政策ニ関スル件

等ニシテ産米改良增收及ヒ米以外ノ重要作物改良增收ヲ圖ルハ先ツ農事改良ノ根本的施設ヲ俟タザレバ能ハサルモノナリ最近十数年来官設ノ勸業模範場、種苗場并ニ日本人會社經營ニ係ル水利事業及ヒ水利組合等ノ設置アルヲ見ルモ之レニ依リテ



朝鮮ノ農民ニ利潤ヲ與フルコト未ダ洽ネカラズ隨ツテ耕作地ノ整理、農法ノ幼稚、未墾地荒蕪地ノ自然ニ放任シタル有様ハ未ダ原始ノ狀態ヲ免レズ且ツ地方ノ小農ハ地主ノ壓迫ニ苦メラシ年中耕作ニ努ムルモ遂ニ得ル處ナク却テ飢餓ニ瀕スル悲境ニ陷ルミナレバ耕作地ノ整理、農法ノ改良等ニ就テハ思モ寄ラズ漸次農村ノ疲弊ヲ来タシ餘所ニ流離スルノ己ムヲ得ザルニ至レリ是レ識者ノ常ニ憂慮スル所ニシテ本委員モ先年是レニ鑑ル處アリ日鮮有志ト共ニ謀リ農事改良ニ関スル稍ニ大規模ノ會社設立ヲ企テシモ生憎政府ノ保護意ノ如クナラズ中途ニシテ頓挫ヲ見タルハ今更遺憾トスル所ナリ蓋シ朝鮮ハ從來農本國タルニモ拘ハラズ上下共ニ之ヲ等閑ニ付スル傾向アルハ結局朝鮮ノ發展ヲ無視スルモノト云フベク且朝鮮民衆ノ向上ニモ非常ナル影響ヲ及ボスモノナリ若シ政府ニシテ自ラ之ニ関スル施設ヲ為ス機會未ダ到来セズトセバ民間ノ有志ヲ獎勵シ又ハ之レ

ニ保護ヲ加ヘテ前述ノ如キ農事會社等ノ設立ヲ促進シ農事改良ニ全力ヲ注グベキナリ

又養蚕ニ関シテハ朝鮮ノ氣候ハ養蚕上適當ノ氣温ト濕度トヲ保有シ為メニ蚕兒ノ發育良好ニシテ其繭質ノ佳良ナルコト、勞力ノ供給、勞銀ノ低廉其他桑樹ノ到處栽培ニ適セザルナキ等蚕業ノ要素ヲ具備セルモノナルヲ以テ昔ヨリ不完全ナカウモ養蚕ヲ農家ノ副業トシテ既ニ行ハレタリキ從來當局ハ之ニ鑑ミル處アリ併合、際下附セラレタル恩賜金ヲ以テ授産事業ト為シ蚕業傳習講習、蚕室及蚕具ノ改良、稚蚕共同飼育、蚕種製造、優良蚕種ノ普及、蚕種ノ統一、乾蚕器ノ普及、朝鮮蚕業令制定及其施行、柞蚕等施設ヲ為シタレトモ内地式ノ養蚕ニ不慣タル朝鮮農家ニ取リテ此等ノ獎勵俄カニ顯著ナル成績ヲ舉ゲ難キ事情アレバ始メ朝鮮ノ風俗慣習ト調合セシメ徐ニ之カ普及ヲ計ル方針ヲ取ラザルベカラズ即



ナ其施設ヲシテ一般農民ニ有益ナルコトヲ感得セシメ農民自ラ進  
デ之カ改良普及ニ努力サセルコト何ヨリモ肝要ナリ蓋シ無識ノ階級ハ  
官廳ノ干涉ト云ヘバ縱令好意的ナルモ容易ニ悅服セザルコト有レバ  
何事モ其ノ好ム處ニ隨ヒ漸次誘導スルノ得策タルヲ知ルベシ

次ハ林野政策ナリ朝鮮ノ林野ハ前韓國時代農商工部ノ發布  
ニ係ル森林法ヲ廢シ新ニ森林令ヲ制定スルニ際シ森林山野ノ所有  
者ハ三年以内ニ地籍ノ届出ヲ為スベク若シ期限内ニ届出ヲ為サザルトキ  
ハ國有ニ編入スベキ旨ヲ規定シアルガ如シ然レトモ人民ノ不注意又ハ誤  
解ノ為メ届出ヲ為サザル者ノ中ニ特別ノ緣故關係ヲ有スル者極メテ  
多シ故ニ一旦國有ニ歸屬シタルモノト雖モ調査ノ結果民有ノ證據又  
ハ特別ノ緣故關係アルモノハ當然下附又ハ拂下ノ處分アルコトヲ必要  
トス

次ハ金融ニ関スル事ニシテ是レハ本委員ノ年來主張シタルガ如ク金

融機關ノ運用意ノ如クナラザルニ於テハ抑モ産業發達ヲ期シ難  
キモノナリ朝鮮内ニ於ケル重ナル金融機關トシテ朝鮮銀行殖産  
銀行其他各地ニ點在セル金融組合等アリ朝鮮人産業者ニ對シ  
金融ノ圓滑ヲ圖ルト雖モ金融組合等ハ云フニ足ラズ鮮銀殖銀ノ  
如キ特殊ノ銀行ハ元來朝鮮人ヲ本位トシ設置シタルモ拘ハラズ朝  
鮮人産業者トハ殆ンド没交渉ノ觀ヲ呈スルノミナラズ貸借ノ不公  
平著シク朝鮮人ニ貸借スル總金額ハ人口ノ割當ニスレバ其四十分ノ  
一モ足ラザル日本人ノソレニ比シ及バザルコト幾百倍ニモ達スル狀況ナリ今  
試ニ大正九年六月三十日現在朝鮮殖産兩銀行貸出金表中ノ統  
計ヲ摘記センカ即チ四十萬ニ足ラザル在鮮日本人ニ對スル貸出高二  
千五百四十二萬二千一百三十四円ニ比シ千七百萬ノ朝鮮人ニ對スルソレ  
ハ僅カ三千五百七十一萬三千百七円ニ過ギズ斯クノ如クニシテ朝鮮人ノ  
産業發達ヲ期スルハ所謂木ニ縁リテ巢ヲ求ムル類タルベク朝鮮



人産業ノ日々ニ衰頽ヲ来ス悲境ニ瀕スルハ必然ノ勢ナリ故ニ本委  
員ハ朝鮮ニ於ケル金融機關ヲ改造シ名實共ニ朝鮮人ヲ本位トスル  
方針ヲ取りテ一般産業ノ助長ヲ圖ルベク主張スル所以ナリ元來金融  
機關ヲ充ク運用シテコソ産業ノ發展ヲ得ベク産業ノ發展ニ隨  
ツテ金融機關モ十分ノ業績ヲ舉ゲルコト智者ヲ俟タズシテ明ウカ  
ナルベシ

次ハ鐵道政策ナリ夫レ産業ノ發達ヲ計ルニ第一交通機關ノ  
完備ヲ要セザルベカラズ交通機關ノ完備ヲ期スルニハ全ク政府ノ力ノ  
ミニ俟ツベキモノニアラザルナリ朝鮮ニ現在官營ノ鐵道幹線(支線ヲ  
ルモ極微々タルモノナリ)モ未ダ充分ナル敷設ヲ見ザル中ニ早ヤ各樞要  
地ニ於ケル鐵道支線ヲ急設スル必要ヲ感ジタリ故ニ支線等ノ伸張  
ハ民間ニ開放シ促成ヲ期スルト共ニ既定計劃ノ咸鏡線及ヒ平元線  
ノ如キモ政府ノ財政上急設シ能ハザルモノトセバ之ヲ民間ノ有力者ニ諮リ

朝鮮地方ノ開發及ヒ産業發達ノ為メニ急設ノ方法ヲ講ズル  
コト目下焦眉ノ急務タラズバアラズ

右諸項ハ本委員ノ平生ノ卑見ノ一端ヲ述ベタルニ過ギザルモノニ  
シテ切カニ朝鮮現下ノ産業狀態ヲ考察スレバ如何ナル方面モ始  
ヨリ自給的ノ資源ト自發的ノ勇氣缺乏シテ到底産業ノ開發  
ヲ期シ難キハ勿論何時迄モ自然ノ成行ニ委シ盡々疲弊ニ陥リ  
ツ・アルヲ傍觀スルハ有識者ノ忍ビ能ハザル處ナリ故ニ政府ノ銳意  
ナル指導ト内地人有志ノ多大ナル援助ト下ニ産業ノ根本的施設ト  
發展ヲ計ルヲ俟ツ外ナルベシ況シテ朝鮮ヲ内地ノ延長ト看做ス場  
合ニ於テハ朝鮮モ内地同様開發ノ境域ニ推シ進ムルコトハ政府及  
内地人諸氏ノ當然タル責務トモ云フモ過當ニアラザルナリ今ヤ朝鮮最  
早往時ノ朝鮮ニアラズ朝鮮民衆モ餘程覺省シ来レリ此機ニ乘  
ジ何等カ産業發達ニ関スル政策ト方針ヲ定メ其道筋ニ依リ進



行スルアラス蓋シ事半ニシテ功倍ノ好結果ヲ得ルコト容易ナルベシ  
今般内地人委員諸氏ノ本會ノ機軸ニ當ルハ朝鮮産業開發上  
一大光明ヲ放ツト同時ニ朝鮮民衆ニ取リテ無上ノ幸福ヲ齎スベキ  
ハ本委員ノ信ジテ疑ハガル処ナリ唯タ朝鮮ニ於テ前陳ノ如キ缺陷  
弊害ノ多々アルコトハ委員諸氏ノ業ニ已ニ洞察セラル、所ナランガ  
万一ノ參考資料タルヲ得ハ幸甚ノ至也

大正十年九月十五日

朝鮮産業調査會委員 伯爵宋秉燮



[illegible]







M4-132

3 4 5 6 7 8 9 230 1 2 3 4 5 6 7 8 9 240 1 2 3 4 5 6 7 8 9 250 1 2 3

近代朝鮮における  
電気知識の伝来とその発展  
漢城における  
米国の電気検査と鮮米交渉資料

近代朝鮮における  
電気知識の伝来とその発展

漢城における米国の電気検査と  
鮮米交渉資料



近代朝鮮に於ける電氣事情の増進  
に就ての若干の補足史料（日本国信史料）

漢城に於ける米國電氣事情は同する

朝鮮米交際史料（一）  
一、二

〔朝鮮外交文書、校書集成〕



京城電氣株式會社

監理課 氣附

山坪

監理

課長

殿

御直披



竹橋町三丁目三九ノ一四号

京城府西大門區西小門町三十八番地

朝鮮總督府朝鮮史編修會

電話先化門④二二六七番

國史館

昭和十九年十二月廿三日



昭和 5 年 4 月 12 日

昭和 5 年 4 月 15 日

111 号

拜啓 御依頼の朝鮮に於る電気事業発達に關  
する史料大へん趣くはつて 恐縮に存するに  
御期待に副ふ程に 進捗を見る ことが出来ず  
せん 多忙なる 公務を 加へて 御身  
に 精一杯であり 又 量に 依り 内容  
を中心として 御覽下されば 多少 なる 苦心  
の 處を 窺ふ ことが 出来る 概なり  
取り 整理を 了し 三十八九年 迄の 分を  
差上げ 整理は 思ひ 可なり 時間と 要



しきりか えんが 通達を 一の理由をうけてのま  
す 陸軍 陸軍の部 番号 順序を狂はせぬこと  
が大切と仰るより

舞米の注文書に記しては煩を厭はす 株録に  
抑はりも思ふ所ありてはす 多大重複の莫し  
あるをいふ 一見些細なと思はる 史料にも相  
當重要なる推察の端緒が 藏せられし 場合が  
多くありと云ふ

今年度の分は この正外冊にて 一先が打切りより  
撤出を防ぐなり 製本もして 差上げると仰る



予、何れも上生二十日以來、足と稱す、且、遠方から  
の來客等あり、且、資材も今、思ふ程、不充  
出、未、以、何れも、遠方、何れも、  
揮、東、東、及、韓、國、補、給、日、只、今、騰、高、中、了、  
先、右、田、件、子、か、く、い、加、く、心、即、應、る、多、う、数、見、  
昭和十九年十二月廿三日、朝

國白生

岸 様

虎馬下



通伸 先生 御依頼の件事として、之を以て就  
して、是は、後何の方の公の註解を得て置く  
必要ありと存する。而し、例は、之を内密にして、未  
だ、之を、その處に、今、手紙に、述べ、

し、は、私、心中、気が、つ、いて、之を、若干、の、史料、爲  
し、て、行、將、不明、に、する、所、を、分、水、見、る、所、に、第、一  
を、著、す、(多) 多、く、快、も



①

近代朝鮮ニ於ケル電気移入ノ源流ニ  
就テノ若干ノ補足史料〔日本関係〕  
漢城ニ於ケル米國電気權益ニ関スル  
鮮米交渉史料  
〔鮮米外交文書板本集成〕



# 本史料所載之主要人名表

Allen, Horace Newton.	安達	1884.9.20. 群主出版, 匪作.	1893.8.31. 在
Foulk, George C.	福德	1885.1.9. (M.H. 1885) 群主出版, 12.11. 在	1893.8.31. 在
Footte, Lucius H.	福德	1885. 1883.2.26. 群主出版, 5.11.20. 在	1893.8.31. 在
Dinsmore, Hugh A.	丹時	1887.4.1-1890.3.26. 在	1893.8.31. 在
Herod, Joseph R.	惠魯德	1893.6.27. 群主出版, 1893.5.31. 在	1893.8.31. 在
Rockhill, William Woodville.	萊克	1886.12.11-1887.4.1 臨時出版, 萊克	1893.8.31. 在
Sill, J. M. B.	施連	1894.4.30-1897.9.13 在	1893.8.31. 在
Heard, Augustine.	何德	1890.5.8-1893.6.27 在	1893.8.31. 在
Parker, William H.	巴臣	1886.6.8-9.12. 在	1893.8.31. 在
Paddock, Gordon.	巴德	1894.5.20-1897.9.13 在	1893.8.31. 在
Denny, Owen N.	德尼	1890.5.28 在	1893.8.31. 在
Merrill, Henry F.	墨賢理	1894.5.30 在	1893.8.31. 在
Sands, William F.	山	1894.5.30 在	1893.8.31. 在
Frezer, Everett.	厚禮	1894.5.30 在	1893.8.31. 在
Davis, R. H.	戴肥	1894.5.30 在	1893.8.31. 在
Hallifax, T. E.	百美	1894.5.30 在	1893.8.31. 在
Febiger,	費幾	1894.5.30 在	1893.8.31. 在
Townsend, W. D.	陀雲仙	1894.5.30 在	1893.8.31. 在
Morse, James R.	毛時	1896.3.29. 在	1893.8.31. 在
Dye, J. H.	馬根	1896.4-1899 在	1893.8.31. 在
Morgan, F. A.	馬根	1896.4-1899 在	1893.8.31. 在
General Dye.	湛參	1896.4-1899 在	1893.8.31. 在
Johnson, J. C.	湛參	1896.4-1899 在	1893.8.31. 在
Colbran, H.	高俾安	1896.4-1899 在	1893.8.31. 在
Bayard, T. F.	高俾安	1896.4-1899 在	1893.8.31. 在



Bostwick, H. R.

寶時旭 又 南時旭

Weeber, Karl Ivanovitch.

韋貝

Brown, Sir John McLeavy.

柏卓安 又 柏卓安

Wellendorff, Paul Gorg von.

朱魯 威廉 德 1882年12月27日  
1884.12.31 - 韓國外國銀行

Bagard, T. F.

貝邦 (韓國外國銀行) Secretary of State  
1885.12.12. 9月 (1881.18年)

William?

尤林義

Edison, T. A.

或 William McKay?  
義大涼 或 McKay 2名.

McKay, William

麥巨又 麥達比

Dinswre

登士 義 2-1月 麥達



近代朝鮮に於ける電氣知識移入の源流

開する二三の史料（卷初所収）

近代朝鮮に於ける電氣知識の移入發達の経路に就いては、今日まで多く史料に據るが、最初專ら我帝國の開港に貢ふ所數らざるものゝ如くである。李太王及び威族閔氏等は、排外鎖國主義を頑守せる保守的政治家大院君を却けて開進の方針を決し、丙子（明治九年）年我國と江華島條約を締結して國交を再開するに至つた。當時我使節一行各員が西力東漸に困る



國際情勢の危殆、東洋諸國の孤弱、独り覺醒せる  
富國強兵への苦營、開化への努力等を説いて開  
導に盡瘁する所ありしが、其際隨員中の通訳官  
外務書記生浦瀬裕等亦此の意を體して談論  
の初、初めて電信の便捷に言及して朝鮮人の  
間に驚異を喚起せることは、<sup>「</sup>沁行日記<sup>」</sup>倭使日  
記<sup>」</sup>倭使問答<sup>」</sup>等の當時の記録に窺はれる。  
次いで同丙子年の夏李太王は江華條約答禮使  
の意を獨して禮曹參判金綺秀を倭信使として  
日本國へ差遣するに及び、我國興隆の秘鑰、文

朝鮮史編纂會原爲用部

に  
朝鮮  
の  
秘  
鑰



物原由の模様を及復下命した。不幸にして金  
 綺秀は朝鮮兩班通例の城を多く出でず、王命  
 を果すに決して充分適當なる人物ではなかつ  
 たが、つぎ一行は我日本の文物の進歩に瞠目  
 し、就中電信の駿速に驚嘆し、便利なる燈火即ち  
 瓦斯燈に因る街衢及屋内の煌輝に就いて、心  
 く心を引かれ、こゝは「瀟湘紀行」修信使「謄草」  
 等の記事にあらはれ、廣く坊間に傳へられ、又  
 王戚族等は、金綺秀復命を聞いて日本進化の要  
 矣が、電線（電信、電話、當時日本には電燈、電車等）



火輪（汽車、汽船並に火力水力等に依る諸機械）、  
 及び農器（進歩せる農具に依る近代的農業の  
 移植）<sup>の三者</sup>に在ることを悟り、愈々開進の要を切實  
 にしたるもの、如くである。他方江華條約締  
 結の際全權副大臣ありし井上馨は爾來引續き  
 廟堂の枢機に參し、該條約締結當事者の一人と  
 して朝鮮を開導して独立自主の實力を具備し<sup>せり</sup>  
 以て東亞<sup>共</sup>國防衛の基礎を固めるをその責務と  
 感じ、其後文強使節として渡鮮せる外務大臣宮  
 本小一郎、房義質等亦たよく旨を體して苦心勞

朝鮮の歴史と地理  
 朝鮮の歴史と地理



導し、遂に朝鮮政府を啓蒙する所ありしが、  
 辛巳年（明治十四年）に至り、李王及戚族等は開  
 化の念已み難く、全く前例、傳統を破りて、秘かに  
 側近の年少俊秀なる顯門兩班の子弟多数を撰  
 拔して、日本國文物制度の觀察研究を命じ、彼等  
 は数月の間、東京の重要都市に滞留又は旅行  
 して、使命に専念せしむ。此際にも特に電信及び  
 瓦斯燈（燈煤）は相違わず、彼等の興味の主たる對  
 象の一つであつたことは、東京日記「日本開見事  
 件」日本開見事件草」等により察せらるるが、

4502  
 の用234、847



茲に特に注目すべきは、彼等の間に電信に就いての興味から更に漸って電氣の本質に對する関心を呼び起し、たとへ耳學問ながら敢然その研究に一歩踏み入り又瓦斯燈の構造をも究明せることで、之は「日東録」の記事詳密である。この遊覽朝士一行の復命に就いては殊に威族の感銘を深くしたと記入であつた。その翌年壬午（明治十五年）朝鮮は米國に對して國交を開き更に答禮使として関泳翊（威族中最の人物）及び洪英植（朝士一人）が米國に特命全權大臣とし

日東録に於ては、  
 威族の復命に就いては殊に感銘を深くしたと記入であつた。



て使ふるに及び、曾ての日本の忠告に基きてと  
覺しく農器及び諸器械の輸入に於いて各鐘の  
契約を結び、この際瓦斯燈より（更に便利なる當時發明より）且  
非常なる流行普及を見つゝ、あつた電燈を知つ  
て甚だ魅惑を覺え、之が移入の契約を（多分  
（電燈社）エカフレ電機會社と結べることは蓋し  
當然と思はれる。

（このエカフレ會社との契約係現に「これは記録存在し」  
後日條條するに、す。其他の史料より補欠の要あり。）



沁行日記

上

丙子正月二十日

(1876  
明治九年  
光緒二年  
正月二十日)

傳語官故助金助與中野偕訪訓導私處要喫酒  
肉餘羹云故往復留營先以酒肉果品待之仍饋  
白餅煎骨醉飽稱謝彼曰火輪船我國初不知制  
作矣近年則各國匠包湊集給工價造之而非緬  
甸國材木莫可造船電機寄信者鉄筒中置鉄線  
連於水陸幾千里而兩端作音雖數千里瞬息間  
即通消息每字稅錢二毫二分中既鉄輪火  
砲者當中央鏡砲五柄此則本是洋國人此給者



而我人描得其樣、無不善造、又曰朝鮮人如坐昏  
夜中、俄羅斯人同於我國人曰、貴國與朝鮮交隣  
乎、若無交隣之誼、則我國當侵伐朝鮮云、故我國  
姑爲挽止矣、俄羅斯之侵伐、與否在於今、番文隣  
與否、而貴國瞭然不覺、各國事機之如此、此非昏  
夜中而何、且洋人羊前自貴國還、歸之後、更欲興  
師出來、而尚不出來者、非無警、無軍之故也、（下  
略）



日省錄

一七九

丙子四月初一日

召見修信使金綺秀于康寧殿。

絳陞也。○予曰：此非但遠路渡海，乃初去之行，尤事須善為措處，而彼地事狀，以為詳探以來，可也。  
綺秀曰：謹當依下教奉承矣。（中）

予曰：詳探彼中之物情，是緊切事也。須善為探知，可也。綺秀曰：謹當圖所以探知之道，而素昧之地，善為探知，未敢保也。予曰：凡諸可聞之事，亦須不漏，一一錄來也。綺秀曰：謹依下教矣。（下）



日省錄

一八二

丙子六月初一日

召見修信使金綺秀于紫薇堂。

復命也。予曰：萬里他國，善為往來乎？綺秀曰：無事往還矣。（時）予曰：其外風俗之大，繼可聞者，惟陳可也。綺秀曰：其俗，樂以富強為務矣。予曰：其國人品，率皆務強，而其軍容亦頗強壯乎？綺秀曰：軍容強壯，組鍊甚熟矣，以外操觀之，則似徒知利之一字而已，而凡厥民人，各有業，勤不遊食，路無流丐矣。（時）予曰：電線、火輪，與農器，得無所聞耶？



彼國以此三件為第一急務云、生否、綺秀曰、果然  
 矣、  
 (略下)



滄槎紀行

(東平王十三年丙子)

五月一日辛卯晴、向曉假寐、昧爽而起、東望尖峰出沒於波面、問是何州山也、曰長門州赤馬關之山也、終日出到泊于關前洋、分乘小舟直入于永福寺、設香卓于外廳、淨界行望賀禮訖、還入正房、(略中)申時量自迎接官所、告以電氣信通報于江戸云云、戌時量已有回報、一行々止從便為之、電練者自西教之行有此法、沿海屢萬里、皆沈銅筒設機括繩于其中、書某事某條繫于繩而引之、使相回旋、瞬息之頃可傳萬里之奇、是故三時之間、通江



戸六千餘里之信也。(略下)

註。滄棧紀行、李太王十三年丙子、初次、修

信使金綺秀等、江華條約答禮使トシテ

日本東京ニ赴キ、之際、紀錄ナリ。朝鮮

人が、電気ト云フモノニ関スル實地見聞

ノ最初、或ハ其ノ比較的早キモノ

ト思ハル。

當時日本ニ電燈ナカリシヲシテ思ハル

ルハ、次ノ紀事ニヨリ想察セラル

初十日、庚子晴、(略中)申刻權少丞來詣遼館、以正使之



勞城不為進、現使通官傳語曰、再明日將行宴禮  
于遠遼館、只與堂上官各會、而以馬車迎往、所以  
重遠賓云、又以此紅檯、滿以為燭、然於燈、以燭  
為燈、則與  
施亦然、

當時東京ニ於テ瓦斯燈ヲ用ヒラレ居リ

コトハ此ノ記事ニ於テ知ル

今十七日、丁未、晚雨、外務省官員因各官、願與共觀  
海軍省制度、午間正使以下諸員偕往、到海軍省、  
略中旋即出門、隨員冒雨還館、正使赴井上馨之約、



宮本大丞亦來會，至二更量雨甚，乘馬車還館，路傍立高柱懸琉燈，通衢照映，蓋言藏煤油于地下，引氣上，則雖至多年，晝隱夜明，省費不鮮者耳。上奪天造，下竭地腴，人工之至巧，世運之所使歟。

全二十一日辛亥，早陰晚晴，自陸軍省遣樞少丞，請踐日前之約，使行一齊進去，(略中)先往本省，略觀兵機，次到造兵所，(略中)旋行數里許，至工學寮，工部卿伊藤博文已先待此，製作之度皆聚焉，而莫不以火輪應用，凡鑛山之器，鐵道之械，燈臺之用，電



信之巧，營繕之技，水陸軍裝，天機地範，悉資用於  
斯，神造鬼工，難以形測，而皆以西人為師，日東之  
學其術者，可十之七八云。



## 東京日記

東京日記ハ零六壬年巳年並覽朝士日

本文物觀察ノ際朝士ノ一人常元會ノ

隨員タリシ朱憲斌山東ノ物也凡見開録

ナリ。

1881年  
明治14年  
光緒7年  
壬午年

辛巳三月

十一日壬寅晴丑正發行左夾一岐右夾馬島稍

前進未正到泊長崎港七百里自海門至

埠頭二十餘里許而港內各國大小汽船

及大小風帆船湊泊往來者不可勝計矣



一行即下陸、上等則定館於藥町吉見屋、  
 (略中)各國開港者、清國、英吉利、阿米利加、魯  
 西亞四國也、一邊造火輪船、一建築埠頭、  
 高島有煤礦(略中)

十二日 癸卯、晴、申量、往師範學校、本縣令先到迎  
 接、遍示教場、第一教場、諸生徒各持鍊筆、  
 以細畫做本移模(略中)、第六教場、諸生徒  
 肄習羅馬文字、又有理學化學場、實地試  
 驗表題、其理學、第一、壓迫空氣、噴出器內  
 之水、第二、與空中水之噴騰、第三、電氣之



試驗、電震、其化學、第一、酸化水素之曝鳴、

云々

十七日 戊申、針后入大坂城、次、來鐵道局、(時)黑烟

一發、其行如箭、一時之間、即抵大坂、一百

二十里、夾路有電機線之連亘者、合十餘

條矣、此則各處傳信之具云耳、午量、自神

戶乘車、未初抵大坂、(時)

二十日

辛酉、晴、(時)飯後、往砲兵工廠、遍觀造機

役所、(時)未正、一行到鐵道局、乘火輪車、向

西京、所過田野、鏡次、山川明麗、竹林連亘



百餘里之間，中間有三大鐵橋，長各百餘  
 步，欄亦用鐵，夾路有大小電機線，或八或  
 十，不一其端，而輪車止歇之處，則有電機  
 線分局之屋，令楣上必懸時鐘（時）

全國道路，設置郵便，以為傳札（時）郵便局有三千  
 九百二十七之多，其速縮數百里，為數十里，不及  
 電信之万里一瞬，電信線之架設，實自日主二年  
 八月，凡國內都會之地，各國通商之處，各設分局，  
 和文假名二十文字，橫文以二十語，為一音信，各



局間一音信之貨錢和文五錢、横文十五錢、傳信之快敏、殆出意料矣、

東京及横濱、俱有煤燈、而東京則自品川至上野二十里之間、大路左右、列植煤氣燈、通夜長明、以便往來、



日本開見事件草

李鏡永

開見錄

煤氣之火、延久幾十里遠、燈柱列植、云々



## 日東錄

日東錄ハ李太王辛巳所謂遊覽朝士日本  
 視察旅行記録ナリ。李太王及ビ戚族閔氏  
 等ハ風ニ進取開化ヲ志シ辛巳年正月門  
 地高十兩班進臣中ノ俊秀ヲ撰拔シテ日  
 本文物ノ視察留學ヲ命ジタ。趙準永、朴定  
 陽、嚴世永、姜文馨、趙象稷、閔種默、李鑣永、沈  
 相學、洪英植、魚允中、李元會ヲ主トシ各人  
 ノ隨員中亦タ有能ナル人才少ナカラズ、  
 彼等ヨク使命ヲ果シ歸國後浩翰ナル復



命書ヲ呈出スルト共ニ朝鮮上下ヲ啓蒙  
 スル所益シ歟ナラザルモノガアツタ。  
 茲ニハ電氣モ斯等ニ關スル記事ヲ採録  
 スルニ止メルガ、兩子倭信使金綺秀一行  
 ノソレヨリモ稍々知識ノ進メルストヲ  
 伺フコトが出来ル。或意味デハ當該思  
 想發展史上注目ニ價スルモノモ存スル。  
 故ニ煩且長ク厭ハズ採録スルコトニシ  
 タ。



日東錄 (聞見雜錄)

國內學校處々有之皆非專經攻文之業有諸學、法  
 律學、理學、化學、重學、光學、電氣學、算學、鑛學、醫學、天  
 文學、地理學、機器學、動物學、植物學、文學、漢學、英學、  
 南學等各色



## 日東錄

(聞見雜錄)

瓦斯燈鑄製而點火於室內、光線無所不至、故於歐  
米諸國專用之器也、○二燈器平常置於机上、從上  
或橫以護護管導瓦斯而點火、自由動燈火故、於讀  
書處便利也、○又燈器裝置於柱或壁而畫置於壁、  
把延之點火故、於點場甚便利也、○又燈器用於客  
室或食堂甚美麗而分上下二部、下部以二或三之  
重鉤焉、故點火之際引下而押上於適宜處結合焉、  
縱令外物所触而無傷也、○上項器械並有圖式而



概論其所用便利、不言其製造矩矱、苟非習於見聞、  
 積以日月、則實難悟解、



日東錄

(聞見雜錄)

街路兩邊列立鐵柱上設琉璃燈薄皮燃火遠曉不  
 散此蓋非油非燭號曰煤氣燈柱內空外直下有  
 通穴連穴鑿成池如田隱隱而各處燈柱箇々如是  
 引其穴而聚合一所因作大坎日煤石炭則煤氣連  
 于諸燈無添油剪燭之勞而但暮則燃之曙則滅  
 之而已煤炭之所名曰瓦斯局此亦似化學中出來  
 而未得其詳



## 日東錄

(聞見雜錄)

電氣報以銅為線、約徑分許、用西人所鍊電氣、或架水上、或沉水引而伸之、兩頭以機器繫之、所傳之音、雖萬里即達也、電線之萬里傳信、彼此只憑一盤、中有針、四圍有字、針旋指字、隨指隨錄、遂為一幅畫、如指元指亨指利貞、以知元亨利貞之類也、此邊此針旋時、彼邊此針亦旋也、蓋電線之端、入于屋中、如我國懸鈴索之入屋者、下望于床、今上設機、今傍有器如櫃、今中有電手、敲其機、電生于櫃、閃々燦々、直



上線傍、又一器如國攻木者、墨繩筒、中有杠、轉  
 而傍、又有片紙、圓堆者、一端直上于杠、而圍之紙上  
 有字、傍又布紙、有字、爲此報彼之書也、而圍杠片  
 紙之字、即機傍布之字、一字、波勒無別有誰移  
 爲忽焉、在彼前而據視之紙、之末上杠、初無有字、纔  
 上杠、而隨有字焉、而此杠此紙、亦不與線相關也、則  
 此皆吹靈之事也、此時彼邊、不計千萬里、電線之入  
 于彼之屋者、線忽生電、而筒中之杠轉、杠轉而片紙  
 之圍者、解而下也、下而有字、即此邊圍杠紙之字也、  
 彼邊之事、固不曾見、而以此推之、想亦如是也、此所



以萬里傳信、只爭一時也、電線聯絡之柱、在道路、直木可三四丈者、上施磁杆、線施于杆、一柱之線、其數不一、此邊彼邊處所不一、或多或少、遠近亦不一、此又不得不然之事、過山過野、高之低之、惟意為之、以至過大海、直沉于水底而過之云。



## 日東錄

(聞見雜錄)

電信之法、先知電氣引出、然後始可與言而發電之法甚多、曰、摩電、如用手絨、火漆、各一塊、或玻璃綢、絹各一塊、其摩力俱能吸動紙片、酒塞、輕物、此即摩電是也、細看一物、試摩電氣、用小輕圓球、掛以絲線、將此物摩熱、而近探之、如球被吸動、此物即有電氣、如摩熱、仍不動、是無電氣、或有而力不足、即此可以看出、如蜜蠟、樹膠、硫黃、玻璃等類、甚有吸力、寶石、木炭、乾木等類、甚少吸力、初看五金之物、意必摩



無吸力、遂將摩面有磁電氣、各物分為兩項、大若是  
 分者誤也、因有人細尋五金之物、摩亦有電、其式與  
 者、乃電未出並非無也。又有摩電法、以玻璃為輪、  
 傍安轉運活軸、上安皮墊、敷以白鉛屑、錫屑、蓋覆玻  
 輪兩傍、各安五金、蓄電筒、各插於玻璃柱上、二柱亦  
 以玻璃為脚、筒旁向裡緊連皮墊、向外有柄、可繫下  
 垂鐵鍊、其一筒旁安一鐵橫樑、有齒近吸玻璃之電、  
 向外有柄、可繫下垂鐵鍊、如欲取陽電、可轉玻璃於  
 筒旁、安垂鐵鍊、齒吸陽電、入筒陰、電隨電筒旁之鐵  
 鍊、俱散於地矣、若垂鍊於彼頭、則即取陰、而去陽也、



○又有多收電氣之法、可製一瓶、名曰蓄電瓶、之內、俱敷錫屑為衣、瓶口外敷火漆、用木為蓋、中用銅箸一條、箸首正安銅柄、由蓋伸入瓶裏、下繫銅練、分垂於底、緊貼錫屑、如欲滿瓶、以外繫鐵練、老也、將前電機改輪、此輪轉運、瓶箸之柄相近、此取陽電、由箸行、鉄練、蓄於錫衣之上、有尋瓶外錫屑、陰電則此屑內陽電先則相混、今竟難開、由外繫鉄練而散去矣、是為蓄電瓶。○欲用較比一瓶、力大之電、可將多瓶排放一處、俱要緊、按外敷錫屑、用五金線、將各瓶箸之柄、縱橫連繫一處、似此連繫之力極小、亦能斃小



爲生類、如二十餘人排立、携手相連、此頭人用一指、  
 按於銅箸之柄、彼頭人用一指、按於瓶外錫屑、則電  
 氣傳過人身、一齊震顫矣。○又有二金相合生電之  
 法、以木爲箱、旁做兩柱、中橫平樑、有多鈎可懸、將  
 紅銅白鉛、間放箱中、每一隔白鉛、一隔紅銅、兩頭亦  
 須相錯、如此頭繫鉛、彼頭繫銅、箱中咸以強水、以五  
 金線、厚底一頭連鉛、一頭連銅、其首末仍各以一線、  
 一頭連金、一頭分向箱外繞出、使其兩頭會連、彼此  
 皆各由箱外、相接於線之各一頭。○又一法、以玻璃  
 杯數個、中盛強水、每杯內、置紅銅白鉛各一、相連排



放用金漆線一頭連於彼杯白鉛、一頭連於此杯紅  
 銅其首末兩杯內如此杯白鉛、是須與彼杯紅銅相  
 對仍各以一線一頭連金、一頭分向杯外繞出使其  
 兩頭會連彼此各接如前箱式此法名曰電池、地  
 中有一磁石其力可以吸鉄係自然之質而成之也、  
 人得尋<sup>磁</sup>出藉人力做而復使吸鉄較更便益名  
 曰吸鉄石、如以長條磁石置於鉄屑之中、少時提出、  
 見石兩端吸鉄甚多、往裡漸少、至中則無似不能吸  
 到若將此石從中折為兩段、每段兩端亦多吸屑、中  
 間仍無若以羅盤之磁石鐵針高懸平處其針搖擺、



對准南北然後始定故名曰定北針今於此針旁又懸一磁針此指如之若將此針指北之頭與彼針指南之頭相近則必合而不难如將此針指北之頭與彼針指北之頭相近則必難而不合其理何也蓋因二針之頭異則相合同則相離如一陰一陽之理也今將一磁石下置一鐵勢必吸連磁石之力附傳於鉄其鉄即與磁石無異若一難開則此吸鉄屑亦即紛墜是無磁石之力也似此鉄下連鐵不拘多少力足貫到皆恃磁石連則有力離則無力若用鋼代鉄雖較鐵傳力稍慢然若難開較鉄散力亦慢由漸而



減不似鐵一離即散故尚可用時人用鋼者職此故也。又有將鐵做成磁石之法將鐵條一塊平放用磁石一塊分定南北兩端將磁石北端立起由鐵之北頭順敷至鐵之彼頭至尾提起磁石再由此頭敷至彼頭如是數次鐵感磁氣一成磁前敷之南端易而指北北端易而指南由是與磁石無殊矣做磁鐵之法甚多如電報機器內鐵針之式或做鋼懸如馬掌之形欲其力多亦可照加層數若用久恐力不足可於下而用鉄板如座托住自能懸起其力不洩。又有一名曰針電其法做一木櫃上下二層將前隔



絲相連二針照做二分內針在上層櫃內其外針在櫃外面用作辨數將蓄電瓶內陰陽二線之端分頭接連如此頭陽電由右而入彼頭陰電由左而入認櫃外二針之端指右為何號指左為何號一二動為何號連次動為何號櫃之下層外做活軸二柄亦並排列係為便於更換陰陽之用以五金線二條一在白鉛為陽一在紅銅為陰各瓶彼此間連如欲任便取用不煩移線挪瓶將此二瓶雙手捧推向西是為讓進陽氣之路針即指右為陽若捧推向東是為讓進陰氣之路針亦指左為陰兼可下推上指



以訂號數計一二推指為何號、隨意訂用、意期捷便耳。又法做一水橫形如表盤、面上預有洋字號數、將內外兩針、照前分安、一內一外、掌前馬掌形吸鐵及蓄電各機器俱與接連、借此一吸一放之力、使針指字、用時推柄、分陰陽電路、隨手取用、默記針動次數、每動為何字、記數成字、連字成文、至於彼處之機器做法同此、處處做何字畫、彼處依式畫出、毫髮無訛、無異面談矣。○又名曰電鑰、可以啓閉、用紙印做號數、其法做一橫樑、下安小柱、中間可開可合、為引電路橫樑之末、安一圓柄、係為以手按提、一提則



電止、一按則電來、於此標旁接以機器線、通於機其  
 機上、安有豎筒、內藏絲繩、馬掌形吸鉄簞、外預裹湖  
 絲、簞口上懸一鐵相對、其鐵上下渡頁、末尾有做成  
 鋼尖、灣上浮掌、上輪垂放紙條、鋒尖托紙、可刺可過、  
 統屬電鑰之權、若手按電鑰、則柱中間自合、電氣由  
 機得以通上、直達馬掌鐵、及吸力一出、上面鐵近口  
 之一頭被吸、必近就垂低、其一頭必高、翹仰起、彼處  
 鋼尖隨上刺紙、借可做畫、然在提按電鑰為之、使其  
 或長或短、或間或連、俱可用號數、較之更為清楚、無  
 含混之訛也。○又一法、以用機器各式同前、惟以監



色油墨、染敷於鋼尖之上、所印字、盡變藍色、比前  
 似更明確也、又有意大利國人、喝色利者、創做一法、  
 可用傳往遠處電報、其印字法、預以白金白鉛藥水、  
 將白紙浸過、電氣一過、立時變色、兩頭各設銅几為  
 板、上用鉄筆、一齊運行、此頭筆做何字、彼頭如之、其  
 機、安有筒形二輪、相並排列、橫臥於機上、每輪上  
 各有鋼尖、托此約紙、此紙包貼輪上、紙隨輪轉、其紙  
 預浸染藥、字用漆水畫寫、電氣一到時、遇漆乃電分  
 路故、滿紙漫陰變色、唯空字畫是白、顯出字形矣、○  
 電線之路有三、一陸地、立竿懸線之、一由地中埋



線之電、一由海底 線之電其陸地三竿懸線電之法擇一光潤和柔之鉄、做成長線外鍍柔鉛為衣護之使不生鏽線身粗細分有三樣、厚一寸者分作八分、算一分之線作小近電報之用、現在常用者厚及六分、若其四分者、係備曲折防斷備用、將此鉄線懸於竿上、其竿須擇乾透淨直之木、長約二十尺至三十尺木根、或用火烤日晒、或用銅強水浸過然後埋立地中、掘地當看土質、如係沙鬆之地、須當深掘、大約四五尺深、各竿勻空排埋、如三里直路埋竿十二根至十六根、俱可若遇彎曲相持之處酌增至二十



根亦可懸線之處由竿首至地約難十五尺至二十  
 尺之高鉄線與竿間隔不使相近因木係電佳路若  
 逢雨濕恐電由此散失竿首懸線之處製一磁瓶或  
 一瓦器形如杯式上覆如帽中通一孔使線由此空  
 旋復而出其上覆者防雨下托者使平也。又電報  
 若遠用線須長然恐其力漸洩不足運行機器於是  
 有人思將遠報改分數節途中增添數處至兩頭處  
 皆照設一樣機器人工按節傳遞止因一事靡費徒  
 增不免勞力傷財也今此則不然惟設兩頭用物之  
 外中途止酌設一二處照料而已電氣到時僅需一



人使之生些新電、入其中、增助氣力、仍一氣速行而  
 過、毫無遲滯、迥非前之節之費乎比也、其線不可用  
 鐵、恐其易斷、須用銅絲、埋於地中、然而地內潮濕、為  
 電佳路、恐其由絲散去、須以樹漿裹銅絲、護之、其樹  
 漿譯名曰姑達、劈切扎然、若止以銅絲、與此樹漿護  
 裹、仍恐不堅、後又思得於此護裹之外、套以鉛箔、或  
 以瓦鐵俱可、分節套之、究屬價昂、較懸線之費尤貴  
 故、今人不甚多用、惟於城鎮街繁之區、用之而已。  
 又海底傳線之法、雖與埋地相同、然海水之力、洶湧  
 重大、須用銅絲五六根、或七根、紋繞一處、外用樹漿



護裹又以煤油滷浸之麻纏之麻外以鉄絲多束絞繞仍以煤油敷外如欲鉄身加厚外面再加鉄絲煤油一層亦可此用鉄絲之式當看海底地面如極深之處可用輕薄之線以其省可久也若近岸及稍淺之處船用拂礁新盪之處須用厚重之線線之分兩有四極厚者每一里地長重一萬二千斤次重五千五百斤再次重二千斤薄輕者重一千斤此線或由海底或埋地中以及地大事繁務須於兩頭處多安電線廣設機器每一機器需用二人監管做電報人二須令通達識誌諸曉修理之人自學莫爾斯



印畫提按電鑰之法令其手法熟習順連成跡。這  
 同治九年由法國至美國做成電線長約一萬里地、  
 及同治十二年由英國至美國做成電線長約七千  
 里後又有海底甚長電線係由英國至印度由印度  
 至新嘉坡由新嘉坡至香港此為最長中國海底電  
 報由香港至廈門由廈門至上海共三十里有餘由  
 上海至日本海底電報共一千五百里地又由日本  
 北至俄國地方共二千四百里日本國於十餘年前  
 尚不知電報是為何物有何作用今觀其中之機巧、  
 效而作之已於日本都城通達各處地、統計縱橫



約三千餘里



## 日東錄

(聞見雜錄)

避雷竿附着家屋中最高處及烟突筒也、金屬為最、  
而以價之太高以銅為通常、其高從六尺至十尺、以  
防落雷之間隔、則場所之廣狹、以此高之一倍半為  
周圍、故尖處數多家屋、分備于適宜、諸針、委以導線、  
可結合焉



韓史纂

卷六

太上皇紀

戊子二十五年

清德宗光緒十四年

1888年  
明治二十一年  
光緒十四年

王自經禍變以來，常有戒心，厚饒輜夫二十人，常待于宮城北門，又以亂多乘夜，命闕內燃電燈達曙，以春川近險，可以避亂，陞其府使爲督鍊使，春又陞爲留守府，以閔斗鎬爲留守。



1883-  
明治十六年  
光緒九年  
癸亥十二月  
(丁未)  
72年前

Sept. 2. A Korean Embassy headed by Min Yong Ik arrived at San Francisco en route to Washington. This Embassy was entertained by the U.S. Government and returned to Korea on the U.S.S. "Trenton" with Ensign Geo. C. Foulk, Naval Attaché to the U.S. Legation at Seoul direct. Mr. Percival Lowell, who wrote a book on Korea, was attached to this Embassy and visited Seoul in 1883.

1884-

Jan. 17. Everett Frazer appointed Korean Honorary Consul General New York; discontinued July 31, 1891, reappointed April 12, 1897; died Jan. 3, 1901.

Sept. 4. An electric light plant was ordered for the palace from the Edison Co.

1887-丁亥  
明治二十年  
光緒十三年  
癸丑十二月  
68年前

Mch. 8. Wm. McKay, an American engaged in erecting an electric light plant in the Kyung Pok Palace, was accidentally shot by a Korean Keyasu. He died the

1894. 5. 30 (明治二十七年)

1897-丁酉  
明治三十年  
光緒二十三年  
乙未正月  
癸丑三月  
58年前

next morning.  
米国人 J.W. Power. 明治二十年 明治二十年 明治二十年 明治二十年  
Seoul Electric Co. organized for constructing rail-  
way and lighting plants in Seoul.



美案別

諭欽差全權大臣閔泳翊副大臣洪英植

大朝鮮國大君主特派協辦交涉通商事務閔泳翊

為全權大臣協辦通商事務洪英植為副大臣念

卿等公平忠勤綜明詳審茲命即往美國京城進

呈國書並行慶賀遵約和洽永敦友誼欽哉

大朝鮮國開國四百九十二年六月十二日

奉飭督辦交涉通商事務臣閔泳翊 蓋印

55  
1883年  
明治16年  
癸未  
九月



美案別

與美國書

大朝鮮國大君主致書於

大美國伯理璽天德、茲者兩國條約互換和好既歿

欽差全權大臣閔泳翊副大臣洪英植前往

貴國、修報聘之禮、該大臣等、公忠綜詳、必能代達

衷曲、辦理妥協、幸望

推誠相信、益臻友睦、共享昇平、諒亦

貴伯理璽天德之所歡悅也、



開國四百九十二年六月十二日  
大朝鮮大君主李

奉 飭 督 辦 文 涉 通 商 事 務 閱 泳 穆 印 蓋



美案 別

(癸未十二月十七日 照會)

1883年  
明治16年  
光緒9年  
壬午20年

照會美館

大朝鮮國督辦交涉通商事務閣

為

照會事照得本國現與

貴國和好既敵商務方興尤貴聯絡聲氣茲奉我

大君主勅旨遙授

貴國人厚禮節以本國總領事之任使之駐劄

貴國紐約府所奉

勅旨茲庸照鈔交呈請煩



貴大臣報明

貴政府照此認准可也、相應備文照會、須至照會  
者

右照會

大美國欽差大臣福



美案 別

美館照會

甲申二月十六日

1884年  
明治17年  
光緒10年  
正月21日

大美國欽差便宜行事全權大臣福

為

照會事茲呈物錄係是閔泳翊之為

貴政府所用買來農器貨單也而厚禮節氏之要

本大臣逾呈于

貴督辦者也且照得厚氏來書內稱請

貴大臣惠肯言于朝鮮國外務衙門請其轉行照

報並文送右貨單所載物品價本于在上海厚禮



節會社等因查厚氏之要本大臣轉交照會于必  
因其姑未認自己之授駐紐約府朝鮮國總領事  
之職故也、若其已經膺任、必應自行照會于  
貴督辦也、為此照會、須知照會者

右 照 會

大朝鮮國督辦交涉通商事務閱

茲將閱大人在美國豐泰洋行代朝鮮政府購  
買農具及哆囉呢絨樣共十八件開列於左

(以下略)



美案 別

函覆厚禮節 全協辦晚植蓋印

大朝鮮協辦交涉通商事務全晚植奉覆  
駐劄美國紐約管理朝鮮通商事務總領事厚禮

節貴下、

敬啟者

貴總領事官兩次來函、

盛情殷々、感不容言、

貴總領事官、信義素著、休聞遠播、光膺我



朝廷寵命、授以我國商務之職、必能審時度勢、以裨益我商務、本署之深相倚重者也、前惠書綴多種、竊揣、

勤注拳々、俾我國擴開見聞、斟酌物情、而但本署一切草創、尚未有繙譯之員、不克瞭然一讀、是庸愧歎、俟覓妥手繙出、暢領緒論、再行奉覆、先此略佈、以申謝悃、望

賜涵宥、更冀輪便、時

惠好音、以慰遠念、順頌

時祉



甲申八月十二日



## 美案 別

## 函復厚禮節

大朝鮮督辦交涉通商事務金允植奉復  
駐劄美國紐約管理朝鮮通商事務總領事官厚  
禮節貴下

逕復者頃承抵前督辦閔泳穆實送金玉均書備  
審起居多福深以為慰、故邇十月陽曆十二月之  
變想貴下遠未能詳知、而金玉均、朴泳孝、洪英植、  
徐光範、徐載弼等詐稱 宮中有亂、日本兵入衛、



隔絕內外、王均等戕殺宰輔六人、逼迫我  
大君主、禍將不測、我

政府請中國駐防三營、冒難入救、亂黨逃竄、  
國家復安、日本特派全權大使井上馨前來修約、  
言歸于好、我國亦派

欽差大臣徐相兩、副大臣穆德前往日本報聘、自  
此兩國、締舊誼、相安無事、此誠兩國之福、亂黨  
洪英植為兵民所殺、其餘四人乘船走日本、尚未  
掣獲、想日本朝廷亦知金玉均等之罪犯、為內外  
之所共不容也、從前金玉均喜事費財、託名於公



事、以供於私利、貽害於國者甚不少、所與  
貴下相議者、不量敵邦事勢、不謀於衆人故、凡係  
金玉均所經手之事、我

政府不能代管、今承

貴下所言諸事、實爲我國謀忠、不勝感珮、而我國  
經變之餘、猝難施措、請容徐徐講究、公第議行至  
大砲五尊、誠爲備禦之利器、而現以安民爲急務、  
未暇遠購軍火、至於電信機器八坐、亦難辦買、停  
止購買、寔屬妥善、前督辦閔泳穆爲亂黨所害、金  
宏集代爲督辦、金宏集拜議政大臣、趙秉鎬代之、



現秉鎬又移拜他職、僕以不才、猥叨督辦之任、恐  
不堪其職、祇自愧懼、竊思 敝邦商民、尚未能遠越  
重溟、賣買於  
貴境、獨

貴下為 敝邦周旋、信息不絕、甚為感謝、嗣後有事、  
當隨便奉商、亦望

貴下時賜

德音、以慰天南地涯相望之勞、手此奉復、諸惟  
朗照

乙酉正月初十日

1885年  
明治18年  
光緒11年  
壬辰22年  
70年



未送

69

美館公信、三

函送厚禮節

大朝鮮署理督辦交涉

通事務徐相雨謹啓

駐劄美國紐約管理朝鮮通商事務總領事厚

禮節貴下

敬啓者前承

貴總領事官來函、爲敬拜購買大砲電機燈之

類、深荷

貴總領事官勤注之意、已極欽頌、第伊時、敬拜

經變屬耳、安民爲急、未暇遠圖、本衙門督辦金



以停止購買、實屬妥善之由、奉覆想  
貴領事官已經照悉矣、現今民心向安、利用物  
類、亦不可闕故、茲復仰懇、屢瀆

崇聽、殊甚悚仄、回旋砲與電機燈價、先以二萬  
圓、送付貴國商會、他雲仙順交、其餘容俟兩種  
物、來到本國後、即當計完、仰祈  
照亮周章、勿以煩瀆見罪、又荷端此奉佈、藉頌

台祉

乙酉四月二十八日

徐相兩





美館公信、三

照會美國外務

大朝鮮署理督辦交涉通商事務徐

為

照會事照得本國現與

貴國首先締好睦誼尤敦是以欽惟我

大君主勅諭

貴國全權大臣福、轉託

貴政府要致各業教師欲為肄習已有年矣向  
因本國有難未暇送信再提現今民心稍定不  
容不速延教師然後軍務及諸般事件庶可經



理至船費等雜費俟

貴參贊示覆始可辦理相應備文照會

貴參贊請煩

查照酌核見覆施行須至照會者

右照會

大美國外務衙門參贊巴

大朝鮮國<sup>開</sup>四百九十四年五月初三日照會

明治十八年乙酉  
1885年  
五月十一日  
五月二十二日  
五月廿四日



美館公信 三

美國外務大臣貝那照會

大美國外務大臣貝

照復事、照得前准敵國海軍中尉代理公使福送到

貴大臣五月初二日來文一件內稱

貴大臣代

大君主欲覓美國文武官升數員前來

貴國訓練兵卒教習 民等因、准此本大臣接



聞之下、欣慰莫名、且知  
貴國四方安靖、各為共慶昇平、於閒暇時、講求  
武備大事、真足以奮然有為、毅然自在、敵國臣  
民聆之、殊為羨慕、但查前任公使曾 有將  
貴大臣來文、已經轉送、茲復接到前因、當即送  
交議政處、商辦、惟款國政務、凡在本國訓練兵  
卒各將、不准送往他國、現與例政局議及此事、  
亦深願遵照所請、然非增益章程、不易辦理、蓋  
敵國 係於每逢國會、 大臣所有政事、  
或因仍、或增損、定一準 過此則不能擅行



政易、至接到

貴大臣前來之文、實因國會國政繁多、一時未能議及、統俟下次國會、當由議政處、商酌復增此條、方可允行、再為選擇精明、強幹之武弁、送交

貴國、聽其趨策、至覓文員一節、前已函致、福公、使請其轉達

貴大臣、將或學何事、或應教何事、一切詳細情形、函復以便、由學政處、慎選全人員前來、以充應用、而敝國甚願與



貴國世敦友誼、講修睦、永垂萬年和好之至意、  
 貴國將於各國中、自在一幟、豈非敝國之切盼  
 者哉、所有現在情形、理合照復、統望  
 核奪可也、須至照會者、

右

照

會

大朝鮮署理督辦交涉通商事務徐

乙酉九月 日



美館公信 三

厚禮節來函

大朝鮮國外務衙門督辦金

八月初七日通信後、尚無答示、義之淳言于本  
國商會所曰、依他國例、貴國街路、亦懸電氣  
燈為好、而其機器從速出送云、於僕心、極為合  
當、貴政府諸大臣之心如何否、即詳細回示、  
則僕當極力周旋為計、

乙酉十月二十四日

總領事厚禮諸理公文



## 美館公信 四

## 厚禮節來函

敬啓者、向者本國、本年六月十五日、寄書于貴大人矣、入照否、僕七月十三日、在本港<sup>(ニウヨーク)</sup>、以官員李昭好差定中國領事也、二、僕近來與本港新設日本領事<sup>(姓名)</sup>、多子奴、逐日相逢、情誼如親戚、故公幹難辦之事、相議爲好耳、三年前、<sup>(姓名)</sup>穆公在貴國京城時、以本國造貨之人、與貴國緊要等物、本國<sup>(姓名)</sup>筵子與機器之物、問諸于僕、以造貨人尤林義其磨鍊完定矣、其後穆公還歸中國、終無此等



事之奇辭、伏達請煩

貴大人詳示事、四、本港商會所、以義大灣已於  
貴國電燈機器事、已為准備、待貴國命招矣、更無  
通奇甚訝、若貴國更請教師、則即為派送事、五、貴  
國各營兵丁所用、與政府所用、及至於私用等物、  
隨其貴大人所請、施行矣

大朝鮮總理交涉通商衙門

金

元植

大人

閣下

陽曆一千八百八十六年八月初三日 丙戌八月  
二十日到

明治二十九年  
光緒二十五年 六月廿八日  
西曆一千八百九十九年



美館公信三

厚禮節函

敬啓者去十一月公文未有答函、甚感、僕當  
通奇此處之事、今正月初十日、與

大統領國之司長總公使及僕於華盛頓相議事、僕  
預定新規、故屢度公文中、如電機燈、蠶絲、茶、火  
輪船、兵器等物、想入 覽矣、若自京城至濟物  
浦間、欲設鐵道、則僕當極力周旋於歐羅巴各  
國矣、蠶絲及茶等物緊用者、若送於此處、似大  
有利耳、本國人義大淳會社、電氣燈新設於京



城云耳、現在義大淳會社於各國、廣大有設屋、  
請煩

貴大人即為付答為荷、

貴國學徒三人、依

貴大人命令、書札于教師處、而供饋一節、更不  
舉論、此是逃走入來人也、肅此順頌

台安

厚禮節

丁亥正月十七日

1887年  
081820年  
丁亥  
081820年  
丁亥  
081820年  
丁亥



美館公信三

函復厚公

敬復者

一貴領事照會、自三十四號起至四十六號、內開諸件及伴送等文、一悉接到、而略草以報、前者本大臣累月在外、未能隨便奉答、甚庸悵望、

二所教諸條、幸賜好論、若以西人度量、可採用、然事有不然者矣、朝鮮今與西國交涉者、日月甚淺、風習懸殊、則國之速盛、若不如西人所料、此必人民之習於旧俗、涵養日久、豈可造次而



變古就新之道、教民以利、使見其便而已

三貴領事照會第三十五號內言電燈一節、業已來到、而今雇工等、刻日<sup>興工</sup>竣成之期、可至三箇月云、

四朝鮮本務倚信、厚交與國、而特親於合衆國、故美國大統領既言友誼之敦厚、此實

大君主之欣喜無窮者矣、

五自美國延請之教師三人、業經已興工、課程甚旺、

六前者



大君主、致意于

美廷、請求兵教三人、而迄無答音、甚失、

大君主之夙願矣、

七 凡今外交事務、幸因德尼君之勤勉在職、此諸  
二年前、甚屬平定、而因以永寧、則內政以修、可  
興財源、

八 前自開港以來、出進抽稅、可巨款、本大臣、言囑  
于總稅司、時從船便、送呈商務、記案于  
貴領事、以供  
清覽、



九前書多承

教誨雖不盡可采用、幸勿停止、務相勸誡、  
十嗣後若更修書、請於每件公文、言事一條、免致  
煩攪、

金允植 丁亥正月十八日

1887年 丁亥正月十八日  
朝鮮王 李熙 24  
大正12年 6888



美館公信 三

美館來函

敬啓者、不幸傷命電燈教師之旗手、自  
貴政府懲辦、而日字 詳示、則當其時證觀者送  
之、則發明以處事矣、以此  
照亮為荷、肅此順頌  
台安

柔克義

丁亥二月十六日



美館公信三

函復美館

逕復者、電燈教師身死、不勝驚慘、而旗手之償命、  
不足惜、但未知因在何處、容俟懲辦之日、當有奉  
聞、自貴館送人審視、為荷、順頌時祉、

金

丁亥二月十六日



美館公信三

美館來函

敬啓者、電燈教師麥巨傷命之事、此是運數不幸、  
此非惡心也、請煩  
貴大人該旗手白放還差為荷、以此  
照亮為荷、敬頌  
勛安

美公使桑克義

丁亥二月二十四日



## 美館公信 四

## 函復美館

逕復者、昨接

來函、在囚之旗手、自放還差一事、查我國法律、殺人罪、若非怙終、雖不償命、亦有由我律、投諸四裔、不齒於人、今茲該犯、應照此律、而屢荷盛念、定出公平、愛惜蟻子之命、如千金、且死者之遺囑、婦孺之苦態、俱係仁人之心、敢不欽佩、聞該犯繫囚別營、故現已行飭別營、兼送



貴函、使之知照、枉法曲從、奉念  
盛意、非徒該肥、骨髓、知感、攀世人、且將咸頌  
行誼、甚感、容俟該營回報、再行奉復、肅此奉佈  
藉頌  
勛安

金

丁亥二月二十九日



美館公信 四

美館來函

敬啓者、此函一同徐相兩前去書封矣、此札合衆  
 國國大書記官書、而合衆國國大書記官、致命於  
 福政、福呈上此、則徐公相兩署理督辦時、以教師  
 事、致書、其答今來故呈上、請乞  
 貴督辦轉傳于徐公相兩前、爲荷專此順頌  
 勛安

美國代理公使 福

乙酉九月廿一日

1885年

明治十八年  
 光緒十一年  
 李太乙 22年



● 美信 五

厚禮節公文譯略

一本公館近移于水街第一百二十四號、

二大書記官云、我

大統領簡派公使鄧士穆、前往朝鮮等語、

三自京至濟物浦、可修鐵路否、其所價值與諸般  
茶貫、謹將當仰報、

四桑麻茶藍漸進興旺、可通我市否、

五購去電燈、業已興工、而速成續用否、



六前書仰探諸件、若賜回音、其於鐵路電信電燈生  
絲皮物、郵鈔軍器茶藍綿麻礦等件詳報開見、

丁亥三月十一日

1897年  
11月20日



美信 五

函復厚禮節

敬復者即奉

貴函第四十九號內屬諸件均已閱悉美公使  
鄧士穆前來、敬邇業已交任、

二 自京至濟物浦建造鐵路一節、甚係緊要、不容  
徐緩、但今錢財罄竭、無奈退待日後

三 向來我政府、試治蠶絲之務、迄無成效、然南北  
諸縣、本多產絲、且商人貿易漸成興旺、蠶農之



興、亦應日增、

敝國產麻甚多、而茶藍並非土產、然若試種茶於境內、應致蕃茂、而可以出口、故我

政府將欲勸民種茶、

五 電燈數月前、業已購到、起在

宮中、而甚安堅、不幸該董夢溪偶值暴死、該燈器械暫行停工、為此奉佈順頌  
時祉

金

丁亥三月十一日



敬啓者頃承

時安

悶  
種  
默  
頓

1889年  
明治22年 66年新  
光緒15年  
西曆1889年



美信 八

敬復者、貴歲月金一節敬悉、一是居限已滿、薪水已清、則自當退去、有何在否、有何勞貳、我不雇他、則他雖於此地、住了百箇月、無關於我、何薪金之更索乎、勿過慮、希仍頌  
日安

德尼頌

己丑九月初六日



美 信 八

敬啓者、電燈教師費歲雇限、已滿於我管本年七月、理應超限退、僱、以六七月箇月薪費拖欠、再索八月薪金、殊屬臆見、現將該薪水、早已算清、即行退僱、理無執拗強索、然該人、既以拖欠為談柄、再要一朔薪金、若於准否之間、互相撓貳、再延幾個月、則該人、足應沒索幾箇月薪費、此非本政府利害攸係歟、茲將前因、概而尚冀

照諒、是否核覆、以便妥訂為要、尚此并頌  
秋安



閑種默頌

己丑九月初六日

一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、



美 信 八

敬復者、兩度復示敬悉、一是我雖於僱限後六七  
兩期、月金始為算清、八人薪金、理不當再給、費裁  
若索其幾日滯留之費、則五百兩、可量加給、似為  
合當、請

貴大人海諒處之、為希順頌

時安

德尼 頌 己丑九月初七日



美 信 十

大英欽命駐劄朝鮮辦事大臣兼總領事何 為  
照會事、照得我曆一千八百八十九年、橫濱所  
我國人原禮節商社已為辦供  
貴政府所購諸件、而未受價金、今為一年有餘矣、  
本大臣隨即清賬事此、相應備文照會、  
貴督辦煩查照可也、須至照會者、  
右

大朝鮮督辦交涉通商事務關

庚寅十二月十日

1890年  
明治23年  
光緒16年  
宣統2年



賬目一紙同封

厚禮節會社賬目

西曆一千八百八十九年六月四日、因米阿指揮  
所送電器械所用油四十五箱價銀四百三十二  
元九角四分、

同年九月十日、因德尼指揮所送礦器械價銀一  
百七元二角五分、(中略)

以上合銀六百二元七角二分、

一千八百九十年十一月十三日 (明治二十三年)

橫濱厚禮節會社



美 信 十一

督辦交涉通商事務

為

札飭事、照得美國紐約府住護於時、明勸公務、練  
 嫻商情、茲由本衙門特派美國紐約府代辦朝鮮  
 商務委員、遵此一切應行商務、照章公辦可也、須  
 至札者、

右

駐劄美國紐約府代辦朝鮮商務委員 謹

辛卯六月初六日

1891年  
 明治24年  
 光緒17年  
 辛卯六月  
 初六日



## 美案 十三

大英署理欽命駐劄朝鮮便宜行事大臣兼總領事  
 惠 為照會事、照得現據本國人陀雲仙稟  
 稱內、為該商社向朝鮮政府追索電燈器械價欠  
 款一事、據查我曆本月初一日、該器械搭載于玄  
 翼輪船、到泊仁港、而該港監理之失期、不償政府  
 欠項者、大違交涉之道、此款既經駐劄本國朝鮮  
 代理公使奉承  
 上諭、與本國人毛時結成堅約也、如由本大臣稟報  
 本政府以



貴國不能違約之情形、則兩國之間、友誼將絕、事  
係緊急、除將陀雲仙稟目送呈外、茲特備文照會、  
請煩

貴督辦將三件事辦理、而一則迅將先償條一萬  
元償交、二則開飭海關、以免該器械進口之稅、三  
則以一萬元外餘款三萬七千元償交、妥結總賬  
可也、須至照會者、

右 照 會

另附稟目乙帛

大朝鮮督辦交涉通商事務南



一千八百九十三年七月五日

癸巳五月二十二日

1893年  
明治26年  
光緒19年  
庚子30年  
62年

第二百三號



Notes - Fact and Fancy  
Chronological Index

1892 5.30



朝鮮政府、已飭駐華盛頓朝鮮代理公使、轉托紐  
 約府本商社頭等員毛時購買電燈機械、而所還  
 之金、尚不償交、請煩貴公使、將此專案、知照朝鮮  
 政府辦理、查朝鮮公使、初致函于毛時曰、買此機  
 械、交與朝鮮政府、應祇來電燈教師巴窩、則朝鮮  
 政府應將所還之金、兌換于銀行、以為償還如左、  
 洋銀一萬元、在巴窩由紐約、發向朝鮮之日、即交  
 于濟物浦本商社、其餘者、在器械到泊濟物浦之  
 日、前期該械即為完繳、而總額段、伊日將紐約府  
 原價與轉運船費及每百抽五之口文、按金銀錢



通行交換時值、應行算定者也、再朝鮮公使質言  
于毛時曰、此器械購買事、已奉  
大君主勅旨、則所有償款、必無違期、本商社聞巴窩  
由紐約發向朝鮮之報、往索一萬元于仁港監理、  
則該監理奉政府命令、看檢此事、而答以現不可  
償、惟於巴窩到港之日償還矣、及其巴窩到港、該  
監理更請寬限、以我曆六月二十八日故、本商社  
仍為准許矣、及其日、頃無消息、本商社致函于監  
理署、則該監理業已上京、而署監理仍即電通于  
該監理、遂於我曆六月二十九日、本商社接署監



理來函內稱、監理電復以此款之違期、甚屬不安、  
 惟於六月三十日、另圖辦報云云等因、准查該監  
 理若是違期、以今所見、朝鮮政府沒有踐約意思、  
 茲時陳明、務望貴公使、妥結此案、本商社擬將該  
 器械下陸入庫儲置、至于清賬、也所有儲庫之日、  
 及日後不測之損害、應由朝鮮政府擔當、

陀雲仙 稟告



美案 十三

大朝鮮督辦交涉通商事務南

為

照覆事、照得我曆本年五月廿三日、接准

貴署公使照會內開、現據本國人陀雲仙稟稱、該

商社向朝鮮政府追索電燈器械價欠款一事、

係緊急、請將三件事辦理等因、准此當經轉知仁

港監理去訖、該監理已於本日還仁、自應趕速妥

辦、相應備文照覆、貴署公使請煩查照轉諭該商

社可也、須至照會者、

右

照

會



大英署理欽命駐劄朝鮮便宜行事大臣兼總領事  
惠

癸巳五月廿三日

1893年  
明治26年  
大正19年  
壬戌年  
62年

第十六号



## 美案

十三

大美署理欽命駐劄朝鮮便宜行事大臣兼總領事  
惠

照會事、照得敝曆本月六日接准

貴照、復內稱、電燈器械價先償銀一萬元、趕速妥  
辦等因、准此、業經知照陀雲仙、而現據該商稟稱、  
仁港監理非但不交先償銀、尚無一次妥訪、議及  
此案等情、務望

貴督辦、刻速將先償銀送交本署、若否則本署大  
臣、擬於次船便、稟本政府、以



貴國既使官員結約貨物、竟不踐約之情形、此係  
有損兩國敦密之友誼、特此備文、請煩  
貴督辦查照、迅即見復可也、須至照會者、  
右 照 會

大朝鮮督辦交涉通商事務南

一千八百九十三年七月十日

明治26年

癸巳五月二十七日

第二百四号



美案

十三

大朝鮮督辦交涉通商事務南

為

照覆事、照得曩以貴商陀雲仙電燈機器價先償

茶洋銀壹萬元事、歷准

貴來文催償前來、均已閱悉、在該款一萬元內、先

將七千元籌辦、茲行送交、下餘參千元、限五個日

內償清、請貴署公使、查照煩將該洋七千元轉致

該陀雲仙、代取收、送來本署、以備檔案可也、為此

備文照復、須至照復者、

右

照

會



大英署理欽命駐劄朝鮮使臣行事大臣兼總領事  
惠

另附洋銀七千元

癸巳六月初一日

第十七号



## 美案

十四

大英欽命駐劄朝鮮便宜行事大臣兼總領事施  
為照會事、茲據本國人電燈教師巴爾來呈一千  
三百三十三元五角賬目、并有稟稱、擬在俄歷本  
月七日登程回國等情、據此查、電燈工役尚未了  
畢、但該員不要無事久留、有此徑先發行之舉、該  
員在美國、則所受薪水及接待、優於此處、而來此  
以後、恪勤看事、行其曾所未行之役、每患未便得  
用幫助役夫、故業本署因  
貴政府命意、向該員作一擔認之約矣、竟至無効、



本大臣勢不能挽留該員甚慮倭人茲將賬目乙  
紙送呈請煩

貴署督辦查照迅即償還可也須至照會者

右 照 會

大朝鮮署理督辦文漢通商事務金

一千八百九十四年五月四日

甲午  
明治27年  
三月20日  
三月31日  
三月6日



## 美案 十四

大朝鮮署理督辦交涉通商事務金

為

照覆事、照得敕歷本月初一日接准

貴照會開、本國人電燈教師巴寓來呈一千三百三十三元五角賬目並有稟稱、擬在敕曆本月七日登程回國、據此本大臣勢不能挽留、茲將賬目乙紙送呈、請查照迅即償還等前來、准此查電燈工役尚未了畢、該員之徑先發行、殊非邀請之本意、理宜勉留、照前幹務除將該經費一千元並該員薪水一朔條二百元等撥充電燈所給付該



員收領外、相應備文照覆、請煩  
貴大臣查照轉諭該教師、挽回遐心、克竣要工、可  
也、須至照覆者、

右 照 會

大英欽命駐劄朝鮮便宜行事大臣兼總領事施

甲午 四月初五日

1894  
10月27日



Korea Fact and Fancy  
Chronological Index  
1894. 5. 30

J. W. Power 米国人  
利大に王宮内工品署  
の電氣燈設計師を  
敬



美案

十四

大英欽命駐劄朝鮮使臣兼總領事施  
為照會事、照得電燈教師已寓一事、業經論及於  
秋曆本月四日第四號照會矣、茲將該教師所繕  
英文僱約一紙、洎譯文一紙送呈、如由  
貴政府不即將此英文僱約蓋印、并無償清薪水  
欠款、則該教師斷當發行、本大臣勢難強留、為此  
備文照會、

貴督辦請煩查照可也、須至照會者、

右

照

會



大朝鮮署理督辦交涉通商事務金

一千八百九十四年五月 日

明治二十七年甲午

僱約稟譯

朝鮮政府以電燈教師巴窩所立之僱約期限已滿一千八百九十三年十一月十六日、同日再立五個月仍用之僱約、所有薪水照前例發給、但其後約、以僱約限滿後、如要挽留、加撥薪水、現查本年三月十六日、即該僱約限滿之日、而電燈不業役尚未了畢、由朝鮮政府、再行雇用、每朔薪水三百



元暨轎夫雇錢、理應按月撥交、毋論某時、該教師  
竣役後退產、則由朝鮮政府、即速准施、仍將薪水  
計撥、至于退僱日止、并行撥交回國上等船費事、  
一十八百九十四年三月十六日



## 美案 十四

大美欽命駐劄朝鮮便宜行事大臣兼總領事施  
 為照會事、案查本國商社陀雲仙、於貴國平安道  
 義州人洪鍾大處所覓賒銀、恰過一萬三千兩、嘗  
 經照會 貴署、而前督辦因、雖云畧有所構、實無  
 一分推給於該商處、嗣後幾期、該道觀察使於該  
 道鍾大處另構他債、而於該商處、亦無一分推給、又  
 本國商社主人毛時、曾以鐵路敍造事、因貴  
 大君主電勅駐華盛頓前使署理公使李完用前來、  
 貴國進呈鐵路約牘、至蒙



允嘉、住過一朝、不料貴政府不論右約之如何、即請還國、毛時往來之費、計美金一萬元、此則自貴政府應給者也、又貴政府所僱本國人電燈教師巴窩處、薪水暨回國費總為一千四百元、此亦業經照會貴署者也、已上三條俱涉拖欠、請煩、

貴督辦一々詳查清賬可也、煩至照會者、

右

照

會

大朝鮮督辦交涉通商事務全

一千八百九十四年八月七日

甲午七月初七日

第二十一號



## 美案

十四

大英欽命駐劄朝鮮便宜行事大臣兼總領事施  
 爲照會事、照得 貴內務府於本國商社陀雲仙  
 處要買電燈鐵線、而陽曆五月二十三日、起計限  
 六十個日內、右線價文先給四千元、其餘七千元  
 右線到來時、畢給之意、蓋印訂約、而限日已過、尚  
 稽先給、又器械油四桶、亦曾要買、價文爲一百六  
 十五元二角二分、而線則現到日本、油則已抵濟  
 物浦、兩項物價、依數準給、則右物該陀雲仙亦當  
 交付矣、請煩



貴督辦依約給價取物可也、須至照會者

右

大朝鮮督辦交涉通商事務金

一千八百九十四年八月八日

甲午七月初八日

第二十二号



[illegible]



漢城に於ける米国電氣株式會社に因り

鮮米交渉史料

一)

8127-260



以原禮部  
復差名譽  
總領事

127

美 案

十七

照會第十号

大朝鮮外部大臣李完用為照會事、茲奉我  
大君主陛下勅旨、以前任美國紐約府總領事厚禮  
節復差名譽總領事駐紮紐約府、欽此、相應備

文照會、請煩

貴大臣查照轉達

貴政府可也、須至照會者、

右

照

會



大英欽命駐劄朝鮮使臣行事大臣兼總領事

施逸閣下

建陽二年四月十一日

1897.  
明治30年  
光武23年  
大正3年



美案

二十七

照會

無名、譯本

大美欽命駐劄漢城使宜行事大臣兼總領事安為  
照會事、現接一電內開、駐在美國紐約府之韓國  
名譽總領事原禮士身故等因、查該員十五六年  
勤供

貴國事務、今焉已矣、本大臣聞知該府所在美國  
商務會社員施大類、倘

貴政府按此名譽領事之啣、則該員似有膺



命接任之意、本大臣原不得等薦美國人於  
貴政府、以授官職、本大臣既詳知該施大類之  
忠直故、特此說明該員之為人而已、相應備文照  
會請煩

貴大臣查照、須至照會者、  
右

大韓外部大臣朴閣下

一千九百一一年一月七日

明治  
34年  
正月  
廿二日  
大韓  
外部  
大臣  
朴閣下



原僅節  
後附狀

131

美 案 二十七

照會第十七号

大韓外部大臣朴齊純爲照會事、駐紐約韓國名譽  
總領事官厚禮節、視事有年、著績孔多、不幸溘逝、  
久愈嗟惜、茲本大臣恭奉

大皇帝勅諭、追褒該員、肅示韓廷紀念之意、繕附褒  
證狀一件、備文照會

貴公使、諸煩查照、妥致該遺嗣收領、是爲盼切、須  
至照會者、



右

大美辦理公使安連閣下

光武五年三月四日

再茲有送致駐美公使公文一件附送、  
并乞代寄



美案 第二十八

照會第二百七十七號

大美欽命駐劄漢城便宜行事大臣兼總領事安

為照會事照得本大臣得見

貴政府方與法國人擬訂之借款合同草本而備  
知

貴政府將典質海關稅餉以作報償之備從雲南  
會社借五百萬元等節、此合同雖經法人之印、  
雲南會社自英國本大臣以左陳事由、不容不駁  
政府句管者、



此與實海關之事也、一千八百九十八年十二月二十日、以

貴國

大皇帝陛下勅命、與美國人高佛安及寶時旭會社訂立合同、以爲高佛安及寶時旭會社敷設水器於漢城、而與執各海關、以作該費募集之資等情、又於一千九百年七月十四日、以

大皇帝陛下勅令、此合同更加擴大、同年九月二十九日、

貴宮內府大臣承認該合同以後、測量技師、行



初測量、以為預算該所需之費額、及量算海關收入之幾分、可擔此費矣、今此典質海關於他國借款、必將妨碍美人之已成合同、則本大臣乘此該借款問題未決之時、不得不反抗其典質海關之議也、相應備文照會、請煩貴大臣查照、及早準備、無使已訂之合同、被此等妨害可也、須至照會者  
右

大韓外部大臣朴 閣下

一千九百一十一年五月二十一日



美案 第二十八

照覆第三十号

大韓外部大臣朴齊純為照覆事、照得本月二十一日接到

貴照會內開、本大臣得見貴政府方與法國人擬訂之借款合同草本、而備知貴政府將與實海關稅餉、以作報償之備、從雲南會社借五百萬內等節、一千八百九十八年十二月二十日與美國人高佛安及寶時旭會社訂立合同、以為高佛安及



寶時旭會社敷設水器於漢城而與實各海關以  
 作該實募集之資等情又於一千九百年九月二  
 十九日貴 宮內府大臣承認該合同以後測量  
 校師亟行初測量以為預算該所需之費額亦量  
 算海關收入之幾分可担此費矣今此與實海關  
 於他國借款必將妨碍美國人之已成合同則本  
 大臣乘此該借款問題未決之時不得不及抗其  
 與實海關之議等因准此查無論何樣合同則與  
 外國人立約須經外部妥商是為真正合同此有  
 交涉以來莫越之通例也該高佛安及寶時旭會



社擬設水器於漢城、經立合同之時、

貴公使何不早將此由、議及交涉之官乎、該合同  
本大臣未曾經眼、並不載於本部案檔、其與借款  
合同有無妨害、本大臣何可費辭辯論、

貴公使諒亦以此言不悖於理也、須至照覆者

右 照 覆

大英韓理公使安連閣下

光武五年五月三十一日



照會第二百八十一号

大英欽命駐劄漢城使<sub>ハ</sub>行事大臣余總領事安  
為照會事照得上月二十一日<sub>ハ</sub>本大臣<sub>ハ</sub>第二  
十七号照會<sub>ハ</sub>先前<sub>ハ</sub>美國人<sub>ハ</sub>外<sub>ハ</sub>成<sub>ハ</sub>立<sub>ハ</sub>合同<sub>ハ</sub>  
有<sub>ハ</sub>些<sub>ハ</sub>量<sub>ハ</sub>因<sub>ハ</sub>係<sub>ハ</sub>到<sub>ハ</sub>水<sub>ハ</sub>海<sub>ハ</sub>關<sub>ハ</sub>定<sub>ハ</sub>他<sub>ハ</sub>國<sub>ハ</sub>則<sub>ハ</sub>典<sub>ハ</sub>實<sub>ハ</sub>部<sub>ハ</sub>ハ<sub>ハ</sub>事<sub>ハ</sub>量<sub>ハ</sub>  
反對<sub>ハ</sub>在<sub>ハ</sub>案<sub>ハ</sub>則<sub>ハ</sub>之<sub>ハ</sub>昨<sub>ハ</sub>日<sub>ハ</sub>之<sub>ハ</sub>貴<sub>ハ</sub>履<sub>ハ</sub>刻<sub>ハ</sub>接<sub>ハ</sub>閱<sub>ハ</sub>悉<sub>ハ</sub>則<sub>ハ</sub>  
漢城水<sub>ハ</sub>器<sub>ハ</sub>合同<sub>ハ</sub>之<sub>ハ</sub>貴<sub>ハ</sub>大<sub>ハ</sub>皇<sub>ハ</sub>帝<sub>ハ</sub>陛下<sub>ハ</sub>勅<sub>ハ</sub>命<sub>ハ</sub>一<sub>ハ</sub>立<sub>ハ</sub>成<sub>ハ</sub>立<sub>ハ</sub>外<sub>ハ</sub>  
吹<sub>ハ</sub>之<sub>ハ</sub>貴<sub>ハ</sub>大<sub>ハ</sub>皇<sub>ハ</sub>帝<sub>ハ</sub>陛下<sub>ハ</sub>則<sub>ハ</sub>計<sub>ハ</sub>錯<sub>ハ</sub>誤<sub>ハ</sub>立<sub>ハ</sub>信<sub>ハ</sub>可<sub>ハ</sub>有<sub>ハ</sub>些<sub>ハ</sub>量<sub>ハ</sub>  
至<sub>ハ</sub>本<sub>ハ</sub>大<sub>ハ</sub>臣<sub>ハ</sub>之<sub>ハ</sub>不<sub>ハ</sub>得<sub>ハ</sub>思<sub>ハ</sub>量<sub>ハ</sub>則<sub>ハ</sub>本<sub>ハ</sub>大<sub>ハ</sub>臣<sub>ハ</sub>則<sub>ハ</sub>此<sub>ハ</sub>事<sub>ハ</sub>貴<sub>ハ</sub>  
大臣<sub>ハ</sub>則<sub>ハ</sub>昭<sub>ハ</sub>詳<sub>ハ</sub>備<sub>ハ</sub>告<sub>ハ</sub>至<sub>ハ</sub>前<sub>ハ</sub>則<sub>ハ</sub>不<sub>ハ</sub>可<sub>ハ</sub>不<sub>ハ</sub>陛<sub>ハ</sub>見<sub>ハ</sub>面<sub>ハ</sub>稟<sub>ハ</sub>則<sub>ハ</sub>



貴政所川付多般令飭を發佈せし中川外國人  
 外約証書を成立せし言明貴部印信を踏蓋せし事  
 本大臣の確證を以て此等令飭毎多中止施行  
 是より已往川本大臣の照會抗論を以て  
 本大臣の美國人の契約書に約証書の貴部批准  
 を領有せしと如此に令飭を因に貴大皇帝陛下  
 下川付美國人川後來事に宮内府川命を以て合  
 同を成立せし事本大臣の不得願會を以て  
 川茲川備文照會を以て陛下見を請要を以て請煩  
 貴大臣の査照を以て外亟請陛下見を以て此事を以て



定奪<sup>スバツテ</sup>刊<sup>カン</sup>立<sup>ツキ</sup>言<sup>ゴン</sup>為<sup>ニ</sup>要<sup>ニ</sup>須<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>照會者

右

大韓外部大臣朴 閔下

一 千九百一一年六月一日



## 美案 第二十八

## 照覆第三十一号

大韓外部大臣朴齊純為照覆事、照得五月二十一日接到

貴政府內閣本大臣得見貴政府方與法國人擬訂之借款合同草本、而備知貴政府將與實海關稅餉、以作報償之備、雲南會社借五百萬兩等節、一千八百九十八年十二月二十日與美國人高佛安及費時旭會社訂立合同、以為高佛安及費



時旭會社敷設水器於漢城、而與實執各海關、以作該費募集之資等情、又於一千九百年九月二十九日、實宮內府大臣承認該合同以後、測量技師亟行初測量、今此與實海關於他國借款、必將妨碍、不得不反抗等因、准此查該合同、本大臣未曾經眼、並不載於本部案檔、其與借款合同、有無妨碍、本大臣無以辨論、須至照會者

右

照

復

大美辦理公使安達閣下

光武五年六月五日



照覆第二百八十一号

譯本

大美欽命駐劄漢城便宜行事大臣兼總領事安  
為照覆事照得本大臣可上月二十一日照會至外  
國借款則海關稅餉並與實之人心事亦美國人外  
已成這合同量妨害之止事立聲明在案可足外昨  
接貴覆內概謂該合同本大臣未經眼亦未存檔本  
署其與借款合同有無妨害本大臣無以辨論等因准  
此並本大臣可該事以辨論量本不請求止外此本  
大臣可職分至美國人可利益量保護外為部外  
美國人外已成這合同可有言止至海關量必用外



新  
聞  
之  
聲  
聲  
聲  
聲  
聲  
聲  
聲  
聲



貴大臣查照可也須至照會者

右照會

大韓外部大臣朴 興下



駐  
桑  
港  
領  
事  
交  
勅  
諾  
送  
請  
轉

美 案 第二十九

(西歷一千九百零六年)  
光武三十五年

敬啟者、本大臣奉

旨著

貴國人寶時旭為駐劄桑港名譽領事、茲有  
勅誥洎委任狀各一件附函送致

貴公使、覓棉轉交該員、以便祇受為禱、仰瀆  
清神、不安之至此頌

擬安

(大韓外部署  
崔榮夏 頓首)

五月二十七日

朝鮮皇帝御筆



高佛安商會  
鑄銅合同地  
行

148

美案

第三十

(西歷一千九百二十年  
光武六年)

照會第三百二十二號

譯本

大美代理特派漢城全權事務巴

為

照會事、照得一千九百二十年十一月九日美國人

高佛安及寶時旭商會奉承

貴國

大皇帝陛下之啓字、

勅諭許令該商會鑄造白銅貨二百萬元、該啓字

付本館承此該商會一千九百一十一年十月十九

朝鮮日報社印



## 日本通談

勅諭進入白銅地入城、而迄今尚不接領該白銅地、以為遵行其合同書故、該高佛安及寶時旭商會、告訴本代理、求其趕早了結該案、查本代理昨接本政府電訓內開、必須極力保護高佛安及寶時旭商會之利益等因、准此相應備文照會、請煩貴大臣查照、即將右由轉達

## 貴國

大皇帝陛下、後將該白銅地領取之日期與方法及該合同之施行與否、確定



賜覆可也須至照會者

右

大韓外部大臣朴 閔下

一千九百二年一月十四日



美案

三十

照會第三百二十四號

大美代理特派漢城全權大臣事務也

為

照會事本月十四日以美國人高佛安及寶時旭

商會承准

大皇帝陛下

勅命所進白銅地一事已經照會在案查接有如

何措辦之

覆音然後可以備報我政府而尚未見



復故莊又備文照會請煩

貴大臣查照早

賜惠復可也須至照會者

右

大韓外部大臣朴 閣下

一千九百二年一月二十日



白銅貨及陸  
見不復事

153

美案

第三十

(西歷一千九百一十六年)  
光緒

照會第三百三十號

大美代理時派漢城全權大臣事務已

為

照會事、照得以高佛安及寶時旭會社奉

勅而進入白銅地一事、本年一月十四日、已經照會、

去後未承

照覆、又於同月二十日、照請

覆示其如何措處在案、嗣於本月四日照請、奏請

陸見、以為面達、所有緊急事情在案、查一未有

覆故、茲又行文照會、請煩



貴署理大臣查將該白銅地如何措處之法暨何  
間可得以

陛見等事、一、

示覆可也、須至照會者、

右

大韓外部署理大臣朴 閣下

一千九百二年二月十九日



上同滯留  
利息報償

155

美館 第三十

照會第三百三十三号

大美代理特設漢城全權大臣事務已為

照會事、照得美國人高佛安及寶時旭會社奉遵

大皇帝陛下勅旨、進入白銅地以待歸決一事、本年

一月十四日二十日二月十九日已經屢照在案、

本月一日

陛見時、

大皇帝陛下勅諭本代理、當令外部、日間辦理該事、



以為決為

勅本代理今開則有

大皇帝陛下勅命、昨日將談白銅地二百萬枚、所約  
路、而該一半、方在航運之、輸送與國局云、茲行照  
會、請煩

貴署理大臣查照、奉邀

大皇帝陛下之所諭、本代理之

旨意、將談白銅地價、并其滯留之間利息、報償之  
期、訂定示明可也、須至照會者

右



漢城水器  
敷設事  
電社賬簿  
調查事  
15

美案 第三十

照會第三百七十四号

大美特派漢城全權大臣安連

為

照會事、照得漢城電氣會社基址并漢城水器敷  
設事、漢城電話事、銀行所及銀行事業事、電氣鐵  
道延設於德沼事、自漢江至松都鐵道敷設事、其  
他各合同與契約、美國人高佛安及寶時旭會社  
已經典執、期限在於本月十五日、查本<sup>年六</sup>月十五日、  
本大臣於陛見之時、將該事狀并倘無趕早清償、



該債或不准施相當方法、則其限滿之日、將該所  
執各利權、執行放賣一事、詳細奏達於

大皇帝陛下、又奏稟以爲漢城水器敷設權、訂給於  
高佛安及寶時旭、而該會社用巨款、雇用技師、以  
營劃該方略、且

大皇帝陛下勅柏卓安、看檢該事務、又勅從海關稅  
餉中、除留幾兩、許以作該水器敷設之費也、即

勅令該會社始役該工、則可以稍寬其典執限期  
等語、伊後、尚無如許之歸決、且今更無從新交談  
之暇故、高佛安及寶時旭、將轉賣該未施行之合



同利權、以充其所損金額也、倘於一千九百二十年八月十五日內、將該債款、不為報償、則照該典執合同、將該漢城電氣會社各基業、作為高佛安及寶時旭會社基業、而賣與他人一事、本大臣茲將照明、倘或照該債款加數捧償、則該加受額、自歸漢城電氣會社、其漢城電氣會社及宮內府之所償於該美國人之額、於八月十五日、幾為日貨一百五十萬元、而本大臣願與貴大臣派員、將該高佛安及寶時旭之帳簿、一々調查、以為清決也、相應備文照會、并將該典執契



約書一通訂給該會社之各合同記一通抄呈  
貴署理大臣、請煩查照、須至照會者、  
右

大韓外部署理大臣俞箕煥閣下  
一千九百二年八月一日



美案 三〇(附載)

光武四年九月二十二日<sup>에</sup> 大韓國京城<sup>에</sup>在<sup>고</sup> 宣<sup>고</sup>  
야<sup>고</sup> 漢城電氣會社<sup>에</sup>出<sup>고</sup>典者<sup>가</sup>되<sup>고</sup>已<sup>고</sup> 高佛安及寶時  
旭<sup>은</sup>主典者<sup>가</sup>되<sup>고</sup>야<sup>고</sup>合同<sup>을</sup>訂立<sup>하</sup>如左  
証明 此一元金<sup>과</sup>該財產鋪設及保護<sup>을</sup>重要  
事務<sup>은</sup>因<sup>하</sup>야<sup>고</sup>主典者<sup>가</sup>出<sup>고</sup>典者<sup>가</sup>외<sup>에</sup>此等建築<sup>을</sup>  
執行<sup>을</sup>스<sup>고</sup>前<sup>에</sup>給錢<sup>을</sup>야<sup>고</sup>出<sup>고</sup>典者<sup>가</sup>領受<sup>을</sup>스<sup>고</sup>由是  
認准<sup>을</sup>야<sup>고</sup>出<sup>고</sup>典者<sup>가</sup>及該後嗣者執行者代理者<sup>가</sup>主  
典者及該行嗣者執行者代理者<sup>가</sup>로<sup>고</sup>되<sup>고</sup>日<sup>에</sup>紙幣二

朝鮮史綱目卷之四



十一萬元及添加額光武六年八月十五日  
 典者該後嗣者執行者代理者之報償  
 外該報錢之時或隨行或該總額或裁許  
 邊利每年十分利息計給出典者主  
 典者該後嗣者執行者代理者之報償  
 年一月二十六日大韓國  
 皇帝陛下特許  
 城電氣會社所有官許權及地役建築機械電車  
 廠軌路鐵線桿木各樣需用器具一切財產交付  
 保守地事



主典者<sup>若ハ</sup>該後嗣者<sup>若ハ</sup>執行者<sup>若ハ</sup>代理者<sup>若ハ</sup>外<sup>ニ</sup>計<sup>ハ</sup>許<sup>ハ</sup>付<sup>ハ</sup>  
 意<sup>シ</sup>財產<sup>ヲ</sup>及<sup>ハ</sup>官<sup>ニ</sup>許<sup>ハ</sup>權<sup>ヲ</sup>是<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>約<sup>ニ</sup>款<sup>ヲ</sup>內<sup>ニ</sup>載<sup>シ</sup>明<sup>ニ</sup>高<sup>ニ</sup>計<sup>ハ</sup>依<sup>テ</sup>リ<sup>ハ</sup>外<sup>ニ</sup>長<sup>シ</sup>  
 久<sup>シ</sup>世<sup>ニ</sup>襲<sup>シ</sup>テ<sup>ハ</sup>保<sup>シ</sup>守<sup>シ</sup>利<sup>ヲ</sup>用<sup>シ</sup>可<sup>シ</sup>立<sup>テ</sup>出<sup>シ</sup>典<sup>者</sup>該<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>嗣<sup>者</sup>  
 該<sup>ハ</sup>執行<sup>者</sup>該<sup>ハ</sup>代理<sup>者</sup>外<sup>ニ</sup>先<sup>ニ</sup>武<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>年<sup>ニ</sup>八<sup>ニ</sup>月<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>五<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>該<sup>ハ</sup>  
 錢<sup>ノ</sup>總<sup>ノ</sup>額<sup>ノ</sup>二<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>萬<sup>ニ</sup>及<sup>ハ</sup>添<sup>ハ</sup>加<sup>ハ</sup>額<sup>ノ</sup>外<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>今<sup>ニ</sup>年<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>分<sup>ニ</sup>利<sup>ノ</sup>  
 息<sup>ヲ</sup>具<sup>シ</sup>言<sup>シ</sup>主<sup>ニ</sup>典<sup>者</sup>該<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>嗣<sup>者</sup>該<sup>ハ</sup>執行<sup>者</sup>該<sup>ハ</sup>代理<sup>者</sup>  
 者<sup>ハ</sup>外<sup>ニ</sup>報<sup>シ</sup>償<sup>シ</sup>主<sup>ニ</sup>典<sup>者</sup>該<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>嗣<sup>者</sup>該<sup>ハ</sup>執行<sup>者</sup>該<sup>ハ</sup>代理<sup>者</sup>  
 理<sup>者</sup>外<sup>ニ</sup>出<sup>シ</sup>典<sup>者</sup>該<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>嗣<sup>者</sup>該<sup>ハ</sup>執行<sup>者</sup>該<sup>ハ</sup>代理<sup>者</sup>外<sup>ニ</sup>  
 志<sup>ヲ</sup>願<sup>シ</sup>是<sup>レ</sup>依<sup>テ</sup>リ<sup>ハ</sup>外<sup>ニ</sup>財<sup>ノ</sup>產<sup>ヲ</sup>還<sup>シ</sup>付<sup>シ</sup>可<sup>シ</sup>自<sup>ラ</sup>行<sup>ハ</sup>辦<sup>シ</sup>理<sup>シ</sup>可<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>  
 先<sup>ニ</sup>武<sup>ニ</sup>六<sup>ニ</sup>年<sup>ニ</sup>八<sup>ニ</sup>月<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>五<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>前<sup>ニ</sup>主<sup>ニ</sup>典<sup>者</sup>該<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>嗣<sup>者</sup>



者<sup>ハ</sup>執行者<sup>ハ</sup>代理者<sup>ハ</sup>該財產及官許權<sup>ハ</sup>保守  
 官<sup>ハ</sup>出典者<sup>ハ</sup>該後嗣者<sup>ハ</sup>執行者<sup>ハ</sup>代理者<sup>ハ</sup>  
 與主典者<sup>ハ</sup>該後嗣者<sup>ハ</sup>執行者<sup>ハ</sup>代理者<sup>ハ</sup>該財  
 產及官許權<sup>ハ</sup>官<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>官<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>在<sup>ハ</sup>許<sup>ハ</sup>官<sup>ハ</sup>王<sup>ハ</sup>一切<sup>ハ</sup>妨<sup>ハ</sup>礙  
 是<sup>ハ</sup>除<sup>ハ</sup>免<sup>ハ</sup>官<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>陳<sup>ハ</sup>各<sup>ハ</sup>財產<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>讓<sup>ハ</sup>與<sup>ハ</sup>官<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup>便<sup>ハ</sup>易<sup>ハ</sup>官<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup>  
 是<sup>ハ</sup>為<sup>ハ</sup>官<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>合<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>駐<sup>ハ</sup>韓<sup>ハ</sup>美<sup>ハ</sup>國<sup>ハ</sup>公<sup>ハ</sup>館<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup>存<sup>ハ</sup>憑<sup>ハ</sup>刊<sup>ハ</sup>官<sup>ハ</sup>已  
 該錢額二十一萬元及添加額<sup>ハ</sup>具<sup>ハ</sup>達<sup>ハ</sup>利<sup>ハ</sup>官<sup>ハ</sup>光<sup>ハ</sup>武  
 六年八月十五日<sup>ハ</sup>報<sup>ハ</sup>償<sup>ハ</sup>官<sup>ハ</sup>若<sup>ハ</sup>違<sup>ハ</sup>期<sup>ハ</sup>官<sup>ハ</sup>主<sup>ハ</sup>典<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>  
 該後嗣者<sup>ハ</sup>執行者<sup>ハ</sup>代理者<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>世<sup>ハ</sup>襲<sup>ハ</sup>保<sup>ハ</sup>守<sup>ハ</sup>官<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup>  
 是<sup>ハ</sup>句<sup>ハ</sup>諸<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>依<sup>ハ</sup>官<sup>ハ</sup>該<sup>ハ</sup>財<sup>ハ</sup>產<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>切<sup>ハ</sup>奪<sup>ハ</sup>入<sup>ハ</sup>官<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup>利<sup>ハ</sup>益<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>



[illegible]



之間川新爲保險金費額出給當以欠缺이有否여  
或該領受証은主典者外에傳友치이否는境遇  
에主典者나該後嗣者나執行者나代理者가該  
家屋等을保險하야保險費를出給하되該費額은  
出典者나該後嗣者나執行者나代理者가上條所  
定邊利를照하야報償하기로約定하已該費額  
報償하외지該黃金은主典者나該後嗣者나  
執行者나代理者外財産을世襲保守하는權에添  
加하意로出典者外該後嗣者外執行者外代理者  
로더브러該計約을이事



右開		宣統元年		月		日		各約員等		親自署名		宣統元年	
漢城		電氣會社		社長		李允用		署名		高佛安		及寶時旭	
全代者		高佛安		署名									

宣統元年九月廿五日



美案 第三十

高伸安寶時旭處典執之漢城電氣會社財產目錄

地段 鍾路事務所位置

東門內建築占據及木柵圍有地段

龍山事務所及場庭

今 鉄離壕有地段

舟橋賣票所據有地段

京橋停車場今

鍾路賣票所今



雇員住所園地地段 五宮祠	南門內器械間據有地段	軌路敷設路線	註明 以上諸處ハ南門內器械間官契ハ高	佛安寶時旭ハ保有意ハ其他ハ不有	事	建築 鐘路事務所	器械廠	儲油室	鉄工場
--------------	------------	--------	--------------------	-----------------	---	----------	-----	-----	-----



排車舍	東門內大庫	小事務室	石炭庫	木匠場及修車場	鐘路賣票所	舟橋	京橋	清涼里	南門內
				東門					



東門內全	龍山停車場	全	守宣室	磚製	雇員住所及外部建築	南門內器械間	東門內器械廠各種器械	全	物庫所儲各種機械準備品	車輛	舊用客車六坐	二十	五馬力連機	別車	一坐	全	御車	一坐	全
------	-------	---	-----	----	-----------	--------	------------	---	-------------	----	--------	----	-------	----	----	---	----	----	---



鐵線 鐵途環輪線及運力線	三十呎長客車	二坐	全
	載物車	二坐	二十五馬力二倍運機
	全	三坐	旧用平面車
	新製客車	十五坐	五十馬力運機
	長平面車	一坐	
	短全	二坐	
	短(五呎)物車	二坐	
	手運車	一坐	
	工匠所用推車	四坐	

鐵途環輪線及運力線



	點燈天地線
	電話線具器品
	高佛安寶時旭庫間儲有之電社準備品
	東門內儲有之準備品
	龍山儲有之準備品
	南門內器械間儲有之準備品
準備品	東門內、南門內器械間、及高佛安寶時旭
	庫有與自日美歐洲輸來之各種準備物
傢伙	各事務所各庫內所有之煖爐、
	事務所各種傢伙



認許權

電燈飲送等一切電氣運用權

城內城外電燈掛設三十年間獨許權



電社典約  
派員調查

175

美 案

第三十

照覆第 号

大韓外部大臣臨時署理宮內府特進官俞箕煥為  
照覆事、照得接到本月一日

貴照會附送光武四年九月二十二日所訂電氣  
會社財產典約一件、其約內載明係該紙幣二十  
一萬元及添加額年利等項、以該財產抵質、限于  
光武六年八月十五日照數報償、倘若違期、則該  
財產皆歸受典者執業云々、查該報償之款、自應



詳悉、一一核算、合計幾何數目、乃閱

貴照會內、并未逐一詳細叙明、某款幾何、某款若干數目、是應按

貴照會、彼此派員、將該帳簿、一一調查、以為清決、至於

貴照會內、所開水器敷設事、銀行及銀行事業事、電氣鐵道建設於德沼事、自漢江至松都鐵道敷設事、按此各項事件、並皆與該典約、毫無干涉、若該各項有何須得核辦之處、容堪另行、商量辦理、茲惟應將該電氣會社所辦電氣項下之事、查核



辦理第一要著最攸關者、即係實欠實存數目、須得逐款一一查明、核算清晰、方堪辦理、今已奉旨、著總稅務司柏卓安、為電氣會社署理社長、即行查明、該社創始用費及歷年出入帳目、實欠實存各款數目等額、一一按簿算計、核勘明晰、迅速具覆、欽此、一俟該署理社長查明詳覆、應行如何辦理、再為商量斟酌、照辦、相應備文、照覆貴大臣、請煩查照、轉知是禱、須至照覆者、

右

大英特派漢城全權大臣安連閣下



光武六年八月六日



電杜照目  
與極文同  
查

179

美案

第三十

照會第三百七十八號

大英特派漢城全權大臣安連為照會事、照得美國  
人高佛安及寶時旭會社債款一事、昨接

貴復在案、查本大臣無怪於

貴大臣之不詳燭其典約、而因

大皇帝陛下之啓字命令協成之、此文蹟實包容各  
權也、然本大臣除將該原本文蹟、呈查於調查員  
之前外、不能呈文



貴大臣再查、

貴大臣似是言及該賬目之不明、此等文字已經  
備呈、而似或間失於、

關內也、至若柏卓安之被選調查一事、本大臣非  
但無所反對、還望伊之詳細看查也、本大臣亦應  
派員同查、茲選仁川居陀雲仙、倘

貴大臣將本大臣之容准柏氏被選一事、知照該  
員而准該派員、則當飭陀雲仙與柏氏議定日期、  
同查該文簿也、相應備文照會、  
貴大臣請煩查照、須至照會者、



右

大韓外部署理大臣俞箕煥閣下  
一千九百二年八月八日



著柏稅司  
為電社署  
理社長另  
行派員調  
查賬目

182

美案

第三十

照會第五十二號

大韓外部大臣臨時署理宮內府特進官俞箕煥為  
復行照會事、照得查辦電氣會社典貨契約一事、  
今接貴來文謂擬派仁川居陀雲仙會同調查該  
社賬目等因、本大臣亦無異見、惟是前奉

諭旨、特著柏總稅務司為電氣會社署理社長、非為  
查核帳目已也、蓋著其為署理社長、要在查明該  
社一切事務、加意照拂、而兼查該帳耳、茲擬會同



查辦為要、相應備文、復行照會  
貴大臣請煩查照、是禱、須至照會者、  
右

大美特孤漢城全權大臣安連閣下

光武六年八月十三日



美案 第三十

照會第三百七十九號記本

大英特派漢城全權大臣安連為照會事、昨接  
貴復、准糾陀雲仙調查漢城電氣會社文簿、柏卓  
安奉

旨署理該社長、使之加意照辦、該社事務、不但專為  
調查文簿也、當派官員、會同陀雲仙、調查該文簿  
等節、當經閱悉、查柏卓安之署理社長、想是代辦  
李贊成允用也、本大臣無所異論、該基業、既是與



質於高佛安及寶時旭、則社長之事務、未曾管理  
 該高佛安及寶時旭、且以其與質談業、而未償其  
 債之故、高佛安及寶時旭、當自明日就有談業、則  
 電氣會社員之事務、從此減少、高佛安及寶時旭  
 照自意應將該社務、照舊辦理、若另派委員、代柏  
 車安調查文簿一事、殊甚缺乏、倘在柏氏之副、則  
 想無異議、相應備文照會。  
 貴署理大臣、請煩查照、須至照會者。

右

大韓外部署理大臣俞美煥閣下



一千九百二年八月十四日

朝鮮日報



電社水器  
事十月一  
日內各決

187

美案

第三十

照會第三百八十一號

大美特派漢城全權大臣安連為照會事、照得以  
貴政府之未償債款於高佛安及寶時旭該典當  
尚無稱滿之決、前定今日以為高佛安及寶時旭  
執有該業之期故、該會社執行其業、茲行通報、至  
若該債帳實數、要待調查員查報、可從詳知、茲定  
本年十月一日 告伊時該調查報為該案清決之期、  
倘過此期、



貴政府當失去各樣利權、而該高佛安及寶時旭、隨其所願、將該業轉賣、或自行經紀、此若不合、本大臣、必使高佛安及寶時旭、斯速轉賣該業矣、與此案相續之漢城水器事、

貴政府新施該合同之政、高佛安及寶時旭請索相當賠償、自有文簿之詳悉者、該高佛安及寶時旭以此事二個年之久、用巨費之技師測量線路、及費額畫出圖形與方策、轉交柏卓安、復從其意為變更、後呈納

呈宮、而上年柏卓安奉遵



皇敕、從海關稅餉中、除留所需錢額、凡必要事務准  
 備已久、始役之處、分高、邊、高、佛、安、及寶、時、旭、倘非  
 水器一款、更無收緊於逗留此處、則水器新施實  
 際、此次執有該典質基業也、然則該高、佛、安、及寶  
 時、旭之所費用於準備設行水器之外、宜受豐盛  
 賞與、以充其受害、該人等之所企望者、亦是也、水  
 器一事、請要賠償、無所有、關於漢城電氣會社之  
 典質、乞本大臣、必求  
 貴大臣之將此事為相連、而亦於本年十月一日  
 以內、一體妥決、為此備文、照會、



貴大臣請煩查照、煩至照會者、  
右

大韓外部署理大臣崔榮夏閣下  
一千九百二年八月十五日



上因查核辦理  
以期完結事

191

美 案 第三十

照覆第五十二號。

大韓外部大臣署理外部協辦崔榮夏為照覆事、照得疊據本月十四十五兩日

貴來文、為會同查核電氣會社帳目、以便辦理該社典約事件、俱經閱悉、大都可以照辦、其會同查帳、柏總稅務司事務甚多、恐未遑暇時、常與此擬派副稅務司湛瑪斯幫同、與陀雲仙會同查核、電氣會社一切冊簿帳目、大約於貴



貴大臣所訂之本年十月一日已可查核清晰、隨即轉典約事、是高佛安及寶時旭、執業轉賣諸談、俱堪無庸言矣、至於漢域自來水器具等事、自當另行查核、辦理、以期同時完結、相應備文、佈覆照會

貴大臣、請煩查照、見覆施行是禱、須至照覆者、右

大美特派漢域全權大臣安連閣下

光武六年八月二十日



路業虹橋  
致有損害

193

美案 第三十

照會第三百八十八號

大美特派漢城全權大臣安連為照會事、照得今接  
美國人高佛安及寶時旭商會申稱、在俄公館後  
路、方築一虹橋、而該處所在電氣鐵道、係是宮內  
府基業漢城電氣會社雇員之所占有者、而漢城  
電氣會社各業、既為典質於高佛安及寶時旭商  
會、將該各業已經執有、方在壘決之地、此虹橋之  
役、致有多大損害於該業、則本大臣理宜請求



貴政府擔當其損害、且提勸該業、宜於該虹橋始  
役之先、贖作漢城電氣會社之業、甚是便當也、相  
應備文照會、請煩

貴署理大臣查照、須至照會者、

右

大韓外部大臣署理崔榮夏閣下

一千九百一十二年九月十五日



美案 第三十

照會第六十二號

大韓外部大臣署理外部協辦崔榮夏為再行照會事、照得查核電氣會社帳目、前經彼此照會、定於本年十月一日歲事、茲經柏總統務司報稱、本擬如期告竣、奈因高佛安未得早回漢城、以致耽延時日、不能如期查畢、今宜請展其期、以本年十月十五日為限、至期自堪將該社出入各項、按照帳目、逐一查核清晰、隨即辦理可也等情、准此相應、



再行照會、

貴大臣請煩查照施行是禱、須至照會者、  
右

大美特派漢城全權大臣安連閣下

光武六年九月二十九日



## 美案 第三十

照復第三百九十五號

大英特派漢城全權大臣安連為照會事、照得昨接貴上月二十九日照會內概、茲據柏卓安報稱、因高佛安之未克即還、十月一日內不得調查電氣會社文簿、將該期延到十月十五日、則可以一、調查等因、請煩查照施行等因、准此、本大臣領得高佛安之准許展期、以十月十五日作為終結該案之期、故茲仰佈



貴署理大臣查照須至照復者、

右

大韓外部署理大臣崔榮夏閣下

一千九百二年十月一日



美案三十

高佛安等帳  
簿調查過帳

照會第三百九十八号

大美特派漢城全權大臣安連為照會事美國商會  
高佛安及寶時也。以債款事。由執赴漢城電氣  
會社基業。外電氣鐵道延長敷設權。外開城電氣鐵  
道敷設權。外漢城水器設行權。外漢城電話設置事  
外銀行所設行權。一并執行。此等事。至本年八月一  
日。已經照會在案。外之該債額。并本利。外  
八月一日。外日貸。至一百六十九萬六千九百七十  
四元四十三錢內。外勅命。至任置。外之錢。外餘額  
十九萬一千八百四元五十八錢。外扣除。外之實餘

朝鮮史料卷之四



額<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>百五十萬五千一百八十九元八十五錢<sup>ハ</sup>  
 之<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>八月七日貴全任大臣<sup>ハ</sup>柏卓安<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>漢城<sup>ハ</sup>  
 電<sup>ハ</sup>義會社帳簿<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup>調查<sup>ハ</sup>命<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>照復<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>  
 八日<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup>照復<sup>ハ</sup>命<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>柏氏<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>該帳簿<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>話<sup>ハ</sup>  
 查<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>請求<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>十三日<sup>ハ</sup>准許<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>照<sup>ハ</sup>  
 復<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>接<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>十五<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup>該各業<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup>執行<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>期限<sup>ハ</sup>  
 以<sup>ハ</sup>照會<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>該帳簿<sup>ハ</sup>照復<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>日<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>稍寬<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>  
 求<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>本大臣<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup>照會<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>内<sup>ハ</sup>概<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>十月一日<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup>該<sup>ハ</sup>  
 該調查報告<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>成<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>伊日<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup>過<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>該債<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>



了償<sup>セシム</sup>シ<sup>ハ</sup>人<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>貴政府<sup>ハ</sup>外<sup>ニ</sup>該各業<sup>ハ</sup>還<sup>ル</sup>有<sup>ル</sup>權<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>失<sup>ス</sup>  
 去<sup>シ</sup>云<sup>フ</sup>該高佛安<sup>ハ</sup>及<sup>テ</sup>實時<sup>ハ</sup>胆<sup>ニ</sup>會社<sup>ハ</sup>小<sup>ニ</sup>該業<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>實<sup>ニ</sup>實<sup>ニ</sup>  
 之<sup>カ</sup>自<sup>ラ</sup>行<sup>フ</sup>經理<sup>スル</sup>之<sup>カ</sup>任<sup>ニ</sup>意<sup>ニ</sup>辦理<sup>ス</sup>等語<sup>ハ</sup>去<sup>リ</sup>後<sup>ニ</sup>同<sup>一</sup>  
 十日<sup>ハ</sup>貴照復<sup>ヲ</sup>接<sup>ケ</sup>到<sup>リ</sup>內<sup>ニ</sup>概<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>貴大臣<sup>ハ</sup>所<sup>ニ</sup>訂<sup>ス</sup>本<sup>ニ</sup>年<sup>ニ</sup>十  
 月<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>該調查報告<sup>ハ</sup>必<sup>ズ</sup>爲<sup>ス</sup>告<sup>ス</sup>竣<sup>ス</sup>則<sup>チ</sup>將<sup>テ</sup>該業<sup>ハ</sup>伊<sup>ノ</sup>日<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>決<sup>ス</sup>  
 至於<sup>ハ</sup>漢城<sup>ハ</sup>水<sup>ノ</sup>光<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>事<sup>ハ</sup>亦<sup>チ</sup>當<sup>ニ</sup>調<sup>ス</sup>查<sup>ス</sup>期<sup>ハ</sup>同<sup>一</sup>日<sup>ニ</sup>了<sup>ス</sup>決<sup>ス</sup>等語<sup>ハ</sup>九  
 月<sup>ニ</sup>二十<sup>ニ</sup>九<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>接<sup>ケ</sup>到<sup>リ</sup>貴文<sup>ハ</sup>內<sup>ニ</sup>概<sup>シ</sup>茲<sup>ニ</sup>據<sup>テ</sup>柏<sup>ノ</sup>卓<sup>ノ</sup>安<sup>ノ</sup>報告<sup>ハ</sup>內<sup>ニ</sup>因<sup>ニ</sup>  
 高佛安<sup>ハ</sup>之<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>克<sup>ニ</sup>早<sup>ニ</sup>還<sup>ル</sup>以致<sup>シ</sup>調查<sup>ハ</sup>之<sup>ノ</sup>遲<sup>ニ</sup>延<sup>ス</sup>十月<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>  
 及<sup>テ</sup>修<sup>ス</sup>繕<sup>ス</sup>報告<sup>ハ</sup>等語<sup>ハ</sup>准<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>請<sup>ニ</sup>問<sup>ス</sup>貴大臣<sup>ハ</sup>展<sup>ニ</sup>期<sup>ス</sup>於<sup>ニ</sup>十月<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>  
 五日<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>要<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>因<sup>ニ</sup>本<sup>ニ</sup>大臣<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>本<sup>ニ</sup>月<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>照<sup>ニ</sup>復<sup>ス</sup>准<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>展<sup>ス</sup>期<sup>ス</sup>



各在案查柏卓安<sup>イ</sup>此兩期之間<sup>イ</sup>該文簿<sup>イ</sup>調查  
 之<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>引盡<sup>ヲ</sup>得其便<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>柏卓安<sup>イ</sup>臥<sup>ル</sup>臣<sup>イ</sup>該  
 事<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>對<sup>シ</sup>昨<sup>ニ</sup>屢<sup>ニ</sup>次<sup>ニ</sup>相<sup>ニ</sup>談<sup>シ</sup>計<sup>ニ</sup>次<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>報<sup>ス</sup>告<sup>ス</sup>旨<sup>ニ</sup>趣<sup>ニ</sup>外<sup>ニ</sup>如何  
 外<sup>ニ</sup>該各款項<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>對<sup>シ</sup>昨<sup>ニ</sup>柏氏<sup>イ</sup>小質<sup>ニ</sup>問<sup>フ</sup>毫<sup>ニ</sup>句<sup>ニ</sup>節<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>有<sup>ル</sup>無<sup>ク</sup>  
 臺<sup>ニ</sup>本<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>臣<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>尚<sup>ニ</sup>今<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>ス</sup>以<sup>テ</sup>日<sup>ニ</sup>該<sup>ニ</sup>報<sup>ス</sup>告<sup>ス</sup>臺<sup>ニ</sup>本<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>臣<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>  
 尚未<sup>ニ</sup>受<sup>ル</sup>接<sup>ス</sup>之<sup>ニ</sup>該<sup>ニ</sup>債<sup>ニ</sup>帳<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>如何<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>辦<sup>ス</sup>決<sup>ス</sup>之<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>  
 報<sup>ス</sup>道<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>無<sup>ク</sup>之<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>十月十五日<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>今<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>過<sup>ス</sup>午<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>本<sup>ニ</sup>  
 日<sup>ニ</sup>展<sup>ス</sup>限<sup>ス</sup>迄<sup>ニ</sup>限<sup>ス</sup>日<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>本<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>臣<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>該<sup>ニ</sup>電<sup>ニ</sup>氣<sup>ニ</sup>會<sup>ニ</sup>社<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>  
 又<sup>ニ</sup>簿<sup>ニ</sup>小<sup>ニ</sup>確<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>所<sup>ニ</sup>錯<sup>ス</sup>之<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>貴<sup>ニ</sup>政<sup>ニ</sup>府<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>外<sup>ニ</sup>高<sup>ニ</sup>佛<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>及<sup>ニ</sup>寶<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>  
 旭<sup>ニ</sup>會<sup>ニ</sup>社<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>所<sup>ニ</sup>債<sup>ニ</sup>茶<sup>ニ</sup>小<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>貸<sup>ス</sup>一<sup>ニ</sup>千<sup>ニ</sup>五<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>萬<sup>ニ</sup>五<sup>ニ</sup>千<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>百<sup>ニ</sup>八



十九元八十五錢外調查始行之日<sup>ヨリ</sup>起<sup>シテ</sup>之<sup>ハ</sup>費<sup>ハ</sup>  
 用<sup>ニ</sup>金<sup>ニ</sup>額<sup>ハ</sup>引<sup>キ</sup>裁<sup>ハ</sup>酌<sup>ス</sup>之<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>高<sup>ニ</sup>佛<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>外<sup>ニ</sup>實<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>旭<sup>ニ</sup>舍<sup>ニ</sup>  
 社<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>命<sup>ス</sup>令<sup>ス</sup>之<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>該<sup>ニ</sup>各<sup>ニ</sup>業<sup>ニ</sup>を<sup>テ</sup>執<sup>ス</sup>有<sup>ニ</sup>之<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>已<sup>ニ</sup>意<sup>ニ</sup>を<sup>テ</sup>從<sup>ス</sup>之<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>  
 辦<sup>ス</sup>理<sup>ス</sup>之<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>同<sup>ニ</sup>本<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>臣<sup>ニ</sup>が<sup>テ</sup>責<sup>ス</sup>大<sup>ニ</sup>臣<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>此<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>認<sup>ス</sup>準<sup>ス</sup>書<sup>ニ</sup>  
 量<sup>ニ</sup>請<sup>ス</sup>求<sup>ス</sup>之<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>該<sup>ニ</sup>各<sup>ニ</sup>業<sup>ニ</sup>を<sup>テ</sup>放<sup>ス</sup>賣<sup>ス</sup>之<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>此<sup>ニ</sup>債<sup>ニ</sup>額<sup>ニ</sup>を<sup>テ</sup>補<sup>ス</sup>  
 充<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>足<sup>ス</sup>之<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>該<sup>ニ</sup>債<sup>ニ</sup>額<sup>ニ</sup>を<sup>テ</sup>啓<sup>ス</sup>字<sup>ニ</sup>勅<sup>ス</sup>命<sup>ス</sup>之<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>成<sup>ス</sup>之<sup>ハ</sup>  
 之<sup>ハ</sup>合<sup>ス</sup>同<sup>ス</sup>量<sup>ニ</sup>由<sup>ス</sup>之<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>放<sup>ス</sup>出<sup>ス</sup>之<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>白<sup>ス</sup>銅<sup>ニ</sup>地<sup>ニ</sup>購<sup>ス</sup>入<sup>ス</sup>費<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>貸<sup>ス</sup>  
 三十五萬元<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>御<sup>ニ</sup>路<sup>ニ</sup>修<sup>ス</sup>築<sup>ス</sup>費<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>貸<sup>ス</sup>十五萬七千二  
 二百三十七元三錢<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>查<sup>ス</sup>緝<sup>ス</sup>電<sup>ニ</sup>氣<sup>ニ</sup>燈<sup>ニ</sup>購<sup>ス</sup>入<sup>ス</sup>費<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>貸<sup>ス</sup>  
 五千六百元<sup>ニ</sup>金<sup>ニ</sup>礦<sup>ニ</sup>踏<sup>ス</sup>査<sup>ス</sup>費<sup>ニ</sup>與<sup>ス</sup>電<sup>ニ</sup>氣<sup>ニ</sup>費<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>貸<sup>ス</sup>五千二百



七十二元五十錢、關内支入費日貸一萬四千五十  
 九圓十六錢、義親王殿下放費先割条日八千二百  
 五十一元五十八錢、債款餘剩日貸一萬四千元、漢  
 城水災事背約賠償金日貸四十三萬三千元、外關  
 内外道路川電燈費<sup>ニミテ</sup>日貸漢城電氣會社<sup>ハ</sup>各基  
 業<sup>ハ</sup>各契約<sup>ヲ</sup>以テ代償<sup>スル</sup>也、外川本大臣<sup>ハ</sup>該高  
 佛安及寶時旭會社<sup>ハ</sup>川報償<sup>スル</sup>立<sup>ニ</sup>相当<sup>ナル</sup>數額<sup>ヲ</sup>  
 請求<sup>ス可ク</sup>也、又川相應備文照會貴署理大臣請煩  
 查照可也、須至照會者

右照會



大韓外郎署理大臣崔榮夏 閣下  
 一千九百二十年十月十五日



為查電社  
在文各項  
及下欠事  
206

美案

第三十

照會第七十三號

大韓外部大臣臨時署理官內府特進官趙秉武為  
照覆事、照得彼此照會、議定本年十月一日為查  
明電氣會社帳目結之期、當經柏總統務司派港  
副統務司、與美商高併安等所請之陀雲仙會同  
查辦、報稱該商原帳、未曾交出、惟將該商所開之  
帳單、交出按照、該單乃係該商售賣貨物器具、與  
該會社者、實屬不足為憑、是以未能報稱查明、蓋



高佛安往旅順口未回、而不得不待渠回時查帳、  
 于是、彼此照會改期訂於十月十五日、為查明該  
 社帳目完結之期、旋經柏總裁務司於十月十四  
 日、即將所查該社該行一切各帳、開列清單、奏呈  
 御覽、並報稱、查該帳目、高佛安雖回、依然不能徹底  
 查明、因渠仍未將原帳交出、據報稱、該系帳與該  
 行之帳、混淆於一、而不能分開、故未便交出也、因  
 問該商原帳與所開單之數目、兩相同否、據渠云、  
 所開之單、俱係按照原帳、加有經手之費、在內、即  
 如煤炭、係一大宗、渠加價約百分之七、及至之十、



若機器等來自外國者、約加百分之十四云々、本總  
稅務司據此以為甚錯、未便遽允、按照該行包辦  
電車事務之合同內、註明凡該經手贖物、俱照百  
加十二而按所開單內購辦之物、當購時即加百  
分之十於開單時、又加百分之十二、是再重增加  
也、是按百加二十二矣、又按該合同註明該社月  
入之款、如不足用、則由該商墊款應用、按年照加  
十之利、定以半年付清、據此本稅務司以為該商  
應照合同得利、而合同外不得有絲毫之利、蓋該  
商購物、應於價極賤時購之、所得便宜之利、應歸



會社、而不得歸該商收納、以是而論、則該單所多加之價、應卽一併扣除、乃該帳目第一應如是改正之處、此外尚有二端、一、該出款係購物並僱人等之款、而開單內、俱將逐月所收白銅貨、兌換紙幣、折耗之項、俱開入、該出款內、照提經手之費、是不應提而提者也、自應扣除、一、該出款、多有係用白銅貨者、而開單內、俱開作紙幣、且照紙幣、提經手之費、是既以白銅貨作紙幣、應照折而扣除、又應照白銅貨作紙幣、而扣除經手之費、此項是加而又加、應照重加、而扣除者也、按以上三項、應改



正者、一為購物再重加價之項、一為日收之白銅貨不先折作紙幣而將折耗開入出款、又照出款、提經手費等項、俱應扣除者也、一為所用之白銅貨、於出款內作紙幣、又照紙幣提經手費之項、俱應扣除者也、是必將此三項、改正而需時日之工大則非少數、勢須姑緩為之、茲按該商帳單約算、至本年十月底止、需償八萬元之譜、而帳目僅查至七月底止、以本稅務司之意見、今即按照算、至七月底止、可先付給、該會社紙幣五萬元、則該商所虧者、亦無幾矣、蓋總核計該電氣會社開辦以



來約有三年入不敷出、無月不欠、自創始、至今茲  
 大約虧空紙幣十九萬三千六百元、內有二萬三  
 經手費、并有四千七百、以此計算、裁長補短、每月  
 五十元、係墊款之利、或謂該社係必用外國人而  
 約虧五千三元之譜、至虧也、要知不然、查該社雇用之外國人、三年以  
 來、裁長補短、每月薪水約計一千八百三十元之  
 譜、是所虧者、非因用外人也、明矣、今按該入不敷  
 出、所虧之款、十九萬餘元、已經宮內府陸續補還  
 十三萬六千七百八十七元、是於月入不敷出款  
 之虧算、至本年七月為止、下餘實欠五萬三千五



百二十元耳、而按該合同註明該社日入之款、應存第一銀行、即由該銀行、爲主電氣會社存支各款冊簿、以便查核、乃該日入之款、並無此項冊簿、以致查不易查、且該每月整款、則按照百五十之利、而於諸存儲之款、並不起息、即如去年七月間、宮內府付存該社之款九萬八千九百一元、又自去年七月至今年一月間、每月多有數餘存款、並皆未起利息、如將此二項存於銀行、是皆必照起息者也、

又按該商帳單、查核明晰、即如該商包辦一切工



程係皆預定數目者、茲列于下、

一建造電燈之費、除付下欠原本三十七萬元

已付十六萬元

下餘定欠二十一萬元

又利息四萬八千元

合同本利日本紙幣二十五萬二千元

查此款奉 旨、著以電社產業器具等件、作為  
該電款一切等項之典質、並立典約契、據存證、  
又按此款、未即全還、而以典質作抵者、乃因存  
款多於相抵之數目、且因於此典期二年之內、



或可獲利相抵、故不即清償也。

二建造東門外四十五里長之御道、預定價款韓

錢二十八萬五千元

嗣奉旨改造工程<sup>准加</sup>韓錢一萬五千元  
共三十萬元

內除付收韓錢一萬五千元

下餘實收韓錢二十一萬二千元<sup>時按照市價</sup>

每百<sup>加</sup>合作紙幣十五萬七千二百三十

七元三分

又利息每年按百之十<sup>算至本年八月十五日止</sup>八二萬

一千二百元



合計日本紙幣欠本及息、十七萬八千四百  
三十七元三分

三大觀亭傍建造韓式小房二千五百元

利息三百一十二元五角

合共紙幣二千八百一十二元五角

以上三項共四十三萬三千二百四十九元

五角三分無此三項係

又按該單未預定數一切數目列下

一聘來內地察勘金礦技師所用費款五千元

二電詢美國擬聘新聞館主筆者之費二百七十



二元五角

三購電燈及氣線、暨零件一萬四千五十九元一角六分

四義和君匯用之款、八千二百五十元五角八分

以上四項、共紙幣二萬七千五百八十三元

二角四分 細查此四項係該商已交

五建造電社公所九萬三千八百元

按此內有七萬五千元、係先預定工程價目、無庸議駁者

下餘一萬五千三百八元、係社被火、重造、未



預先定數、而必須有細帳、方可算者  
六、擬于西門外<sup>內</sup>造鉄橋、需請美國畫師來圖數幅  
之費、五百元

按此數雖小、亦應有細帳、方堪核實者  
七、購用轉照遠之電燈、五千六百元

按此件尚未辦到、必須到時、開有細帳、方堪  
核實者

八、宮中每夜所用電燈、一年有餘、未付價值、<sup>至七月止</sup>  
一萬五千一百六十四元

按此係應照付者、而于此後者、亦應照付



九代度支部付還借款、下餘完清之款、一萬四千  
元

按此亦應照付者

十築造至德墅鐵路、因停工一年、應償虧款、七萬  
二千元

按此係按照合同于完工時、付給、今未興工、  
是無庸議償者

十一電社所雇外人、解合同旋國、須給盤川費二萬  
四千六百四十四元九角

按此係下、必付給者、如此時、解合同復雇他



人莫若俟合同滿期時、計算為宜

復查光武四年四月二十八日、電社社長與高佛安等、草訂德野鐵道合同、載明須先由該商繪圖、並算明電款若干、呈待核辦、嗣經呈圖、並開需款七十二萬元之譜、一併呈核、旋于光武五年二月六日奉

旨、著電社社長與高佛安等、訂立允行合同、第此合同未見交出、雖然、謹按

旨意、固須應辦、而必且俟一年之外、為之者也、維此



之故、是以允該商於完工之後、照價此停工一年  
之虧款按照十分一計算、即上第十條所書之七  
萬二千元也、且按

旨內並著每月應付該商白銅貨若干、以備便至開  
工之時、得數應用、第此白銅貨、亦并未曾發給、又  
按

旨內著李允用將以上各節、立一合同、交與高佛安、  
收執為憑、此合同亦未立也、茲按德暨鐵道停  
工之限期、乃於今年二月為滿限期之日、而至於  
今、尚未傳



旨興工、惟原其故、蓋初擬築造該鐵道也、原欲藉以獲利、乃觀域內之鐵道、行電車三年以來、并無利益、且每月虧有五千元之譜、故且姑緩為之、是此緩辦實甚有理、而此合同、尚未撤銷、若俟至觀其情形、有可獲利之處、即便興工、亦甚妥焉、第該商因按照合同、預為購辦一切應用器具、並雇需用各等人員、所用之款、幾何、應由該商開列清帳、交呈核明、照數償還、惟此償款、須俟興工開辦之時、方可照付、而自交此帳時、即為完結之日、此後不得再生枝節也、



又查該合同暨契約契據叙明所典質之電社產業器具等項乃係作為該電事款項一切前此後此各項之抵款也是該德墅鐵道未截事前則該合同不得撤銷而該契約乃係專為該電事之抵款憑證確與他署別項一切事件皆無干茲今該德墅鐵道雖由政府不願舉辦而該商索討七十萬元之全價以補所虧是殊匪夷所思不可解者也又查擬辦自來水之法今該商索款計需紙幣四十三萬三千元乃係該商所擬將來可得之利之款項即係按照辦自來水工程全價之四分



之一也、是該全價針需紙幣一百七十三萬二千  
 元之譜、而按初議此事、乃係于光武二年十二月  
 二十六日漢城判尹李采淵、與美商高佛安兩相  
 議、編隨訂議草、合同言明、俟高佛安歸國順便、訪  
 明自來水一切辦法、以何法為妥善、則於高佛安  
 旋漢城時、如若彼此兩下、皆願為之、再為互立辦  
 理、自來水之合同、即照如何為妥善之法、辦理并  
 言當時暫且不與他人商辦此事、須俟高佛安回  
 漢以後、再為議辦、於是高佛安起程歸國、一年半  
 後、於光武四年七月十四日、李采淵與高佛安實

明治三十三年  
 一九〇〇年



時旭互相議定、立一合同其內最關緊要之條係  
 高佛安自美國回韓、將所訪明之妥善辦法、豫備  
 妥帖、以便立訂、包辦合同、辦理自來水一切工程  
 事件、而李承淵因該需之款項、未曾豫備、不能即  
 立、遂行開辦興工之合同、第言明此後無論何時  
 如若舉辦自來水之事、必得解高佛安寶時旭辦  
 理、而不得與他人辦也、亦曾將願原故、說明因與  
 高佛安言此事在最先耳、茲查前立之兩合同內、  
 有兩事為最新明較著者、一係顯明此後如辦漢  
 城自來水、必歸高佛安寶時旭辦、而不得與他人



一係顯明該兩合同、或單審勘、或合觀之、並非言  
 定包辦之合同也、實甚明晰、而分而言之、其第一  
 合同之所言者、即有及照、永不願辦之意、寓於其  
 間、其第二合同之所言者、即係顯須續立包辦合  
 同、而此實非包辦之合同也、然、雖包辦合同、未曾  
 定立、而該商、預備一切應需之事、不無費用款項、  
 延請技師人等、勘量地段、繪畫圖幅、及一切事件、  
 是此費款、應由該商、開列清帳、交呈、即必將該款  
 項、照償者也、上年十月、總統司面奉  
 諭旨、著會同該商、議明、先由該商、將所擬辦法、開列



清單、交總統務司核定、可行、轉奏請

旨定奪于同時奉

旨著從開稅項下于八年內每年提撥二十萬元存  
俟

頒旨撥用欽此並未宣明、用于自來水也、而查自來  
水之辦法按該單所開者、確實妥善、惟該單內所  
開一切工程器具之各價目、莫由核定虛實、若舉  
辦時必得將該價目、從實核定、方堪開辦、即如該  
商所開一百七十三萬二千九之價、果然公道、而  
該商因不與辦、索討四分之一、以補該所虧款、得



無太過也乎、

又按奉

旨、著總稅務司查核電社出入各款、旋經查明、存於該商高佛安寶時旭之行內、共計日本紙幣一百七萬四千八百十四元六角三分內奉

御票暨傳

旨提支七十三萬五千八百五十四元八角二分下、餘實存日本紙幣三十三萬五千八百五十九元八角二分、維此存項、按照該商親筆收單、所書明者、非奉



御票提撥、一概不得支用、乃該商又自開帳於實存  
 項下、擅撥紙幣十四萬四千五十五元二角四分、  
 以抵別項帳目、而云下餘實存紙幣十九萬一千  
 八百四元五角八分、是不應然者也、且按該商親  
 筆收單內、載明存款項下、應得幾何利息、進繳於  
 宮內收納、而今該商並未繳納、分毫利息、反設詞  
 謂、因不准存於某處、而不能起息也、是殊不合者  
 也、設若該商將該存款之項、收儲於該商家鐵櫃  
 之內、自然不能起息、若存付息之銀行內、則所得  
 之利息、應行轉交、宮內收納、又若將該存款項、整



為電社月虧之用、則應按照十分一之利息、繳交  
 官中收納、如此辦法、方合情理、今查該原存款係  
 于光武四年四五七月之所存者、共有一百七萬  
 餘元、是年之內、所提撥者計將二十五萬元之譜、  
 下餘八十萬元之譜、存有一年半餘、是應起息而  
 該商未交納息者也、昨經按照原存暨提撥及下  
 餘實存三十餘萬元之數目、逐一開列入出、實存  
 清單、上呈  
 御覽、核奪茲總結之按照一切用帳、除造御道及  
 電燈暨小屋三項、係有實證、無庸論外、至於他項、



有由該商開呈清帳者、有未開呈清帳者、已開者、  
 固無論矣、未開者、應由該商將該各項、逐一開明  
 價目、及運費、經手費等、俱必明晰條列、交呈核定、  
 以便照辦、相應備文、藉請

貴大臣、囑令該商、將所應開之帳目、一一從實開  
 明、詳細條列、照到本署、以便查對、無謬、便照辦理、  
 至於鐵道變賣、抵帳之說、本大臣、則不以為然也、  
 姑無庸議、為此照會、

貴大臣、請煩查照施行、是禱、是荷、須至照會者、

右

照

會



大英特派漢城全權大臣安連閣下  
光武六年十一月一日



電社帳簿  
方有據實

232

美案 第三十

照會

大美特派漢城全權大臣安連為照會事、本月一日  
接到貴無日子第七十二號照會閱悉、一是查八  
月二十日貴照復內開、貴大臣所訂本年十月一  
日漢城電氣會社帳簿、可以竣查調查報告、亦必  
修成、伊時、可將該案了決、至若漢城水器一款、亦  
將使之調查、以為同時妥決等語、在案再查、本大  
臣雖已將該期展至十月十五日、而本大臣十一  
月一日以前、未開如何措處、



貴大臣照復中、亦無如何辦法、但曰該商會之將  
欲轉賣漢城電氣會社各業於他人一事、似屬無  
理等語在案、十月十五日照會、本大臣將該事案、  
明白陳告、而接到此等照復、不勝訝歎、該各業、方  
在議賣中、而倘該交易、成約、則本大臣將該業、期  
照常例、轉交新買者而已、至若柏卓安之調查報  
告、除德沼延長電氣鐵道、及漢城水器等事外、昭  
詳具報、而本大臣、已將漢城水器、及德沼建設一  
事、說明於柏卓安、柏亦約以查報、而反要高佛安  
及寶時旭商會、將此事、自備報告



貴大臣既有將該事案一體調查、以為同時妥決之語、則此豈非違背責約乎、漢城水器設立一事、如柏卓安之言、未有訂成之合同、而高佛安寶時旭依照所有契約、又奉遵

大皇帝陛下聖勅之從、本大臣與他員下者、亟行測量、

大皇帝陛下又勅柏卓安、從海關稅餉中、除留錢額、以備設行水器之費、此足以抵當合同、此若違越、亦足以要求賠償、故我民從該預算額、求償二十五、以充其實質、與所失利益、及以電氣事務逗遛



之費未曾領受者也、摠之今日之頁巨款於美國  
人者、無非李容弼之不遵日報白銅貨之

聖勅故也、蓋奉遵此

勅、而日償白銅貨則債已了償、電氣各業已為

貴政府管轄矣、相應備文照會

貴大臣、請煩查照、須至照會者、

右

大韓外部大臣趙秉世閣下

一千九百二年十一月十二日



上因使會  
據可了事

206

美案 第三十

照復第七十八号

大韓外部大臣趙秉武爲照復事、照得接到本月十

二日

貴照會、爲調查電社帳目、延遲未結、該商擬賣該  
社之各產業、致爲阻滯一事、查該電社帳目、經柏  
總稅務司派同副稅務司湛瑪斯襄辦與美人陀  
雲仙會同查核、據報該商高併安寶時旭等、不將  
原帳交出、惟交該商所開帳單、而單內各款、多加  
虛數、混淆紛沓、實難查明、以致多需時日、即如所



謂延遲之時日、猶屬至為迅速之時日也、該商帳單、虛加款數、自應即除、而未有細帳之款、是必詳細開列、以便核查、今俟該商將一切各款、從實逐細開列清帳、遞到會同核對、無謬、即照償還、自然不可轉賣、該社各產業也、若曰轉賣、自不能允准也、無容多議、德墅鐵路、漢城自來水、兩款、皆未舉辦之事、該商索償太甚、礙難照准、即必償款、亦當定一彼此公平之償數也、方可照償、總之此案、皆因該商不交原帳、而所開之帳單、又屬不實多虛、報數混淆不清、致延時日、若將原帳交出、此案已



早完結、何至如此延遲、今既如此、惟有俟該商、將詳細數帳目、遞到、並將索償之款、會同議定、公平數目、自然即日可了事矣、茲備覆文、照會

貴大臣、請煩查照、轉囑該商、從速覈事、為要、而該鐵道本政府定留自用、該商不得變賣、若欲賣之、本政府不允准也、今預言明免後、多說除另照會各公使、轉諭各商、勿與該商、議論賣買、該電社產業事外、為此照覆、即望

照准施行、是禱、須至照會者

右

照

會



大美特派漢城全權大臣安連閣下  
光武六年十一月十七日



電社禁賣  
官報收改  
存

240

美案 第三十

照會第四百八號譯本

大美特派漢城全權大臣安連為照會事、本月十七

日接到

貴照復內榮高併安及寶時旭商會、不曾交出原  
帳、柏卓安以致此案、延拖未決、本大臣不勝訝惑  
查該帳簿、可於六日之間畢查、而柏卓安將六十  
日調查、且柏氏若以其不交原帳之故、未能了清  
其調查、則何不於其時、通之本大臣、乃於  
貴大臣所訂決案之期、過去三十二日後、言之乎、



貴公文中、該調查、可於十月一日畢了、則伊日、當  
行清楚等語、此日、即柏卓安所訂日子、而伊後展  
期、至十月十五日、此日亦無所決、始於十一月一  
日

貴大臣、將柏卓安調查報告、傳交本大臣、此報告  
柏卓安之所云無疑、清償者、鐵路建築費、額二  
十一萬元、利息四萬二千元、

御路修築費、額十七萬八千四百三十七元、美  
國雇用人家屋建築費、二千八百一十二元、五十錢、  
金鑛調查費、五千元、電報費、三百七十一元、五十



錢、關內所用電燈費一萬四千五十九元十六

錢、

義親王旅費八千一百五十一元五十八錢、共四

十六萬八百三十二元七十四錢、事務所失火後、

更建費一萬五千三百八元、電燈費、此應按月清

兩、一萬五千一百六十四元、借款零額一萬四

千元也、右三款、柏氏不曾言論、而似想以應入於

他款者也、柏氏又不曾辨論美國雇用人月俸條

二萬四千六百四十四元、而亦想以該員等雇限

前、不當報償之意、然高佛安及寶時旭、則其在與



貴國政府卡清各樣債帳之際、勢不得不將此一  
 體清決、電氣行直燈費五千六百元、柏氏駁論、而  
 燈尚未到、原帳亦宜未接矣、燈已來到、已經備掛、  
 虹橋費五百元、柏氏又為駁論、該橋雖不依其擬  
 定式樣、今已建築於所定之地、德沼延長鐵路敷  
 設費七十二萬元、以其契約內有該役竣功之日、  
 報償該費等語、故又被柏氏之駁論、然高佛安及  
 寶時旭因  
 貴政府之延拖阻礙、不曾始役、則該商會不當任  
 其責於



貴政府之不能執行其契約之地、該商會費用鉅額、以備其所需材料、而增其鉅金矣、因為延拖時日、該商會受其不貲損害、而

貴大臣對其正當求索、以數字戲言、反作此無理駁論也、柏卓安之所反對於其報告者、乃是開拓事、鐵路事、電燈事、共為八萬元之預算、而其所駁論者、即是原帳無交者也、高佛安將該原帳之本年一月失火時失去之由、詳細告知柏氏、對此項所提出應償五萬元、并柏氏所云當報條四十六萬八百五十三元七十四錢、合計五十一萬八千



三百七十四錢、

貴大臣宜於十月十五日報償高佛安及寶時旭  
商會、而求再行調查、其駁對各項也、不此之為、既  
無幾許報償之言、又無如何報償之言、勢已如此、  
則本大臣除飭高佛安及寶時旭將該業執有隨  
其意向辦理之外、無他道理、至若德沼敷設鐵道  
事、與漢城水器事、柏卓安於始查其帳簿時、使其  
巫官湛珣斯言之曰、只將電氣會社帳簿調查云  
云、將德沼延長敷設一事、本是漢城電氣會社之  
基業、而亦入於典質各業中云、而忌伊一體調查、



貴大臣亦以公文知照本大臣、以為此案一併調查、以為同時出末云、而柏氏猶未曾查核漢城水  
器事亦為如此、柏氏報告內言、其無確立之約訂  
然、本大臣十一月十二日照會詳明、其雖無確立  
合同、其契約與文蹟、亦足以抵當合同也、該合同  
確立之前、所準備之所用額、柏氏亦云宜償、此項  
乃至八萬元、柏氏屢告本大臣曰、吾當調查此案、  
貴大臣亦云行將調查該案、期於一體了決云、柏  
氏不宜此案、反以為高佛安及寶時旭詳細開單、  
應將交出云、而該商會曾已準備、切願柏氏之調



查矣、對此案、該商會照其預算額請求百分之二十五、以充其所費、柏氏亦云、以所費額、宜其報價、以賠償將百分之十、定為當報之額、云則此幾為百分之十五也、本大臣屢告柏氏、以為倘伊果調查該帳、而許其相當額款、以充賠償、則無慮於確定其一合意之額也、美國商會以貴政府所發命令、及所訂合同增加額款、以至一百五十萬元、而今者貴照會云、此款、自其八萬元價值之原帳、柏卓安元報續出了決不曾交出之故、不能妥決等語、且云、之意、提出者、



該商將該原帳交出、則此案必以妥決云々、本大臣實不知云何也、照柏卓安之報告、

貴政府有巨款之報償於高佛安及寶時旭商會者無疑而

貴大臣猶不許我以報償之方與期限、惟防阻我民之賣却該業、以復伊之所費錢貨也、今有高名之外國二員、議買該業而

貴大臣知照本大臣、以為聲明各國公領事、使不得議買該業云、此乃

貴大臣之禁阻我民富有之權、本大臣勢不得將



此具報我政府、以待命令也、相應備文照會、諸煩  
貴大臣查照、須至照會者、

右 照 會

大韓外部大臣趙秉世閣下

一千九百二年十一月十九日



高佛安銷  
索事照各  
使之草  
交

250

美案 第三十

照會第四百九号譯本

大美特派漢城全權大臣安連為照會事、照得、以

貴部與本館往復之高佛安及寶時旭請索事、自

貴部送抵各國公領事之照會草乙紙本、大臣稿

要閱覽、茲行備文照會

貴大臣、請煩查照、並交一草為荷、須至照會者、

右

照

會

大韓外部大臣趙秉式閣下

一千九百二年十一月二十五日



美案 第三十

照覆第八十二号

大韓外部大臣趙秉式爲照覆事十一月廿七日接  
到

貴照會內開高併安寶時旭事自貴部送抵各公  
領事之照會草乙紙竊要閱覽等因准此除將該  
照會抄錄送附外相應備文照會  
貴公使查照須至照會者  
右

大美特派漢城全權大臣安連閣下



光武六年十二月六日



電社原帳  
儘可交出  
以便查核

253

美案 第三十

照會第八十五號

大韓外部大臣趙秉世爲復行照會事、照得調查電  
社帳目一事、已於本年十一月十七日照會、諸  
貴大臣轉囑該商交出原帳、從速嚴事、旋經接到  
是月十九日

貴來文、長言細論、道厥原委、茲無庸議、惟未詳明  
叙及原帳究竟如何辦理、是爲至要者也、查該商  
經手之電社、及各項一切事件、俱有原帳、儘可交  
出、以便查核、清償完結、此案且必須原帳者、爲核



原價以視該開單內所加之數目耳相應復行備  
文照會

貴大臣請煩查照轉囑該商交出所有之一切原  
帳以便核結隨即會同議定應償之額即行照數  
清還以了此案不再耽延是盼是禱須至照會者

右 照 會

大英特設漢城全權大臣安連閣下

光武六年十一月十一日



漢城電話  
擴張損害  
美人利權

255

美案 第三十一

照會第四百十五号

大美特派漢城全權大臣安連爲照會事、十八百  
九十八年一月二十九日成立而准許漢城電氣  
會社之契約書、年限三、第十一条內、農商工部持  
電氣鐵道電氣燈及電話機數設於漢城之權、准  
許於該會社、而此合同年限前、右權不得准許於  
他人事等語、查、

貴大臣亦必燭此利權亦歸於美國商會高佛安  
及寶時旭之基業與利益也、本大臣曾開設行電



詔於漢城之事、而亦常通知本大臣、以為此係無  
命令而暫時設行於地方等語、今見新聞、則將擴  
張該線路於地方及漢城內各要地云々、按查他  
人之設立電話於漢城、非但違

貴政府之契約、又損害美國人之利與權也、相應  
備文照會

貴大臣、請煩查照、保護我民所有契約書、為要須  
至照會者、

右 照 會

大韓外務大臣趙秉世閣下



一千九百三年一月二十三日

明治36年  
光武7年

光武7年

朝  
飯  
後  
睡  
午  
覺  
晚  
飯  
後  
睡  
午  
覺



上因未嘗  
准施外人

258

美案 第三十一

照覆第七号

大韓外部大臣李道宰為照復事、照得一月二十三

日接到

貴照會內開一千八百九十八年一月二十九日

成立而准許漢城電氣會社之契約書、年限三年第

十一條內、農商工部將電氣鐵道、電氣燈及電話

機數、於漢城之權准許於該會社、而此合同年

限前、右權不得准許於他人、事等語查

貴大臣亦必燭此利權、亦歸於美國商會、高佛安

明治三十二年  
十二月二十九日



及寶時旭之基業與利益也、本大臣曾開設行電  
話於漢城之事、而亦常通知、本大臣以為此係無  
命令而暫時設行於地方等語、今見新聞、則將擴  
張該線路於地方及漢城內各要地云々、按查他  
人之設立電話於漢城、非但違越貴政府之契約、  
又損害美國人之利與權也、請煩查照保護我民  
所有契約書、為要等因、准此查、電話架設自有本  
政府應行之權、惟認許我漢城電氣會社未嘗准  
施別國人也、相應備文照復  
貴大臣、請煩查照、須至照會者



右 照 會

大美特派漢城全權大臣安連明下

光武七年三月二日







補遺

本稿校了後、漢城旬報に言及するところを失  
念してゐたのを追加する。

漢城旬報中四号（博文局刊）

朝鮮開国四九三年  
癸未十月初一日

（西曆一八八三年）に「論電氣」と題し「夫電氣者

陰陽二氣合而爲一無物不有無時不然其爲物也  
運動則爲雷爲電響可以遠傳光可以編照隱藏則  
無光無響目不能見之稱不能量……」と冒頭  
して電氣の性能を説明し、その作用の西曆紀  
元前より發見せられ、近世に於て欧米各國學

者研究の結果、電信・電話・電燈等の事業勃興  
に至れる顛末を要領よく取まとめてゐる。

右は曾て書物同好会報に掲載の拙稿の一部  
であるが今手許に漢城旬報もなく右の会報も  
なく詳しくは後日の調査に譲ることにするも、  
ここに余白を藉りて難題備忘の一端とするこ  
うである。



明治二十五年高宗三年(一八三)

漢城旬報

第四号

博文局

朝鮮開國四百九十二年癸未十一月初一日  
中國光緒九年

論電氣

夫電氣者陰陽二氣合而為一無物不有無時不然然其為物也轟動則為雷為電響可以遠傳光可以徧照隱藏則無光無響目不能見之秤不能量之故世人忽聞彼蒼之有聲則指以為雷閃見大地之掣光則呼以為電須不知此聲此光從何而來從何而去亦不知是動是靜由何而有聲由何而有光迨西歷二千六百年前泰西希臘國有名士七人並稱七賢其中一人名達兒者始以布片緊摩琥珀令發熱氣近之於紙絲羽毛等輕物則能吸引其物然當時只知此性之獨存於琥珀



珀未知盡賦於流形之內也。迨後人以玻璃火漆等物摩熱，亦能吸輕  
 物如琥珀然。若質巨氣足，則見有火星爆出，尋知五金之屬皆可善引。  
 又以瓶內外粘貼錫箔，畜其氣放<sup>之</sup>，則有光如電，作聲如雷，能震人擊  
 物而仍不知為何氣。迨中國乾隆三十年<sup>（美）</sup>國富蘭林設法試驗，遇雷雨  
 時以紙鷲放於空際，初見繩上絲縷蓬然，堅立繼則氣隨繩下，盛之充  
 瓶，用一鉄匙稍近瓶口，則火星躍出，逆然有聲，與向用之器無異。因知  
 琥珀玻璃等物所生之物<sup>氣</sup>實與雷電無殊。電學由是<sup>盛</sup>興，然凡發現電  
 氣及導引電氣，必各物不同，故萬物中或唯有發之而不能導之者，或  
 唯有導之而不能發之者，是所以電氣之為利用也。假使一物能發電  
 氣者亦導電氣，則電氣必不可畜也。能導電氣者亦發電氣，則電氣更



不可導也且可畜而無可導而無可畜則其為氣也雖塞乎天地之間  
 不可以利用例之也<sup>可導</sup>是以物理學家查驗物質區以別之凡能發電氣  
 而不能導者如琥珀玻璃硫磺<sup>礦</sup>石玉絲髮布皮之類能導電氣而不能  
 導者如五金木水炭汽水雪之類是也然古之所謂電氣者知是乾電  
 不是濕電所謂乾電其由琥珀玻璃等物之摩擦而生者也夫<sup>收</sup>聚乾  
 電之法亦有機器其製造機<sup>即</sup>雖有精粗之別常用之機關<sup>即</sup>乾電機  
 蓄電瓶引電架放電又也而難述其詳故試舉蓄電一端以見其餘蓋  
 蓄電之法玻璃瓶內外俱貼以錫箔瓶口以木為蓋上加銅條為<sup>柄</sup>穿  
 蓋而通於瓶內下接銅鍊垂於瓶底使電氣引入瓶中蓄於錫衣之上  
 以致充滿則一瓶所蓄之氣雖云力薄以指按柄即有暴聲如有電瓶



數十聯絡銅絲而俱導電氣使達其中則勢盛力厚儻將電氣一齊發  
 出能令人徧體震動儼若小雷所擊也論其功用則或以之而劈物或  
 以之而放槍穽氣更有以之而起風催水有以之而吸紙搖鈴然用不  
 甚溥故再不煩縷也所謂濕電今各國電氣會在利用之一法其理則  
 由義大利之嘎利法尼暨佛蘭塔二人窺得一法係以強水金屬交感  
 成爲濕電先是西曆一千七百九十年嘎氏之妻久病勞症無藥可治  
 唯有蒸湯可補故捕得數蒸剝皮切肉置之机上將欲作羹之際有門  
 徒數人俱在机側以電氣機方欲試其作用也偶有所持小刀橫觸一  
 蒸腿筋陡見其筋抽掣動躍如生門徒大驚入告於嘎氏嘎氏亦甚異  
 之試之果然乃再試復然故知其爲電氣所致由是推得金屬相感而



生電之理又有人將錫箔一片置之於生薑之背載之於匣鉛板上連  
 之以二金屬則觀生薑即起痙攣又或人銀錢置舌上以匣鉛貼舌下  
 連之以二金屬則忽覺味酸因之而致暗窒則或有閃光發出舌頭是  
 乃化學家發現電氣之一證也自是以後濕電之理始明於世其法則  
 用紅銅白鉛各數片大如掌者二金成隔間以強水浸透之厚紙於其  
 中復以銅絲連之即能生電若合數十片連之則生電頗多也然其紙  
 易乾而其機無力佛氏旋以玻璃盆為電池後有人造長箱內以磁片  
 分為數十格箱蓋下安銅鉛薄片數十對以銅條連之每對入一格箱  
 內貯以強水用時但旋其蓋則二金自然相感若格箱寬大銅鉛多片  
 則生電最旺於是乎濕電之學大興有藉以融化金屬者有藉以鑄製



印板者有藉以造燈代炬者有藉以佐醫治症者行用雖廣尚無人得  
 法通信遐方者係各國多士歷有年所探蹟索隱悉心考究創明電報  
 之理故西曆一千七百七十四年法國里氏以電氣能吸驅燈草因以  
 為號閱十三載碑丹氏以電氣瓶<sup>蓄</sup>因以為號閱七載布國來茲以電能  
 發光因以為號復有南氏以電發熱能煨紅白金細絲因以之燒紋成  
 點成畫因以為號一千八百有九年日爾曼人索馬凌以電能化水從  
 而變化字母因以為號閱十一年法國安氏以電能感動指南<sup>南</sup>鐵因以  
 為號荷蘭底喜爾以電能震人因以為號閱十六載美國賢禮氏以二  
 電路相聯其力倍因使連鐘擊鐘因以為號閱一歲英國惠子敦者復  
 以磁鐵連鐵指字美國莫爾斯<sup>亦</sup>以磁鐵畫直鋪字嗣<sup>有</sup>意大利人<sup>曉</sup>



No. 7

色利者因電能變色創造電報於是字音問答遄遄無間也然其功  
之歸固非一人一國所得專美即各國多士千百歲以爲期千百人  
爲群思無不周乃成電報果格物之功独擅千古之神妙庸成萬國之  
利用也



漢城に於ける米国の

露米権益に関する

鮮米交渉史料(二)

(鮮米外交文書校訂集成)



②

漢城ニ於ケル米國電氣權益ニ

関スル鮮米交渉史料 (二)

〔鮮米外交文書抜萃集成〕



宮內設電  
燈准許

261

美案

第三十一

照會第四百三十四號

大美代理公使巴德為照會事、本月十二日本代理  
將

貴政府另設電燈器於

皇宮一事、面訴於

貴大臣、而此事係是違越准許、漢城電氣會社為今

旭高佛基業及費時之章程、本代理今聞則

貴政府非徒思料另設、今已着手始役云、故本代

理茲又提及、安連公使之本年四月十四日照會



所陳農商工部准許章程條款而該章程第九條  
 內電氣燈是<sup>ハ</sup> 皇宮內<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>五署內各官廳<sup>ハ</sup>內<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>  
 國人之<sup>ハ</sup>私屋<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>各舖店<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>道路<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>設張<sup>ハ</sup>立<sup>ハ</sup>且<sup>ハ</sup>適當<sup>ハ</sup>  
 這<sup>ハ</sup>稅金<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>按月<sup>ハ</sup>收棒<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>事等語<sup>ハ</sup>第十<sup>ハ</sup>一條<sup>ハ</sup>內<sup>ハ</sup>農商  
 工部准許<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>得<sup>ハ</sup>這<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>本會社<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>電氣鐵道<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>電  
 氣燈<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>電話<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>五署區域<sup>ハ</sup>內<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>專管設張<sup>ハ</sup>立<sup>ハ</sup>且<sup>ハ</sup>他  
 人<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>同一<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>利權<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>請求<sup>ハ</sup>立<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>農商工部<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>付<sup>ハ</sup>准  
 許<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>言<sup>ハ</sup>事等語<sup>ハ</sup>安連公使照會<sup>ハ</sup>亦<sup>ハ</sup>已<sup>ハ</sup>言明<sup>ハ</sup>而此  
 准許年限<sup>ハ</sup>定<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup>三十五個年<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>倘  
 貴政府違越此准許章程而另設電燈器於



皇宮內則該章程執有者必訴求損害賠償也故茲  
行文預告

貴大臣請煩查照亟行設法措辦無致請求此等  
切緊之賠償可也須至照會者

右

大韓外部大臣李道寧閣下

一千九百三年六月十七日



宮中電燈  
並即停止

美案

第三十一

照會第四十一號

大韓外部大臣署理外部協辦李重夏爲照會事茲  
接我 宮內府大臣文開、宮內所設電燈自今  
日爲始並即停止事奉

旨請知照美國公館轉飭該會社等因准此相應備

文照會

貴公使、請煩查照轉飭該電氣會社遵照施行須  
至照會者、

右



大美代理公使巴德閣下

光武七年十月一日



## 美案 第三十一

照復第四百五十四號

大美代理公使巴德為照復事昨接

貴本月一日來文內開現接我宮內府大臣照會

內開自本日停止開內電燈之意奉承

勅旨茲行照會須轉照美使令之轉飭該電氣會社

等因准此茲備照會等因准將

大皇帝陛下旨意當經轉諭該會社另飭停燈於

皇宮內茲行照復

貴署理大臣請煩查照另照



貴宮內府大臣、將

皇闕內所用電燈費、至於停燈日未發條、早行清  
償於談會社、無或至因其遲延不撥、致生索利爲  
要、須至照復者、

右

大韓

外都

署理

大臣

李重夏

閣下

一千九百三年十月三日



宮內設燈  
臺無違戾

268

美案

第三十一

照覆第四十七號

大韓外部大臣臨時署理宮內府特進官李夏榮爲  
照覆事本年四月十四日及六月十七日疊准  
貴照會內以電燈另設於宮內一事當經行文  
我宮內府旋接覆開農商工部約章第十一條  
載明本會社得農商工部許可後京城五署內電  
氣路車及電氣燈電話筒設張權利專管但遇有  
他人請願此等會社者由農商工部勿得疊許等  
語此非認許他人設行會社也特自宮內設立



機關者、則有何關於該會社、有此背約索賠之說乎、若認許他人、容或無恠、至於

皇宮內設立、係是權限內事等因、准此查、此次敷設電燈、特由

皇宮自辦使用、與疊許他人一節、不可同日而論、定於談約旨、毫無違戾之處、相應備文照覆

貴代理公使、請煩查照、須至照會者

右

大美代理公使巴德閣下

光武七年十一月十四日



欽奉  
查核電社  
帳目

270

美案

第三十一

照會第十一號

大韓外部大臣李道宰爲照會事照得漢城電氣鐵道會社帳目調查一事迭經彼此往覆在案本月五日欽奉

勅旨全權公使李夏榮爲查辦委員長司稅局長李健榮地契衙門記事員或仁鶴侍從李懋榮前財務官尹泰興爲查辦委員查該案各款混淆實難查明以致遲延時日此次遴選委員查核帳目行將視務處可妥決理合照會



貴大臣請煩查照須至照會者

右

大美特淑漢城全權大臣安連閣下

光武七年四月六日



電氣會社  
案三種意  
見書呈交

美案

第三十一

照復第四百二十三号

大美特派漢城全權大臣安連為照會事今接

貴昨日之第十一号照會閱悉一是本月三日本

大臣費三時之久將漢城電氣會社現狀及典質

法則於李容弼氏而今接此等照會殊甚訝歎此

事自上年七月以後經四位外部大臣而

貴大臣想不詳燭其顛末也幸將本大臣之上年

十二月十五日照請詳

閱覽至於五員查辦委員之猝然遴選以為調查



該會社火簿一事上年八月七日

貴前任大臣俞英煥知照本大臣以為

大皇帝陛下命柏卓安調查該火簿等語本大臣於

其翌照復且該調查報告書上年十一月一日

貴前任大臣趙秉式以第七十二號照會送到本

大臣各在案請煩詳覽各該公文該調查期間特

許六十日以為準備妥決而

貴政府將柏卓安調查所出之額即此報額宜不曾報

清又無訂期報償之約而其加定十月十五日之

期亦已過去故該各業照法律自歸美國商會高



佛安及寶時旭、今此再查該文簿、乃是更開談此  
斷、今不可之事、上年十月十五日以前、本大臣極  
力以圖幫助

貴政府、今亦隨機當盡力協助也、本月三日李容  
翊氏來訪之時、本大臣告之以為、若無致損於高  
佛安及寶時旭之利權、而顧圖決求之方、則本大  
臣將盡力幫助等語、至有使該商會、陳出安決之  
意見書之約、故、今將該商會所陳三種意見書、呈  
上、而初欲直送於李容翊氏矣、今既有  
貴大臣之照會、故茲胎呈、并行照復、請煩



貴大臣查照、向此三種意見書中、從一辦理、以為  
 決案可也、從何種意見書辦理、須於本月十日以  
 內決定、否則勢不容不認、以該三種意見書、并皆  
 見却於

貴政府、而亦將是意轉諭於高佛安及寶時旭南  
 會也、須至照復者

右

大韓外部大臣李道寧閣下

一千九百三年四月七日

附高佛安及寶時旭南會意見書



上因定期  
會商

276

美案

第三十一

照覆第十二号

大韓外部大臣李道宰為照覆事照得本月七日接  
到

貴照會內為電氣鐵路會社要償一事並附有意  
見書各等因均經閱悉查商佛安及寶時旭所陳  
三種意見書中應求夥多不容不派我查辦諸員  
訂與該商在

貴公使之前一次會同面商後乃可歸決煩請  
貴公使查照會所與日期指定



示明、以為會商切盼、先行備文、須至照會者、  
右

大英時徽漢城全權大臣安連閣下

光武七年四月八日



上因認有  
所陳意見  
各款該案

美案 第三十一

照復第四百二十四號

大美特派漢城全權大臣安連為照復事刻接

貴第十二號照會內概高佛安及寶時旭商會所  
陳意見書數額夥多、不容不派查辦委員訂與該  
商在

貴大臣之前一次談辦後、可以了決等因准此查  
本大臣確認

貴大臣此意、非謂從新更查該文簿、以為更開該  
案、無過是會同該委員、以商其決末之方也、願與



該委員等相會開其所陳意見而此與該美國商會之從與不從無關也故明日上午十一點鐘邀同高佛安在家等候倘該委員陳出一相當意見而有所必施之確據則似可解其紛難而有相合之了決本大臣不認該委員更開調查該文簿認有所陳意見以為妄決該案也相應備文照復貴大臣請煩查照須至照復者

右

照

復

大韓外部大臣李道宰閣下

一千九百三年四月九日



卡因認有  
所陳意見  
年未議案  
電社帳目  
各業從他  
周旋

280

美案 第三十一

照會第四百二十五號

大美特派漢城全權大臣安連為照會事以高佛安  
及寶時旭商會所有漢城電氣會社各業一事照  
本大臣之昨日照復今日上午十一點鐘與高佛  
安在本館待候矣因該查辦委員長李夏榮有病  
未得來列故前往該家則李客翊氏與各委員皆  
在座矣將該案多少言論後更查文簿一事置之  
不論該委員陳出意見以為買還該各業而本大  
臣雖欣幸其意見之陳出然所許七十萬元係是  
相當意見而有所必



太史該高佛安不能准辦故該商會既限許久之  
期以待

貴政府之提許其價則今不得已將從他國旋以  
復伊等財產也相應備文照會  
貴大臣請煩查照須至照會者  
右

大韓外部大臣李道宰閣下

一千九百三年四月十日



電社查辦  
交付系帳

282

美案

第三十一

照會第十六号

大韓外都大臣索道寧爲照會事、照得漢城電氣鐵道會社賬簿調查一事、迭經彼此往復在案、茲接該鐵道事務查辦委員長來文內開、本員於昨日與美國公使高佛安會晤時、請將該鐵道費額原賬簿一切查辦、美使不准其查辦、就該社繕交之三種意見、求其可否、本員以爲、今此三種意見中、要求費額初無明細款項、原賬簿不明之前、該案顛末無從領會、斷不能就三種意見決其可否、但



將原賬簿不日查辦之意屢次申請美使於查簿一節甚為靳許只要決其意見本員先問自該社創立前後由宮內府或有任置金額或有電路敷設費劃撥者總計款日貨為一百四十一萬餘元銅貨為二十七萬餘元而該社領受証昭然自在矣今者該社意見書中不提此款之如何歸屬誠莫曉其意不得不先查原賬簿逐條核正任置金數目多少及工費金數目多少區別各款將任置金還納宮內府只將工費金不足額清償然後其欠其利自可妥決如是駁論高佛安曰委員



不必問知其 宮內府之所撥款項也、譬如建築  
 家舍、工料都給者然、一定工料之後、或欠或剩、一  
 切屬之工師囊橐、本非家主之所過問也、則此亦  
 如是云々、本員又問、然則曾有都給合同否、其都  
 給酌定之數幾何乎、高氏亦不答、多端推避、終不  
 明言其兩款歸屬之處、本員曰、如此鉅工、專任貴  
 社、寔出於深信貴社之誠實辦理、而積年賬簿、不  
 准一次查辦、只要償費、大欠公平、美使曰、此案既  
 經總稅務司柏卓安調查以後、屢過約限、已作該  
 社基業、今欲還作大韓基業、除非論價買還之外、



無他道理云云、本員曰、栢氏雖經調查、本員等、今承查辦之命、不容不更查原賬簿、查辦之前、買還一事、亦不可質言然、該案內、漢城水器、德沼鐵道、延長、有言未果之費、與他諸般費用、并皆包含其中、而前後所入費額、以七十萬元、假量則可、以相當否、此亦查辦賬簿、方可確論也、本員茲述彼此、談辦送備費、大臣鑑核等、因本大臣查電氣及鐵道、係是

大韓 皇域內外重要地段敷設之

皇室所有基業也、今此查辦委員之差出、宜為調查



該社原賬簿中各項出入款後將可推者推來、可償者償還、以全我

皇室基業之事則第一要着惟在該社之早即出示原賬簿、亟行查正然後妥決也、且以柏卓安調查一事言之、自該社不曾出示其原賬簿、柏氏亦云但就其賬單中槩查而該單各款、多加虛數、混淆紛勢、實難查明等語、該網查之不足為憑、無庸多辨、而今於貴履中、該價太少、故從他周旋云者、果係無理壓制之說也、摠查任置、余及役費、余前後該社領收之數、合為日貨一百四十一萬餘元、



而自該社不言還納條爲幾許亦不言役費條爲幾許欲查而不聽有問而不答未知此一百六十餘元之巨款盡入於三十里敷設電路之費乎較諸各國敷設鐵路冊子以右巨款足可敷設百餘里鐵路也若謂盡銷於三十里敷設之費云則可謂語不成說者也又從而更索百餘萬元之費以不卽聽順歸咎或謂執作已物或謂從他周旋督責之恐動之不遺餘力古今天下想無如許事理矣蔽一言賬簿查正之前斷無歸決之方應請貴大臣查照轉飭該社刻卽交付原賬簿查辦可



也須至照會者

右 照 會

大英特派漢城全權大臣安連閣下

光武七年四月十五日



上因驚訝  
繳還

289

美案 第三十一

敬啓者昨接

貴本月十五日之第十六号照會讀閱詳細殊不  
覺驚訝之至、肆意極爲駁對、本大臣不得已茲將  
繳還查、

貴大臣總不認准漢城電氣會社各業、已經典質  
而惟強求更開談案、不認

皇勅之因本大臣所求於

貴部而下 命柏卓安調查該帳簿而概言不足  
爲憑、論本大臣之所已陳呈於



貴部者、而惟謂語不成、說又謂本大臣恐動之本  
大臣之行於此案者、謂之古今天下、想無如許事  
理云々、

貴大臣亦應記憶此事、生梗總由李容弼氏之不  
曾奉遵

大皇帝陛下之落字命令也、過去十朔之間、本大臣  
極圖所以和叶、妥決之方、事竟不諧、反邀此繳還  
之公文、可恨可歎、竊頌台安

一千九百三年四月十七日美國公使安連



上因難勉准  
原照繳呈

291

美案 第三十一

敬覆者昨接

台函并繳到第十六号照會閱悉之下、斷難勉准

貴意也

來文謂不認

皇勅之因本大臣所求

命柏卓安調查該賬簿云々、查柏氏因該社不即  
出示原簿終難查明此次奉

旨查辦委員一切行查蓋調查未了、雖再三查辦不  
害爲務求明白之道、



貴大臣則以柏氏之銅查爲斷案乎而況宮內府所送金額係是巨款見漏於銅查所以再開查辦勢不能已者也

來文謂此事生梗總由李容嫻氏之不曾奉遵啓字命令云々查李氏何敢不遵命令但其不知理由欲償巨款非本大臣所曾聞也竊思

貴大臣既不恠乎該社之索巨款何恠乎我國人之一欲查巨款乎惟查明前後賬簿爲了決此案之捷徑也茲將原照會繳呈尚求



查照另飭該社交出原賬簿、亟行查辦、以決拖案  
是為至要并頌  
台安

李道宰頓

四月十八日



上因責照  
非交際之  
緯編又還  
呈

294

美案

第三十一

敬復者昨接本月十八日之

來函并大臣本月十七日繳呈之

責照會而該照會有非交際之緯本大臣實不得

領受茲又還呈此照會全文載佈於今日之

皇城新聞本大臣曾聞此新聞社即自

責政府扶持者也此照會之揭載於新聞係非禮

待本大臣且以其事實不實之故似或致難便之

端此等難便之端必自

責政府擔責也本月七日將本大臣之緯絕更聞



其已作高佛安及寶時旭基業之案一事、照復

貴本月六日之照會、本月九日准依

貴大臣之照會、會同五員查辦、委員談論該價、擬將該業還作

貴國基業、則今者更要該調查、更開一事、非所擬論、不可准施、至若與質該業之合同、因

啓字命令成立者、內開其該額二十一萬元及添

加額、具邊利、光武六年八月十五日報價

立、其違期、典主、該後嗣者、執行者、代

理者、外世、保守、句語、依、該財產一



切奪入<sup>スル</sup>利益<sup>ベシ</sup>を享有<sup>スル</sup>者<sup>ニ</sup>何人<sup>カ</sup>も何許金額<sup>ナシ</sup>を要求<sup>ス</sup>或訟討<sup>ス</sup>言<sup>ハス</sup>ハ無<sup>カ</sup>言<sup>ハス</sup>ハ<sup>ル</sup>イ<sup>ニ</sup>等語<sup>ナシ</sup>惟<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>右期限<sup>ナシ</sup>之外<sup>ニ</sup>更加<sup>ス</sup>六十日<sup>ナシ</sup>之限<sup>ナシ</sup>以爲<sup>ス</sup>查決<sup>ス</sup>該事<sup>ナシ</sup>、

貴大臣亦曾公約而無許償該款或其幾分、柏卓安查簿之時、以原帳失去之款三萬元、伊自拔出、以爲後查、而尚有五十一萬元、伊自查得其當報、至若德沼延長敷設一事、柏氏以爲該合同、係是確實亦在於典質之內等語故、目該額之報償、或其了決該案之舉、尚未有許故、上年十月十五日高佛安寶時旭會社將該各業、一切執有、則



貴大臣之此求、我與求見該高佛安及寶時旭之家間、私簿相同也、至若自

宮內府、任置於該商會之金額、柏卓安亦已詳查、得十九萬一千八百四元五十八錢、當為還納於宮內府也、故已經<sup>告</sup>達於

貴大臣、該商會即為除減於伊等請償之額、則

貴大臣想應易看得、該文簿調查已盡其細、該各業已為高佛安及寶時旭之基業、而無所更開調查之理也、惟為和平妥決、該事本年二月因

大皇帝陛下之要、本大臣許其委諸韋貝妥決矣、不



知曰何事端此亦委棄不行而韋貝言內吾欲從  
公辦理而自韓國

宮中更無如許委託則不得言論等語本大臣之  
曾為提論中裁一事及委諸韋貝妥決一事一并  
辭卻則本大臣實不知從何幫助之道也惟力護  
高佛安及寶時旭之享有談聚而已

貴政府若有管理該鐵道各業急如今之猝然求  
其更查該文簿典期過限六朔之後則本大臣力  
勸

貴大臣之就高佛安所陳三種意見書中亟行一



種也尚望

照諒端頌

台安

安連頌

四月二十日

附四月十五日之第十六号照會



上因細查  
前無由決  
案原照并  
呈

300

美案 第三十一

敬啟者本大臣第十六號照會所陳各節、要不過  
乎請示原賬簿查辦一事也、然後多少款項、自可  
明瞭、則查辦賬簿、乃是彼此極公平之事、而以極  
公平之辭、謂以有非交際之辭、實不得領受云者、  
及非交際之辭矣、至如該照之載、佈皇城新聞者、  
自是館報之探載者也、此非政府之所知也、該報  
館亦非政府之扶持者也、此案係非國際上秘密  
事項、唯一社會上營業賬簿事件也、人民之聞知



未始有礙而此事之載不載本非有係於禮遇之  
 道亦無損於行事之方畧也來文謂以事實不察  
 之故似或有難便之端云等語查此亟行查簿條  
 條核正昭晰無蘊然後其實不實自歸辨明可免  
 互相難便之端也以典實該案之合同言之所典  
 物目自在原不過電道所關之物而已也又有何  
 漢城水器及德沼鉄道延長等件有言未果之費  
 濫索巨款混入其中者乎來文謂以柏卓安查簿  
 之時以原賬簿失去之款五萬元伊自拔出以為  
 後查而尚有五十一萬元伊自查得其當報至若



德沼鐵道延長敷設一事、柏氏以為該合同、係是確實、亦在於典執之內等語、按上項典質合同內、並無此等包含、而柏氏調查之時、亦云該典契、乃係專為該電事之抵款憑證、確與別項事件、皆無干涉、今該德沼鐵道、雖由政府不願舉辦、該商索討補虧、是殊匪夷所思、不可解者也、且云築造至德沼鐵道、因停工一年、應償虧款七萬二千元、而按此係按照合同、于完工時、付給、今未興工、是無庸議償者也、云々、以此論之、該件不入於典質合同、確有其據也、漢城水器一事、柏氏亦言未有曾



訂之合同云而上年十一月十一日貴照亦不  
以此言明乎同照又云從海關稅餉中留額二十  
萬元以備水器設行費之

勸諭足以抵當合同云而柏氏調查之時以為該款  
撥用未曾宣明于自來水也又曰槩查賬單時該  
單所列各款多加虛數混淆紛繁實屬不足為憑  
而該社之購辦物品時所謂經手費俱照百加十  
二而按所開單內當購時即加百之十而開單時  
又加百之十二是再重增加則實扣除百之二十  
一也及逐月所收自銅貨換紙幣時經手費不應



提而提之、出款用白銅貨者、開單內已作紙幣、又照紙幣經手之費、重疊扣除云々、又按宮內府任置金額言之、前後送款合計日貨一百四十一萬餘元、銅貨二十七萬餘元、而柏氏但查得其任置金一百七萬四千八百十四元六角三分、中該商不由傳

旨、擅撓十四萬四千五十五元二角四分、不可謂該商之無其過失、而餘存金十九萬一千八百四元五角八分、遺漏金額又有日貨三十八萬餘元、銅貨二十七萬餘元、而該商終不提及此款之歸



屬豈可謂財上分明乎、上項柏氏之調查中、查列各款、以不見其原賬簿故、如是錯亂模糊、虛實相蒙、而來文內謂以五十一萬元之查得當報云者、確難遵辦故、以至今日之未決、該柏氏調查之不足為完案決案、無庸多辯而、上年十二月十一日亦有囑示原賬簿之照矣、今猶更查未決之簿、貴大臣謂以此求幾求見高佛安寶時旭之家間私簿相同等語、實所未解也、該業既係官辦府出資數較高佛安不過為雇聘之員、則九千賬簿理應條々開錄、交付資本家、乃是不易之規、何可



歸之私薄而有此隱藏乎、來文謂以本年二月、因  
大皇帝陛下之要本大臣詳其委諸韋貝岳決矣、不  
知因何事端、委棄不行而本大臣之曾為提論仲  
裁一事、及委諸韋貝岳決一事、並無結却、則本  
大臣實不知從何幫助之道也、云々等語、查此語  
以是、貴大臣初冀韋氏之承

命、安決終至失望、悔恨之辭也、假如該案已作決案、  
則貴大臣豈望韋氏之從新提案、以歸安決乎、  
既望韋氏之開案安決、則本國查辦委員之從新  
開案安決、與韋氏有何間隔、而於韋氏則希望之



於本國查辦委員則有此反對乎、可謂厚薄之甚也、來文謂以過限六朔、就三種意見中、必行一種也、云々等語、查此三種意見、斷非擬論者也、現以鄙見擬之、自宮內府槩較其去來之額、似係初無可報者也、總之調查賬簿之前、無由決案也、茲得原照會再行還呈、務望貴大臣查照施行可也、為此並頌  
台安

李道宰 頌

四月廿八日



上因屢繳  
未安原照  
中數語刻  
改

美案 第三十一

敬啓者敬照會第十六号屢經繳還其在交涉之  
誼殊屬未安原照會中數語句語并刻改仍將  
貴第四百二十九号公文伴繳幸煩  
照亮亦將貴照會中無禮句語改繕擲還爲盼  
端此頓頌  
台安

李道宰 頓

五月六日



查簿不能  
准許

美案

第三十一

照復第四百二十九号

大美特派漢城全權大臣安連為照會事本月六日  
接到第四次送附之

貴本月十五日第十六号照會并

貴函在該照會既為改刪故今茲接領而漢城電  
氣會社帳簿斷不能更開調查於該五員查辦委  
員也倘

貴政府於本大臣之將該各業執行之由聲明後



該典期屆到前七十五日之內、選擇調查委員、則  
本大臣必能准其調查、而為其詳明調查、許久寬  
限之後、典質各業已為執行、此則

貴大臣可從本大臣之四月二十日公函說明者、  
而洞燭、而因該典質合同該業、自上年十月十五  
日統為高併安及寶時旭之基業也、設若請償之  
債款、只為日貨二十一萬元、若過期未償、則該典  
執各業、一樣執行也、以

皇勅柏卓安將德沼延長敷設權、及漢城水器兩款  
撥出不查、而其餘一為



貴政府詳明調查該員、惟查出日貨五十一萬元  
之當報者然、

貴政府未曾報償其額、或其幾分至若德沼延長  
事已有確立會同、而

貴政府調查員、亦查出該合同已包含於興實各  
業內、該合同訂以七十二萬元、若有一個年遲延  
設行、則將加七萬二千元之意、此謂該鐵路全線  
竣役也、該役之不曾始役云々者、乃是不確之言  
也、價值巨款之機械與所入材料、已為備辦、方在  
始役、一千九百零二年二月



大皇帝陛下要本大臣轉知高佛安及寶時旭苦待  
 一個年始役滿為  
 勅竟至停止而高佛安及寶時旭以為已所費用  
 之外再加三十萬元則可以竣役此路該商會請  
 償之額即其合同所定金額乃是竣役該鐵道之  
 意也若不欲該役竣畢則可減三十萬元而其餘  
 實費為四十九萬二千元則此與柏卓安除德沼  
 敷設延長一款而查出之五十一萬元共計一百  
 萬零二千元高佛安提出意見書本大臣四月七  
 日胎呈也上月二十七日之



貴函謂以本大臣所料高倂安處位置額以其諸  
 償條相校則無所加給之額等語推此觀之則  
 貴政府初無報償該美國商會之意也、不然則柏  
 卓安之所查出之額五十一萬元、必即備償、或許  
 我所求中裁判理也、至若高倂安及寶時旭處、自  
 宮內府任置一款、  
 貴政府調查員在本大臣之前、一々審查、今得十  
 九萬一千元之當為還納者也、前後任置條全額  
 為一百七萬三千元  
 貴大臣來文中、數過於此、



貴大臣以不認准高佛安及寶時旭商會之就該  
任置額中有幾次還納之額、高佛安所呈文定、柏  
卓安調查之數外有任置之領受票示之則、本大  
臣將呈一說明書也、本大臣不勝歎惜

貴政府之負此當報之巨債、本大臣原不認准此  
等續債、曾有多般周旋、以為阻擋

貴政府之負債於美國人、以此鐵道一事、本大臣  
初不承認、及勸勿設、竟無所用、高佛安及寶時旭  
之相求、英十三里之金谷道路修築也、本大臣亦  
勸其勿為干涉而



貴政府懇求高併安及寶時旭不計費額亟日治道以為

幸行時無或不及竟為舉行其至急

命令該商會又因

啓字命令購入三十五萬元價值之白銅地而本大臣以百方勸其停止而該商會事勢於留在漢城之間不得辭却此等

命令也本大臣預見

貴政府之漸負債款必至於巨大故本大臣極力周旋以



啓字命令、許其日報白銅貨於該商會、以代日貨幾  
十日間、報給銅貨矣、此若照約繼續給則、今必無所  
續或所請之額、而生其基業也、而該

命令旋不施行、而債乃續大也、一十九百一年間、高  
併安及寶時旭受買來二隻兵艦之  
命、而本大臣極力奏稟於

大皇帝陛下、而阻該商會之買來、上年七月間、又要  
該商會自美國收買三百五十匹之馬、以為備用  
於

稱慶禮式時、而價至十二萬五千元也、本大臣切



言其不可談商會竟不舉行矣以此推之本大臣  
 實是極力周旋以拒吾民之商務上利益也然則  
 貴大臣必詳燭本大臣之於此案實心助韓者也  
 而此事今既<sub>(於)</sub>在本大臣權力之外而債不容捧  
 收也該業今既屬於高佛安及寶時旭商會而至  
 於更查文簿一款斷不能准許也

貴政府倘切要該業則須備價買還至若該商會  
 於經紀該業之際有所阻礙或致有減損該業價  
 值或其日收入等事或另設他機以觸該業所有  
 契約如上月十四日本大臣照訴之者



貴政府必擔當巨大之損害而此案亦必致於大  
困難也、故茲預先聲明且本大臣曾以上月二十  
日之函有所反對於

貴十六號照會之頒布新聞一事、而此等揭載尚  
此不止、日前本大臣與賓使以他事晉晤

貴大臣而新聞謂本大臣與某使伴晉外部詰論

電氣會社事案等語、并應備文照復

貴大臣請煩查照須至照復者

右

大韓外部大臣李道宰閣下



一千九百三年五月八日

13月+836年  
支武7年

朝鮮史編年會要



一千九百三年五月八日

明治三十七年  
五月八日